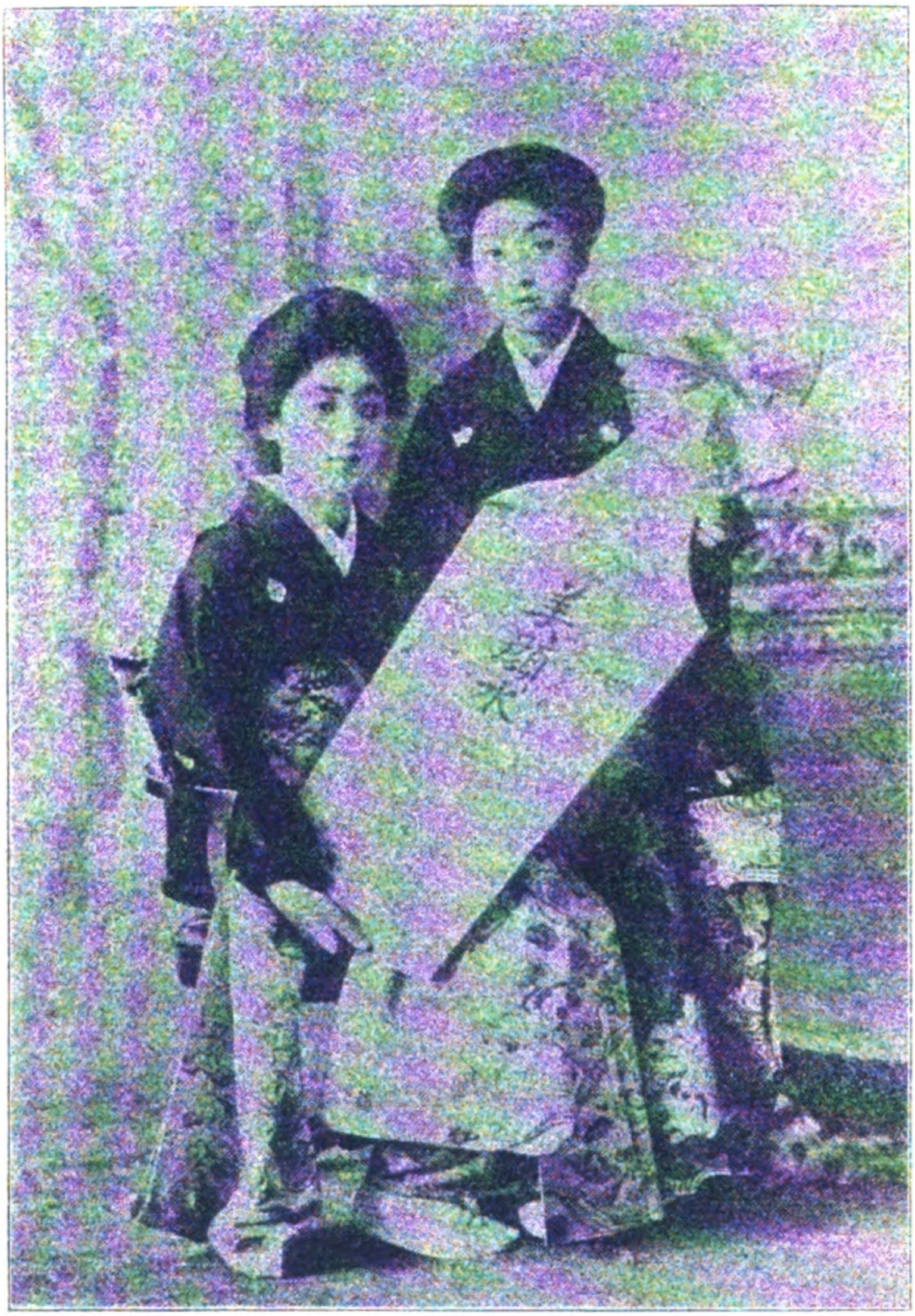
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十二年一月一日發行
（毎月一回一日發行）

女學世界

第九巻
第壹號





美顏水と新年の化粧

多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧用美顏水は畏くも、九重の雲深き貴顯を始め顯門名家の貴婦人令孃紳士淑女の方々に召されて今や最新流行の化粧水として其名世界に嘖嘖たり

●常に之を愛用すれば、色白くきめを細かにし艶美しく、又化粧下に用ふれば巧妙なる作用にて白粉濃く薄く意のまゝにのび、亦あれ性の方には最もよく、美しき姿は玉を欺き花を羞しむ

●本品御購求の節は化粧用美顏水と御指名を乞ふ

▲東京市內は勿論日本全國各地到る所の有名なる小間物店にて販賣す


恭賀新年
三越呉服店
日本橋駿河町

女學世界第九巻

第壹號目次

新製

御料たつた

純無鉛白粉

◉此白粉出でゝことしの冬こそ



◉お顔の荒る氣遣ひ御無用に候







新年の御慶芽出度申納候

昨年は別して多大なる御引立を蒙り爲に全國に未だ例なき小間物小賣大商店として名實伴ひ繁昌仕候は全く愛顧各位の恩惠に外ならずと厚く御禮奉申上候就て本年より從來の營業品の外に

金銀時計并に附屬品類を

擴張仕り品質の正確と器械の堅牢に意を注ぎて精選の品を取揃置候間何卒御注文奉願上候詳細は弊店雜誌「よそほひ」第二巻に掲げ候に付御下命次第送呈致候

東京京橋南傳馬町
小間物小賣大商店

大西白牡丹

振替口座 九二九三番

女(いの一)

女(いの二)


マツニホン
ウメニホン
改良醬油
お臺所の改良を念とせらるゝ奥様方は皆日本醬油の愛用者なり
市内及び全國各酒醬油店にて販賣致居候
日本醬油釀造
株式會社
東京深川
小名木川通
フジニホン
ヒシニホン

(いの三)



大(いの四)

女學世界
定期増刊

こゝろの秘密

第九巻第貳號
一月十五日發行

婦人の胸底の秘密を披瀝せる活文字

曩にこゝろの日記第二回を募集するや、親展書として到來せしもの數百通いづれも婦人こゝろの秘密を語らざるなし一讀愕然として驚く再三讀み來つて裡に人生至妙の教訓あるを見る、今の世に於て眞に得難き文字なり。今回これを撰し題して『こゝろの秘密』となす。

▲私の胸に秘めたる三年間
▲榮耀にもくれたる令孃の日記
▲親にも知らさぬ私の秘密
▲人に賣られし娘の日記
▲帳中獻酬録
▲勝手に振舞はれつゝある妻の日記
▲小間使の書いたお孃さんの日記
▲趣味に逐はれて無趣味に暮らせし妻の日記
▲處女より一足飛に寡婦となりし女の日記
▲喜憂こもゞ結婚日記
▲配偶者の選擇に迷ひし女の日記
▲戀に惱める一年間の私の日記
▲不結果に了りし私の結婚日記
▲周圍の同情を失ひし少女の日記
▲兄嫁の書いた小姑の日記
▲濡衣日記
▲美人薄命録
▲私は何故に妾となりしか


婦人の最大なる幸福は
美しき容色にあり
毫も鉛毒のない伸びの良い芳香の
高尚な大學白粉は婦人の美
しき容色の友なり
大學白粉
東京　大阪
矢野芳香園



女/ろの三



衛生家必携懐中良薬

年のはじめ

霞たなびく初春の　空の色こそ麗らなれ
旭に匂ふ日の御旗　緑色したたる門の松
表は賑ふ禮者客　娘子供の追羽子の音
笑興する獅子舞に　さざめきわたる紙鳶
進は太平の春なれや　春こそ樂き時なけれ
春の初の樂しみに　年中の勉强の基なり
さはれゼムを口にして　心神を軽く爽やかに
身の健康を心掛け　歌留多遊に雙語六に
隔ぬ友の語らひに　此の初春を樂しめや

（主效）

◎頭痛眩暈　◎食傷水傷　◎悪酔宿酔　◎息切渇
◎氣鬱胸痞　◎口熱口臭　◎煙草害毒　◎時候傷　◎船車酔

ゼム定價		
七十五粒入	十錢	
百六十粒入	二十錢	
[illegible]粒入	五十錢	
[illegible]粒入	一圓	
ゼム容器入	廿錢	

日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
支舗　大阪[illegible]二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣薬化粧品店にあり

女（ろの四）

春の光



田中製版所三色版

女（はの一）

家庭界の新福音

清浦樞密顧問官題字　時事新報
下田歌子女史和歌　文藝週報
山根正次君序文　懸賞當選
菊判二百頁表紙美麗

家庭料理の栞

定價一冊四十五錢　郵税六錢

歌舞伎座社長大河内輝剛君序文
老優中村芝翫閲
マダム川上貞奴閲
四六判二百頁表紙頗美麗

美顔と化粧

定價一冊四十五錢　郵税四錢

貴族院議員柳原伯爵閣下題字
前代議士鈴木萬次郎君序文
風月堂主人米津恒次郎君書翰
菊判二百頁表紙頗美麗

家庭製菓の栞

定價一冊四十五錢　郵税六錢

發行所　東京芝區櫻川町二　電話新橋二〇一九　タイムス社

大賣捌　東京東京堂東海堂至誠堂北隆館　大阪盛文館寶文館

文(はの二)

▲出たり!! 婚禮に關する完全完美の大寶典!

新編 日本婚禮式大全

妙齢の才子佳人は勿論其父母たる人又必ず見よ

密畫入頗美本　全壹册

正價金四拾錢　郵税四錢

注文切手代用は一割增

世間從來婚禮の書少からず小笠原流伊勢式など稱すも實は孰も二百餘年前の舊式に係り事々當世に適せず又近時徒に華美を衒て禮の本意を誤る等如今婚禮の諸式一も其宜を見ず是弊堂が特に斯道の大家篠田翁に囑し本書を刊す所以にて一々故實に則り誤謬を正し諸禮諸作法**詳細**洩さず先づ見合の式より結納の式里出の式嫁入及婿入の式里開の式媒人の心得等大綱七章細目百數十款——細は物の折方包方から贈答の仕様——密は入床及寢所の取様まで書中幾多の**圖畫**を挿みて遺憾なき上尙**附錄**として婚姻に關する古今の沿革から結婚前後の心得——妻を撰び夫を擇むの注意尙殊に妙齢少女が猥に他に問ひ難く而も最緊要なる……男女**衛生**さては姙娠中の心得まで殘る方なく教示したれば妙齢男女は勿論其が父母たる人亦必ず一讀すべし

▲製本既成直ぐ送本す

發行元　大阪市高津局區内天下茶屋町　**芙蓉商會出版部**　〜〜振替貯金口座大阪三三〇番

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市內有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥褥の內と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尙續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告け試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ內務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尙ほ淺きにも不拘內地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及ひ**印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり
用法及ひ詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖 川名助次郎

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
横濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七
東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
靜岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

肺治散特約店

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
大阪西横堀舟町橋西詰 賣藥卸賣株式會社
馬關西南部町 賣藥會社
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀬戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
相模横須賀汐入町 茶本商店
東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
越後國長岡町 藤井卯吉
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通大 野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷回春堂
長野市大門町 小林傳兵衛

(全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)

女(はの三)

かほりの袖とはいかなるものか



『梅の花たが袖ふれし匂ひぞと春や昔の月にとはばや』との古歌に因みて造られたるいとも高尚優雅の匂ひ袋なり。（桐箱入壹個拾錢、拾五錢、貳拾錢）

かほりの袖は一種云ひ難き床しき香氣を保つ。寄席、劇場、汽車、汽船などの旅行、さては箪笥の抽斗、書畫骨董等の中に入れ置かば不斷馥郁たる佳香を放ち、虫類黴なぞの附く憂ひ更になし。

本品一とたび世に出づるや、東京、京都、大阪、神戸等の名ある呉服店より多大の御注文に接し且つ、今後其取次をも快諾せられたり。

製造販賣元　東京日本橋水天宮前

安藤井筒堂

各地取次

東京

實業之日本社代理部
報知新聞社代理部
三越呉服店
大丸呉服店
白木屋呉服店
いとう松坂屋呉服店
松屋呉服店

京都　大阪　神戸

三越呉服店
高島屋呉服店
大丸呉服店
十合呉服店
柏原屋呉服店

どよめき



榊原蕉園筆

本品は

全國有數の同種類中其の質最も佳良にして又實用に適せるが故に世人の贊辭と需用益々多大なり

本品を以て

赤毛を染むる時は優に半ヶ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日日到着せり

使用法

手輕にして實用と安全とを兼備す



女(にの一)

新年號主なる記事

羽仁もと子女史の**若き婦人の根本修養**は一般の女子誰が讀んでも得心の出來る大文字

近代女性の自覺に就て談話を試みられたるは姉崎博士、新渡戸博士、木下尚江、成瀬女子大學長、三輪田文學士、安部磯雄の諸氏にして女子思想界の**大問題**は天下の名士に由りて解決せられんとす

目覺ましき 大附錄

▼執筆作家

島崎藤村氏
蒲原有明氏
眞山青果氏
薄田泣菫氏
大塚楠緒子夫人
與謝野寛氏
江見水蔭氏
岩野泡鳴氏

女子文壇の大發展

來る新年元旦發刊 **五巻第壹號** 本號に限り附錄とも大冊二百頁

改正定價 一冊拾五錢 郵税壹錢五厘 (前金明細は本誌にあり就て見よ)

日本一の女學雜誌

女子文壇



新年號より一躍紙數増加し内容革新す之を實質に比し此種雜誌中の最廉

○若き婦人の唯一機關として又文學と家庭の調和者として雜誌界無二の特色を存す

○世の父兄たるもの子女の品位を高め趣味を養はしめんとするには本誌を讀ましめよ

○本誌は學校以外に於ける善き感化、美しき感化、清き感化を與へんことに主力を注ぐ

○文學的記事の如きも更に多方面に渉るべし

投稿の自由と**選評**の嚴正と**懸賞**の豐富とは世擧つて本誌を第一位に推す

新年號には大家傑作小説の大附錄と美麗口繪澤山

毎月一回一日發行

(口繪)着色名畫二枚、寫眞版六頁

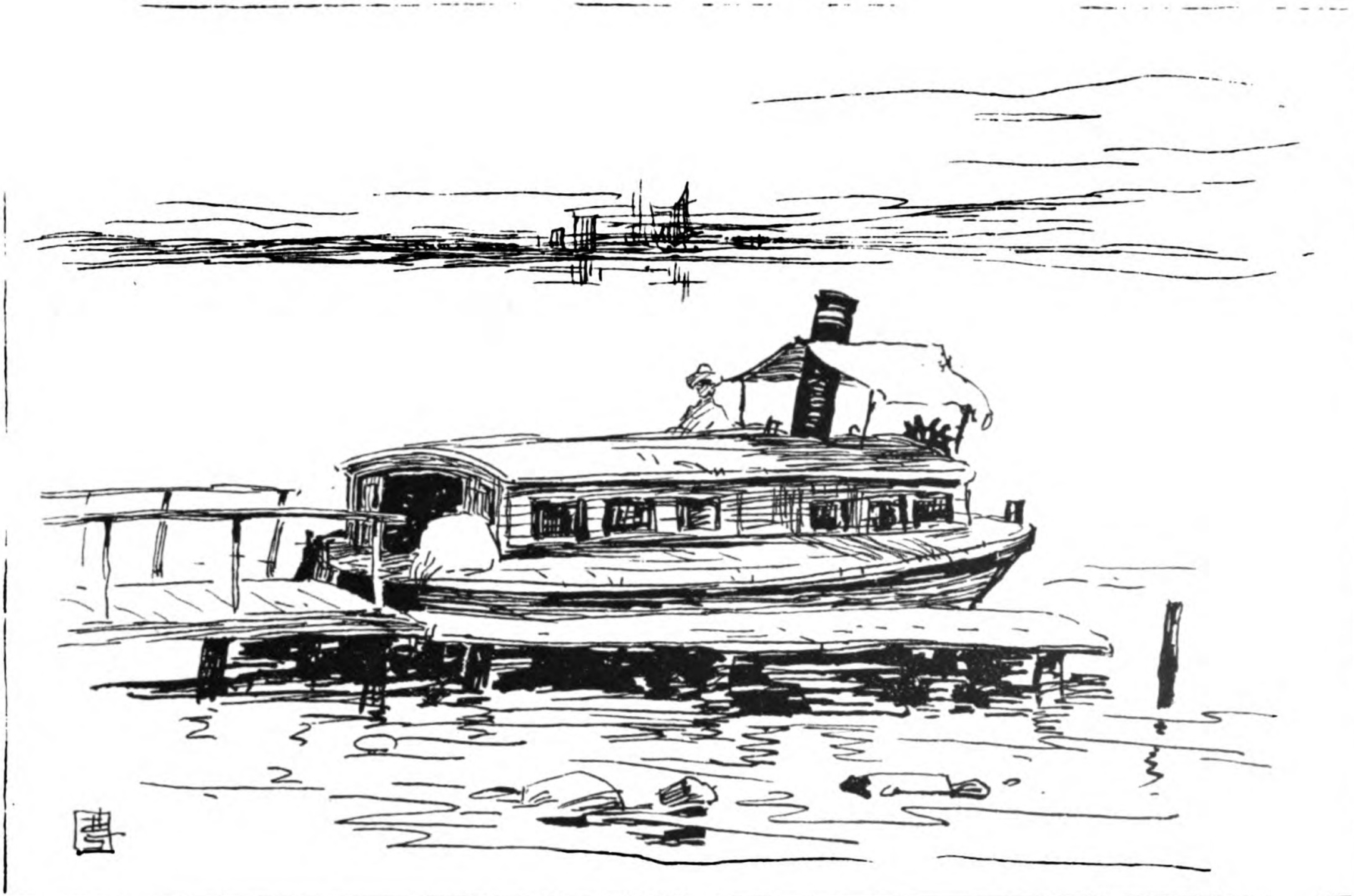
東京京橋大鋸町十一番地 女子文壇社發行

特約發賣元 ○○ 東京堂 北隆館 東海堂 上田屋 良明堂 至誠堂

女(にの三)


恭賀新年
新輸入の樂器
弊店の販賣品目……
山葉オルガン。山葉ピアノ
鈴木ヴアイオリン。鈴木マンドリン
舶來ピアノ。オルガン。ヴアイオリン
樂隊用吹奏樂器。譜面臺各種
オーケストラ、ホーン
新年各種の餘興には最も適當なり賃貸の御需めに應ず
新輸入の樂器
手風琴。フラジオレット。ハーモニカ各種
各樂器附屬品。和洋音樂書。樂譜用紙
樂器の月賦販賣及賃貸應需
ピアノ。オルガン調律。修繕應需
弊店の營業課目……
郵券貳錢御送附あれ目錄進呈
東京市京橋區竹川町十三番地
合資會社
共益商社樂器店
電話新橋五二九●四八八〇番
振替貯金口座一五八〇番

好晴



竹久夢二筆

和平



川崎蘭香筆



美術
造花材料
謹賀新年
發賣御案内
最新式造花用鐵線
如何に本品の斯用として好適せるかは御試用の
上知り給ふべし郵券貳錢封入申込み次第直送す
東京市日本橋横山町壹丁目拾六番地
美術造花材料商
天野卯兵衛
特電話浪花一六四三番
電信略號（アマウ）
振替口座四九七〇番
營業案内御入用なれば郵券四錢封入御申込みあれ

女（ほの一）

らい病

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール 一ヶ月分 貳圓
複方ザノサール 一ヶ月分 參圓

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主 中島龜之丞鑑製

●婦人科 ●小兒科 專門

午前宅診 午後往診

▲入院を許す▼

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

女醫 鷲山彌生

電話番町七八四番乙

瓊姿香油（けいし）は愛すべきバラ、スミレの芳香があつて束髮散髮に適し誠に時世に應じたい、香油です

東京日本橋區通二丁目

柳屋本舖

電話本局二〇一番

本麝香入 柳清香油は充分の精製と芳香の永く保つ点に於て他に其比類がありません





女（ほの二）

衛生的なる改良かもじ發賣

新案特許一〇三六二號

種類 丸髷、島田、銀杏髷、其外



本品の特長

一、根元にコロップを装置せるにより舊式のものゝ如く硬からず膚ざわり軟らかなり

二、皮膚を摩擦する事少き故禿頭の憂なし

三、頭痛癖ある婦人にも用ひて爽快を覺えしむ

四、二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髪の傳染病を媒介する憂なし

小賣特約店

京橋區中橋 大西白牡丹
本郷三丁目 兼康商店
淺草區駒形 百助商店
神田須田町 三井屋
日本橋通二 都屋

諸かもじ製造販賣

東京市神田區豊島町十七番地
【振替貯金口座一八一八八番】

田中金三郎

特約店

神田區橋本町三丁目 勝本治助
日本橋區田所町廿一 山三商店
同 横山町一丁目 安井治太郎
同 馬喰町三丁目 萬新商店
日本橋區若松町 松葉屋紋太郎
同 横山町一丁目 天野源七
同 馬喰町三丁目 阿部錠
同 橘町四丁目角 島村商店
日本橋馬喰町二丁目 飛川商店
同 横山町二丁目 江川小間物店
同 横山町二丁目 森本文店
外全國到る所の小間物店にあり

女(ほの三)



九條公爵令妹蓬子

女官の面影



大奥に仕へまつる二女官

賀正

◎當店は顧客各位の御便宜を圖り歳首御贈答用に極めて適當なる商品共通切手を發行す可し

◎當店は三百年間同所に於て確實眞摯の商業を營み來りし老舗にして常に完全なる商品を豐富に取揃へ誠實薄利を以て御注文に應ず可し

◎當店發行の御注文之栞は郵送料を要せず何時にても送呈す可し又營業に關する御照會は返信料を要せず即時懇切なる回答を差出す可し

近江商人之先覺者

嚆矢之近江屋

- 各種蒲團
- 卓子掛
- 窓掛及簾
- 毛布膝掛馬車掛
- 麻布
- 和洋敷物及寢臺
- 疊表
- 富士印蚊帳
- 柳行李
- 懷中莨劑及匂袋

毛布蒲團

敷物疊表

東京日本橋

近江屋伴傳商店

電話本局四二六番長四三六番

振替貯金口座一六一六番

◎當店に於て御購入の商品は東京市内に限り遠近を問はず運賃無料を以て速かに送達す可し

女(への二)

新春の盛装を凝せる婦人世界空前の美観

材料豐富

婦人世界

內容整頓

正月 一日發行 每月一回 四卷 第壹號 一冊 拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊分郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎破天荒の大文字 男女必讀 夫婦情愛論 村井弦齋

◎生涯を通じて大愉快 棚橋絢子

◎毛髮を美しくする最良方法 岡村醫學博士

◎支那の各宮妃殿下 侯爵夫人 鍋島榮子

◎初產當時の感 下田壽惠子

◎私が三人の娘を嫁にやりし當時の實驗 侯爵大山夫人 大山捨松子

◎新渡戸博士が養父の意に從はず西洋婦人と結婚せし話

◎流行の衣裳と顏に似合ふ衣服の着方 高橋義雄氏夫人 高橋千代子

◎大珍附錄 名流日本婦人の今昔 第一流の婦人數十名の今昔の寫眞を集む珍又珍

◎三十七歲にて始めて結婚せる私の實際談…… 半田のち子

◎四十六年前の正月につけたる私の日記 跡見女學校長 跡見花蹊

◎日本婦人を妻とせる英國紳士の妻君評(磯村春子)

◎美しき師弟の情 下田歌子

◎高輪御殿のお正月 小山中佐夫人 小山みつゑ子

◎十五人の子女を牛乳にて育つ

◎京都婦人と東京婦人

◎名流婦人の頭相判斷 當代名流婦人の運命性行を縱横無盡に解剖批判し痛切を極む大珍品

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番)(電話新橋八四七番) 賣捌全國書店

女(への三)



謹賀新年
宮内省侍醫局
製藥所御試驗濟
純良白椿精製香油
志ら井油
同上特製優等香油
志らぎく
椿製香油
新つばき
發賣本舗
東京市京橋區桶町
白井椿堂

女(への四)



故貴族院議員小幡篤次郎氏の令孃けい子



橫濱メール新聞主筆ブリンクリー氏の令孃

賑はしき一族



文學博士物集高見氏の家庭

衛生經濟便利兼備

久能木式 石油暖爐と厨爐

石油厨爐

石油厨爐は僅卅分間に三勺の石油で一升の飯が炊け魚を煮又餅を燒も臭くなし下等石油で使用するも無煙無臭なる事を保證す

金貳圓廿錢より各種

石油暖爐

專賣特許一〇三三二一號



石油暖爐は最も美麗なる構造にしてマッチで點火せば直ちに強熱を發し無煙無臭一點の塵なし僅か廿分間に七八十度となり煙突を要せず衛生と經濟に最も適せり

特製 金拾五圓

上製 金拾圓



注意

目錄定價表御入用の方は御申越次第直ちに送呈可仕候

新築落成紀念割引

●本券の有効は二月末日限りとす

此切取り持參の方は定價の五分引

如（その一）

製造發賣元 東京日本橋區室町 久能木商店

（長電話本局二八九番）――（振替口座一四五七番）

關西出張所 大阪北區曾根崎中二丁目 片山旅舍 長電一一五四番

京都出張所 京都四條通高倉角 宮本商店 電話一七二番

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓◎一圓半◎濃厚二圓半◎三圓半送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらふとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總ての肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓五週三圓廿錢送費十錢



▶僞物あり乞御注意◀

皮膚專門藥

おまづ	あか鼻	ぜにがさ
いんきん	ざくろ鼻	ひぜん
たむし	あざ	わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

らい病 根治新藥 レプラ丸

本劑は癩病の病源より探究し多年の辛苦と數萬の患者に施藥實驗を經て終に成功したる最良唯一の特効藥にして効能顯著確實輕きは一劑重きも四劑を用ゆれば忽ち其病毒を根底より驅逐し恐るべき難症も本劑に依て全治するを得る一大奇藥なり從來醫藥等百方手を盡し更らに効なく困難せる患者は速に本劑を用ひて偉大なる奇効を知られよ

●藥價(一劑廿五日用三圓)(二劑五十日用五圓五十錢)(四劑百日用十圓)(小包送料十錢)

中風 全治保証藥 ヘミプレギー丸

此藥は世にありふれたる營利的の賣藥と異なり効驗拔群如何に長年の慢性病にても必らず驚くべき効を奏し身體を強健に體力を恢復する特異の奇効あり

●藥價 ◎十五日分一圓廿錢 ◎卅日分二圓廿五錢 ◎六十日分四圓廿錢 ◎百日分七圓五十錢 ◎小包送料十錢

壯快奮起 強猛丸

本劑は男女共に專ら賞用さるゝ補血強壯劑にして如何に衰弱の人にても忽ち精氣を壯んにす之を用ふれば自ら心臟を強め記憶を增進し元氣を壯快ならしむる特効藥なり本劑の特効は腦病、神經衰弱、記憶缺乏、神經痛、氣鬱、貧血、不眠症、耳鳴、遺尿、ヒステリー、男女生殖器虛弱、病後衰弱、其他神經系麻痺、發育不充分の人に頗る有効確實なり

●藥價(一週間七十錢)(三週間二圓)(五週間三圓廿錢)(送料十錢)

れうまちす根治劑

芳名パウル氏丸は服用各位より全快禮狀を添へて賞賛を蒙ること珍らしからず其効驗の確實なること喋々を要せず用ひて治せざる患者の非ざるを以て明白なり

藥價——●十五日分七十錢卅日分壹圓卅錢六十日分二圓四十錢小包料十錢

女(との二)

本舖 東京本郷區本郷三丁目 振替口座一二五八四番 新宮藥館

電話下谷二二一九番

恭賀新年

巖谷小波立案 お伽扇

去る程に茲にお伽扇とて、賣扇庵の新たに思ひ付けるは、我邦の兒童の間に、耳に馴れ口に親めるお伽噺の中より材を選みて、ざれ畫ざつとの骨を惜まず、極彩色もて懇に、其圖を現はせる小扇なり。（巖谷小波）

此扇をお買求めの方には巖谷先生がお作りになつた『お伽かぞへ歌』と云ふ奇麗な繪本を無代で差上げます。

（一）	桃太郎	一本	金貳拾五錢（金拾五錢）
（二）	かちかち山	同	金拾八錢
（三）	金太郎	同	金拾五錢
（四）	花咲翁	同	金拾六錢
（五）	牛若丸	同	金貳拾貳錢
（六）	大江山	同	金貳拾錢
（七）	浦島太郎	同	金貳拾貳錢
（八）	竹取物語	同	金拾五錢
（九）	舌切雀	同	金拾六錢
（十）	鉢かつぎ	同	金拾八錢
（十一）	松山鏡	同	金貳拾錢
（十二）	鼠の嫁入	同	金貳拾五錢

▲注意▼一より六まで細骨にして坊つちやんに宜し
七より十二まで平骨にして孃さん方に宜し

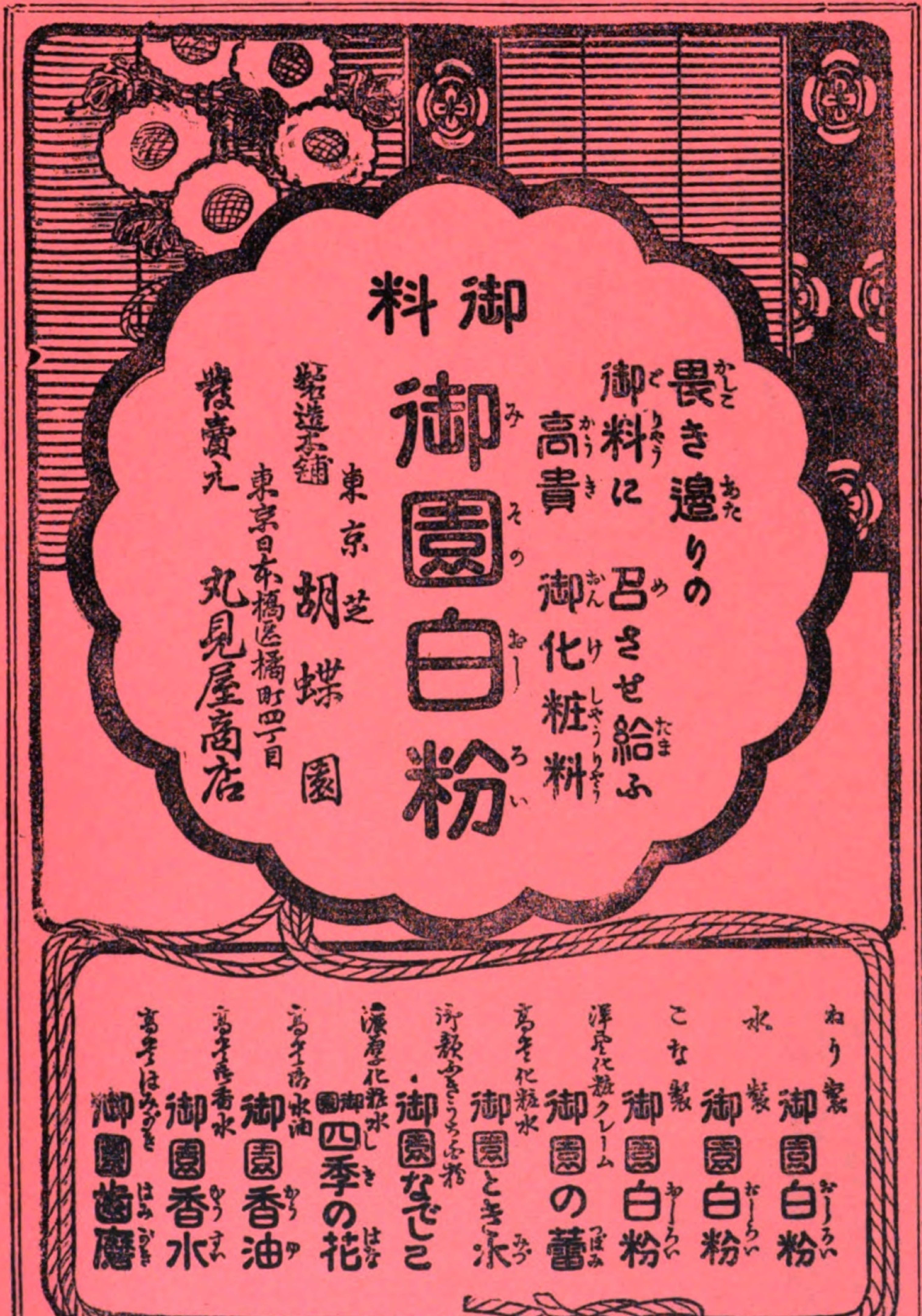
義也古扇

京都六角富小路（振替口座二六七五番）

宮脇賣扇庵

電話（長一八一番）（二五八七番）

女（との三）



御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
發賣元
ねり製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
洋風化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
御園香油
御園香水
高等はみがき 御園齒磨

女(との四)

雪中の松



新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡の「サーサパリラ」は峻烈なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓也

らい病根治新劑

癩病患者の新福音——最新發見藥——(レプロイス)

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治することと到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

血塊 流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば中年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき**類似僞藥**を顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ無効なる



腋臭 わきが 根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**するゝこと確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割増しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房

女（ちの三）

女（ちの四）

名流婦人



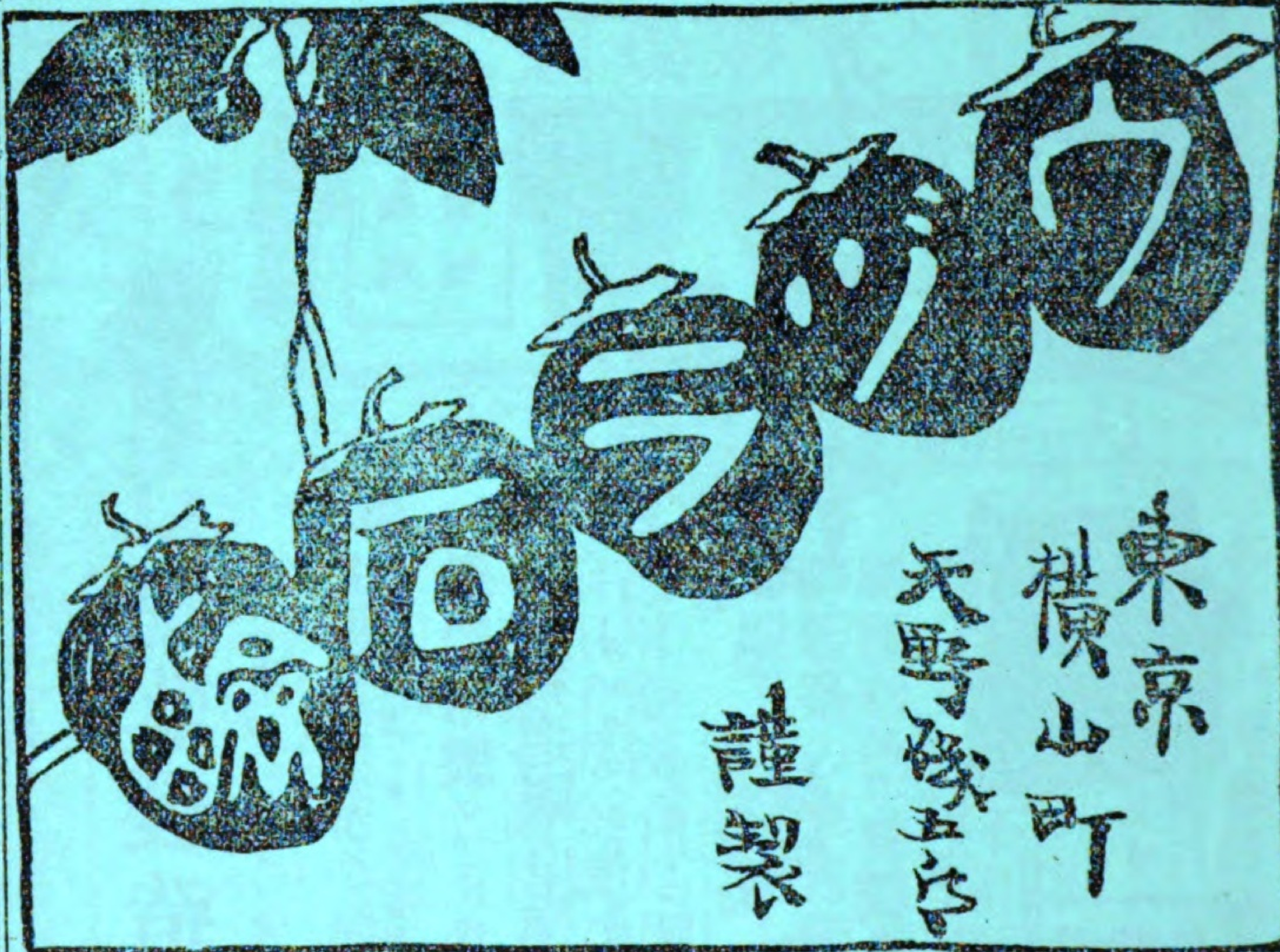
戸田伯爵夫人極子



鍋島侯爵世嗣夫人禎子



三井男爵夫人苞子



産科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齡の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⊙著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ。

目次

婦人病の總論⊙子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法⊙神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法⊙しらちながちの病理及其根治法⊙月經時の手當月經諸病の療法⊙姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一 笹岡省三 （電話新橋三千六百一）

女（りの一）


謹賀新年
◉東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
◉山葉製オルガン（金拾八圓以上）ピアノ（金参百卅圓以上）
◉鈴木製ヴァイオリン（金貳圓以上）
◉獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）
オルガン（金参百五拾圓以上）ヴァイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器
絃樂器各種
◉舶來樂譜
◉獨乙國製樂器
新荷着
目錄御入用の節は往復葉書にて御申越次第御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四九一番

女(りの二)

新春の雜誌界に光彩燦爛たる本誌の大美裝

東洋婦人畫報

一月一日發行 毎月一回發行

正月の卷

一部金廿五錢 郵税二錢 六冊壹圓卅八錢 十二冊二圓六十四錢

◎本誌の畫報は雜誌界中の一大特色、一大美觀なり!!

◎新年と婦人の覺悟……大隈伯爵
◎男子に對する態度を一變せよ……新渡戸博士
◎思ひ出多き新年……下田歌子
◎還羅の新年……安井哲子
◎小說……大塚楠緒子、三宅花圃
◎新年の子供の遊び……岸邊福雄
◎酉のはなし……井上折山

◎筆はじめ(石川寅治畫伯が最も苦心を凝らせし作にして艶麗花の如き妙齡の閨秀畫家、石版十五度刷極彩色二頁大の大附錄
◎御新築の東宮御所と東宮同妃兩殿下……
◎妃殿下と貴婦人の餘興御覽◎女子大學生の自轉車……
◎徳川實枝子夫人◎合奏……
◎前田子爵令孃の養鷄◎新春の名家夫人……
◎令孃鑑◎岡田八千代女史と長谷川時雨女史……
◎新郎新婦◎五常樂……
◎宮川、野口、龜井三女史……
◎其他優艶花の如き寫眞版十數葉あり、眞に婦人界の反射鏡たり

◎姑となりし始めての新年……鳩山春子
◎娘時代の新年……跡見、三輪田、棚橋三女史
◎女學生とかるた……山脇房子
◎支那の新年……淸藤秋子
◎新春の料理……龜井まき子
◎婦人の理屈……紅芙蓉
◎其他十數名家の最趣味に富める實談、逸話、衛生、等滿載す

◎本號より紙數を增加し記事一大發展をなせり!!

東京神田 東京社 小川町四十一番地

女(りの三)


謹賀新年
ケーバ石鹸
舶來石鹸界の覇王と稱せらるゝ本品は本國にて品質に一大改良を計りし爲め一月元日より値上げ仕り從來の直段より
大形壹個に付五錢増し
小形壹個に付三錢増し
と相成申候
東洋一手
代理店
竹間商店

女(りの四)

女生徒の修學旅行



跡見女學校の生徒が鎌倉地方へ旅行せし時の紀念撮影

最新式月經帶
月の帶

効用

●月經時に使用すれば如何程強い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令嬢教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品なり

●赤白帶下の強き人、子宮病を惱める人等にも最も妙也

●初めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を温め子宮病を豫防するの効があります

●殊に月の帶は其製造の親切なるを以て極めて堅牢なれば長く使用し得らるべし

改正定價（特製品金一圓五十錢、甲種金一圓（附屬品添）乙種金七十五錢送料各八錢

▲送金は郵便爲替郵劵代用は必ず一割増

發賣 醫療藥品器械勉强店 東京神田猿樂町二丁目 **資生堂藥局**

村井弦齋先生曰く有名の山田逸子が歐羅巴に行幾多月經帶を調査し日本婦人に適する樣改良を施し新に製造したる『月の帶』は私共の家族が用て居ますが至極輕く腰の工合も自由で大層都合が良です云々

元大阪府立病院產科婦人科醫長**伊庭醫學士**は、本品の婦人衛生に適し且必要なることを婦人世界に汎く紹介され

報知新聞曰く『月の帶』は產婆山田逸子が西洋婦人の用ゆる月經帶を我邦婦人に適する樣改良を施したるものにて日常之を用れば各種の生殖器病を豫防する故月經時の活動に最適當也

婦人世界雑報は殆んど毎號其記事欄婦人衛生問答欄及各通信欄内に於て本品の衛生經濟に大稗益あることを賞賛し汎く紹介せられたり

其他明治の家庭、女子文壇等に於て頗る好評を博し**宮中、御殿**各貴顯紳士の家庭は勿論殊に近時**各女學校**に採用され多くの**御用命**を蒙る**名譽**を得たり

女(ぬの二)

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日 目に必ず美麗に除去す

保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さずることと無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて美質を完うせよ來館者へ感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に天然の美質は山の如き全治者の世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

●白色特効 ペーアス石鹸

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし・粗糙質を米するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ品切中の處今回拾萬個着荷せり)

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

●毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑大瓶一個を用ゆれば忽ち毛髮著しく發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付孝に玉石混同視すること勿れ

藥價特別製大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

●奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

聲惡しき人又は聲出ぬ方の新福音

●美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓拾五錢

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして…男子は威嚴あり▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

(ウエーヌス有効感謝狀)……(近着の分)

一筆示し上候先達て私事貴地に於て興行中聲ないため候節あなた樣より結構なる御藥申受け候間其御藥前夜に用ひましたら其翌夜八分通り直り尙又三日目の夜はすみやかに元の通りに全快致し誠に不思議におもひ其まゝ大阪へ歸りました折柄他の太夫竹本廣鶴竹本房七樣兩人共聲ないため候に付直に其御藥二回分づゝあげましたら私同樣に直りました故此御藥は世にまれな御藥にて太夫一同不思議におもひ右兩人より貴所樣へよろしく御禮を申のべくれと私方へ依賴を受ておりますす此御藥に付て私共迄誠に功名致しました誠に〱喜び居り候故に今回愚筆を以て御禮申上候 明治四十年七月十日 大阪女義太夫竹本隅照㊞

其他如斯感謝狀は積んで如山も皆大同小異に付略して爰に掲載せず

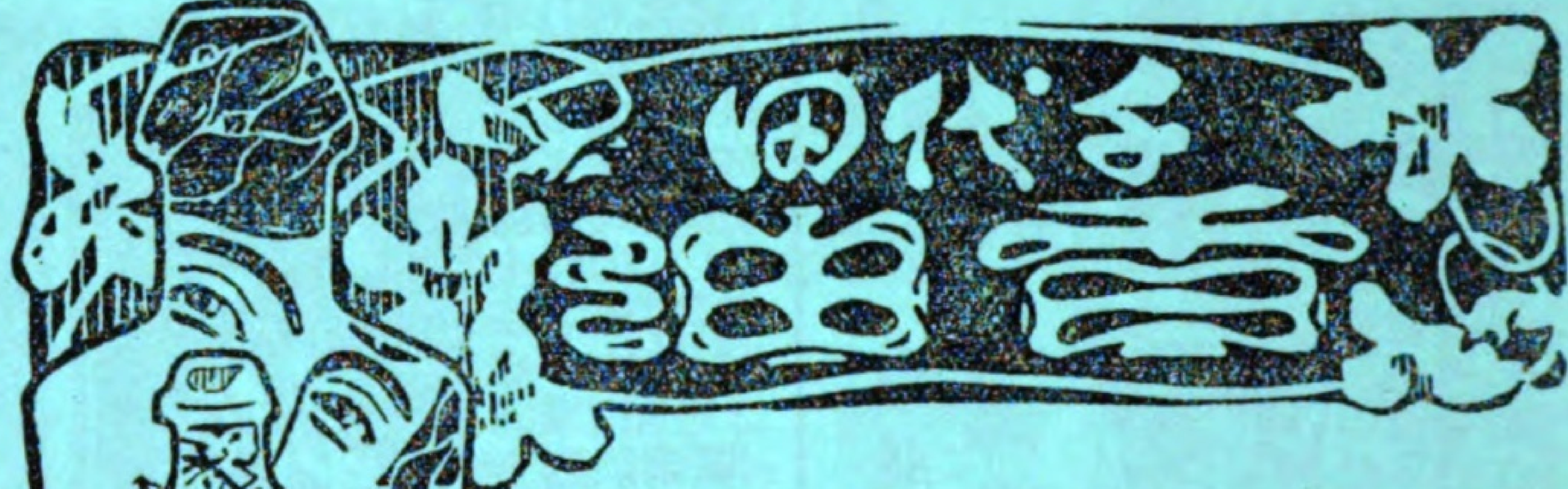
以上五種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女(ぬの二)

婦人教育會の總會



舊臘高輪なる毛利公爵邸内に開かれたる時の景況





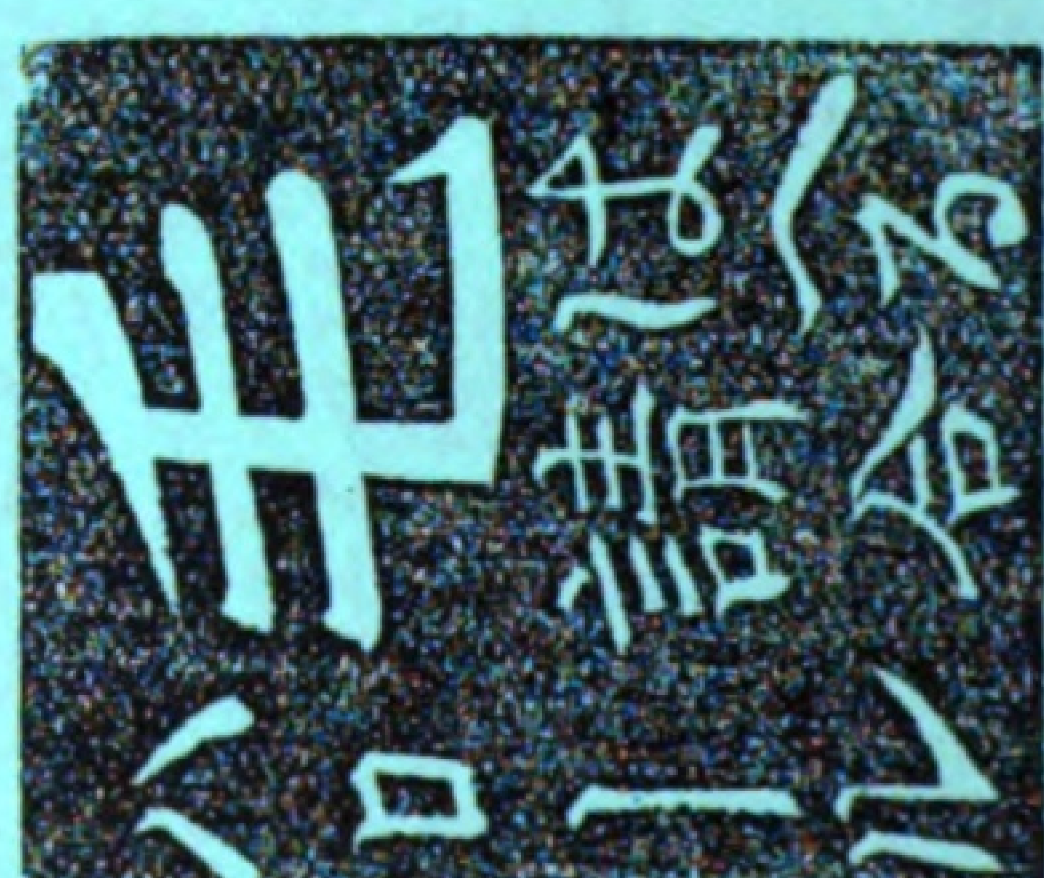
恭賀新年

千代田香油と白粉とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり

香油 ｛大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢 特製七十錢

白粉 ｛大瓶卅五錢 小瓶二十錢 水製廿五錢

東京馬喰町 **山岸三之助** 電話浪花三七九三番



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無貴任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する沃度丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツホー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ●

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
醫科大學卒業藥劑士
本舖 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

大取次左ノ通リ　大取次附近ノ各藥店ニアリ

東京市
本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
麹町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一ノ二 加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹内藥局
同青山北町五 西井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
高松市片原町 新明藥局
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角 福知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り 安江洋反物店

大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 荒川長太郎
同鐵砲町三丁目 谷田藥局
神戸元町一丁目 西村闘寉堂
廣島市橋本町 萬代藥堂
神奈川青木七軒町 永崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 磯崎藥局

女(ろの一)

謹賀新年



東京化粧研究會編纂（新刊）

洋裝菊判全一册

化粧のもし

六拾錢　郵稅八錢

本書は衞生上及修容上化粧の智識と方法を懇切に說明したるものにして家庭上化粧の教科書とすべき好著蓋し淑女諸姉の座右に缺くべからざるものなり

發賣所　東京日本橋區數寄屋町　六合館　振替貯金口座二三七一番

川上貞奴嬢十數年來常用の美顏化粧料

シモンクレーム

粉白粉（ライスパウダー）黄色

佛國巴里シモン會社製



何故にマダム貞奴嬢は斯く永く此のクレーム並に粉白粉（ライスパウダー）黄色、肉色、白色の化粧料を朱鷺色等使用しつゝあるか……それは『シモン、クレーム』は一種の強壯劑と皮膚を柔かくする藥劑及化學上數種の美顏料を配合して數十年の實驗と緻密なる注意監督の下に精製せられたる美顏と衞生上世界無比の良品であるからであります

『シモン、クレーム』は皮膚を白くし且つ滑かにし表面がすべ〳〵となり又天鵞絨の如く艶麗ならしめ快よき香氣を發します毎日お化粧の時に御使用になれば何時もつや〳〵しき容貌を保たれます

『シモン、クレーム』はヒゞ、アレ、霜ヤケ、唇のワレ、日にヤケ、ニキビ、汗モ等には僅かに少時間で其効能が分ります又髯剃の後やお小供衆に塗抹しますとすべ〳〵となり大變氣持がよく又非常に美しくなります

日本代理店　横濱七十番　羽車印ホワイトシヤツ販賣元　エー、ハイム商會

關西特約　大阪市安土町四丁目　河井商店化粧品部

一手販賣　東京大阪三越吳服店は本品を世界最上化粧料として今や盛んに推擧しつゝあり

登錄商標



○各地洋品店及化粧品店にあり

シモン、クレーム、粉白粉、石鹼共特に登錄商標を御確め御購求を乞ふ

懐妊避妊自由自在

子なき人は本書を讀みて懐姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懐姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割增

全壹册 拾五錢 送料貳錢

大阪市東區和泉町二丁 泉陽堂

◉子を持つ親病人ある家人は必ず讀め

定價 乳兒用九拾五錢 中人用壹圓貳拾錢 大人用壹圓九拾五錢 特別製品各貳拾錢上り

ね小便袋



衛生最良徳用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば小兒病人老人の最も必要にして、ね、をき、たち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり(男女の區別あれば御注文の節御注意をなふ)

發賣元 大阪市東區内久寶寺町四丁 旭商會 振替貯金口座大阪一二一四〇

通學生募集

高輪裁縫女學校

東京芝區二本榎壹丁目

美髪療法

本會々長石原ドクトル多年の研究と實驗せる學理に基き左の毛髪變常症に對する最新有効の自宅治療法を教ゆ

▲ちゞれ髪 ▲くせ髪 ▲薄き髪 ▲赤髪 ▲白髪 ▲禿髪症 ▲染髪藥 ▲毛生藥 ▲脱毛藥

◉通信手續は返信料添へ照會あれ

横濱市山田町二丁目十四番地 治療研究會

洋畫講義録

洋畫講義録は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯 三宅克己先生 岡田三郎助先生 大下藤次郎先生 中澤弘光先生 外大家十數名

新學期開始!

東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

繪畫講習録

繪畫講習録は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿す、毎月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯 川端玉草先生 荒木寛畝先生 寺崎廣業先生 梶田半古先生 外大家十數名

女(その三)

純金包張細工装身具

△本品は其名稱(包張)よりも實品に價値ある事は大阪有名新聞…朝日毎日新報時事…等の記事に張金術と題し高評嘖々たるは獨り本品のみ

美術
保險
専門





△純金包張指環
四匁付 三圓五拾錢
五匁付 四圓貳拾錢

△右の外御注文に應じ如何樣にても調製可仕候に付御用命を希

●尚御注文の節は指廻り寸法及印面の形ち御明記被下

●印面の種類は卅種

附言 以上の品は在來の人造金の如き品と其地質大に異り故に外部純金を以て包張なせば光澤は勿論其重量は正に純金同一永久に使用の稀品也

文字彫刻料一字廿錢 送料十錢

●時計鎖 八匁付 六圓半より種々

◉ 18金包側 合成金張側 懷中時計

弊店は各國時計中品質精良にして最堅牢正確なる物のみ撰拔し廉價に販賣す右時計は總て三枚蓋にして形は御望み次第各卅ヶ年保證を付す

價
18金包側 甲卅圓乙廿五圓
合成金張側 甲拾三圓乙九圓
各送料十二錢

以上の外金緣眼鏡老眼度付其他御婦人用金銀細工物色々 目錄入用三錢

發賣元 大阪東區京橋貳丁目 常盤號 振替口座八一九八番

◉子のある親 病人のある家 人は是非必要

本品に紙製の類似あり注意

◉衛生を重ずる人は◉

◉徳用輕便を好人は◉

ね小便袋は近來非常に發行せり最上のゴム製なれば永久使用し得る常に洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば老人子供病人等有人は一時も早く使用し其効驗を知られよ本品は立ち…すわり…ね…をき等に毫も差支無妙の特長

一度試み給へ本品は各病院の有功證明有

製造元



◉定價 大人用壹圓九十五錢 中人用壹圓廿錢 乳見用九十五錢 外に特別製各廿錢上り 各送料十二錢

ゴム専門

大阪市東區京橋貳 常盤號 振替口座八一九八

見ヨ

専門



純金包張指輪四匁附 正價金貳圓八拾錢

文字入彫刻一字貳拾錢 純金包張(クサリ)拾匁附 正價金六圓八拾錢

前金送料拾貳錢引替送料四拾錢 貳拾五錢清韓送料四拾錢

商品目錄四錢送レ 送呈ス



大阪安堂寺町善安筋北入

阿波屋商號

振替口座大阪四九九番

見ヨ

女(ろの五)

女學部新設

實用女學講義錄 發行

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ケ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半。此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月女學雜誌『姫百合』を發行して會員に限り毎號無料進呈す『姫百合』は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學說創作及び會員の投稿を揭ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◎新學期開始――至急入會者に限り入會金全免すべし◎

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

見本つき規則 無料進呈

(その八)

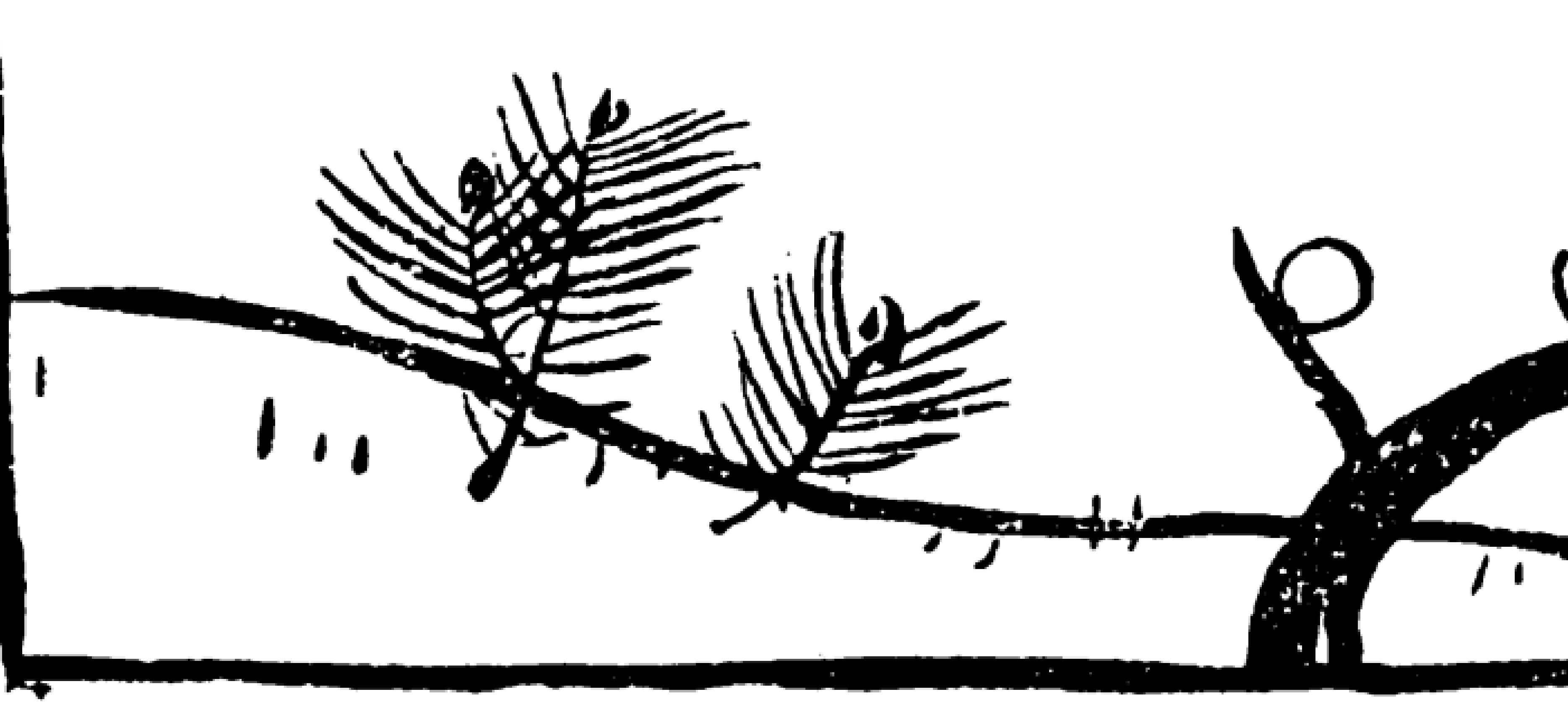
新年の辭



眞紅洋々として新年の曙光は紫雲靉靆たる東天にかゞやきいでぬ。「思ひ出で多き」との數字に結ばれたる舊年追懷の頁はこゝに新たに「今年こそは」の希望ある頁と更へられぬ。此祝す可きうれしき元旦にありて厚澤なる國恩に感泣するわれこそ、抑もいかなる計畫をや起す可き。

時世の進運につれて男子は外にあつて事益々多からむとす、この時にあたり家庭に社交に教育にあらゆる務めをさゝぐ可き婦人は懸據さらに紐をかたうせざる可からざるを。即はち從來の如く囚へられたる日本の日本婦人たるにあらずして世界の日本婦人たる可き自信と努力とを求めてやまずんばあらざるなり。

其の如何なる準備より那邊に反響を促がさるゝかは最も興味の耳を以て婦人諸君に問ふ所。今年の本誌またこゝに聊か協力貢獻せんと期するに餘念なきなり。





不幸なる結婚と不名譽なる老孃といづれを我等は選ばんか

眞心ある女

計らずも不幸なる家庭の人となつて、一年を泣き明し候 私より一つ下の廿二の從妹、まだ一週間ばかりにしかならぬ舊臘押しつめの廿六日に、遂に離婚の悲しみに遇ひ候ひしが、人は目出度き新年の祝詞に事よせて、そと今日私を尋ねてくれ申候。つひ先刻迄、例の書齋の一つ火鉢に頭よせて、長歎の太息、涙をながして二人語りあひ申候。

其の亂れて不和なりし家庭は、從妹の良人なりし人の放蕩に原因いたし候。初めて從妹が嫁がんとする當時、多少は其の良人となる可き人の性格も知れ居り候まゝ、私は絶對に反對いたし、從妹もどうやら進まぬげにも候ひしが、誰れも人には多少の缺點は必ず有るもの、かれこれとあたら婚期を失しては、との父母親類の心配から、遂に昨年一月、嫁す事に相成り、以後丁度一年間、放蕩家の妻として、隨分不幸なる家庭に起き臥し致し候。

『從姉さんの樣にお宅に長く居らつしやつてお幸福でしたわ、私の悲しみが好い手本、せめて姉樣がたは何時迄も幸福な人で居て頂戴、眞實に私、撰擇を誤つて居ましたんですわね。』と、歸るさの寂しい微笑に斯う云つて、立ち上つた可憐の從妹を、玄關迄送り出して

再び書齋に歸りし私、不幸なる結婚の哀れと、不名譽なる老嬢の薄命とを思ひ較べて、又一しきり、冷たうなりし火鉢の前に、轉た思ひを深ういたし候。

生れて今年廿三年、私未だ決して、自ら老嬢とはかなみし事は之なく候へど、人は餘り若からぬ年だと申候。近く結婚に就て、一つの恐怖心を抱き候ひしが、今宵また從妹が悲しき運命と共に泣いて、果ては我が身の上迄も、思ひ迷ひ候、終りを遂に自ら「不幸なる結婚をなさんより、寧ろ清き老嬢として、一身を崇高の事業に捧げよ。」との結論をつけ申候。友よ、暫らく笑ひ給ふまじく候。

此の結論、無暗に老嬢の肩を以て、尊しとなす譯にはこれなく、不幸なる結婚をなさんよりは、との前提を置きての後の事に候。勿論どの方面より考へても女子が生涯獨身に過さんは、不適當の事と存じ候。然し文明の進歩と、教育の普及は、現代の若き婦人に斯くの如き煩悶を齎し候事、必然の結果、新事實と申可く候。尙又世界の統計學者が男子の數よりも女子の數が多しと申し候へば、數の上に於ても我れ等女子の中、誰れか、溢れ者とならんは當然の事にして、豫め此の覺悟が必要とぞんじ候。

辿り行く人生の旅路、遂に好個の配偶を見出し得ざるの時あらんか、徒らに我が身の老ひを悲しまんは愚の限りに候べし。歐米の諸國、婦人の獨身者は頗る多く候、それ等凡て醜ならず、虛弱ならず、偏固ならざるの婦人にして、才色兼備、妙齡者の多數なる事は、私共の遠く考へ及ばざる處に候。而も之れ等獨身者は決して自ら不幸とかこたず候。否寧ろ自ら精神的幸福の生活をなし、尊き事業に一身を捧げて眞心から滿足いたし居り候。

あたら青春の華かなる時代を、冷たかる可き老嬢として過さん事、慥かに一面悲慘の事には相違之れなく候。然し自らの幸不幸は己れ自身の心一つに候べし。堅き決心と覺悟と一身を捧げてとの眞心あらば、不幸なる家庭に無爲なる呼吸を數へんより、慥かに光榮ある生涯と申可く候。

さるを頑冥なる世間の人、所謂道德に囚はれたる世間の父母や娘は、結婚せずして年頃を過さんは此の上もなき不名譽の事と心得居り申候。何が故か、其の明かならぬ理由に苦しみ候。父母は娘が女學校を卒業して、はか〲しく良緣の見出されぬ時は無暗に氣をもみ候て、賣り物か何かの樣に、「時機を失してはならぬ。」と時機の來ぬまへ、もう既に失してるかの樣な大騷ぎを致し候へば、娘の方も之れと同じく、嫁したる友を數へたてゝ一人取り殘された想ひして心細がり申候。

　其れさへあるに、惡口上手の世間の人は、いらぬ事迄親切相に、人の疝氣を氣に病んで、「彼處の孃樣はもう廿二だのに、大層御緣が遠いぢあないか、家の血統でもいけないのか其れともあの孃樣に缺點が有つてだらうか。」などゝ、知つたか振りの批評、眞實に要らぬおせつかいに候。

　玆に於てか、此の老孃の大不名譽に(?)比して、多少の缺點と不相應とを知り乍ら忍んで結婚を求むる婦人は今の世に少なからず候。放蕩家でも、怠惰者でも、けちん坊でも、醜男子でもかまはず、甚しきは老人の五十面、少し位の片輪はよし、嫁して了へはどうにか平衡が取れるだらう位の考から、一個の男子とさへ見れば敢へて辭せざる婦人は多く候、さりとては餘り狼狽方も度に過ぎ候。

　これ程不合理な僞善な事は、又と世に有るまじく候。心得違ひの家庭敎育よりか、心得違ひの社會道德よりか、何にせい未だ頑固の遺傳習慣をやう脫し得ない、婦女の權利義務を無視した社會の弊風に候などゝ赤ん坊の癖に小癪な、あんまり大きい口はきくまじく候、然しこれで釣合がとれ一家が圓く納らば、此の上もなき結構に候へど、試に見渡す友や親戚や、多くの家庭の平和ならぬが心細き限りに候。

　此の樣な事申し候へど、實は私も老孃と云ふのが嫌ひに候、此の語をきく度に私は名に負ふ好個のモデルを髣髴と眼前に思ひ浮べ申候、事はある一夏の事に候、殊勝にも、學校の休暇を東都に殘つて、音樂の講習會

に通ひ候ひしが、第一日に其の若き女の集りより好個のオールドミスのモデルを見出し候。好個とは「所謂の」意味に候。例の物ずきの私は好奇心にかられ申候、そして非常に趣味を以て彼女の觀察につとめ候ひしが、十日の後には親しくなるを得て大方の心理は解し申候。

先づ第一に目に止まり候は彼女の風采に御座候。年は三十歳許り、例の前髪を出した束髪に金蒔繪の三枚櫛は勸工場物とすぐ知られ候、裾短かの紫袴、飛白の着物は割合にはでに候ひし、艶のない皺多き顔に薄化粧して、曇つた双眼、やせほけた頬、極めて薄き唇の色は褪せて、とがつた鼻の下にはうつすりと髯が少し生へ居り申候、これでさへもう、限りなき悲惨の影、人生の哀れは此の人の一身に集められたかの樣に、何とやら痛ましう存じ候ひしが、其の婦人と親しうなつて、更に此の感を深う致し候。

東北の地方、或る村の小學校の女先生の由にて、『師範學校卒業してからズツト今迄、獨身して育英の事業に盡しました。』と其の初め私に申され候。第二日目に此の婦人には非常の偏僻の傾向ある事を見出し候、以後十日交際するに從つて小さい事迄よくわかり候ひしが、猜疑執拗の心深く、同情の念乏しき樣にて所謂曲り根性なる事を知り申候。知らず知らずの習慣によりしものか、それとも之れが此の人の天性なるやも知らず候へど、何にせよ歐米婦人獨身者の勇氣壯快に較べて、慥かに雲泥の差と存せられ候。此の樣になり終つては老嬢も嫌やになり候。

斯の樣なみぢめな婦人は、若き時よりの覺悟が足らざりしからの事と存じ候、現今の良妻賢母主義、結構に候へど凡て家庭に入る女のみには候はず、不幸一人して立たねばならぬ婦人に良き覺悟を與へん事も目下の急務に候べし。茲に於てか或る先生の宣ひし「彈力ある婦人」とは誠に意を得たる言葉に候。如何なる境遇にも常にバウンドして應ずる婦人、之れにて何時の世にも、何時の處にも必要の事に候。

移りゆく旅路に關係よろしき己が住家を見出し能は



ざるの時、道徳の絆、世間の手前に囚はれて、不幸なる家庭の人とならんか、何等價値なき犧牲となる可く、餘りに辛き用意に候。さればぞ、不和なる家庭に囚はれんよりむしろ老孃として大なる家庭の慈母たれと、願はれ候。餘りに我田引水の論と友のゝ給ふか、さらば笑ひて多くの苦言を返させ給へ。

今十二時、遠く離座敷にてはまだ妹等が時を忘れて歌留多あそびに、興がり居り候、此處は靜か、更けし夜の何時よりか、淡雪がさら／＼と、窓の小笹に聞えだし申候。

今宵の感想を僞らず、新年早々から驚かせ參らせ候罪、友よ許しましてよ、かしこ。友の君へ――すみれ

私が見てつくづく呆れた事實

今の婦人を如何に見るか

扶桑女學校長　小林一郎

空想が上手

女學生に作文をやらせて見ると、空想に屬する事はなか／＼上手なもので、例へば「雨」とか「風」とかいふ様な題を出すと、自分自からが雨になつた心構で、「雨になつて薔薇の花の上へ降つて來た處が、大變綺麗で、自分の身が紅く染つた」とか、或は「氣が附かずに花にとまつてる蝶々の上へ降つた處が、蝶々の羽が濡れて飛べなくなつて、可哀相だつた」とか、然ういふ事を書かせれば旨いもので、誠に感心される程の出來榮のもある。處が「勤儉」といふやうな題を出して見ると、さあ全然物にならない、滅茶苦茶で理路も通らず、何を言つてるのだか薩張分らない。つまり少し理論がかつた事になると全然だめなのです。修身の話などでも、後に訊いて見ると例話ばかり記憶えて居て、その間の理路や意味は薩張頭腦に殘つて居ない。

どうも今の若い婦人は、あんまり具體的な、感覺的な、即ち色彩とか形容とかいふ物や、若しくは空想的の事にばかり走つてゐて、少し抽象的な、理性に訴ふべき事、即ち頭腦で考へる方の事に對しては、實に呆れ返るほど興味が乏しい。これがまあ現代の婦人かと思ふ程である。

賢母良妻と頭腦のレベル

これも一つは教育者側の影響によるので、今は何でも實用的々々々と云ふ所から、手藝などといふ事が流行物になつてる勢で、從つて若い婦人の興味も唯々實際的になるのです。成程手藝も結構ながら、然ういふ末の事ばかりしてゐて、肝腎の頭腦を確乎養つて置かなかつたら、果して活用が出來るであらうか女學校の

家事科などゝいふものが、チヨイと生理衞生の事を話しチヨトと敎育や經濟の事を話すので、これも實用的の事でせうが、然しあれだけで果して實際の活用に役立つであらうか。だから頭腦を作る事を忘れての實用的實用的は、却つて實用に遠ざかる所以である。

あんまり末々の場合々々を擧げて話し、又それにばかり賴つてゐるのは大いに考へ物であらうと思ふ。習つた場合以外の場合が出て來れば直ぐ困つて了ふ。『それは學校で習はなかつたわ』などゝいふ事が直きに初まる。そんな活用の利かない事ぢや不可。が、其の活用は頭腦の確乎してゐるのにあるので、即ちよく物を比較し場合を類推して、一から二三を推して知るといふ科學的頭腦の活動にあるのです。だから確乎した頭腦を養ふのが却つて眞の實用的なので、所謂實用はむしろ實用に遠ざかる所以であらうと思ふ。

同じ意味で只管に賢母良妻々々々々とばかり考へて居るのは、却つて賢母良妻となり得ぬ所以であらうと思ふ。一口に賢母良妻と言ふがその實を擧げるのはなかなか容易い事ではない。今のやうに單に雜駁な智識や、諸種の手藝を纏まりもなく少し習ひ覺えたゞけでは到底だめである。最つと確乎した科學的の、活用の利く頭腦を作らねばならぬ。で、一般に頭腦を最つと高い水平線に進めねばならぬと思ふ。その位まで進んで恰ど眞正に活動ける賢母良妻となれるのである。西洋のやうに老孃の女學者などが澤山出來られても困るが、然し一人や半分は然ういふ婦人も出來る位までに一般の婦人が學問や理智の事に興味を持つやうになつて來ねばならない。新らしい空氣に滿ちた新らしい家庭を作る婦人は、どうしても然ういふ頭腦の傾向に進まねばならぬ。

自ら白狀してゐる事

が、それは擱いて、まづ今の若い婦人の實際の樣子を注意して見るに、

蓋し人は一言一行悉く我を語つてゐるものである。『はゝ此れは恁ういふ頭腦の女だな』といふ樣な事

は、作文でも分る、試驗の答案でも分る、話をして見ても分る、不用意に語つた其の物の言ひ振り、不用意に書いた其の字の書き態でも分る。殊に私の學校などは敎室や廊下の掃除を總て生徒にさせるので、その掃除の仕方などでは猶よく分る。

又面白いのは何かの式の後の餘興などに、『敎科書からでも何でも可いから、自分の一番面白いと思ふ一番好きな文章を選んで、それを朗讀して見なさい』と言ふと、その選んで來る文章で頭腦の傾向がよく分る。自作の文章では何うしても一部分掩うてゐる處があるが、他人の文章を選むとなると露骨に眞相が現はれて來る。平安朝式なのもあれば、德川時代の俗文學を選んで來るのもある。古典的なの、現代的なの、外國物の飜譯を持ち出すもの。かと思ふと又然ういふ感情的なものでなくて、嚴ましい哲學的な、人生觀などを論じたものを持出すのもある。然うして悲觀的なのや、唯無性に快活なの……

時々畫の敎師が模樣の意匠をやらせて見るが、それが又我を語つてゐて面白い。此頃も長方形を畫いたものを題に與へて、それを紙入の心持で模樣と色彩をして來させた處が、さあそれが千差萬別で、中には大きく日の出に鶴を描いて、まるで下等演劇の引幕のやうなものを拵へて來るのもあれば、又ずつと澁く淡い間色を用ゐ、模樣も大分古雅な、蘆手書などをやつて來るのもある。かと思ふと全然一杯を紫で塗りつぶして了つて、それへ金箔か何かで大げさなものを描いて來る。又藍で太い瀧縞などを書くのもある。或は厭に細かくゴチヤ〳〵して、何だか要領を得ないものを畫いて來るのもある。平生の行爲と思ひ合せて、そゞろに微笑まれるやうな感じがする。

不思議なもので、例へば遠足とか何かの式とか言ふやうな折に、時間よりも恐ろしく早く來る者がある。然ういふのに碌な人物はない。即ち定めの時刻より一時間も早く來るのです。つまり最う沈靜いてはゐられなくて出かけて來るので、然ういふ尻の据らぬ人を妻君に持つた男子は大變であらうと思ふ。

噓は女の特質？

日本の女は最う遺傳的に噓を吐くと言はれるが、兎も角も女は實によく噓を吐くと思ふ。男に比べては確かに一倍噓を吐く。

それが必ずしも惡意あつてするのでないから憐れむべきものである。むしろ當人は自覺せずに噓を吐いてゐるのかも知れぬ。即ち第一に氣の弱いために噓を吐く。見す〳〵自分に出來ない事と思つても、それを斷る勇氣がなくて不覺諾と言ふ。それが後から噓になる。だから不可と思ふ事はピンと撥ね付けて了ふ事が出來れば、よほど噓は減じて來る。西洋婦人などは比較的この勇氣に富んで居るから可いのです。それから前のと反對に、出來る事でも若し出來ない時に惡いからと危ぶんで、不覺「私には到底」などゝ言つて了ふ。そして對者から「確かに出來る事を噓をいふ。不親切だ」と痛くない腹を探られる。

笑ふべき小名譽心、といふもの、これが又婦人に噓を吐かせる大原因である。何うも下女を使つてゐないなどゝ言ふのは不見識だ、と思つて、無い下女をも有るといふ。又その反對に有るものを無いといふ。「あれは貴女の御親類でせう」と言はれて、ナニ格別耻でも何でもない事を、それが餘り誇るに足らぬ親類だと、「否。さうぢやありません」と平氣で言つてゐる。

又不思議な噓――分つて見れば呆然として了ふやうな無意味な噓を吐く婦人がある。「貴女のお宅は芝公園でせう」といふと「否。愛宕下です」といふ。後で分つて見ると矢張芝公園なのだ。すべて此の調子で、何でもない事にそれから其れと皆噓を吐く。つまり自分を知られて了ふのが厭なのである。内兜を見透かされて了ふといふ樣な感じを持つのです。即ち一部分己れを秘密にしておきたいので、これは程度こそ違へ總ての婦人の持つてる感情でせう。由來女は自然的に秘密の多い身の上だから、自から自分を秘密に守らうといふ性癖を得るので、これは無理もないが、然し又其處から隨分詰らない噓が出て來るのです。

忘れつぽい感情家

女學校では最う珍らしくない例ですが、教師の轉任する者でもあると、必と最う生徒の中に泣く者がある。送別の式でもあると、その會場ではハンケチを絞る者が最う大部分に決つてをる。これは中學校などには絶えて見られぬ事實です。

處が又其れ等の教師が轉任して愈〻行つて了ふと、最う大概それぎりで、後までも手紙をやるといふ樣な事は一向に無い。送別の式場にはハンケチを絞つて泣いたのであるが、愈〻その人の影が其の地を離れて了つた頃には、最うケロリと忘れ果てゝゐる形である。長く後までも手紙の一本もやらうといふ樣な生徒は殆ど無い。

そこへゆくと、男子の方がよいので、後々迄も消息をしたり、或は訪問たりするのは却つて男子の方にあるのです。婦人の方には此の把住力といふものがない。ホンの一時の感情で、直きに紛れて移つて、忘れ果てて了ふのです。やつぱり理性の力が弱いので、その方から確乎と把住してゐないからなのです。喉元過ぐれば熱さ忘るゝ。あんまり是れでも頼もしくないではありませんか。

根本の缺陷は何？

自分から骨を折らない、これが最う今の若い女學生の最大缺點であります。尤も幼稚園で「先生は生徒の機嫌を取つてくれるもの」といふ事を覺え、小學校で「學校といふものは骨を折らないでも出來てゆくもの」といふ事を心得て來てゐるのだから、骨折らないのも無理ならぬ點もありますが、然し又あんまり骨を折らなさ過ぎると思ふ。骨を折れと言つたつて、別に此の上に澤山學べといふ事ぢやない。唯學んだ事を最少し自分で骨折つて、自分の頭腦で消化して統一めてゆかねばならぬと言ふのです。これが即ち確乎した頭腦――活用の利く頭腦を作る唯一の方法です。頭腦養成は自分で骨折らねば何うしても出來ません。今の女學校

の學課組織や教授法が散漫で雜駁なのにも固より罪があるが、然し女學生に此の心懸があれば、最つと消化して活用してゆく筈である。

今の若い婦人一般が呆れるほど推理的の頭腦がなく又思考的の事に呆れる程興味を持たないのは、かく學生時代に些とも自分で骨折らなかつた爲ですが、更に根本を言ふと、私は若い婦人に自尊心が無いからだと思ふ。

自尊心の置きどころ

かう言ふと『唯さへ威張りたがる今の若い婦人に、其麼事を言つては益々威張り出して仕方がない』といふ非難もありませう。けれども私のは少し意味が違ひます。

實際婦人は詰らない事に直きに自惚れると思ふ。ほんとに可笑しい程詰らない事に直ぐに自惚れて了ふ。電車で隣席にゐる人より自分の服裝が綺麗だと最う得意になる。けふは髪が旨く出來たと思ふと最う歩いてる顔付が違ふといふやうな譯です。私の言ふ自尊心は其麼事ではない。

「どうせ女だから」といふ卑屈心を去るべし、といふが私のいふ自尊心です。「どうせ女だ」といふ一語で、骨折も廢めて了へば頭腦を鍛へようといふ精神をも起さない。だから私は飽くまで「男女同等」といふ觀念を主張します。男は外に出で女は内を治めるといふは唯分擔する方面の相違であつて階級の相違ではない。飽くまでも男女は同等なものである。否、同等であらねばならぬ。

然し又私はいふ。本來は同等のものであるが、日本の現狀ではどうしても女の方が劣つて居ると。それは決して女が内事を擔任するからではなくて、男が外事によく活動するだけに女が内事をよく治め得ぬからである。飯を炊く其の事が耻づべきではなくて——どんな米が營養に可いか、我が夫には何ういふ米が適するか、硬さ軟かさは何ういふのが可いか、それらの智識と技倆とをよく備へてゐない——即ち完全に飯を炊き

得ぬのが耻かしい事である。處が遺憾ながら今の若い婦人は、まだ男女同等となる資格を備へてゐない。
だから自尊心の置き處を此處に定めて、即ち男女は同等である、否、同等であらねばならぬ。同等と稱して耻ぢぬ活動を婦人の擔任すべき方面として、活動くのが、即ちこれ女子の誇りとすべき處、天職とすべき處である、かく自から信じ自から尊まねばならぬ。
此の自尊心を眞に持つたならば、明晰確乎な頭腦の智識の養成も、さては高雅なる趣味の涵養も、自分から骨折つて行らう、といふ精神は、自然に湧いて來る筈である。單に夫の職業に同感して夫の話相手になるといふ必要だけでも、最つと高い水平線まで進まねばならぬ事は、誰でも感ずる事でせう。
其處に此の一つの確乎した觀念が据つて來れば、自然と其の重んずる所は立派な活動にあつて、詰らない事に嘘を吐くなど丶いふ、すべて其麼浮いた事は自から無くなつて了ふであらうと思ふ。





最高學府を出でたる女の行衛

彼等が卒業後如何なる方面に活動しつゝあるかの消息

秋雨

▲花守り　廣島にて　たつ子

御歌使ひのふみ迷ふ、朧月夜の萩の奥、といふやうな、そんな風流な花守りとはまるで異つた百姓女で御座いますのよ。

毎日々々油糟の香を嗅ぎ、かつては萬葉集湖月抄に不審紙打つた手を全然皮なりの杉の様にして土ほじりする苦しさ、やめてしまふことは容易う御座いますが、折角丹精した草花や木をせめて花さく春迄はとおもふ心がのび〳〵と今日此頃は人夫も多勢使役する事が出來る様になつて參りました、只今苑の地所は坪數にして大凡一萬坪ばかり、しかしこれを全部私がするのなら豪氣なものですが、なか〳〵さうは參りません、兄の持物なので、私はそのうちの草花部丈けをあづかりて居るので御座います。

今は折柄霜枯れどきで野菜部の方は大變面白い相ですが草花部の方は一向榮えません、まづ菊も終り、水仙が持切りの姿で御座います、此の草籠に入れるときも大變心配しましたが東京迄枯れずに參りましたかしらん。

學校にある時分から園藝には趣味を持つて居つたつ

もりの私も實際に當つて見ると、思ふた程の結果をあげる事が出來ないので隨分ある時は氣がもめます、しかしこの五ヶ月間花そのものゝ成長から得た教訓よりも、はたらくうちに或は人との關係からまた花に含まれてゐる暗示から訓へられた經驗がより多いといふことは事實で御座います。私もかくして一生を過さうといふのではありませんからには、只技術的に通じた處で大した貢献は出來ようともおもはれませぬが、將來成さうといふ事業の上に今の準備の時代がどれ丈けわ



たくしに必要であるかといふことは今自覺して居る以上だとおもひます。

第一、人を使役することの難かしいことは、私の樣なわかいものには頭から信用をして與れません、それをともかく今の樣に協力、皆が仕事を樂しむといふ迄には隨分苦勞もいたしましたし、かれ等にも苦勞を懸けました、それをおもへば、現在の盛況を得るに至つたのも決して偶然ではないと信じます、目下專心私を扶助てくれて居りますのは、壯年の者が三名と老年

のものが二名と、それにその妻子を加へて凡てゞ十三名で御座います。

元來これ等は天來の素朴、やゝもすれば習慣的の迷信を固持して新らしい空氣を吸ふた人を罵ります、また實際新空氣を吸ふて居てもそれが消化して居ないので應用の才がなく實行力の薄弱な處から自然結果もあがらぬといふわけ、それをかれ等經驗の賜から罵るのは無理もない事なのです、此の間の調和を保たん爲めに費した、時と、お金も少なくはありません、それでもどうかかうか、よい結果を見るにいたつたことはうれしいとも何とも譬へ様のない次第、他日人を使ふ上に於て人間を見拔く心の鏡は今から磨いて置かねばならぬと始終考がへて居りますと、同時に私もかれ等につかはれて居るので御座いますもの、「使はんものは先づ使はれよ」の訓言は、今の場合の金科玉條で御座います。談は少し側へそれますが、今の世間の奥様がたが動もすれば雇人を奴隷視した樣な苦々しい振舞をお見せになることです、かういふ所の雇人にかぎつて陰險、怯懦、正面から見れば、から意氣地のないものであります。「雪の日やかれも人の子樽拾ひ」たとへは妥當して居ないかもしれませんが他人に於てすらこの通りの情は出るもの、まして一日でも二日でも縁あつて我が家の臺所を手傳はせる以上は、自分の手足と同じで御座います。それを牛や馬のやうに只こき使ふとは年寄りならば後生罰があたるとでも申しませう。要は雇人は奥樣の技量があらはれる結果に外ならないといふ事なのであります、あまり長くなりますからこゝらで切りあげる事として今一とつ花からの暗示、すなはち人が此の世に對する道として誰れもが花の樣な心であつたならばといふことで御座います。かれ花は口もなく耳もなく目も鼻もありません、けれども無言のうちに美くしい花に咲き、無言のうちに實を結んで居ります。そして人の情けに報ふて居ります。ともすれば輕薄な世に私はこれを思ふごとに、よき修養錄を、活きた手本に有して居ると心ひそかに誇つて居ります。世の人はそんな佛臭い馬鹿な訓があるものかとか、浪

漫的な空想をとおさげすみなさるかもしれませぬがともかくこんなにおもふて居ります事實ありのまゝを右のみかしこ。

▲わが願ひ

東京にてひなを此の度、秋雨氏の手に由て編まれし草籠、には一とかたならぬ贊成を致し候、のみならすこのお催しに對して感謝の外これなく候、と申すは、ともすれば遠ざかりゆく世路の人心、否、世路といはず、朝に夕に親しくして居りしものも、一と度校門を出づればおもひながらの疎遠にながれ易きものとは、一はお互が無精横着なると、一はこれが連絡をはかる可き機械の運轉がわるきとによるものと存じ候。この點よりして此の度の企圖が甚だ面白くかつ有益なるものと贊成致す所以、もしそれこの草籠に、もれし人のおはすならば早速の御報導あつてしかる可く、なほ今後とも此の種の計畫がより進み、より敏速なる方法にて續出せんことをわれ自らも祈り候。何卒地方の皆様が御奮發の通信に接せんことを期して已まず候。



扨はしがきはもうよして私の近況を一とつ打ち

ゝまけ候はんかな。入りては四十の姉妹を顧りみる可き責任の身出でゝは後進の妹達を擁護すべき身、すべからくひなをは三面六臂の觀音樣に、忙しさに於て負けはとらぬつもりに候。

そも〳〵何を求めてそのありさまぞなど仰せらるゝかたもあるならむが、ひなを最初の目的は何卒してわがありしきのふのクラスの生命に引きつゞき活きんためなりき、ともかくも一とつの色にそめあげし旗を、よりあざやかに輝かさんの心にて候ひき、かつは前途の光明に資せんとするわが燈火の力だめしとにて候ひき。

しかれども微力なほみな樣におうなづかせ申すほどの結果もあげず、甚だ遺憾の次第とは存じ居りながら、しかも大器晩成の四字を心にしめて、さまでの失望も失敗もなく、無事毎日を惠比壽然とかまへ居り候まゝ御心配は御無用に遊ばされ度候。

おもへば、一年、一日、一刻、毎に進み行く後進の妹の元氣なる顏を見るにつけ、喧嘩しても、意氣地なしでもとにかく毎日喜憂をわかちし、我が級がなつかしくて堪らず候、さるを何故、友誼の糸の時と共に縺れゆくにて候やらむ、まさか在校中に「卒業したらそれつきりの間だ」とおもふてつきあふ人は候まじ、親よりも兄弟よりも永世の力になりもし、なられもし度しとは必らずたれもがおもふ情にて候可し、それすら、一度袂をわかちては格段に親しかりしは別として、おほかたは路傍の人に外ならぬ樣なしむけそぶりになりやすきものに候。これくらゐならば何も苦勞して知己三年の連絡にも及ぶまじなどつひ愚痴のいづるときもなきにあらず候「心には思ひながら」など言ひ譯は誰れも口先きにてすむことなれば巧妙なり、實際おもひ居るのならば言はずとも何時の間にやら以心傳心わからずといふことなき筈なるを、そも〳〵傳へむの心弱きよりか、傳へらるゝかたの心にぶり居るよりか。それはどうでもよしとして、願はくば今一度積日の思を互に打ち明けし昔日のクラスのあたゝかさに浴

したきものに候。さはれこんな慾望を起すのが馬鹿なのにて起さぬのが本當なるやはしらず候得ども、今迄級に居て人一倍我儘が通りし、また通して頂だきし私は今更ながら此の心つのり候。宗教的の生命といふも畢竟空なものには候はず、吾等の間に於てこれなきものならばなど、幾萬の迷信者を覺ますを得可きおもへば思ふほど前途遼遠、しかも日月は容赦なく回轉致し居候を見ればあまり氣が小さき樣なれど焦慮をせずには居られず候。

目下校内の同窓生は、はつ子氏、かめ子氏すゞ子氏と合せて四名、揃ひもそろつて五尺に足らぬ御身をまめ〳〵しく立ちはたらきたまふを見ては涙がこぼれ候。



はつ子樣は此度體操をうけもたれ候、來る可き運動會の御準備にて、きり〳〵舞をなされ居り候。

かめ子樣は相かはらず、花の樣な幼稚園、小學校の生徒を相手に愛らしき月日を送り居られ候。すゞ子樣は日曜迄も校務を輔け居られ候を見てはわたくし等も倣はずには居られず候。

クラス唯一の機關たるみどり會も今やあはれなる有樣に居り候が原因は他ならず不穫々述べしものに候へば重ねては申すまじ、在京會員はたゞ七名に候。

愚痴二分五厘、涙半分、あと二分五厘丈けの御報告

にすぎず候へど何卒情狀御斟酌ありて今後の御發奮をうながし奉り候。不日亞米利加シヤトルに着せらるる末岸氏程の元氣者にあらばと祈りてやまず候。呵々。

▲夕の鐘　京都にて　みき子

聲もなく螢を吹く夕べの風、音もなく袖にかゝりし紅葉しぐれ、われ只默として、暮雲の行方を見送れば、比叡山のかた雨をふくみて、京の町を濡らさん、琵琶湖にや注がんと、たじろへるに似たり。ときけば黒谷の暮鐘はおごそかに撞きそめられぬ。

初め二つ三つなりしときは、此の世清めのと聞かれぬ、中四つ五つひゞきしときは、此の世濁れりときゝぬ、終りの六つの撞かれしときは、冥路に旅する心地しぬ、そも無爲にして暮らすわれをはげまさんの聲か、無聊に苦しむわれをなぐさめんとの響きか、知らず、才も能もなき煩惱の身は、早う法の水に浴みよとの戒めの鐸か、悟れず、目覺めず、只恍惚としてあはれ今日も夕の鐘は遠く京の町に逝き去れり。

▲病床錄　相州柳しまにて　ひさ子

一、人は凡て見えぬ半面を見むとあせる、强者は弱者の心に入らむとし、弱者は强者の誇りを羨み悶く。嘗ては人にうらやまれし身、今は人をうらやむ身なり、此の兩面を辿り辿るわれに「噫」の聲は、眞に僞らぬ胸よりの息なるを。

一、夜暗うして靜かなるとき、孤身瓢然人もなき濱の砂に立てば、魔の如き大手を擴げて怒濤はわれを呑まむと寄せ來。心を籠めて書きし偈の句も、かれが裳のふれしとき、つれもなくかき消されたるぞ口惜しき。

一、同じ運命に泣く友と、携さへて孤舟を馬入の入江に棹させば、何に驚ろきてぞ名もしらぬ魚の潑溂として舷に躍り入る何ぞ此の魚天分を知つて、自由の水に泳がざる、何を求めて水もなき里に入らむとはせし。

一、苦き藥の香に醉ひて、裏の松原を彷徨へば、眼

前に横たへる相撲連山、そを統御する富嶽の偉、これをおもひかれをしのびて、われに殘るは只死の勝利のみかと叫びぬ、此瞬時、何處よりともなく追分のしらべを耳にして無明の眠はさめたる心地せしまで、われ、生に渇きを覺ゆるぞかなしき。

一、例になく熱高き日、母が情けの御手より注ぎ入れたまひし、ミルク、殊に味よかりしを追憶ては、限りなき恩を何時報いんと只なみだのみさしぐまるる。心よわしと人は笑へど我れには一人よりなき母樣なり。

一、吹きつゝく木枯しに落る葉もなき梢ながらなほ屹立して旅の烏に宿を與ふ墻一重隔てゝ隣りの老翁、年は六十路に近けれど腰もゆがまず眼鏡もかけず己が業務の傘あみに忩がはし氣なり、しかも家は旅宿を渡世とす。かくても生ける人、さ迄も立てる木あはれをかしの世や。

▲書店の意氣　大阪にて　てつ子

用あつて皆樣より一と足おさきに歸國いたしました私、久々にておめにかゝりますうれしさ、しかし此籠に入れる程の美くしい花もありませんが、たで食ふ蟲も好き〴〵とか、そのたでの花にでもなりてと一筆。

此の頃の文界、可成眞面目になつたぢやありませんか。と共に社會の見解も進んで來たのは、たしかでせう。東京あたりでは、そんな野暮な人も少ないでせうが、こゝらでは矢張り古くさいものばかりを喜こばれて居りました、處が近來では、おぢいさん、おばあさんに至る迄、よみものが多少近代的になりて參つたのは事實ですが、どうしても、此の頃の小說はあたりまへの事ばかり云ふてゐて面白くないなんて小言ならべて居る樣です。借り本などは、銘々傳だの、大岡政談だの、それに少し氣位の高相に見える處では澁柿園さんの歷史ものをよろこぶ樣に見えます、幽芳さんのは土地丈によく出るやうですよ。

から近頃の小說は讀者の範圍が大分せまい樣におもはれますのね。勿論文藝の目的からいへばどうでもよ

いことですが、またよむ方の頭腦をせまいのですもの。
處で女の人でも少し本氣にやつて見樣といふ人はないのでせうか、隨分淋しい時代ですのね、とにかく一葉時代は全盛なものだつたさうですが、今ぢや二人三人チラリ、ホラリ、何といふ物たりないことなのでせう。それに今の樣ぢや折角書いたものでも書店が意地の惡いことすりやそれつ切りに原稿は捨てられるといふ樣では、とても新らしい人の出途がありませんね、岩にからまる蔦ならいざしらず、手づるがなけりや江湖に問へぬなんてそんな意氣地のないことでどうして新らしい人が出ませう。

そこで一とつ御相談ですが私書店を始め樣とおもひますの、そして下手も上手も出版し樣とおもひますがどうでせう。つまり單行本にでも、したいとおもふ人があるなら喜こんで引うけますの、しかし、さうなると猫も杓子もといふ譯で、一度に無名の女文士が雨後の筍の樣にとび出しても仕末に終へません、これでは私の素志にもどります。一體今の書店の意氣といふものはすつかりうせて、只世俗に阿諛して、廣告、懸賞をこれ命といふ姿なのですものね、でもこんな事東京でいつたら世の中に脊中あはせの馬鹿者と笑はれませうが、とにかく私が書店でも開かうとおもふのはこゝらの情實の網から拔け出たものを設けたいとおもふのです。それには失敗を維持する莫大の費用もいりませうしなか〳〵一朝一夕のことではとても堪つたものぢやありますまい、然しこれ丈けの意氣組は不日必ず表はし度いと存じて居りますのよ。

▲異郷の月

アメリカシヤトルにて　たき子

回顧すれば早や二ケ月以前の十九日にて候ひき。年來の素志成りて遠く異郷に學ばんとする夕。
午後五時解纜、一聲の汽笛と共に祖國に最後の祈りを捧げ候。捧げて岸に送別をたまひし人々の健康を祈り候。
一セコンド毎に、遠くなりゆく陸の形、見えずなり

しと覺えし時は、さしも獰猛なる威を揮ひし眞夏の日の地平線に沒するにて候ひき。此の夕陽に沒する處、そこにわが志ざす地のありとは知れど、今更に身の行末心細くて、何とはしれぬいく夜にベッドを濡らし申候。(中略)

途恙がもなく、行程十六日の後無事只今の地に安着仕り候。

こゝに一とつ終世忘れがたき思ひの候。そは船がわれ等を陸にうつして、再び日本に歸航する其別離の際に候、一日住みても住めば都とよ、まして三週日の朝夕を共に波と風と戰かひ所謂苦樂をともになし來しものを、この時かぎり船は東へわれ等はこゝに幾年の春秋を送らねばならぬとおもひし時は身も世もあらぬ淋しさをおぼゆることに候、わかれてはまた何時か會ふ可き、匆忙極まりなき〇〇丸、われもまた志成らずんば故國の土を踏まざる心、かゝる時かゝる思ひして船は再び見えずなりて候。(中略)

十日餘りは夢見る心地して過ぎ申候、二週目の月曜日に始めて、此家の補助者となりて候、主人は僅かに夫妻のみ、外に召使とクックが居り候のみ至極安樂なる處に候、さりながら日本にありての境遇とはちがひ、第一言葉が暗に候、日本にて學びしものとは發音も異なり、きくに不自由はなけれど、いふことは啞にことならず候まゝ朝の程、主人不在の折などは、只イエスとノーの持ち切りにて、我れながらわが口が可哀相になり候、日を經て耳の練習の功積まば發音も自ら爲し得る事と存候得ど前途なほ遼遠に候。

今宵七日の月、部屋の破璃窓を通して、冷たき床上を照し居候、形も影もかはらねど、去年は、なつかしき校庭にながめき、ことしは知らぬ異鄕にながむる月贈られる四十の姉妹が御紀念をせめてものなぐさめにして自問自答凡ての過去を追想いたし居候。(下略)

學問を如何に生活に應用すべきか

宮川壽美子

△數學的の頭腦

數學などは一寸婦人に不必要のやうにも思はれますが、私はむしろ裁縫、習字、作文、讀書以上に必要なものだと思ひます。兎角女は感情的で、でも私然う思つた。然う思ふといふやうに「思ふ」事が多いものですが、たとへ何う思はうとも、二二が四といふやうに精確で最う動かせない理詰があるといふ事を、考へられる頭腦になつてゆかねばなりません。今後は女でも冷靜な明瞭した頭腦を持つて居らねばなりませんが、それを作るは數學の力だと思ひます。

又實際上の事にしても、例へば利息算が分る。すると茲に百圓の帶が一筋あるのに、又その上へ百圓の帶が一筋欲しい。けれども一年に何度と數へる位より外締めないものを、既に一筋ある上へ又拵へて簞笥へ入れておく、それは宛然お金を眠かせて藏つておくやうなもの。もし百圓を借りてその帶を拵へたとすれば、その利子が日々幾干づゝで一年に何程になる。といふ樣な事が自然に胸に浮んでくる譯。さうすれば無暗に簞笥に入つてさへゐれば、嬉しいといふ樣な考のない事もなくなり、主人に借債を負はせても何でも着物が欲しいといふ樣な無茶な事もなくなりませう。これも數學活用の一端、又見聞智識から申しても、電車には乘つても電車の株券の利が年八朱だといふ樣な話は皆目分らない。こゝらにも數學の活用はあると思ひます。

△迚も駄目な主義

理化學の活用が非常なことは既う言ふにも及びますまい、なせならば家事は一切理化學の應用ですもの。例へば一片の肉を燒くのにも、燒くと其の蛋白質が外面へ出て來て、恰ど卵の白味の固まるやうに固まる

ものですから、初めは強い火で燒いて、恰ど蛋白質の固まつた頃を見計つて、今度は火力を稍弱くして燒くと、中心までよく燒けてそして甘い汁が出て了はないやうに參ります。それを強い火で何時までも燒くと、中心までポツ／＼になつて了ふ。其處らの道理を了解んでゐると總てがその流儀で參ります。牛肉のスキ燒をするに、脂肉を熔してそれで一寸痛めて、そして燒くのも同じ道理。又肉を煮るのに、最初から醬油と砂糖を入れて了ふと、何でも強い味の物の方へ汁が出てゆくものですから、肉の味が悉皆汁の方へ出て了つて、肉は鹽張味が無くなる。冷えでもすると既う不味て食べられません。よくお辨當に入れた、牛肉などがシパシパで些とも旨味くないのは恁ういふ煮方をしたからです。それを初めは薄味の汁で煮ておいて、下す前に醬油と砂糖を加へるべきだけ加へると、肉の汁が肉の方に保たれて、冷えても旨味く食べられます。けれど恁麼事は唯恁ういふ順序に／＼と方法だけ覺える主義では迚もだめで、道理から了解めば努めずに應用が利くと思ひます。

△草鞋蟲がツー／＼

物を洗ふのでも同じ道理で、例へば白い物を洗ふには苛性加里でよく洗つて、それを酸で中和すると眞白に綺麗に仕上がる。けれど其の酸をよく／＼洗ひ落しておかぬと、その物の腐る虞があると、恁う理化の智識から分つて居ると居らぬとでは大變な違ひ。水でも飲料にするのだけは、お父さんや兄さんが嚴ましいからといふので必ず沸したのを用ゐても、茶碗や俎板や庖丁を洗ふのは唯の冷水。これでは何にもなりません。處がその奥様が一度顯微鏡で井戸の水を觀て、その一滴の水に無數の小動物が浮游してゐるのを見、殊に草鞋蟲などのツー／＼と顯微鏡の下を往つたり來たりするのを眺めたら、最う今度は言はずとも必と煮冷しの水で物を洗ふ事になりませう。一釜か二釜の煮冷しを製へておけば、一日の食器を洗ふのには略間に合ひませう。これ位の手數は何でもないと、心から家事の改

良をするのも理化學の活用と存じます。

△仕様の無いお撥ね

世間では西洋婦人を撥上りで仕様のないやうに申しますが、然し一方から見れば、實に端然として犯すべからざる所があつて、羨ましいやうだねと此間も家の者と話し合ひました。

それは固より一得一失で、西洋の主婦は裁縫もせず、臺所もせず、あれを日本へ連れて來て、月收四五十圓の家政を繰廻せと言へば到底出來はしません。その點では日本婦人の方がずつと美點を備へてゐますが、さて然うかと言つて家事にばかりぐづ〳〵してゐて、何一つ社會の事情も分らず話も出來ない處を見ると、男子方がどうも米國あたりの女は怜悧だが、日本の女はまるで話せない。だめなものだと言はれるのも尤と申さねばなりません。

△様子振るとは違ふ

まづ日本の家庭へ來客があつて、主人と頻りに社會上、政治上の話をしてゐる。そこの奥様は其談話には關係がないといふ風で、まるで沒交渉でゐるのが常ですが、西洋の夫人ならば聰耳を立てゝ聽き洩すまいといふ風ですから新聞の二面記事風の話でも何でも、行き渡つて却々話せるのが普通になつてをります。子供の教育などは全く妻の役目で、小學校にしても校長に逢ひ學校を見、あれならばといふ様な鑑定までも自分でして、公立よりは私立でもあの方が善いからと言つてそこへ入れ、又折々學校を訪問するなど、一切夫人の擔任です。處が日本では奥様が子女の學校の撰擇を自身でなさる方が幾人御座いませう。

學問は品格です。西洋の婦人は男子方の前へ出ても、保つべき威嚴品格はチャンと保つて、實に犯すべからざる所を見受けます。それが唯様子振るばかりでは出來ない事で、口を開かせて見ても言ふべき事はチャンと言ひ、知識、趣味の高尚な話もチャンと出來るのでそれであの威嚴品格が保たれるのです。學問が恁ういふ活用をするやうになつて、初めて學問の本意が遂げられたもの、又恁ういふ風に活用かせねば、學問の仕甲斐がないと存じます。



上流社會の松の内

小すみ

▲舊大藩の家風

上流社會の松の内と言つても、新進の華族の家庭では、一口にいへば、立派な着物を着て、美味しいものを食べて、面白い事をして遊んで暮らすといふ位で儀式作法に於ては別段に之れといふ程の事もありません。而かも其の様な向では、近頃年始の煩を避けて田舎の別荘へ引込む事が流行るから、猶のこと、事は簡單に濟んで居ります。其處へ行くと何うしても大名華族で御座います。時代の推移につれて、昔の風は眞づ廢れたにしても、正月の様な折には、矢張り故實を重んじて居ります。殊に徳川家をはじめ大藩の屋敷などでは、舊幕時代の儀式習例を今日でも餘り略さずにより行つて居るのです。

▲お屋敷様々の松飾り

尤も大名華族と言つても、國柄により、家格に從つて、それ／＼家風が違ふから、正月の儀式風習なども素より一樣でないことは、更ためて言ふまでもありません。例へば門松の飾りにしても、鍋島家では藁で圍製へた大鼓を門松へ飾り、松浦家では椎の木を立てるなど色々違つた風があります。或は少し古い事を言へば、佐竹家では昔は人飾りといふ事がありました。佐竹の人飾りといへば隨分名高かつたもので、麻上下を着た侍が十人許り門の兩側に立つて居つて、門松代りを勤めたものです。これは何でもずつとの昔、同家の門松が元日の朝に間に合はなかつたとかで、取り敢

へず人間を代りに立たしめたのがそも〳〵例の始まりだと申ます。

▲お雜煮に祖先を偲ぶ

料理に就て見ても、正月は重詰を調へるとか、吸物を仕立てるとか、雜煮を祝ふとか云ふ樣な事は、一樣に行はれることですが、其の料理の材料になると家々に依つて餘程違ひます。雜煮に里芋や花鰹の類を用ふることは、何處でも大抵同じやうですが、松浦家などは之れに必ず國産の金海鼠を加へます。それから正月の吸物といへば鰭の吸物——鯛の鰭をつかふので、素より肉もついて居るのが一般であるのに、德川家では兎を用ゐます。これは御先祖が正月に何も食べるものが無かつた爲め、山に出て兎を獵つて吸物を調へたとかいふ話があるので、畢竟昔を忘れないといふ徴になつて居るのであります。

▲お供餅と食初

扨て斯う屋敷々々に依つて色々違つた風習のあるに拘らず、何れの屋敷でも一般に松かざりと同樣に重んぜられるものは飾供餅です。これは何れの屋敷にも床の間に飾るもの丶外、家族の人數丈け數を調へて、部屋部屋へ飾つて置きます。この飾供餅と並べて飾つて置くものに「食初」といふものがあります。これは普通の家には餘り設けられないものですが、上流の家では必ずなくてならぬものとしてあります。それは三寶に米を盛つた上に熨斗昆布、橙、柑、ほんだわら、榧、かち栗、蜜柑、ところの根などいふもので飾つたものですが、雜煮の時などは先づこれを座敷の眞中に持ち出し祝ふのが常で御座います。儀式正しい處になると來客の折にも一々この「食初」を持ち出で丶すゝめ、客の挨拶を待つて再び元の場所に戻して飾つて置きます。

正月の座敷の飾りは何んな風かと申ますと、床の間にはまづ三幅對の掛物をかけ、花は南天、水仙、松竹梅などいづれも目出度きものを撰んで活け、違棚には料紙硯といつたやうなものが置かれるのです。

▲正月三日間の身ごしらひ

正月の儀式のある前にお召更といふことがありますことに婦人方のそれは、なか〳〵大したもので御座います。恁ういう社會になると、我々のやうに寢衣のままで顔を洗ふといふやうな事はなく、朝床を離れると一旦まづ常着に着更へた上でお風呂を召す。それからお化粧を濟して、愈ゝ禮服のお召更といふ段になるのです。昔は必ず打掛を着なければならなかつたもので元日は白、二日は赤、三日は淺黄といふ風に地色にまでそれ〳〵制限があつたものですが、今日では一般に白衿紋付となつて居るやうです。餘程簡單になつた譯ですが、儀式のやかましい家柄にでもなると、其中にもまた種々定めがあつて、なか〳〵面倒なものだといひます。姫様方は振袖のお曳きずりで、帯は竪やの字に結ばれるといふのが殆ど一定して居る様ですが、事によると一日に二度も三度もお召更があるので、一方に一人づゝのお附女中では間に合はない位だと申ます



御召更なるものゝ、いかに手數のかゝるものなるかは之を以て推しはかられませう。髪は昔ですと御簾中樣をはじめ、姫樣方まで、正月は必ず「おわらは」といふお髪にされたものですが、今日となりては其樣でもありません。併し束髪などは避けられる方で極幼い方がお下髪にでもなさるほかは、皆島田とか「おちご」とかいふ正しい形に結びまする。

▲姫樣もおち〳〵休まれず

さてお召更が濟むと家族一同と座敷に出て、立派に席順を正して坐ります。そして一通り祝ひの式が濟むと、今度は表の人が年賀の禮を申上げに來る。續いて奥の女中一同のそれも行はれます。それから大名華族にはお逢ひ日といふのが定まつて居つて、矢張り家族一同居ならんで舊臣參賀の禮を受ける式がある。それらの儀式は全く舊幕時代に於ける君臣の關係を以て行はれるのであるから、何うしてなか〳〵簡單なものではありませぬ。兎に角古風を追ふて居る大藩の大名華族ほど種々儀式が多くとり行はれるので、松の内は姫樣若樣に至るまで、おち〳〵休息の暇もない程です。

▲上品な歌留多遊び

が、おしなべて申ますと、正月は遊んで暮らすので御座います。其遊びものとしては、矢張かるたが第一ですが、百人一首をとることは稀といふよりもない方で、主に古今集とか、伊勢物語とかいふものが行はれます。そして源平に分れて勝負を爭ふのが普通ですがそれにしてもずつと大きいお屋敷のお姫樣が女中を相手で遊ばすかるたなどは、誠に以て禮儀作法の正しいもので、假りにも席を亂して坐るといふやうな事はなく、至つて靜かなもので御座います。讀み上げられた札が先方にあるを見付けたればとて、乘り出してそれを取ると云ふ樣な事はなく、「其處に御座います」と言つて此方の札を一枚先方へ投げてやると言つた風、素より札を爭ふて引掻き合ふと云ふ樣なことはありません。我々から考へると如何にも間の拔けたもので、斷

白味などありさうにも思はれませんけれど、上品に育つた方々は、夫でも相應に興を催されると見えます。

かるたの外には双六、毬、おはじきなどが一般に遊ばれるもので、其他歌を詠むとか、香をきくとか、茶をたてるとか、彈琴をするとか云ふ樣な慰にも、家の例により、人の好みに從つて、とり〴〵に行はれます。

但し昔は非常に盛んに行はれたといふ貝あはせは、今日では全く廢れて、其代りに新しい遊びがいろ〳〵殖えて來て居る樣です。親戚間で催される酒宴の折などには、舞踏なども行はれます。

お正月の食物

▲屠蘇＝これは防風に桔梗、桂皮、山椒の三品を合せて紅絹の三角の袋に容れ、味醂の中へ浸して作るので、たゞ一種の興奮劑に過ぎない。其の味醂は普通の酒と異つて多量の葡萄糖を含んでゐるから、飲めば甘く、其の飲口のよい爲に知らず〳〵多量に飲むが、飲めば酒だから醉ふのは當然である。のみならず、葡萄糖は、胃の中でアルコールを作り、醱酵を起すから、これで醉ひ、糖の分解で醉ふ上に、尙は桂皮、山椒、防風、桔梗等の興奮劑で逆上するから、心持の惡い事此上なしである。一杯機嫌の親達が、子供に飲ませて、面白がつて居るなどは大に戒しむべき事である。

▲雜煮＝これは言ふ迄もなく餅が主なる成分である。餅は米の儘ならば左程不消化な事はないが、之を餅に搗くと大變不消化なものになる。其の理由は、凡て食物は胃腸に入ると、諸方から來る消化液が食物に浸み透るから消化するのであるのに、餅はそれが出來ぬからである。故に餅を食べたら能く齒で嚼み碎いて、十分消化液の浸み透る樣にせねばならぬ。子供などが齒で嚼み碎きもしないで丸嚥にするのがあるが、そこで永く胃中に滯る時は、乳酸醱酵から溜飮を起し、胸が焦けて、酸い水を吐く樣になる。

▲重詰＝豆で暮す樣に、數々の子が出來る樣に、多く田作る樣になどゝ云ふ緣起から、色々の材料が這入つて居る。其の中の數の子は鷄卵と同樣に滋養分を有してゐるが、惜し哉、魚の子の卵膜を其儘で食ふのであるから、不消化な事はおびたゞしい。嚼み碎いた積りでも膜は破れないから消化液で溶かす事ができぬ。たゞ胃の中で白色になる丈で、其儘で腸を通過する最も不消化なものである。次に黑豆も同じく固い豆だから、小兒などになると、豆は其儘で排泄されて居る。其外田作も干魚を砂糖澤山で味を附けたものだから、不消化は勿論である。かく不消化揃ひのものを御馳走とするから、消化機は殆んど休息する暇が無い。故に子供は勿論、大人と雖も、お正月の御馳走は餘り食べ過ぎない樣に注意が肝要。



都の女と阪東の女

愛山生

（一）

太平記は學者の馬鹿にする書物にて噓ばかり書きあるものなりとの事なれども、我等などはあれ程善き歷史の書物は無しと思ふ。餘り異論を立てる樣なれども其仔細を聽き給へ。歷史とは何月幾日に猫が三疋二階から落ちた。いやそれは時日と猫の數が相違致し居るなどゝ些細なる考證をするを能事とするものに非ず。左樣の仕事が史家の業ならば是れ唯だ古き帳面を繰返し、多く反古紙を拈くり、馬鹿でも根の善きものが勝を制すべきことにて、賴山陽の言ひし如く唯だ是れ帳簿を校するの業に過ぎず。誠に以ていやな仕事にて早速御免を蒙りたき次第なれども、我等の學ぶ所に依れば眞の歷史と申すは左樣のものに非ず。古今に通じて行はるゝ人事の法則を研究し、古人の精神と生活とを今の世に保存するが其役目なり。歷史の眼中には古今なし、唯だ人間あるのみ。唯だ靈活なる此心あるのみ唯だ人間の生活あるのみ。たとへばマコレー卿の英國史を讀めば我々は覺えず、其畫きたる歷史の中に躍り込みて復た古今東西の別あるを知らず、古人の生命、我が生命の中に連り、英雄の活力、我が心臟を鼓動するを覺ふ。我等は斯樣なるものが則ち眞の歷史なりと信ずるなり。或は其は古流の歷史にて今の歷史に非ず今は考證學の世なりとて現代流行の史學を笠に着て、我等を嚇すものあらん。それ程の事は我等も存じ居るなり。さりながら古流の新流のとて實は左樣の區別あるものに非ず。たとへばカーライルの「クロンウエル」

傳などは論者必ず鼻であしらひ古流の歴史なりとて擯斥するならん。さりながらカーライルの考證に苦心せしこと決して今の所謂考證家に讓らざりしは「クロンウエル」傳自身が證據なり。唯だカーライルは考證に苦心したれども、考證を以て直ちに歴史家の全事業なりとは信せず、其考證を階梯として古人の生命に觸れ古人を書かんとしたるのみ。梯子は屋根に登るまでの用なり。梯子の詮議に日を暮らして屋上の光景を見ずんば畢竟徒勞のみ。諺にも目も口ほどに物を言ふと云へり。人生に秘密なし。古人の心と雖も、我心を働かしたらば、目も口ほどに物を言はせ得べし。史料の考證も大切なることなれども、其史料に物を言はせて直ちに古人の心髓に喰込むことは更に大切なり。太平記は成程嘘の多く、間違だらけの書物なり。其間違の程度は大抵今の新聞の三面記事位と思へば善し。さりながら、今より後數百年後に生れて明治時代の風俗、生活を學ばんとせば、公文書、官報、辭令などの斷簡零墨よりは纏まりたる三面雜報數册の方が却て明白なる想像を書く料となるべし。二十二史をみな讀みても分り兼ぬることが却て水滸傳にて分ることあるが如く、太平記は半ば小說と云ふべきものなるが故に却て其時代を目に見るやうに書きあり。此段太平記の長所にして、かゝる書物あればこそ、古人の心も知り、其時代の人心をも考へ、昔の生活を、今の生活に結びて古人も今人に同じ人間にして同じ血の通ひ居るものなることを知るを得るなれ。殊に太平記の作者は非凡の讀書家と見え、其文句は大抵出所あり、一册の書なれども當時の敎育を代表するものなり。されば我等は太平記は、其作者の時代を知るには最も善き書物にて、當時の人氣、生活、思想、信仰は凝つて其中に在り、史家の珍重すべきものなりと存ずるものなり。

(二)

筆が橫道に走りて太平記の講釋が長くなりたるは例の癖なりと許し給へ。扨此太平記を讀むに女子敎育の爲に見のがし難き一箇條あり。則ち京都の女性と關東

の女性の比較なり。我等の此文を擧するは唯だ此一箇條の爲なり。太平記の作者は例の狂言綺語にて讀む人を笑はす爲めに書きたるものなるべけれども、當時の世の樣は自ら其中に現はれたり。たとへば高師直、亂行の事を記して、

月卿雲客の御女などは世を浮草の寄方なくて誘ふ水あらばと打ち佗びたる折節なれば、せめてはさま如何せん。申すもやんごとなき宮腹など其數を知らず彼所此所に隱し置き奉りて毎度通ふ方多かりしかば執事の宮參りに手向を受けぬ神もなしと京童部などが嗤草なり。

とあり。大日本史に之を譯して「多く諸王公卿の子女を奪略して數所に分ち匿し、毎夜就て淫す。京師之が爲めに語て、執事の宮を巡る、神の享けざることなしといふ。」とあり師直の女色に耽りたるは他書にも記したれば太平記の記事は根據あることならん。或は全くの根無し草にもせよ。斯樣の物語が無遠慮に書かれし世の樣を按するに都の女性の情餘りありて節操の足らざりしを見るに足れり。太平記は又武藏の大名、竹澤と云ふものが新田義興を誘ひ出さんとて京都より美人を招きしことを記して、

ある宮の御所より少將殿と申しける上臈の女房の年十六七ばかりなる容色類なく、心樣優にやさしく、おはしけるを、兎角申し下して先づ己が養君になし奉り、御裝束女房達に至るまで樣々にしたてゝ兵衛佐殿（即ち義興なり）の方へぞ出したる。

と云へり。京都の女ならでは男子の歡心を買ひ難かりしこと此一節に明かなり。それのみならず、太平記は更に一歩を進め、京女の多情にして男を多く持ちしものあることを記し之を鎌倉の女性と對照したり。則ち高土佐守の女房の事なり。先づ土佐守の關係したる京女の浮薄にして多情なりしことを記し、

菊亭殿に御妻とて眉目貌類なく其品賤からでなまめきたる女房ありけり。高土佐守に通なれて云々。（中略）此女房は通ふ方多かりしかば、いづくとても差しては知り難し。（此女房に通ふ男多き故、誰れと駈

落ちしたるや知り難しとなり)。近來は飽浦三郎左衛門とかやいふものにこそ分きて志深く、人目も憚らぬ樣に候ひし。

此に至りては節操は復た論題に非ず。兎角言ふべき樣なし。京女の放縱此の如くなるに引かへ、土佐守の鎌倉に置きし女房は如何にと云ふに、太平記の記者は極めて其不粹にして嫉妬深きことを記したり。



此土佐守に子ども數多儲けたる鎌倉の女房ありけり是は元來田舍人なりければ(京洛の人に對して鎌倉を田舍と云ふなり)。物妬はしたなく、心猛々しく、彼の源氏の雨夜の物語に頭中將の指をくひ切りたりし有樣ども多かりけり。

太平記の作者は何の思慮も無く、思の儘に筆を揮ひたるものなるべけれども、我等は此に東西女性の素養を畫き出して遺憾なしと思へり。鎌倉時代の女性に妬婦多く、而も德川幕府の時代ならば史家の筆にすまじき醜態として擯斥すべき嫉妬の物語も東鑑などには平氣にて書きたるを見れば關東にては男も相應の程度まで婦人の嫉妬を當然の事なりと思ひしものと見えり。太平記の作者、胸中先づ東西婦人の素養にかゝる大差あることを疊み置き扨此物語を作り出したるなるべし。此れ我等の大に注意すべき所なり。

（三）

抑ゝ女の風儀と所の人氣とは必ず一定の關係あるものなり。たとへば江戸の大昔は女の少き所にて一町の中に一女を見ずと云ふ所もありたり。是は江戸は新開の地にて其始は申さば上方の棚店同樣の所なりし故なり。其上三河武士は田舍者なり。其妻女も勿論田舍者なり。大名屋敷の勤番者は申すまでなく田舍侍なり。關東の女は首筋太く足平たく、正直にて無愛嬌なる田舍女なり。斯樣の所には芝居も發達せず。辨慶金時の切合などが人氣に合ひたり。市川の先祖、初代團十郎の荒事など云ふも實は此人氣の餘波なり。女が男のなぐさみものにならず人氣の荒かりし江戸の人情世態を察すべし。但し江戸が眞に天下の中心たりし重量を有したるは實に此時に在り。是と同樣にて關東の女が太平記の作者より物妬はしたなく、心猛々しと罵られし頃こそ關東武士が世間に幅を利かせて政治界の主人となりし時代なるべけれ。それにつきて我等の目擊したることあり。明治八九年の頃と覺ふ。薩摩の人大迫貞淸、縣令となりて靜岡縣廳に來任す。其頃の靜岡は德川武士の流れ落ちたる所にて士族町は悉ゝく旗本御家人なり。其人々の有樣を見るに今は殆んど流人に均しき境界なれども、さすがは昔の御直參なり。貧乏はすれども氣位は高し、奧樣が臺所に出でゝ立働かるゝ有樣を見るに、甲斐々々しきは少く、所謂御引ずりなるは多し。善く言へば深宮に育ちたる美人の薄命にしてならはぬ賤の手業に苦めらるゝものなれども、正直に批評すれば身の程を知らず、依然として懶惰の故態を棄て兼ぬるものと謂つべし。されば其頃或老人の我等に語りけるは士族の商法とて、我等にても商賣をせねばならぬことなれば我は必ず魚を賣るべし。仔細は魚は賣らねば腐るものなり。腐らせては損は眼前に現はるゝこと故、如何なる士族も魚を賣る間は懶惰なることを得ざるべし。此外士族にさせて損をすまじと思ふ商賣はなし。士族の懶惰は眞に度し難きものなり云々と云へり。其懶惰にして氣力なく、敗軍、竄逐の境界

に居て猶ほ威張り居りし狀態を察すべし。然るに今度縣令として來任したる大迫氏は如何にと云ふに、夫の退衙の後は妻と共に、裏の畑に出で、肥桶を肩にして百姓の業を爲す。之を見たる旗本、御家人の妻女は腹をかゝへて笑ひ、氏と素性は爭はれぬものかな。今こそ令殿などとて此縣にては二なき役人なれ、其昔は薩摩の田舍侍なりしかば今も令殿の奧方ともあらう人が肥桶をかつぐよとて、窃かに爪彈きするものあり。或はいや／＼令殿の、かうせらるゝには仔細あるべし。我等に昔の習を改めて、世渡る業に油斷すなと敎へらるゝものならんなど云ふものもありたり。長州の士、長井雅樂は其藩にてはさばかり小身のものに非りき。されど母氏の庭訓嚴重にして、雅樂少年の頃、馬の稽古するに、馬脊に汗のしみ出るに非れば母氏喜ばず。稽古はてぬれば母氏自ら厩に馬を連れ行きて水をあびせ、毛を洗ひ、馬丁のする程の事を母氏一人にてなしたりしと云へり。薩摩の婦人たる大迫氏の室は令殿の奧方となりても猶は肥桶を肩にして畑に出でたり。薩長氏の女性にはかゝる素養あり。其天下を制して政界の主人となりしこと亦宜なり。我等は古今の事、盛衰の理、符節を合するが如きものあるを見て女性の風儀の眞に識者の深思すべき問題なるを知る。



（四）

世の中は常に善き方に赴くものなるや。人事は樂觀すべくして悲觀すべきものに非ざるや。此段却々容易に斷言の出來得べきものに非ず。歴史に行つまりと云ふ時期なく、家は亡ぶれども、國は亡びず。國は亡ぶれども人は亡びず。大局より大觀したらば人事は常に善に向つて進むとも言ふことを得べし。或は左樣に信ずるをこそ天命を樂しむとも云ふべきならん。さりながら一家一國に就て言へば盛衰興亡は免れぬ天理なりされば百年の富家も少く、千年の大國も稀なり。此世をば我世とぞ思ふ、望月の缺けたることとも爲しと歌ひし藤原氏の榮華の夢も覺めてくやしき時はありき。然らばかゝる時期は何時來るぞとならば、婦德の頽れたる時に來るなり。我等は今の西洋の將來に就て頗る危險に思ふ。仔細は歐米に旅行したるものは必ず知るべし。「アングロ、サキソン」人種の誇としたる家庭の清潔は今も猶ほ他の人種に對して模範たり得べきや否や歐洲大陸の婚姻を神聖視する感情は今猶ほ昔の如く熱きや否や。若し文學が國民の生活を反映するものならば我等は現代の白人種の婦德に就きては餘り感心すべき理由を見ず。一夫一婦を嚴守すと聞えたる耶蘇の教も今は殆んど告朔の餼羊たるが如き觀あるを覺ふるなり。獨逸より來りし人の話なりとて又聞きしたることあり。今は彼地の大學生も人物宜しきものは多くは商人たり、工業家たり。文學、宗教などに身を寄するものは書生の屑のみなりと云へり。今の歐羅巴は金持の天下にして金持ならでは幅の利かぬ世の中なり。高材逸足の士、好んで金の取れる仕事を選ぶも亦宜なり。戰國の時代には大志あるもの皆王侯將相たらんことを求め、守文の國には豪傑の士も身を翰林文苑に起さんことを欲す。金持ならねば人にして人に非る程の世の中に有爲の青年が悉く金持たらんとすること固より怪むべきに非ず。さりながら斯く一方に金持を出し、他方に貧乏人を生じ、社會の力が均合の取れぬ樣になりし其時こそ道德上の危機にして婦人の節操の殊に懈

ばれ易き世なりけり。羅馬の女徳が頽敗したるも其實は貧富隔絶の時に在り。白人種の女徳が昔の如くならざるも病根實に此に在り。我等は竊に白人種の盛運既に絶頂に達したるに非ずやとさへ思ふものなり。日本には今だに西洋を有難がる盲信家もありて此間も日本に遊廓と云ふもののあるを非難し、是非とも西洋のやうに公娼を廢したしとて演說會を開きし人もありたり。知らずや、西洋にては今や此問題に苦むこと甚だしく、日本の事を聞きて人民の健康を保つには眞に善き仕掛なりとて、わざ〳〵研究に來たりし人さへありしことを。我等は西洋の最早我等の模範たらざるを知るのみならず。實は西洋風の日本に感染して日本婦人の特色を破壞せんことを深く恐るゝものなり。世には西洋婦人は交際に長じ日本の婦人は交際を知らずなどゝ申すなり。されど西洋婦人の所謂交際と云ふことはそれ程尊ぶべきものなりや否や。徒らに追從輕薄を事とし心にもなき世辭愛嬌を振りまくことを覺えたりとて、それが果して國民の道德に何等の益

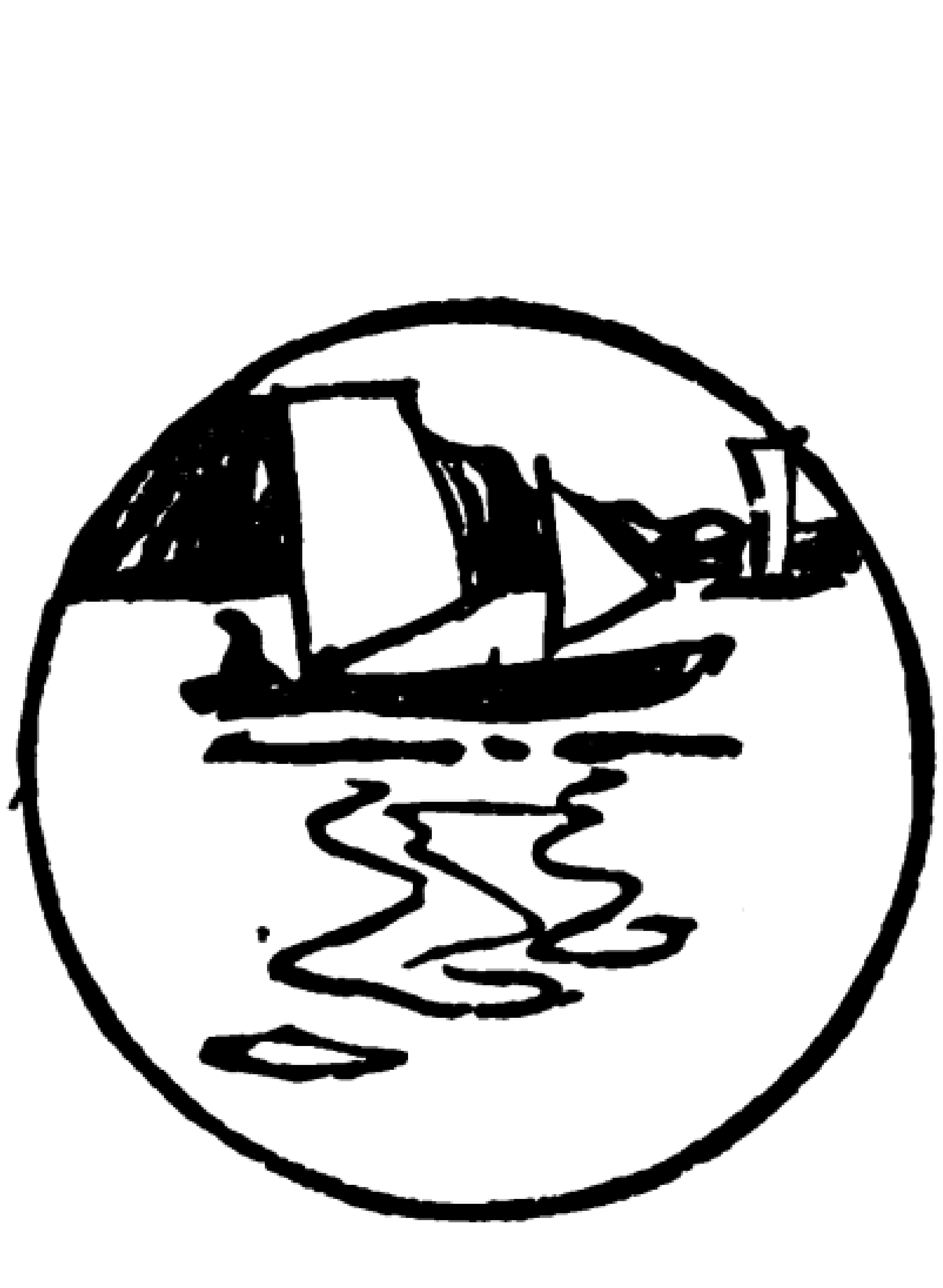


ありや否や。我等の窃に疑ふ所なり。西洋にても世に興國の氣象ある時代の婦人は家庭の婦人なり。子女の教育を以て其誇とする婦人なり。淸教徒の婦人は家庭の中に其信仰を維持し、家庭の壁内に立籠りて信仰の戰爭に從事したるものなり。淸教徒の力は實に此に在りき。「メソヂスト」教會の祖ジョン、ウエスレイの母は九人の子女を一手にして教育したる賢夫人なりき。英國婦人の模範は此に在り。交際塲裡に飛出して「ノンセンス」を語り、痴を撒し、情を弄び、眉來り眼去り、藝妓の客を誘ふが如き態を演じて怪まざる、今の所謂交際社會の婦人の如きは泰平の裝飾にはなるべけれども、決して國力の根底を養ふべきものに非ず。日本婦人を煽動して交際社會に引き出さんとするが如きは餘計の御世話と謂つべきものなり。或は左樣にせねば何時までも世間の仲間入りが出來ず。たとへば米艦渡來の如き、不意の珍客ありても、其世話行屆かずなど〻云ふものもあらん。さりながらそれ程の事はどうにもなるべし。別問題なり。不意の客來ありとて其用意にとて奥樣が子息の躾も顧みず、遽かに三味線の稽古をすべき理由あるべからず。其上外國交際とても、一から十まで他國の眞似をするに及ばぬことなり。昔英國の政治家テンプル卿が和蘭を訪問したりしとき、和蘭の政廳は極めて質粗なるものにて其政治家も閑素の生活を爲したりしかば海上無双の威權を揮ひつ〻ある國の、是はまた單純なる生活なるかなとてテンプル卿の驚歎したることあり。一國には自ら一國の流儀あり。世界には世界共通の情義あり。世界共通の情義を守りて一國固有の流儀を變へざるが即ち世界交際の要道なり。西洋人より言ふも、日本人が人眞似のみして萬事西洋流とならんことは地理にも合はず、自然にも背きたる醜態と見るべき歟。それよりは日本は日本流を守り、衰世の頽俗とも云ふべき西洋の眞似は成るべくは致さぬ方が宜しからんとも存ずるなり。二十年來日本に住みし外國宣教師の説に日本の富の進歩は驚くべきものにして日本人の生活は西洋人を凌ぐの勢ありと云へり。日本の富の進歩は祝すべきことなれども

奢侈に流るゝ危險其中に在り。或は奢侈は富の進歩したる徴候なり心配に及ばずとの說もあるべけれども、其奢侈が天下國家の柱に喰込て其中を空洞にしたらば社會は直に顚覆すべし。つれ〴〵草に北條相摸守時賴の母の事を記したる文あり。

相摸守時賴の母は松下禪尼とぞ申ける。守をいれ申さるゝことも有けるに。すゝけたるあかりさうじの。やぶれたるばかりを。禪尼手づから小刀して。きりまはしつゝ、はられければせうとの城介義景。其日のけいめいして候ひけるが、たまはりて何がし男にはらせ候はん。さやうの事に心得たる者に候と申されければ。其男尼が細工によもまさり侍らじとて、猶一間づゝはられけるを。義景、みなをはりかへ候はんは。はるかにたやすく候べし。まだらに候も見ぐるしくやとかさねて申されければ。尼は後はさは〳〵とはりかへんと思へども。けふばかりは、わざとかくて有べきなり。物は破たる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと。わかき人に見ならはせて。心つけんためなりと申されける。（つれ〴〵草）

かゝる庭訓ありたればこそ北條氏は七世の繁昌を續けたり。女德の消長世運に關係すること斯の如し。太平記の作者は殆んど無意識にて京都と關東の女性を書き分たれども、我等は此相違こそ關東武士をして天下を取らしめたる大源因なりと思ふなり。斯くて武士の世なりしかば、公家の人々言も習はず阪東聲をつかひ、着もなれぬ折烏帽子に額を顯はして武家の人に紛れんとし世の物笑となりにけり。風俗に優劣なし、勝者の儀範は則ち天下の儀範なり。世の人此理を忘るゝ勿れ。





家庭教師の眼に觸れたお孃さんの日記

家庭教師

可憐なる日記を内所で書き拔いたもの

十七日(土曜)日本晴。

起床五時半、洗面結髮、六時、孃樣起床、洗面後マガレットに薄桃色リボンを結び、朝寒故羽織をすゝめまゐらせ、同半、食事後衣替、八時御出門、麹町佛語の敎師の許へ行かせらる御留守中、今日は午後一時よりクラス會へ臨まるゝよし其仕度を整へ置き。十一時過ぎ御歸り、三十分復習しまゐらす、晝餐の折父上にダイヤモンド入胸時計をねだられ、終て大悦びにて換衣いたされ、零時半御出掛け、御見送りして其より母御へ種々米艦來訪の事に就き御話申上げ、さて孃の御居間へ入り書類を調べ置かんと思ひ、戸棚の硝子戸を開くとたん見なれぬノートが傍に挾である、常に懷中して居られるらしい、赤い小形の麻張りである、上に(こゝろおぼえ草)としてある、はて他人の秘密を知りたくも無けれど、責任ある職とて詮方なし、罪の樣なる心地しつ明ければ別に變りたる所もなし、二月十九日、二十日……おなじく、面倒くさい樣子が見ゆる。三月七日雨強くいとわびし。向岡自治寮紀念祭、三月一日は毎年々々實に面白く太郎さんの御自慢話しに誘ひ出されて皆で行つた。櫻がまだ咲き盛である、彌生のはじめ、七日といふに團子坂の太郎さん、小石川の芳夫さん、芝の松三さん、

土曜だから二時頃からやつて來た、もう來ると直ぐ灰皿は一杯、火鉢のまはりは百本杭となつて居る、自分も十二時十五分に學校からかへつて晝食して休むですぐ何時も定まりの洋菓子を造るので三時に間に合はせるのだから忙しい、先生が大抵やつて下さるのだから早く出來てしまつた、まづシウクリームとスパンチロールとが出來た、和蘭燒の大皿が待ちどしさうに二つ並で居る、婆やは勢急だから二時半を三時といふのだらうとおもひつゝ、何となく芳夫さんの側へ早く行きたい、どうしてかしら？　あゝやつぱりあれが聞きたかつたのだと、打消し〳〵切り上げて、奇麗に澤山に兩方へ積み分けて、竹に持たせてやつた。手を洗いながらも何と聞かうかしら、でも變だと思ひつゝ二階へ行かうとしたら、廊下を通るとプンといゝ匂ひがする、芳夫さんの持て來た薔薇だらう、まあ美しい事……頰に付けて向ふを見ると母樣に見つかつた……きまりがわるいから奥二階へ走け上つた『鶴さん、ウェルカム大層今日のシウはよく出



來ましたよハア…サアどうぞ御遠慮なく」なんて隨分太郎さんは馬鹿にしてるわ自分が骨折て造たものを誰が遠慮するものですか何日でも滑稽な事ばかり言つてるとおもつたけれど、何だか常のやうに御轉婆なお喋舌が出ない……早く太郎さんと松さんが歸ればいゝにと思ふけれど、却々かへらない『芳兄さま今日は何處か御出かけ？」御新調の背廣で御髮も取分け美しく、カールが掛ッて居るから伺ふと『否此處ばかり……』と仰しやつた、したら直ぐ松さんは人が惡いから『此先生は六月にはコンマーシヤルカレッヂ御出身の優秀のヤングジエントルマンとして社交界へ舟出するのだもの、今からもう大意氣さ……』なんて憎らしくて仕方がないわ……其内兄樣と長治さんが歸て來られた、例の惡口屋の長さん大將になつて紀念祭のデコレーションを片端から攻擊するもんだから、太郎さんむきになつて逆襲する、松さんが何時になくほめたかとおもふと、すぐ口の下から『あれでも東都の學生で候とはいさゝか情ないね』といふもんだから、包圍された敗軍の將は口惜しさ半分で、外方向いて芳樣と大人しく、博士連の批評して居る……調子ぬけした人達も詩吟する、犬の遠吠え見たやうな謠曲をやる父樣の方が餘程御上手だ……聞いて居ると却々面白い、けれど、どうして自分には從姉妹がないのだらう……と悲しくなつてスタデールムへ來て雪子さんからの手紙を繰返した『私程幸福な、また私程不運な者は、世の中にないでせう……察して頂戴』なんてあの方の境遇は別に苦悶するほどの事はないのだ、御兩親はあるし、御理想に從ていらしつた御養子はあるし、今更不平言はれるのは常識はづれるかと思ふわ……、而し他の事もいへない、自分だつて彼の誠さんが理想だ……此間も一高で會つた時、實に立派であつた、マーキユリーのマーク嚴しく、丈高き姿に裾長のマント……顏色も淺黑くて氣高い面差に、情の籠つた眼光は高尙な性格が見え透いて居る、まして從兄の芳夫さんの親友なのだし、芳兄さまだつて何時でも人格の昇つた實に得難い好漢だと、刎頸の交りをしていらつしやるのだからよさゝう

なものだけど……あゝ其處が義理ほど愁いものはない……芳樣が去年是非エンゲージして呉れと申込みなすつた時、父樣が他ににらんだ者があるからやれぬと、叔父樣に御斷りなさつたさうだ、けれども芳夫さんには母方の親戚から花子さんといふ人が內々來て居るのだのに、嫌がつて、理性の合た人でなければ一生獨棲して、失意の勝利を味ふ覺悟だつて酒句の兄樣に仰有つたさうだけれと、芳夫さん處へ來た誠さんの御文には「身一度心を注ぎしに、其を消さゞるを得ざるの已むなき悲を見るならば、父ある身の如何で先立つ事は能はざるも、嗚呼此世からの活天國、板子一枚下は奈落の底千尋の海を家として軍艦生活に身を委ね、富も名譽も打捨てゝ腦の印象を永劫不滅に神聖に保つ心底だ」と書いてあつたつけ、それに青山の正さんがいらつしやると、毎時でも誠さんと散歩した時の話しをしては泣かせられてしまふのだもの、ほんとにどうしていゝかと思ふわ、たとへ冷だ酷だといはれたつて、親の許可の無いものを拒ますには居られない



それは〳〵滿腔の同情はするけれど、芳夫さんは誠さんが自分に對しての事は少しも知らないらしい、正さんが芳夫さんに打明けても信じないといふし、酒匂の兄樣が仰しやつた時『意氣相投じた友だもの少しも不思議はないぢやないか……』ていはれたといふのだもの、どうしていゝのだらう、父樣だつて何方とも遊ばされないわけだわ、自分なんかマーレーヂなんで念頭にないのだ、けれども、欲しい物はやつぱりほしいやうなものだもの、いやになつてしまふわ、若し此處に配せらるべく定められてる者があるとしたら、眞實幼より双親がきめたのだから仕方がない、卒業なされば理想のスクール出身ぢやないのだ……けれどファザーの御眼鏡に叶た人、最高學府の俊才であるのだもの、人格として品性として恥かしい所はないとして、表面だけは治安太平にして置きませう、想へば、人世の裏面は解るものぢやない、従姉妹でもあつたら此樂から出て悲に入る始終も打語て泣いてもらへるけれど、先生だつて明せやしないわ、兄樣もローだもの……又例へビジネスだつて、そんな獨きめな熱は吐かれるものぢやなし、自分なんか元々受動的であるのだし、何も何も苦勞艱難するにも及ばない、とは想ふけれどやつぱり考へてしまふわ、また投球が始まつたらしい、どうしても芳夫さんが一番上手だ、長治さんはいやに觸り天狗できざハイカラだわ、松さん柔道の段付だとかつて威張かへつてゐたつてあんな人田舍へ行けば掃く程あるわ、でも來年商學士になるていふけれど、フオールすればいゝ氣味だわ、おしやか見たやうな頭して人の學校の惡口するのだもの、やれ華美だの、ひさしが五寸だの、振袖式部だのつて、いぢめてばかり、內の兄樣は優しくて好いけれども、少し自分の事に就いて關渉して下さると、どれ程有難いけれど、芳樣は卒業して長崎へ行くのかしら？ それとも酒匂の叔父樣の銀行へ出るのかしら？ それとも誠さんのすゝめのやうに海軍部內へ入るのかしら？ なるべく東京に居てもらいたいけれど、何も〳〵勝手にはならないものだわ、他の事はどうでもいゝから唯此十八で齡が五年

續いたら隨分嬉しいとおもふわ、また晩には叔母樣がいらつしやるからヴァイオリンで縛られてしまふのだ斯やつて何時までも〳〵考へて居たい……皆面白さうにやつて居るわ……迎へにでも來られると大變、又いぢ惡に見せろつて言はれたら一大事だわ……、まるで蛇見たやうだもの、誠さんでも來て居るなら一緒に遊ぶけれど……無邪氣でいゝわ……ほんとにいゝ人だけれど、外交官には御誂へだのに、板子生活なんて外交官には違ひないけれども……外務本省詰にしたいわ……何故だらう……正兄さまから無理に父樣に願がつて頂かうかしら……人二人が精神的に死ぬのだもの…………けれどもそんな親不孝な事は自分には出來やしないわ……彼の君があるのだもの……あゝ想ふといやになつてしまふわ……けれど兄樣の御說の達觀的に萬事やつた方がいゝわ……會話でもさらいませう〳〵……もう書くのもいやだ、誠さん何してるかしら……また夏に輕井澤へ行くと遊ぶから樂しみだわ……

少孃と小囊は油斷がならぬとはことはりなるかな

さても細かく表情が見ゆる、先生とは私の事なれども、何故明し給はらぬ？　彼の小さき胸一つに秘めて、然し樂天性の生立ちなれば案ずるところはあらねども、讀み終りて一汗、月の如く花の如き自然の臺に人となりし君にして、かゝる心理展開を見るとは、いともはかなききはみなれ、噫！今宵神嘗祭の御祝として御親類の方々打參ゐ給ふに、定めて賑ふ事なるべし、長治氏は最早來給ひてピアノ彈き鳴し居らるれど、晩の正雄氏、芳夫氏の合唱は聽物なるべし、孃の琴にても拭ひ置かん哉。




1909.

恭賀新年

(1)



今川橋
松屋呉服店前

金製羽織紐

初春の御召料にとて
新形品種々出來致し
置き候に付何卒御用
仰付られ度候

金製羽織紐の價
(1) 金拾圓
其他
金八圓五十錢より
金拾五圓迄
種々取揃へ有之候

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西
電話本局二〇四〇番振替口座一五二一四番

根治確證
わきが
新治療藥 ラピヨシン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ
丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔滌驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる
毛髮生長液 原名ベグネス

有力なる最新液にして毛をはやした人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮增生す◉頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名ベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學的美容品
色の白くなる
バントコロン溶液

盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば皮膚は次第に新陳代謝を促し十分の力に依り主性

月やくさらい

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極めて確實なるも毒なくたやすく下る
月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す
價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢 合發特別製貳劑參圓 包料治貳錢

メソルビン此藥は局部を痛ず如何ほど長き月經のとまりも必ず下ろ二三月位のは壹劑も用ゆれば

專賣 東京神田小川町四十番
オリエンタル藥舘
電話下谷二五三五

（なの二）

婦人くらぶ

毎月一回一日發行 一月一日

第貳卷第壹號

定價十五錢 郵税一錢半 六冊税共九十錢 十二冊一圓七十四錢

本文全部舶來紙

▲動物園に於ける情愛深き鳥　黒川園長

▲財と愛　東郷博士

▲女子と職業　國分正憲

▲新年の遊戯　遠山稻子

▲雪中の松　前田曙山

●私の受けし最も大なる感化…後藤男爵夫人

●内親王殿下の御平常

●女性の遊具に就て…矢野龍溪

▲小説 前兆　水野葉舟

▲當世奥樣評判記　紅女

▲衛生 婦人講話　寺田醫學士

▲新年の御料理　齋藤稻子

▲婦人の鼻と其表情　中山石庭

▲男より女子への忠告

▲西洋婦人衣裳料

▲絹糸レース寫眞挾の編方

▲初日影（彩色石版）　萩原一羊

▲梅が香（彩色石版）　上村松園

▲其他口繪八頁

●新年大附録●

親子四人 日本漫遊双六

奇妙珍妙 むべやま占ひ

共に新年の遊物として群を抜く

▲其他詞藻和歌俳句短文依例如山

▲更に感想五題を募集す五種共に賞有

東京日本橋區本銀町四丁目七拾番地　紫明社發行　（郵便振替貯金口座一七五五四番）　賣捌店全國到る處

女（その五）

廿世紀の淑女諸嬢は
斯様の婦人を模範とせよ

田村江東君著

活動せる實業界の婦人

全一册

洋裝菊判紙數二百四十頁
卷頭實業家婦人寫眞版數葉入

正價卅八錢
郵税八錢



内容

△勤勉力行の化身……三枝かれ子
△文明の美花……菅川英子
△發明家の妻……仁科經子
△内顧の憂なき婦人……山崎ため子
△獨立身螢の標本……篠原よれ子
△隱れたる偉勳……川合こう子
△黒リボン……伊藤なか子
△時計の針の撓みなき妻……服部まん子
△夫婦共勵の醫師……篠田せい子
松田八十子
大西琴子
△白牡丹の姉妹……秦利舞子
△寧ろ環衣を縫はん……
△準備教育を受けし嫁……佐藤歌子

△才德兼備の良妻……龜井まき子
△商業教育の産物……宮成枠子
△福德圓滿の内儀……横田錦子
△商賣繁昌の秘訣……内田とめ子
△夜店の女書肆……片桐なか子
△實踐躬行の才女……山崎きみ子
△白芸營……丸茂宗子
△此母にして此嫁あり……大橋きよ子
△妙齡の女書記……秋山徳子
△中洲の西大后……佐々木親子
△光榮ある襤衣の元祖……茂野蝶子
△實業家の理想的婦人……雨宮信子
同てる子

東京本町
博文館
振替口座二四〇番

女（その六）

女（その七）

文(その八)

婦人が一人前となる能力を試驗する最良機關

これは文部省敎育檢定豫備試驗に應じて登第せし人々が話された試驗場裡の狀況と、之を受くる迄の工夫及び苦心談であるが、今後苟も一人前の婦人として世に處し一家を整理し行かんとする婦人には少くも斯かる修養は必要なるべく、此の人人の苦心談は何人も參考して有益なるものとして茲に掲ぐる事にしました。

家事科　A氏

◎參考書の讀み方

何分初めての事故勉强の方法がわからなくて困りました。まづ高等女學校の家事敎科書に擧げてある項目即ち衣食住、養老、看護法、禮法、家事經濟、料理、管理法、家庭敎育、育兒、それから敎授法など申すもの、それを土臺にして種々の參考書を讀んだので御座います。

參考書と申しましても、家事のことに關して書いた本は數限りない程澤山ありますから、其中で最も確實な深いものを取つて讀むことにいたしました。そして調べる項目がなか〳〵多いのですから參考書をたゞ此れも彼れもと讀みましても一向まとまりがつかなくていけません。まづ衣食住に就いては如何、育兒については如何といふ風に、大體自分の考を定め意見を立てゝ置いて勉强にかゝり、一項づゝ片付けてゆくことが必要で御座います。左樣いたしますと參考書を讀みましても、此の書物には恁ういふことが言ひ足りないやうだとか、この事に就いては甲の本よりも、乙の書に書いてある方が確かであるとかいふやうな事がわかりそれに就いての考もよくまとまつて明白するので御座います。

◎實地經驗の必要

それにしても家事の方は實際問題ですから書物の上で學んだ知識ばかりでは到底完全な答案を書くことが出來ません。尤も書物も讀まなければなりませんけれど、それと同時に實際に當つて經驗して見ることが甚だ大切な事で御座います。私共は僅か一月内外で試驗の仕度をいたしましたやうな譯ですけれど、一體ならば一年も二年も前から用意をしはじめて機會を利用しては其時々に書物を委しく調べそれを實際に結び付けて研究いたしますならば印象が強くなり知識も確實になつて最もよいだらうと思はれます。經濟の問題なども實際に當つて見た人でないと迚も本統の見當がつきません。まあ、この方の試驗を受けますには家庭を有つて其上に敎鞭を執て居つた人が一番好都合でせう。

◎今回の試驗問題

家事科の檢定試驗は今回が其の廿二回目に當るので御座いますが、其間の問題の變遷を見ますと勿論一定いたしては居りませんけれど、概して初めの程は理論がゝつた難しい問題が多いやうで、近來はだん／＼實地應用の問題に傾いて來たやうに思はれます。こゝに今年(四十一年)の問題を御目にかけますと、

(一)左の條件に於て半ケ年間の家計豫算案を作製すべし。

1、職業　醫師

2、月收平均八十五圓

3、家族八人　夫婦、老母、子供二人(八歳五歳)代診一人、藥局生一人下女一人

4、住所　縣廳所在地

(二)家族中に「ヒステリー」患者ありと假定し之が看護の方法につきて詳記すべし。

(三)郊外の地を卜して地所二百坪建坪三十坪内外の隱居所を造らんとす其の設計圖を調製し且つ庭園の配置をも附記すべし。

但し家族は老人夫婦下女一人とす。

(四)尋常小學を卒業せる女子をして引き續き修學せしめんとす此際に於て父兄の注意すべき事項を列擧して其の梗概を說くべし。

と申すので一寸常識でも書けさうで、さてなか〳〵考への要る問題でした。

◎答案を書くに就いての注意

答案を書きます時にはよく落付いて問題に注意することが最も必要だと思ひます。問題に餘り注意いたしませんで、つひうつかり違つた事を書くといふやうな事はよくあるので御座います。今度の一番の問題の家計豫算案を作りますにしても、住所の縣廳所在地といふ事に注意しませんで東京の積りに書いた方が大分あるやうで御座います。四番目の問題なども父兄の注意すべき事項とあつて、父母の注意すべき事項としてなかつたことは、餘程答案に差異を生ずる處ではあるまいかと思はれます。

問題は書き易いものから順々に書くのもよいでせうが、私は初めに何の問題には幾分、どの題には何時間といふ風に、大方時間を割り當てゝ置いて取りかゝる方がよいと思ひます。左様いたしませんと一つ二つは滿足に書いても、時間がなくなつて了つて書くことが出來ない問題が殘つたり、半分で筆を捨てなければならないやうな事になつたりいたします。

それから最う一つ注意いたさなければなりませんのは名前で御座います。願書の方へは本字で書いて答案の方へ假名を用ゐたりなど、書き方が違ひますと代人と認められ其の答案は無効になるといふ譯で御座います。

◎試驗當日の有様

終りに一寸試驗當日の有様を申上げて見ませう、まづ硯とか筆とか鉛筆とかいふやうなものを用意して、時間に後れないやうに試驗所に參ります。すると溜でも申すやうな所に紙の札が幾つも下つて居りますから、それを取つて名前を書いて置き、初めの鈴が鳴つたら其の札を入口で渡して愈々受驗室に入るので御座います。机の上には一々紙が備へてありまして席は勝手で御座いますが、人數が大抵入り切りますと、監督

官の一人が更めて「家事科以外の人は出て下さい」と嚴かに言ひ渡し、さて何もなければピーンと入口の戸をしめて了ふので御座いますが、此時は何となく牢屋へでも入れられたやうな氣もちがいたしました。やがて八時の鈴が鳴りますと同時に、問題の封を切つて各自へ渡されますから、隨意に筆をとりはじめます。そして十二時を報ずると同時に假令半分でもパタリと筆を擱かなければなりませんのです。私はつひ其邊の規則をよく心得て居りませんでしたので、少し位でよささうなものと殘りを書いて居りました處、時間以外に書いた答書は無效と認めると怒鳴られ吃驚して筆を捨てたやうな譯で御座いました。

國語漢文科　B氏

◎試驗の準備

△國文では、

古事記、萬葉集、源氏物語、古今集、大鏡、増鏡、平家物語、太平記、徒然草

△漢文では、

大學、中庸、論語、孟子、韓非子、左傳、史記、十八史略、唐宋八大家文、唐詩選

など申すもの、これは國語漢文科の試驗に應ずるものの是非讀んで置くべきものとして、豫め示されてあるので御座いますから、私共はまづそれに就いてよく勉强いたさなければならないので御座います。

私は敎鞭をとつて居りますほかに種々の用務をもつて居りますので、試驗のために充分時間を割く譯に參りませず、誠に心苦しく思ふて居りましたのですが、また考へて見ますと餘り自由に時間を用ゐた勉强は、例へば汽車旅行のやうなもので、割合に讀んだ處が頭腦に殘らないものかも知れません。敎鞭を取つて居りますものが其の敎へる時に當つて眞面目に委しく調べて置くといふ事は、最も役に立つやうに考へられます。

◎試驗の第一日

試驗は八月の廿四日と廿五日との二日で、初めの日

は設問と作文で御座いましたが、設問は、

一、盤渉調、豊樂殿、春宮大夫、袙、直衣、母屋、除目、歌合、萬里小路、流鏑馬、等の語の讀方

二、未議判、旋頭歌、序歌、浮世草子、宣命等の語の説明

三、格物致知、徑庭、函丈、良知良能、度支等の熟語の説明

四、音便、副詞、修飾語、等の文法上の名稱の説明

五、唐宋に於ける古文復興の始末を略記せよ

の五問題で、作文は夏期休業の一題。これ丈けを八時から十二時迄四時間で書くので御座いました。

それで私は此問題を見渡しまして、中で自分の考を一番よく言ひ現はす事の出來るのが作文だと思ひましたから、まづ第一はそれに取りかゝり生意氣にも議論文みたやうなものを書き初めたので御座います。處が幾ら書きましても果てしがないので困つて了ひましたとにかくよい加減に結局をつけることにいたしましたが時計を見るともう十一時、あとの五問題は一時間で書かなければならないやうな事になり、氣ばかり急いて筆が動かないやうな有樣で御座いました。矢張どの問題には幾時間どの問題には何時位といふやうに大概時間を割り當てゝ置いて書く方がよろしいので御座います。

それは隨分間違つた答もいたしました。設問の函丈。といふ熟語が何うもわかりません。函人といへば鎧を作へる人のことゝ覺えて居るが函丈とは何の事だらうと考へて居りますと、何々先生函丈などいふ事があるやうに思ひつきましたのです。明白はわかりませんけれど書かないのも惜しいやうな氣がいたしましたから手紙の事だと書いたので御座います。處が後で調べて見ますと、昔師弟の間で、弟子は先生の御座から一丈離れて坐つたものなさうで、函丈とはつまり先生の御座といふ事なので御座いました。それから度支と申す語、これもわかりません。何でも朝鮮の官名に度支部何々とあつたのを新聞で見たやうな氣が致しましたから、それを便りに種々考へて見ますと内務省でもなく

農商務省でもないやうで御座います。で、大方大藏省あたりの事だらうと見當をつけまして、これもよい加減な事を書いて出しましたのですが、調べて見ますと出納の事で御座いました。まあ大藏省に出納とで御座いますから、割合に縁の近い間違ひをした譯で御座います。

◎試驗の第二日

廿五日は國語と漢文の訓點と解釋で、國語の方は太平記と徒然草から一題づゝ、漢文の方は論語と孟子から出たのが一題に、十八史略から一題、唐詩選から一題ですから、都合五題、これも矢張四時間で書くので御座いました。

私が初めから心配いたして居りましたのは漢文で、先生方からも國語の方は何うにか出來ない事はあるまいから、漢文の方を精出して讀んで置くやうにと仰しやつて頂いて居りましたけれど、勉強の仕方が惡う御座いましたゝめ、矢張り十分な答案を出す譯には參りませんでした、勉強の方法が惡かつたと申すのは、容易いものを措いて難しいものばかり讀んで居つたことで御座います。十八史略などは容易い方だからと後廻しにいたしましたので、遂々試驗までに讀み了へることが出來ませんでした。處が問題は其のまだ讀んでない處から出たので御座いました。これに引き換へ國語の方は何一つ試驗のために勉強いたして居りませんでしたのに、仕合にも問題も割合に容易く、殊に太平記から出ました方は、笠置御沒落として教科書に出て居りますもので、生徒に敎へてから間もない處で御座いました。これは眞實に運がよいと申すのでせう。

解釋は何樣につければよいかわかりませんけれど、私は まづ難しい語をぬき書して詳解し、其上に大體の意譯を施して置きました。そして又字義よりも其の文章に對する自分の感想といふやうな事を主として書いたので御座います。漢文の方は一字々々の解釋が出來ませんでしたから、大意を取ることにつとめ、唐詩選から出ました問題など詩の意味を十分に取ることも

出來ませんから、まあ斯ういふ心持であらうかといふ處を和歌に作つて出して參りました。

◎よい加減に學んで居る缺點

私が今度試驗を受けまして、第一番に感じましたのは、平生物事をよい加減に學んで居るといふ事で御座いました。問題を見ますと、知つては居るやうだがさて明白としないといふのが大變多いので御座います。それで常に書物を讀みます時に、よい加減に解釋して置かないで、明白わかるやうに委しく調べて置くことが必要であるといふ事をつく〴〵感じました。それに國語漢文科の方の問題には、これ丈けのものを與へるから何ういふものを作つて見よといふやうな應用問題がなく、まあ何でも暗誦して居る方が勝を占めるといふ工合で御座いますから矢張り成る丈け廣く讀んで、種々な語をよく覺えて置くのが宜しう御座います。それには私のやうにいろ〳〵な用務を持つて居つて十分準備をいたす時間のないものは、少しの書物を讀んで多くの利を收める勉強の方法をとらなければならないと思ひます。例へば同じ文字でも用ゐ處や文章によつて其意味が違ふもので御座いますから。まづ一つの文字に就いても、いろ〳〵と違つた解釋の仕方を調べて置くので御座います。左樣いたしますと初對面の文章に逢つても別段骨折らずに意味をとる事が出來るだらうと思ひます。

體操科　○　氏

◎勉強の仕方

參考書も種々御座いますが、原理は大抵同じなのですから、餘り廣く讀まない方が宜しいと思ひます。私の見ましたのは體育原理、運動の生理的訓練、體育の原理及び實際、體操及び遊戲法精義等で、中にも運動の生理的訓練と申す本が一番よかつたと思ひます。それに先生から時々問題を出して頂いて答案を書きましたことは、最も有益で御座いました。問題を出して頂きますと、それに就いて種々の參考書を調べ、出來る

丈け完全に答案を作りあげることを努めましたから、終には其の自分の書いた答案ばかりを見て勉强いたして居りました。一體私は體操が好きなので御座いますから今度の試驗の準備とても苦しんでいたした譯では御座いません。勿論骨折はいたしたのですけれど、一々自分の身體に就いて、研究するのですから非常に興味を感じたので御座います。

◎實地研究の必要

それにしても豫備試驗の問題は、

一、新陳代謝の機能を述べよ
一、運動の精神に及ぼす影響
三、姿勢の體操演習上の價値
四、猫背の原因

と申すやうな、まあ常識でも書ける容易いものでしたから、合格いたすのが當然なのでせう。難しいのは今度の本試驗で御座います。それは術科と實地教授との試驗で、普通體操一般が實地に出來なければなりません。體育學校などから出た方達はさすがに、巧みなものですけれど、私共のやうに、學校であまり普通體操を教はりませんでしたものにとつては、なか〳〵の骨折で御座います。それは何うしても試驗を受ける前に一度講習會へでも出て置く必要があると思ひます。

◎私の考へる受驗者の資格

よく人は何も出來ないから體操の試驗でも受けて見ようなど丶申すやうですけれど、それは大變に間違つた考です。體操科の受驗者はまづ最も身體が丈夫でなければならないことは申す迄も御座いませんが、人格の高いといふこともまた同時に必要な資格であらうと思ひます。文部省では何ういふ方針で採りますかわかりませんけれど、もし術ばかりを重んじますならば藝人と一向變りのない體操の先生が出來ませう。これは強ち私が實地が出來ないために負け惜しみを申すのでは御座いませぬ。(以下英語科、手藝科、理科、歷史地理科等續出)



禮式の立場より觀たる今日の女學生

小笠原清務

▲女學生の歩く樣子

私共が、今日女學生の、往來を歩いてゐるのや、朋輩と行逢つてゐる樣子、又電車に乘つてゐるとか、或は學校其他で椅子に掛つてゐる所などを見て、顏を背けることが餘程多くあります。勿論今日の女學生は、英佛語や、國文學や、理化學乃至家政學の心得は、年一年と進歩して行くに相違は無いでせうが、禮式を事とする私共から觀ると、女學生の動作は理想的のものとは思はれません。一と口に言ふと、今の女學生は、兎角粗暴で、容姿の優婉なる中にも凛然侵すべからざる淑女の風が見えないのです。粗暴と言つては或は酷評かも知れないが、兎に角婦女子のヤサシミと云ふものが見えません。一寸路上を歩くのを見ると、スタ〱大股で歩く。靴を穿いてゐる者には特にこれが多い樣です。人は色々忙しいから、急足で歩くのは善いが、さう大股で歩いたばかりで路が捗取るものでもありません。小股でチヨコ〱歩いた方が、却て路は捗取るのです。日に〱學問の進むのは誠に結構ですが、禮儀作法的の態度の斯う何時も遲れ勝なのは實に殘念に思ひます。

▲作法が腹に入らず

又私の敎へてゐる女學生に就て見ても文章は皆んな上手です。學校で「禮とは何ぞや」とか、「式とは何ぞや」とかいふ問題をだすと、三枚や五枚の文章は瞬間に綴つて見せます。實に感心です。併しながら文章が

良い割合に、禮儀作法の實際の意味は少しも徹底して居りません。それだから私は何時も教へてゐる學生に對つて、私の方は文章は如何なに惡くても良い、例令一行に一字宛書いてあつても、精神の籠つた、禮儀作法の腹に入つた、確乎とした答案を見せなさいと注意してゐるのです。

▲禮法の眞髓は何か

禮儀といへば、擧動進退を整ふもの、外形のみに屬するものと仕てゐる者が多い樣ですが、禮儀はたゞ外形を整ふのみではありません。内部の心と、外部の動作とが相一致する所に禮式の眞髓があるのです。即ち「内其心を正しくして外其體を直くする」のが、禮式の本意です。だから今の女學生に粗暴の風があるのは一面から言ふと、精神修養の到らざる結果で、道德上の問題にもなる事ですが、併し精神さへ正しければ、それで禮式の能事足るかといへば、其樣は行きません。幕末當時は、心さへ正ければ、それで禮儀は足れりと稱して居ましたが、之は禮式の本意を穿き違へたものと言はねばなりません。修身道德の外に、俄に禮式の行はれてゐるのも、畢竟此の故です。即ち時と、場と、位との禮法の形式の存在する所以です。

▲何故に猫脊になるか

隨分女學生達の惡口を言ふ樣ですが、今日何の女子を見ても、一體に猫脊なのは是亦醜しくてなりません。或西洋人の如きは、猫脊を以て日本女子の體格上の特色と思つてゐる者もあるが、これは途方もない話説で、猫脊は決して日本女子の特色ではありません。現に私共が胴作りを以て容儀を正しくする根本と仕てゐるのも、此の猫脊を嫌ふからです。いや、嫌ふなどいふのは感情の事で、禮式の主意から言つても、猫脊は畢竟修養の到らない結果です。

▲だらりと頸を下げる風

次に眼につくのは、一寸學校へ出て見ると、十人が

九人迄は、卓子を前に控へて、だらりと頸を下げて居る事です。これは或は女子の柔順を現はしてゐる積りかは知らぬが、實は日本女子の弊害ともいふべき卑屈の相を現はしたもので、又我が禮式にも背いて居ります。「女は柔順にして卑屈ならず、容姿婉儀の間に於て凛然侵すべからざる風あるを要す」と教場に軸にして揭げて置くのは、つまり斯う云う風を直したいからである。

▲內輪に歩く古風な女

次いで日本婦人に醜くかつたのは、內輪に歩く風であつたが、それが近時體操の普及された結果として、漸次減少して來たのは、誠に喜ばしい現象です。禮式の心得のない婦人は、今でも矢張りチヨコマカと內輪に歩いて居りますが、禮法の本義からして、私は嚴しく之を戒めて居ります。



▲體操と禮法の一致

體操は女の內輪に歩く風習を打破した外にまだ幾つも女學生の風俗に利益を與へてゐます。特に著しいのは、すらりと、姿勢の整つて來たとで、何の學生を見ても、おのづと威嚴が備はつて

來たやうに見えます。從つて、だらりと頭を下げる風習も、よほど減じて來ました。

▲體操が禮式をくづせる一例

體操は禮法に種々の利益を與へて居ますが、又禮法の障害と爲つてゐる例が無いでもありません。一二を擧ぐれば、踵をあげて、爪先で歩く女學生を屢ゝ見受けます。之は全く體操の惡影響で、婦女子の柔順と威嚴とを傷くることは尋常でありません。今一つ、内輪にあるく風習が減して來たのは好いが、今度はあべこべに、外輪に歩く風が、ぼつ〳〵行はれて來たやうです。内輪に歩くのも醜いが、外輪に歩くのも見美いものでありません。嘗て華族女學校で、此の事を注意したと當局者も御氣が付かれたと見え、體操敎師に注意があつたやうに聞いて居ります。私は日本女子の體格の劣つてゐるのを知つて居ますから、今後ます〳〵體操の行はれんことを望みますが、それと同時に、禮式が相伴ふて、能く日本婦女子の美風を發揮せんことを望むのです。

▲同じ高峰の月を見る

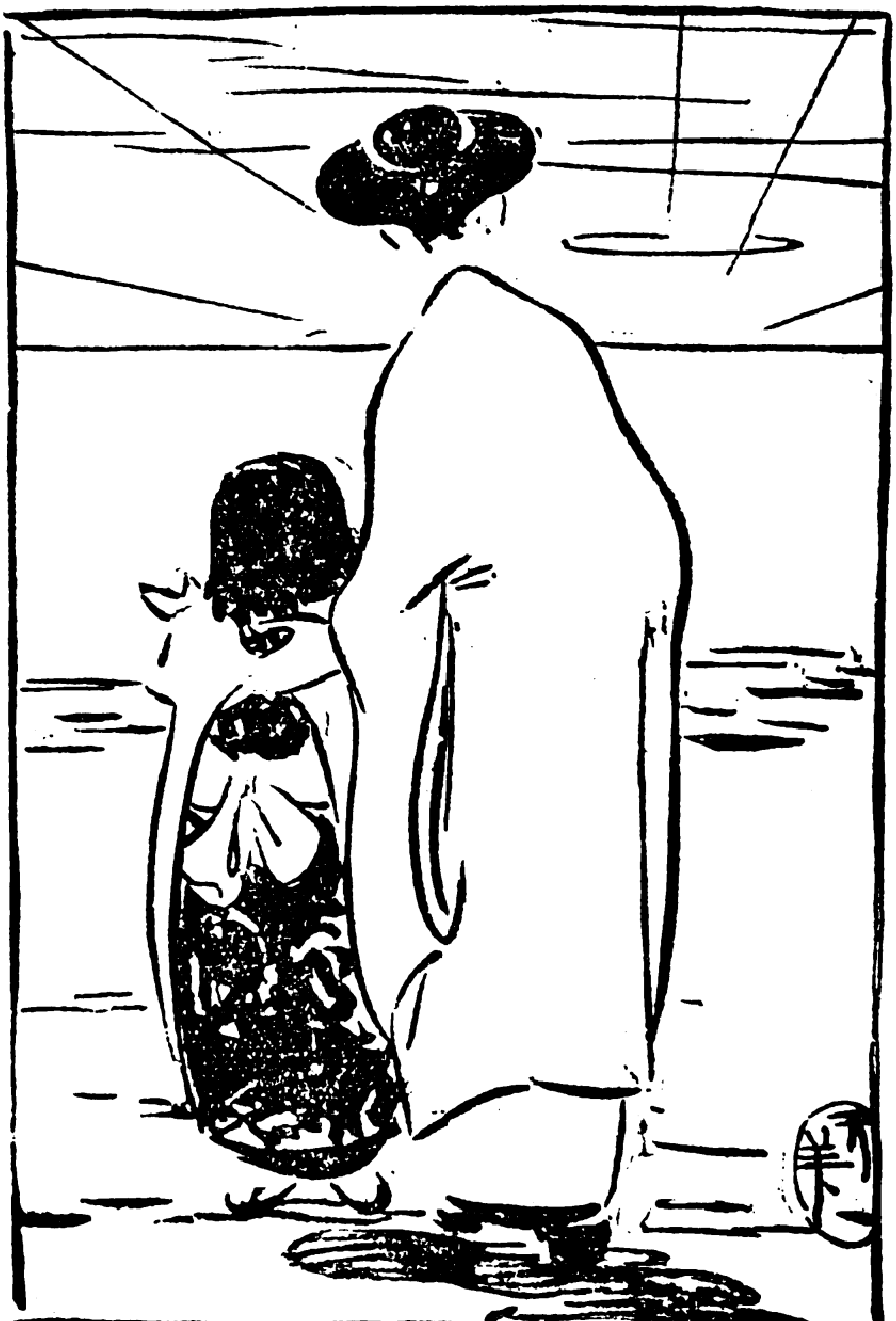
「欲善禮者練其心」で、禮式は精神を練るもの、體操は身體を練るものです。精神と身體との相違はあるが、完全の婦人を作らうといふ點に於ては、二者相似て居ます。唯、一は精神の修養より擧動進退の外部に及ぼし、他は身體筋肉の鍛錬より精神の健全を謀るの相違で、方向が違つてゐるといふ丈けで、二者の間に大した相違はありません。禮式も、體操も、つまり同じ高峯の月を見るので、踏み行く路が違ふ爲におのづから其處にけじめが出來るのですから、私は私の本分を守つて、禮式の方面から我國の婦女子を改善したいと思ふのですが、體操の行はれる割合に、禮式の隆盛に至らないのは遺憾に思ひます。

▲驚いて又辭儀をする

今日如何かすると、相手の頭の下がつてゐるのに、

狼狽して、又もや頭を下げる婦人を見ますが、禮式の一端を心得た者は、這んなへまなことは有りません。

頭を下げる時に内に息を吸ひ込み頭をつける時に息を吹き、頭を擡げる時に又息を吸ふのを三息にお辭儀するといひます。三息の心得は禮式の初歩で、禮法の講義を耳にした者は、何人も知つてゐる筈ですが、如何かすると此の心得を缺いてゐる女學生を偶ゝ見受けます。



▲三息の挨拶の細別

今少しく詳細に三息の挨拶に就て、説明すると、三息の辭儀にも合掌禮・双手禮、指建禮と斯う三通りの區別がある。合掌禮といふのは、目上に對する禮で、左右の掌を下に向け、指先を後の方へ向け、左右の膝を平

等に並べて、頭を下げるに從ひ、左右の手を前に寄せ、兩手の指先を向ふへむけ、臂をもつけ、兩手の拇指と、人さし指とを突き合せ、その内へ鼻を入れて、三息にお辭儀するのです。左右の手を左右の股の傍に指建して、左右の膝と同等に手をつき、指先を向ふになほし頭の下るに從ひ、兩手の指先を内へ向けつゝ前へすゝめ、指と指との間五寸程あけて疊につけ、頭も疊から五寸程離れた所まで下げ、三息にお辭儀するのを双手禮と言つて、同輩の間に行はるゝお辭儀です。目下の者には、左右の股の脇の中程に掌を向ふにして、指先を疊につけて、身體を少し前の方へ屈め、矢張三息にお辭儀するので、指建禮と云ひます。斯う目上に對すると、同輩に對すると、目下に對すると、おのづから禮に區別があるが、三息の法則に從ふ一事は變らないのです。

▲下駄を穿けぬ女學生

斯う言つてくると、禮儀は大層窮屈なものゝやうに考へる人もあるが、それは禮に慣れない故で、丁度西洋人が日本の下駄を穿いて窮屈がるのと變りません。慣れると、規矩に從はないのが、却つて心苦しくなつて來ます。日本人で下駄を穿くのを窮屈がる者があれば大笑でせう。

▲「靜」と「破」と「急」

なほ禮式には靜破急――「靜」と「破」と「急」の差別があります。「靜」は禮を愼重にするもの、「破」は普通、「急」は簡易にするものです。世人は禮儀といへば、馬鹿叮嚀にするものと誤つてゐる者もあるが、その時その場合で、「靜」によるも好し、「破」によるもよし、「急」によるも可い。徳川時代は、「靜」を貴んだが、諸事簡易を旨とする今日では、「破」又は「急」によるも、私は咎めません。が、靜破急の別を穿き違へて、貴賤の別もわきまへず、長幼の序も忘れて、勝手に振舞つてはなりません。「破」又は「急」の簡易に從つても其の中に、ちやんと禮儀が備はつてゐます。

▲指先を擴げて挨拶する者

けれど、女學生の風習が、粗暴の何のと言つても、明治十二三年頃に比べると實は雲泥のやうに變つて居ます。明治十一二年の頃、私は時の文部省又は東京府廳へ禮式採用の建白書を出した事は、幾度であつたか知れません。が、何時も握りつぶし。明治十三年に入つて、初めて採用されましたが、採用と爲つて驚いたのは、時の大官の中、禮法は僅に大書記官であつた九鬼隆一氏(今の樞密顧問官)丈けが多少御承知であつた丈けで、文部卿を初め、何人も御存じなしといふ有樣でした。兎にかく雛形を見せろ、といふので、今の敎育博物館に出掛けて、大官を前にして、禮式の一般を御覽に入れたこともありました。で、當時女學生の模樣は如何であつたか、といふに、粗暴の何のといふ言葉は通り越して、君、僕、失敬で、男子も女子も、ちツとも變らないのです。無茶時代といふものでせう。その頃から見ると、粗暴の何のと言つても、禮式は整ふてゐます。今日の女學生には、肩を張り指先を擴げて挨拶する者は、まア有りません。

弱點

弱點は人間といふ人間の持前である、どんな人間でも仙人でない限りは多少の弱點は持つてゐるものである、まづ衣食住の慾は何人も備へてゐる弱點である。即ち生存の第一義である。次いでは富貴の慾、名譽の慾、子孫繁榮の慾、安樂を享くるの慾、それから段々と進んで人に善く思はれんと欲するの慾、就中榮耀、權勢は俗世界を通じての一般の慾で、古往今來社會人間の活動は要するにこの生存慾の變動に別ならぬのである。而してこの生存慾に影の如く常につきまとふものは弱點である。彼の何物にか色氣のある人が、常に自から其の容姿を修め、言語を婉曲にするのは弱點の程よい表示であるが、若しこの色氣が度に過ぎると、誠にいやらしくて見るに堪へぬものである、故に人は其の求むる處を薄くして成可く弱點を暴露せぬやうにしたいものである。





枯るゝ花嫁 咲く花嫁

宿の妻

一

「なんてよく似て居るんでせう」

又しても從妹の千鶴子はしみ〴〵と云ふ。其美しい瞳の動く處に、紺セルの洋服を着たお下げのお桂ちやんが、同年の吾家の愛子と、二ッ違ひの春子を相手に仲睦まじくお飯事をして遊んで居る。

南を受けた日當りの好い六疊の、敷居際から縁先かけてべた一面の所帯道具。障子に寄せてお人形やら犬やら猫やら、ズラッと並んで居る前には、心づくしの御馳走が、鉢にも盃にも堆かく盛られて居る。其前の靴拔石の傍に蹲踞んで、蓬の葉を挘つて居るお桂ちやんの、目なら、口なら、——あゝ本當によく似て居る——と私にも思はれる。

お桂ちやんには優しい母樣、お千鶴さんには大事の大事の姉樣だつて從妹の不二子は遂此一月、廿五と云ふ奥樣盛りを、腎臓炎で亡なつたのです。小作りながら行丈揃つてキチンとした着物の着こなし、凝つた服裝でも若々しい、襦袢の襟なら履物なら、流行を逃さぬ——筑紫さんは財産家だから——と羨やんだ人も多かつた。

もと某縣の知事を勤めたと云ふ亡父の遺産が十萬餘小石川の高臺の手廣い家屋敷もろとも、當主の一郎に讓られたのは、今から一昔前、其一郎が帝國大學を出ようと云ふ前の年であつたとやら。

さらでも財産家のあとゝり息子、男前はちと中なが

ら、ガッしりとした丈夫な體格、キビ〳〵とした江戸ッ子肌の、是で工學士と云ふ肩書さへつかば、何處へ出しても男一匹、押しも押されもせぬ立派な息子を、親の身として、どう手放して置かれよう。それには亡父が在世の砌恩顧を受けたとやら云ふお末社どもが、ヤレ追悼會、ソレ賞德會と、生若い者をかつぎ廻つて、どうやら茶屋酒の味も覺えた樣子を、見るにつけ、聞くにつけ、未亡人には痛心の種。親類中とも協議の結果何でも嫁を、と金の草鞋で搜して歩いて、早いと云ふのを無理無體に來て貰つたのが、淸見法學博士の令孃不二子。其時やつと十七の蕾の花。別けても幼ない性質だつたので、二ッ違ひのお千鶴さんとは、何方を姉と分らぬ位。春や昔の花耻かしき新婚披露の園遊會に名殘の高髷重かりし私の傍を放れなかつた二人の姿が今でも目につく。

豐頰とした中高の顋がくゝれて、笑ふ目元の又なく可愛い姉の不二子と、叔母樣似のすらりとした瓜核顏二重瞼の冴えて凉しい、口元締つて凛とした氣高い千鶴子と。二人乍ら濃紫の裾模樣を着て、桃割の格好なら、松竹梅の前差簪なら、草履の鼻緒の緋天鵞絨まで寸分違はず、畫にかいた姉樣のやうな美し姿の、恐らくは、はこせこの中の小菊の數さへお揃らしい姉樣思ひのお千鶴さんをば、どう間違へたか新夫の粗忽で、姉樣のやうに扱つたとやら咄したとやら。『ほんとに、相良さんは酷いのねえ』。と自分で怒りに來た事もある無邪氣な、元氣の好い、十七といつても十五位にしか見えなかつたお不二さんが、お嫁に行くと聞いたとき、私はまあ、どの位驚いたらう。

勿論淸見の兩親は、餘り進んで居なかつたので、女學校もまだ卒業前なり、裁縫も碌に出來ませぬ、總領子の少しは我儘も手傳つてお料理なら御總菜も覺束ない、こんな娘をどう人樣に上げられませう、と再三再四斷わつたのを。夫はもとより承知の上、否其ねゝ樣をお貰ひ申して此方の家風に育てゝ見たい、都合に依つては學校へも通はせませう、お不二樣とは一ッ妹のお富と申す娘もあれば、尙更以て。と强ての望に、ど

うせ一度は縁付けるもの、お婿様に不足のないのが何寄なれば『御相談に乗りませう』と、遂切り出すのを待ち兼ねて、善は急げぢや、夫高砂や四海波、目出度愛に祝ひ納めて――。

花婿様も捌たやうで情愛のある頼母し相な人ですよ。と叔母様はお悦びなさる。まあお不二も存外早くお姑様に馴れて。とお祖母様は安心なさる。姉様が居なくなると淋しいわねえ。とつく〴〵歎いたお千鶴さんさへ、生れて初めて兄様つて呼んで見たのよ少しは極りが惡かつたわ。と、にこ〳〵し乍ら報告に來る。親類と云ふので私等夫婦もお招聘した時



意外な邂逅、夫の俊馬と一郎さんとは中學時代の同窓だとやらお互に呑む口の話もはずんで、『あの人ならば大丈夫だよ間違ないさと夫も受合ふ。併し家風は清見の家とは大分ちがふよ、一切萬事昔風？と云ふよりも先田舎風だね、此頃はど

うなつたか、お不二さんも些と閉口だらう」と之も其晩歸つてからの話であつた。

一郎さんはよく遊びに來る。一緒に來ぬのを不思議に思つて、お不二さんは？と殊更に訊けば、『近頃は襷掛で働らきますよ、まあ一度來て見てやつて下さい」と事もなげ、從妹と云つても姉妹よりも睦まじくしたお不二さんのとだもの、行つて見たいは山々ながら、緣付いてから小半年にもならうと云ふのに、遂ぞしんみり話にもよこされぬ——夫も御家風とやらかも知れねば、此方計り厚かましくも——と逡行きそゝくれる。『さう仕舞つてばかり置かないで、少しは連れて出給へ』と調戯半分夫もすゝめる。『まあ待つて呉れ、君等の樣な差向ひとは役者が違ふよ、之で却々人知れぬと云ふお樂しみもあるからね』と賑やかに笑つて歸る一郎さんより、お不二さんは嘸つらからう、窮屈だらう若いのに氣の毒なと、いつも〳〵思つて居る。

それかあらぬか、『姉様は少し瘠せてねえ』とお千鶴さんも心配して居る。

『あなたは此頃行かないの？』

『エ、兄樣は來い〳〵つて仰しやるけれども、いつでもお富さんが先へ出て來て、姉様とはあんまり話が出來ないんですもの、でも姉樣はよく働らける樣になつてねえ』としんみりとする。

『いくら何にも出來ないつても、私のやうぢやあほんとに困るわ、お千鶴さんはよく家の事をお覺えなさいよ』と逢ふ度毎に姉様が云ふ。

『廿歳前で結婚しちやあ駄目ですせ、可哀相だ』と兄樣が云ふ。兩親も至極同意を表されたとやら。

二番娘のお千鶴さんには、降る程の緣を片つぱしから跳散らかして、廿三の今日が日迄を稽古三昧。苦勞知らずの身も心ものび〳〵と、昔乍らの氣高い樣子は某の宮の妃殿下、と申し上げても不思議はあるまい。尤も私は去年の春まで足掛五年越、夫の任地の上海へ行つて居たので。上海へ着いてからまだ半年とはたゝない中に、筑紫の家では一郎さんが、文部省の留學生に選定されて歐洲へ三年許り。と其立ち掛けに寄港し

た。扨。

考へて見れば長いやうでも短かい月日の、めぐりめぐつて、又もや東京に舞ひ戻つた身の、替つた樣子に驚かずには居られなかつた。

分けても子供澤山な淸見の家では、だれも〳〵見違へる樣な育ちかた。あとゝり息子の勝彦さんは高等學校の生徒になつて、見上げるやうな骨格の逞ましさ。おちびさん〳〵と調戯つて居た由紀ちやんも、橫肥り乍ら十六の春を迎へて、人並らしい脊丈は出來た。無邪氣な賑やかな、顏付から氣分まで、お不二さんによく似たやうな。

お不二さんと云へば、見違へるやうな奧樣振。今では二人の子持になつて水際立つたあでやかさ。少し薄い髮の毛を極人柄な丸髷にして、百合縮緬の二枚小袖日曜日每に旦那樣と連れ立つたとて、顏一ツしかめる人もない。お富さんはとく嫁入つて、御姑樣も夫以來めつきり優しう、好な謠に花のお稽古、レウマチで孫のお世話はなさらぬ代り、家事向萬端若夫婦の切盛次第、決して干涉なさらぬと云ふ。

「私もほんとに樂になつてよ」と指環の塡つた手を擦でながら、いかにも仕合はせで堪らぬやうな顏をして居る。

「あなたはいつ見ても若いわねえ」と其時私は心から云つた。

「さう？　でも眞逆此頃では、お千鶴さんの妹とも間違へられないわ」

「お千鶴さんはほんとに立派になつたでせう？」あんな樣子で御飯も炊ければ御料理も手際が好い、裁縫も稽古に行つたでなけれど袴も羽織も達者に仕立てる。花も活ければ洗濯もする。學校に居た時分から何でも出來たお千鶴さんは、双葉會へあがつてからも語學とピヤノでもてはやされた。

「あそこへいつてから、めつきりお品が好くなつてねえ、あんな人を妹だなんて勿體ないわ」と噺して聞かせた。

お不二さんの思つて居る程お千鶴さんも思つて居る

否、私だとて負けずに二人を思つて居る。二人も私を思つて吳れる。かうして思つて力になつたりなられたり、何十年の後までも……と互の胸に云ひかはしたのを、どうしてお不二さんは死んだのだらう？。
　雪間に咲いた紅梅の、春の光に逢つたばかりを、無慘の風に散らされたのだ。

二

「私達の少さい時分も、よくあんなにして遊んでねえ」と庭を見た目を私の顏へ、ちらと宿つた一雫、見られじとやうに膝に落して、林檎を剝く手の急に忙しい。
　其俯いた顏のほんのり紅く、ふつくりとした前髮から生へ揃つた襟足の美しさ、肉豐かな肩から胸へお召の小袖しつとりと。
　四五日前に來たばかりのお千鶴さんが、いつにない重ねて來たと云ふ次第を、私は大抵推察して居る。
「叔父樣や叔母樣が何か被仰らなかつて？」
「え」と頷いて顏を上げたが、忽ちパッと兩頰を染めて、間が惡さうににつこりとする。
　なんて可憐な、此人のこんな樣子を、私は今迄見た事がない。嬉しいの乎。耻かしいの乎。
　曾ては森とした吉祥寺の大本堂、幾百人の目に圍まれ乍ら色も動かさず、白無垢の身を端然と、亡姉不二子の位牌の前に、靜に燒香禮拜した、顏の氣高さ態度の立派さ。アッとばかりに滿座の人を感心させた――雄々しい人が――まあ……と思ふと遂調戲つても見度なるので、
「お氣に召しまして？」と顏をのぞけば、逃げる樣に俯いて、
「あなたによく御相談して見たら宜からうつて」と今度は判然口を利く。
「だからあなたは何と思ふの？」
「私はねえ」聲音も靜に平常の調子で、「よく考へて見たけれど、ちつとも不足はないと思ふの」
「さう？」さうでせう、だれだつて之で不足のある筈がない。抑も全くの天緣！。と兩方の御當人を知つて

る丈に私の感は一層深い。外松子爵の令弟恒雄。赤門出の俊才で齢は三十、外交官だ。私の歸る四ケ月前から上海の領事館に來て居られたので、時々出逢つたこともある。

貴族社會には往々見掛ける眉目秀麗の公達でスタイルのハイカラさ、銀行仲間で幅を利かした小野さんさへも此君の前では顏色なかつた。それで些とも嫌味がなくつて極物靜かな如才のない應對振、あんな結構な人材を領事館あたりで働らかせるため、外務省も氣が利かないなあ、と他人疝氣を頭痛鉢卷の連中も多かつた。



別れてからは餘り消息を聞かなかつた其人が、今は某大使館附の書記官と云ふ格で、二ケ月の後赴任する就ては是非お千鶴さんを貰ひたい、貰つてから連れて行きたい。と云ふ強ての懇望。外松家と云へば同族間でも信用のある舊大名で

御内福との噂も高い。當主は早く宮内省に奉職し豫ねて貴族院の少壯議員で可成名も賣れて居る。姉妹もそれぞれ一家を成して只殘るのは恒雄ばかり。

從て御同族の姫君達を片端から撰り分けたなら、窈窕花の如き美人もあらう、雪中簾を掲ぐる如き才女もあらうを。殊更にお千鶴さんを、と拜む樣に云ひ込んで來る。あゝお不二さんに聞かせてやりたい、聞いたらどんなに悦ぶだらう、もう……もう少しの間生かして置きたかつた。と私はつくづく殘念で堪らない。

「ねえ、此談なんかはあなたの爲めにも充分仕合せだらうと思つてね、先方の人物は確だし、それにあなただつて折角習つた語學やピヤノも役に立つと云ふものでせう。尤も外交官だつて貧乏ぢやあ仕方がないけれども、外松さんでは其心配もなしと、まづ私なら二ッ返事で押し掛けて行く處ね、ほゝゝゝ」

「まあ」と奇麗な齒を見せて「私なんかどうせ何にも出來ないけれど、夫で好いと云ふのなら嫁きますわ。だけれどいつかの病院の事、どうしても氣になつてねえ……」

病院の事！　解めたり。お千鶴さん、健氣な人よ。

想ひ起す去年の十一月三日！　世は小春日の空も長閑に、紅葉よ菊と賑はう佳節を、哀れ心なく病の床に起臥するお不二さんを見舞にと、午後病院を訪づれる。と院内も流石にさゞめいて、日本建の明るい二間の障子を拂つて、白い臥床が雪のやう。

仰向に寢た病人は早くも見付けて、

「あら、矢張來て下すつてね、今お千鶴さんとさう云つて居た處なのよ」と、飛び立つ樣な喜びかた。にこにこと子供のやうな笑顔を見ると、我にもあらず引寄せられて、コートを手早く片寄せ乍ら、

「續いて快いの？」と身近く坐る。

「え、ありがたう、此節は大變氣分が好いのよ、この手なんかも餘程腫が退いたでせう」見せた序に膝の上の風呂敷包をまさぐつて、

「あ、又何か持つて來たのね、シュークリームでせう？」

「まあ驚いた、チャンと當つたわ、これでも今燒立よ、今朝つから大忙しで臺所中粉だらけにして來たのよ。でも少しゝかないでせう！　俊馬がね、お不二さんのお土產なら己が火加減を見てやるなんて、蓋を開けちやあ片端から食べてしまふんですもの、漸く是丈取止めたのよ、あなた好けりやあ食べて御覽なさいな、私もお相伴、ほゝ、久し振りて茶話會、ね、お千鶴さんは？」

「今花活の水を取りに行つたやうよ、乳母や、紅茶でも入れてお上げな」

　お不二さんに乳を呑ませたお菊乳母は、今度の病氣のそも〳〵から附添つて骨身を惜しまず、病勢急な或時は、少しの暇を看護婦に賴んで、我と我身をお身代に、と一心込めた願掛のお百度迄もふんだほど。

「まあそれでも、よく之までにお成り遊ばした、一時はほんにお難かしいかと思はれまして……」

「眞個くですよ、まだ是からつて云ふ處だのに、死んだりしちやあ大變だわね」

　とは云ふものゝそれは何とも測られぬ醫者の目からは、どうして〳〵油斷は出來ぬ。と呉々云ひ聞かされてはあれど、氣を落させじとて乳母へは內證。お姑樣さへ露知り給はず。只よく〳〵に心配するのが、叔父樣夫婦に私達、一郎さんを除いてはお千鶴さん只一人生ある中に切めても、と身をつめての病院通ひ。

　さうと知りつゝ此頃の元氣よさ、是がまあ死ぬ病人かと不思議に思ふ程なれば、況して目前の快に悅び勇む主從二人が、床上の日の樂しさを、あれやこれやと語り合ふ、夢のやうな望を聞いて、素知らぬ風に調子を合はせる、お千鶴さんこそ、あゝ何とまあつらからう。

　と見る向ふに穩な笑顏を向けて、すらりと立つた――文金の高島田に銀簪一ッ――水差を持つた袖の下から腰巾着のお桂ちやんがチョコ〳〵走り。

「母樣、今ね、父樣と由紀叔母樣とが、門の處へ馳け出していらつしてよ」

「まあ馳け出して？　どうしたんでせう」云ふ間もな

く賑やかな笑聲、向の廊下に足音亂れて、スチッキ片手にピッコひき〳〵、一郎さん。
「ヤア、いらつしやい。之は大入！　大繁昌だね。僕あもう由紀ちやんに追掛られて酷い目に逢つたよ」
「うそばつかり」と障子の外から紫矢絣の長い袂が坐りもあへず。
「だつて今好文堂の前を通つたらね、いつもの小僧が先日御注文の、動物葉書が參りましたつて云ふから、這入つて見たら、其間に兄樣つてばドン〳〵逃げていらつしやるんですもの、喫驚してしまつたわ」と息をしい〳〵。
「些とも喫驚するとはないぢやありませんか、こんな賑やかな處が一人で歩けないの？」大人氣もなく調戯ひ出すと、
「でも私、お金を持つて居ないんですもの」と直正直に、聊か悄げる。
「夫ぢやあ殆で强請だわね」お不二さんが笑ひ掛けると勢づいて、
「だつて、どうせ姉樣に上げるんですもの、豚はね、お目出度からお床上の時に出すのよ、而してお祝の時は私とお千鶴さんとで好いとをするのよ、ねえ、此間の晩決めたんだわね」
「さうねえ」とお千鶴さんは落付拂つて、「葉書の豚なんか詰らないから、由紀ちやん自身で出掛た方が御肥つてゝ悦ぶだらうつて、父樣も被仰つたから……」
「こいつあ好い、ヒヤ〳〵」と一郎さんは持ち前の大きな聲で囃して笑ふ。みんなも吹き出す。
「ずゐぶんだわね」と云ひながら御當人も平生の無邪氣にコロ〳〵笑ふ。
「そんなに笑ふなら、もうヴァイオリンなんか彈かないから好いわ、シュークリームを食べようかしら」
「オイ〳〵そんなものを食べては、尙肥つて大變だぜ」
「まあ、皆樣にいぢめられて御可哀相に」と是も笑つたお菊乳母は、紅茶の皿を配りながら、
「本當にまあお賑かな方でムいますねえ、いつでも由紀樣がお歸りになつた後は、もう森としましてね、事

淋しいんで厶いますよ、何卒お近い内お床上のお祝には、ぜひ、一番駈にいらしつて下さいましよ」

其上ヴァイオリンなんか彈かれちやあ鼓膜が破れてしまふからね、院長さんに頼んでみんなの分も掛更を拵へて置かうぢやないか」

「さうですね」お不二さんも、笑つた目元の涙を拭て

「其時はまあどんなに賑やかでせう、矢張園遊會にした方が好いわねえ、私もこんなに快くならうとは思はなかつたもんだから……いつかなんぞ既う到底助からないと思つてね、私が死んでも子供達を繼母の手にかけるのは可哀相だから、お千鶴さんに來て下さいつて云はうと思つて、夫はつく〴〵考へたのよ」

「下らないことを考へたものだなあ」と一郎さんは、すと立つて緣側へ出る。私もハッと、見返る床に白菊七輪、枝振見事に根〆を揃へて、浮出たやうな氣高い姿をじつと眺めて……、

お千鶴さんは此時確と……覺悟を決めた。

三

「兄様さへ御承知なら私はお桂ちやんの母様になりたいんですけれど……」と胸の底迄割つた言葉に私は泣いた。夫でこそお不二さんも安心しよう、瞑れよう。

と一郎さんを說いて見たが頑として應じない。

「母も折々そんなことを云ひますがね、馬鹿な事だつて止めてるんです。夫あお不二も悅ぶだらう、子供の爲にも家の爲にも都合が好いにやあ違ないです。併、濟見の兩親の身になれば、廿三といふ長の年月、雨にも風にも心を痛めて、あれ程に育て上げた名花一輪を、むざ〳〵と古い鉢にも移し植ゑ度ないでせう。又、僕自身にしてからが、今相應しい望手があると云ふのを妨げて、光明輝くお千鶴さんの新生涯を埋沒するに忍びない。其代り桂子が一人前になる迄は、僕あ誓つて妻帶しません。達也は男の子だ、成長くなれば又夫丈の考もつく、ナーニ男の手一ッだつて立派に育てゝお目に懸ます、位牌のお不二が守つて居るんだ。生き

てる中は散々苦勞をさせたもんだが、コラ僕の心中立を見て下さい』

測らざりき。內ポッケットの奥深く、世に時めきし丸髷姿の、永久に笑を含んで隱れたりとは。

* * * * * *

其結果は、今日こゝに現はれて。橫濱埠頭に降る帽子の雨。ハンケチの雪。兎もすれば濕り勝なる心さへ浮立つばかりの歡呼の聲、萬歲聲裡に悠然と搖ぎ出でたる巨船の甲板に、群を拔いたる恒雄と千鶴子と。

しつくりとしたフロクコート、鼻下の髭は短かく挾んで、どこやらに稚な氣の殘る面差。純白の洋裝に顏覆をかけて神々しい迄美しい夫人と並んで……。

『なん共はや、御立派な御夫婦樣ぢや』と去る舊臣だと云ふ老人が、そつと淚をふいたのを見た。

是でまあ、先々と歸り仕度の停車場、待合室に腰を下して手廻の物を始末する。

『鈴江さん』と小さく呼ばれて振り向く戶口に、あでやかな裾模樣、薄紫の絽を短かめに、白繻珍をしやんと結んだ由紀ちやんの目は淚が一ぱい。

『どうしたの？』と云ふ間に近よる、腰から裾へ、溢るゝ計り亂れて咲いた萩の花の陰にかくれて、朱鷺色紋絽のお振袖着た可愛い姿が、しく／＼泣いて……。

『まあお桂ちやん！』今朝も今朝とて、

『お見送にはやつて上げるが、平生の樣に千鶴叔母樣に取付いてはなりませぬ。滿座の中で見苦しい、泣顏などをしまいぞ』と嚙んで含めたる祖母樣の被仰付を子供心によく聞分けて、汽車の中から由紀ちやんの手にからまつた切り。

『途中から度々端葉書を出して上げますよ』

『お桂ちやんも大きくなつたら連れに來ませう』と、新らしい叔父樣夫婦に、忙しい中を慰められて、撫でられて、夫でも音無しく只頷いた切り。

母樣に別れてからは一にも二にも、天下に一人と馴れ懷しんだ千鶴叔母樣も、今日限り。姿も見えず、聲も聞えぬ遠い處へ行つてしまつて、取り殘された幼ない心は。さぞ、と思ふと私は堪らず抱き締めました。

『今日はこれから叔母様の處へ行つてね、又春ちやんや愛ちやんと遊びませうよ、さあ〳〵』と慰藉し乍も不覺の涙がホロリとばかり。

夫の俊馬も目をしばたゝく。

『泣くな〳〵、お父さんが居るぢやないか、ソーラもう汽車が出るんだ』と首に纏る子を抱き上げて、プラツトホームをノシ〳〵と。

一郎さんの大きい眼にも確に涙が光つて居ました。



手軽に出來る 正月向の西洋料理

櫻井ちか子

◎キャベヂ卷(玉菜)

牛肉一斤(大切のまゝ)の中へ水三合を入れ、之を文火にかけ、二三時間位煮て肉を取り出し、更に之を極く細かに刻みて鍋に入れ、其中へ煮汁大匙三杯、バタ大匙一杯、及び鹽と胡椒を少量加へて十分間位煮て置き、(殘りの煮汁はプラオンソース掛汁に用ふ)次に玉菜の葉を一枚づゝはがし、一寸湯煮て、笊に入れて水を切り、それにて前記の肉を包み、竹の皮にて一寸縛りて蒸籠又は御飯蒸の中に入れ、倘ほ湯煮たる馬鈴薯をも一緒に入れて三四十分間蒸し、後キャベヂ一包づつ皿に入れ、其側にジャガ芋を三四個位添へてプラオンソースをかけます。

(注意)プラオンソースは前號に述べた製法で作ります。キャベヂ卷の大さは適宜ですが、凡そ一斤を六人前位に分ければいゝ加減です。卷く時は成るべく葉を破らぬ樣に注意して固く卷いて細き竹の皮或は糸で縛りおき、蒸し上りたる後皿に取りて一寸其の縛り目を切るのです。生の肉を細かに刻みたゝきて前記と同じくキャベヂの葉に包みて一時間蒸し、赤茄子或は其他のソースをかけても出來ます。

◎柚子入クリーム

コンスターチ　大匙一杯　砂糖　一合入茶碗一杯
沸騰湯　一杯　柚子汁　大匙二杯半
玉子　二個

コンスターチト砂糖をよく混化し、水二匙位を入れ、溶けたる後更に沸騰湯を入れ、火にかけて能く攪き混せながら二三分間煮て火より下し、玉子の黄味を混せ込み、能く混化した後柚子の汁二匙を加へ、之をガラスの小皿或は杯に八分目位入れてさまし置き、次に白味の中へ砂糖小匙二杯を加へ、泡立器を以て能く泡立て、後柚子の汁大匙半杯を加へ、又一寸攪きませ、之を前記の黄味の上にのせて出すのです。其味はさつぱりして居て正月の菓子などには極く適當です。又白味を一匙位別の皿に取り、食用紅を一寸入れて色を付け、其赤き泡を白味の上にのせれば倘更美しくなります。黄味は拵つたまゝ數時間置いても味は變りませぬけれども、白味は長くは置かれませんから、食する前に泡

を立てゝのせます。

◎黄金羹

柚子汁　五勺　蜜柑汁　五勺　水　一合
砂糖　一杯(一合入)　寒天　一本

前記の材料を一緒に鍋に入れて煮立てると泡が立ちますから、其泡を匙にて掬ひとり、寒天の皆溶けた頃に火より下して布片にてこし、之を重箱或は鉢の中に入れて置いて、固まりたる時ブリキの花形にて切り抜くか、又は適宜の形に切り、口取或は菓子などに用ゐます。

◎ビフテッキのパイ

軟き牛肉を長さ二吋巾一吋位に薄く切り、小片の脂肉を混せ、之をパイ皿の中へ並べ、間々に胡椒と塩をふりかけ、パイの皮を以て皿の縁を作り、其皮の落ちざる様に見場よく肉を盛り上げ、皿半分位に水を入れ、肉の上部を水にて浸し、パイの皮を以て蓋をなし、少しく拇指を以て角々を壓し付け、皿の形に其皮を切り去り、木の葉或は適宜の形を以て其上部を飾り、玉子の黄味を其皮の上に塗りつけ、其皮の上に穴をあけ、高熱のストーブの中で一時間半位焼くのです。

◎小蕪の酢漬

小蕪の皮をむき、横縦に細かに庖丁の目を入れ、之を笊に入れて塩をふりかけ、一時間を経て後之を酢一合の中に白砂糖を大匙二杯入れたる中に浸け置き、赤唐がらしの皮を細かに刻みて蕪の切り目の中にはさみて器の中に入れて出せば、正月の漬物には一寸美麗です。かける酢は一度沸騰させて用ゐます。

◎ボイルド、フヰッシュ(うで魚)

大きな魚を丸なりか或は大きく切りて皮のまゝ布片に包みて鍋の中に入れ、其中へ魚の上二寸位迄沸騰せる湯を入れ、更に塩を少しと細かに刻みたる葱とを加へ、魚の煮えたる時之を取り出し、別に玉子の黄味二つを能く攪き混せ、其中にレモン(柚子にてもよし)一個の汁と魚のうで汁一合とを加へてよく攪き混せ、之を鍋の中に入れ、更に攪き交せながら煮立てゝ先の魚にかけて出します。此魚は鯛が最も善く、之れに次ぐものはすゞきです。

むづかしい姑を持って可愛い子を持って心を練りつゝ行く私の身の上

若き妻

裏の櫻の木に百舌鳥がけたゝましく啼き立てるのでふと眼は覺めた。

あゝ又おくれた、もう五時だ、困つたなと思つて居ると臺所でお國さんと、お母さんとの話聲がきこえる子持だからと許されては居るものゝ、あとから起きて行くのは辛い。

三時に呑まして夫れきり手枕をして寢た清はまだすやすやと寢て居る、其寢た樣子の可愛らしさ、いくら眺めても〳〵飽かず、何事も忘れて紅木綿の枕にしかへさして中腰になつたまゝ我を忘れて眺めて居ると、旦那樣が眼をお覺しになる。

もう起きるのか、もつと寢て居よとお云ひなさる。

誰が起きたい事があるものですか、旦那樣は何も御存じなしだからさうお仰るけれ共、私の身になつて御覽なさい、なか〳〵然うは行きません。

でも私は夜勘定して見ると、大抵四時間位しか寢ないのですもの、少しは察して呉れても好さゝうなものあゝ、おくれゝばおくれる程出て行くのが辛くなる、清子さへ無ければもつと〳〵早く起きて、暗いうちから皆をたゝき起してあげるものを。

まあ可愛さうに清子が無ければなどゝ、そんな事夢にも思つてなるものか、私の命よりも大切な子を。

あの生き〳〵とした鈴の樣な眼、柔いふくれた頰、色は黑いが私に取つては何とも云はれない程可愛く、又好い子に見える。

◎

まだ生れてからやつと七十日程にしかならぬが、他の子よりも餘程大きく、太つて居る樣だ。

親の慾目とはよく云つたもの、出來るだけ冷靜に、公平に考へても淸子は他の子よりも十倍も、二十倍も好い子である、好い子にはちがひないが、何でも好いところは旦那樣に似て、惡いところは私に似た樣だと皆が云ふ、夫れがいまく〵しい。

昨夜の內にぬれたおむつを集めて臺所に行くともう御飯が出來て居る、お母さんは庭をはいて居らつしやる、お國さんは髮を結つて居る、皆わざとだまつてすまし込んで居る、意地の惡いこと。

私も其處ですましこんでおむつを洗ひにかゝる、忙しいのに取まぎれてつひ痛い〳〵と思ひながら見もしなかつたが、今朝一寸氣が付いて見ると左の親指につまあかぎれが二つも切れて居る、あゝ生れて初めてあかぎれの痛さを知つた、ひゝは云ふに及ばず手の甲一面に切れて居る、糠味噌をいぢるとしみて痛いこと。

斯う云ふ時里に居たらば誰にでも代つてしてもらへるものを、手が痛いと云つたつて耳にもかけてくれる人は無い。

旦那樣より外に私の身を少しでも思つて下さる人があらうか、でも旦那樣は朝から晩迄家には居らつしやらないのですもの。

◎

お母さんに、昔から鬼千匹と例へられる小姑四人の間にはさまつて居るのですもの、みんなお母さんの味方にばかりなつて、いくら私が可愛がつてもいざとなると私の味方になつてくれる人は一人も無い。

でもまだ有難い事には私の里のお母さんはまだ〳〵意地の惡い姑があつて子持の時でも食物をかれこれと八ケ間敷云はれて、ひもじい思ひもした事があるとつねづね云ひきかされたが、私の幸な事に御飯だけは無理にも澤山食べさせられるので、そんな辛い思ひはした事が無い、淸子が出來てからと云ふものは幾ら食べても〳〵お腹がすいたのですもの、お茶碗に五杯位平氣で食べてしまふ、おまけに夜も十二時に又一度食べる。

九時一寸前に旦那樣は役所にお出でになる、淸子に

乳をやつてやつと寢かし付けて。

さて茶の間に來て見ると七人の家内が食べた、お茶碗に、お汁椀、小皿・箸などがテーブルの下に迄一杯に散ばつて居る、夫れ〲寄せ集めて臺所に運ぶ迄一仕事だ、此間の夕方はなまぐさい皿が一枚お茶わんの中に交つて居たとてわざ〲お母さんの處に見せに行かれた、何でも惡い事は一ッも見のがしてもらへない私が姑になつたら皆の前で嫁の惡口などは忘れても云ふまい、何も知らぬ無邪氣な筈のよし子さん迄、お母さんの惡口を聞いて居ては私を仇の樣に思つて居て、一々お母さんにつげ口をする。

みんな學校に行つたあとはまるで海嘯の引いたあとの樣。

◎

淸子はお母さんが取つて下さるので、其間にと、とりかたづけにかゝる、すこしもぐづ〲しては居られぬ、洗濯に裁縫に用事は山とある夫れを一人ではなかなかまはり切れぬ。

洗つて、掃いて、拭くの三通りではあるが、十時過ぎにはどうしてもなる、やつとあらましかた付いた雜巾がけはなか〲骨が折れる、ぬれ手を拭いて上つて來て淸子に乳をやる。

乳だつても然うだ、私は生れたら初め一二ヶ月は二時間毎に呑まし夫れからは三時間毎に呑まして規則正しい習慣を付けたいものだと思つて居たのに、泣く度に乳をやらぬから泣くのだ、そんな可愛さうな事をしてはならぬと八ヶ間敷云はれるのでつひ不規則になつてしまつた。

泣くのが何も可愛さうな事は無い筈だ、惡い習慣を付ける方が餘程子供の爲めに好くない事では無いだらうか、だけれど、もうしかたがない。

◎

あゝ曾て學生時代に描いた理想とはあれは皆空想なので有らうか、人の妻となつたら、習い得た丈の學識と品性とを以て若し夫に惡いところがあつたら、自然に感化して行く樣にせねばならぬと思つた、家風と雖

も好いところは何處までも保ち、惡いところは何處迄も改良して行かうと思つた、臺所の改良もしたい、子を持つたら斯うも、あゝもと其抱負は實に大したもので有つた夫れが今一つでも行はれて居るだらうか、あゝ耻しい事ながら昔我理想などゝ得意顏に語つた友にどの顏さげて逢はれようか今はもう斯う思つて居る、理想とは意志の弱い人の口にする言葉では無く、又次の時代即ち自分が此家に最上の權利を持つた時初めて行う餘地の出來るものそと。



◎さうだ〳〵自分は少しは教育も受けたもので有る、衛生の事や生理其他の事も少しは知つて居る、でも昔の人はそんな學理的の說明は大嫌いだ、まして私が云ふ事は皆うそだと思つて居らつしやるのだもの、いろ〳〵と生意氣顏して云ふのが

悪い。

◎

うちのお母さんも此頃は遠慮が無くなつたと云へば嬉しい樣ではあるが、誠にすまないが根が他人であるほんとに他人同志と云ふものは、如何しても意志の通じにくいもの、誤解され易いには情けなくなる、何の氣なしに云つた事でも、向では大變惡く取つて怒つて居らつしやる、又私にしても一寸小言を云はれてもほんとにひどく感じる、其くせお國さんでも誰でももつともつとひどく叱られる事がある、私があんなに叱られたらどんなだらう、親子と云ふものは有難いもので叱られたあとから直に矢張りお母さん〳〵と慕つて居る、私は然うは行かない其日一日は氣持が惡い、お母さんでも矢張いくら私があやまつてうはべはいゝ顔をして居らしつても直に雪が解けて無くなつた樣に御機げんがよくなるものでは有るまい。

◎

お臺御飯を食べてかたづけて清ちやんを連れて、よし子さん、光子さん一緒にお湯に行く、何につけても親の欲目で清子が一番お湯の中でも大人しく他の子よりは太つて居る樣だ、裸體になつて兩手が自由になるので大悅びで一生懸命に吸つて居る、私はほんの烏の行水の樣に顔だけ一寸洗つて出て待つて居る、清子が出生てから緩りとお湯に這入つた事もない、けれ共子故と思へば別段腹も立たない、夫れ處かお母さんがもつとゆつくり這入つて居よ、と仰有つても、清子に寒い目がさしたくない、永い事お湯に入れて毒になつてはいけないと思ふ處から、自分のからだの事など、どうでもいゝと思ひ込んで居るので、自分から早く出たい。

ほんとに人間と云ふものは得手勝手なもの、併し私は清子が出生てから確に心が和しくなつた、其證據には今迄側に他の子供が寢してあつても抱いてやらうとも思はなかつた、泣いて居てもたらしてやる氣にもなれなかつたのが此頃はつひ抱いてやつたり、たらしてやつたりする樣になつた。

◎

人の妻となつて娘時代のふわ〳〵とした氣が去り、世帶じみた私は今又人の親となつて前よりは餘程氣が和しくなつた、夫れと同時に今迄氣が付かなかつた事迄氣がつく樣になつた。

然うして見ると之れから先姑となり、祖母となる二つの階級を越したら如何云ふ風に變化して行くであらうか、少しづゝ圓滿の域に近いて行くものとすれば、人世の半分にも達しない自分は、四角や、三角やまだまだ角だらけの人間なのであらう、然う考へて見ると何事につけても耻かしくなつて來る。

之れから推して見ても凡ての境遇を經て來た老人は眞に敬すべきでは有るまいか、などゝあてもなく考へて居る間に、淸子が出て來る、直ぐと湯あげにくるんで受取る、まるでつき立てのお餅の樣に柔い、風引かしてはならないと綿入を着せた上にも、又蒲團で卷いてやる、旦那樣がお笑ひなさる、生れる前迄は無暗に厚着はさせないと云つて居たくせに、生れて見れば矢張りどつさりと着せ込むぢやあないかつて、夫りや然うですけれども、一言も云ひ譯が無いけれ共、笑はれたつてかまはない、淸子が大切ですもの。

◎

先達何かの雜誌で讀んだ、子供を寢しなにお湯に入れて溫く寢ましたと安心してはいけない、翌朝起きた時によく氣を付けないと風を引くと、之れはお湯に這入つて緩んだ皮膚が、寢床の溫さで朝まで其まゝになつて居るから、丁度朝風呂に這入つたも同じ事なのだつて、何でも讀んだあとから直に忘れてしまふ私だけれども、子供に關係のある記事は不思議にも一度讀んだらいつ迄も覺えて居る。

◎

お晝からになると何となく心嬉しい、何故であるかと云ふと、四時になれば旦那樣が歸つて來らつしやるからである、家中でのたつた一人の私の同情者ですもの、淸子と玄關まで朝送つて出る時の心細さに引きかへて、晝からは何となくいそ〳〵と待ち遠い、早く歸

つて來らつしやればいゝねえと、何度淸子の頰に頰づりしてさゝやくか知れない。

◎

お留守にあつた悲しい事、口惜しい事一々聞いてもらい度い、少しでも同情してもらい度いとは毎時でも思ふけれども、私は一度も云つた事は無い、朝から夕方まで働いて居らつしやるのに、そんな面白くもない事どうして聞かされるものですか、夫れだから旦那樣はいつも私は幸福だと思つて居らつしやる、朝いつ迄もねて居よとお云ひなさるのを以て見てもわかる。

◎

夕方の支度をする間、みんなにお守をしてもらふ、實は淸子は旦那樣とお母さんの外誰にも渡し度くない自分で守がしたいのだけれども、然うは行かぬ、他の人は少し泣くと、直にひどく搖つていけない、なる程搖ると泣くのは止むけれども、之れは身體を搖る爲めに其動搖が腦に傳つて其爲めに腦がぼんやりしてしまつて、泣かなくなるのであるさうな、こんな事を毎日毎日繰り返して居たら仕舞には馬鹿になつてしまふ。

◎

夕飯を食べる間、お國さんに一寸淸子を抱いてもらふ、忙しいと此頃は緩り御飯も食べた事が無い、其内に泣き出す、眠くなつて來たので蒲團を敷いてやる、ランプを取りに行く、七時頃まで、家中のものがゆるゆると話するものも無い忙しいこと。

やつと淸子を寢床に入れて乳を呑ませる其内に、お腹のふくれたのと、晝間の疲れとで淸子より私の方が先きに眠くなつていつの間にか寢てしまふ、何時間寢たものかふと眼を覺して淸子の蒲團を押し付けて、ねぼけ顏して出て行く間の惡さ、茶の間ではみんなが勉强したり、よなべしたりして居る、自分ながらあいそがつきてほんとに耻しい、ふと氣が付くと晝間干して置いたおむつの取入れを忘れて居る、あはてゝ取りに行くとあゝ情けないもう夜露でしつとりと濕つて居て今夜の間に合はない。



科學上より見たる食物の喰合せ

海軍薬剤少監　小林増作

人の飲み食ひする物には、夫々特殊の成分があるので、味ひにも皆變化があるけれども、一般飲食用に供せられて居る品は、人類の營養上必要の成分を含んで居るから、普通用ゐられて居る飲食物は、味ひの良否に關らず、生活に要用なものと見做さねばならぬ、只人には好き嫌ひがあつて、如何な飲食物でも用ふると云ふ人は極めて尠い、大概は甘いものを好くとか、酒つぱりしたものを好くとか、香ばしいものを好くとか、油つこいものは嫌ひであるとか、葱や艾のやうな特殊の匂ひを厭がるとか、十人寄れば十人皆嗜好が違ふけれども、夫も料理の方法に依つては、心よく飲食し得る事も出來る、そこは料理をする人の腕前であるが、昔しから云ひ傳への喰合せと云ふ事は、學理上からは根も葉も無いやうな、中には判じものゝやうなのやら、洒落のやうなのやらがあつて、随分可笑しいと思ふのもあるが、體質に依つては、穴勝に此云ひ傳への喰合せと云ふ事を全然非認する事も出來ぬ、體質と營養とは容易ならぬ關係を持つて居るもので、血氣盛りの良い體質のものは、少しばかりの飲食物の不調も、忽ち消化されて營養を助けるけれども、體質の不良のものには直きに影響して病氣の種を作る、此喰合せと云ふ事は、能く考へて見ると多くは好き嫌ひに關係があるやうで、體質の優等で無い人などが、嫌ひだけれども義理に飲食せねばならないと云ふやうな場合に、氣持惡く飲食した時と、腸胃に故障のある時に、思はず飲食して傷つたやうな際とに、アヽあれは喰合せであつた、道理こそと、昔しの人の云つた事が思ひ合されて

益々嫌な心地になるのでも想像される、又神經が手傳つて、一度何かの障りから傷つた飲食物は、いつもよく腹が痛んだり下痢を起したりする事がある、昔しの人は體質も調理法も問はない、只之は喰合せと極めて、恐ろしく禁忌にしたものであるが、人の惡いと云ふものは強ひて飲食を試むるのも恐の至りであるから成るべく今日では未だ禁忌の法を守つて置くのも、老人などへ對しては殊に禮であらうと考へるが、さればとて根據も無いに之は喰合せで御座る、こんな食物は向後お止めなさいと、無暗に凡ての料理の取り合せに忠告するのは考へものである、喰合せといふ品を少しばかり擧げて見やうなら、

△鰻に生梅又は梅干——鰻には百分中蛋白質の約十八分と脂肪の約十二分を含んで、多く蒲燒として食料に用ゐられるが、滋養の効は決して尠くない、一種の毒素を含むで居ると云ふ說もあるが、あまり有力の學說でも無いから、安心して食用に供するが良いと思ふ。之と喰合せは生梅又は梅干であると云ふ事は、日本全國各地で人口に膾炙されて居る、生梅は多量の植物酸を含んで居るから、鰻と共に喰はずとも、あまり食用として良い品では無い、梅干も同樣多量の酸を有つて居るから、口當りの良いまゝに多量の鰻を食して其後で、生梅や梅干を食したら、腸胃を害ふのは保險付である。

△鯉に猪又は雉——何れも蛋白質に富んで、脂肪も鳥獸の肉は著しく多量にある、皆好食料であるが、鯉の料理に猪や雉の料理が出遇ふ事は、日本人の食事としては寧ろ稀れな方であるから、深く研究する價値も無いが、何故に喰合せであるか合點が行かぬ。

△鮫に飯又は榮螺——飯は蛋白質にも脂肪にも富んで居るが、鮫や榮螺はあまり滋養の成分に富んで居らぬ、殊に榮螺の如きは難消化の品であるから、鮫と榮螺とを多量に食したら、消化に困難であらうが、是とてもあまり一時に食膳に上る塲合が無いから、只食物禁忌として覺えて置くのも良からう。

△鮭に海豚——餘程のいか者喰いで無ければ、海豚な

どを好むものはあるまい、鮭は蛋白質にも脂肪にも富んで、滋養の効も尠くないが、海豚は經驗が無いから、此一項は沈默して置く。

△鯰に牛——猪、鹿等、何れも蛋白質にも脂肪にも富んで滋養の効は決して尠くない是は昔し日本全國を鯰に見立て、、地震があると夫を鯰の身邊の動揺に比喩へた時代もあるから、地鎮の主の鯰たる其一族のものと四足とを共に食しては、鯰の神聖を汚すといふ洒落かも知れぬ。



△辛螺に蒟蒻——辛螺はなかなか滋養分を含んで居るけれど、乾物となつては鑛物質が多量にあるから、至つて消化し難い又蒟蒻は殆んと粘液質で消化の惡いものであるから、是などは禁忌にして置く方が賛成である。

△赤貝に土筆――貝類は概して消化の點に疑ひのあるのが多いから、味ひが良いとて多食するのは宜しくない、又土筆は別に之れといふ毒物を含んで居らぬが、成分のあまり優等なものでないから、何れも多食は良くないであらう。

△蛸に夕顔又は梅――どれも〳〵食物としての價値は下の下である、古老ならずとも禁忌にして置くが安心である。其くせ蛸は百分中蛋白質の十六分、脂肪の十一分も含んで居るから、味は良いが、難消化な事は著しい。

△蟹に蕗又は氷――蟹は滋養分に富んで居るが、蕗は滋養分として僅かしか含んで居らぬ、併し乍ら何れも之れと云ふ毒成分はないから、少々位な事では喰合せにならぬ、但し氷は單味でさへ絕對的に禁じたいと思ふ。

△河豚に壽司――昔しから河豚は喰いたし命は惜しゝといふ俚諺がある、之には毒素河豚酸といふを含んで居るのがあるから、成る可くは食用を禁じたい、けれども馬關の河豚など〻いふ名物さへあるから、なか〳〵此食用を禁ずるわけには行くまいが、壽司を禁忌にしたのはどう云ふわけか、壽司の酢の成分は醋酸であるが、夫と河豚とどう云ふ關係があるのか、僕不學にして其理由を知らぬ。

△雉に麵類又は茸類――洋食では隨分雉を使ふし、又マカロニも共に用ゐられるが、洋食の方では嘗て禁忌の事を聞かぬ、恐らく雉のジャ鍋の後、蕎麥を己が身長丈け喰つた人の制定でがなあらう？　茸類とても松茸などは隨分洋食の取り合せに用ゐられて居る、此禁忌は頗る怪しい。

△家鴨に山の芋――何れも滋養分に富んで、食用に差支ない、どう考へても喰合せとは思へないから、之は安心して食するが良い。

△鴨に胡桃――鴨は蛋白質の多量を含んで居る好食料である、又胡桃は脂肪に富んで蛋白質もなか〳〵多い、うま煮の取り合せに持つて來いで、且又滋養分はしつかりある、但し鴨の生身に生胡桃では、喰合

せになるかどうか、受け合はれぬ。

△鶉に茸又は猪——鶉も洋食に用ゐられてなか〳〵上品な品である、之と茸類と付け合したり、猪と取り合したりする事は先づ極く稀れな場合であらう、此禁忌も其理由を知るに苦しむ。

△雀に李——雀の如き下鳥は味を知らぬ方が多からう、況んや李などを共に召し上るに於てをや、李の未熟なのは何とでも禁忌であるから、是は禁忌として保存して置くのも妙であらうか。



△兎に芥子又は薑——もし之を事實とすれば、兎のロースの一皿を食したら、他の洋食にも芥子をつけられぬ事に成る、けれども遂に傷つた例も聞かないから之は全く虚説である事を御承知願ひたい、薑とはどうであらうか、あまり大した差は無いやうに思ふ。

△豚に薑——豚は近來盛んに用ゐらるゝ、牛肉にも劣らぬ滋養分を持つて居る食料である。薑の中にはギンゲロールといふ成分があるけれど、健胃の効がある計りで、豚肉と何の作用もない、恐らく多食を戒めたものであらうか。

△田螺に蕎麥——田螺こそ難消化物で、且又あまり滋養物を含んで居らぬ、蕎麥は又時に多食すると下痢を催す事がある、此二點で禁忌の價値がありさうである。

△天ぷらに西瓜——傳染病流行の際などは殊に危險であるから、禁忌に賛成である、夫もオレーフ油で揚げた新鮮の材料の天ぷら二三片に、能く熟した西瓜の汁少し位を共に食したとて、直ぐ傷る事もないが、君子は危きに近寄らずといふ事があるから、之は見合に願ひたい。

△棗に魚肉——單に魚肉と云つては餘り範圍が廣過ぎるが、兎に角何れも異成分無く、食用差支無いと思ふ、但し未熟の棗の飽食は單味でも禁物たる事勿論である。

△甜瓜に油揚——何れも難消化の品であるから禁忌として置く方がよからう。

△李に砂糖——李のジャムを食して却つて傷つた話を聞かないから、恐らく是は未熟の李の事であらう、喰合せにされた砂糖こそ迷惑至極である。

△牛肉に菠薐草——屢〻ジャ鍋にして食して見たが、遂に喰合の原因を發見した事がない、もし禁忌であるならば、此研究は他日に讓るが、元來牛肉に菠薐草を取り合す場合は、常規では殆んど無いと云つても宜い位である。

△當藥に馬鈴薯——當藥は民間藥として健胃の目的に用ゐられて居る極めて苦い藥である、夫と馬鈴薯とは喰ひ合せになるとの事であるが、之は當藥でも飲まうといふやうな場合は、大概胃に故障のある時であるから、其時に馬鈴薯のやうな多量の澱粉質を含んで居るものを食したら、健胃の目的は達せられない事になる、其點で禁忌にしたものであらう。



ざつとこんな種類であるが、此外平常あまり用ゐられない品に就ての禁忌は隨分澤山あるが、夫は凡て略して、茲にはほんの例を示すに過ぎないが、是でも大略は了解せらるゝ事と考へる、禍は口よりと云ふ諺がある通り、不用意な言語と、不注意な飲食物とは、身體に禍を招く源因であるから、常に愼密の注意を怠らない事を希望する、凡て飲食物は陳久なものは避けて、常に新鮮なものを用ゐ、よく〳〵原料を選擇することが肝要である、肉類であれば不快の臭氣なく、彈力性を失はずして、指先で壓搾するときは忽ち其指の跡の消失するのが良い、鳥ならば、眼球活きて居るやうに水氣なく、嘴の中に粘液が無く、羽毛の容易に脫落しないが新鮮の徵で、魚ならば、眼球水晶のやうな透明で、腮の肉濃紅色を帶び、鱗片よく固着し、肉は彈力性を有するもので、此條件を具へて居るものは、原料として上等である、野菜は申さずとも御案內であらうが、我が國では肥料の關係から、どうしても野菜には大腸菌の附着を免れないさうであるゆゑ、何でも能く煮て食用に供するのが上策である、喰合せと云ふ事は、之を善意に解釋して、腐敗の疑あるもの、未熟の果物陳敗の清涼飲料、異成分を含むもの、難消化のもの、是等を皆喰合せと心得て、常に避けて居れば、事々しく喰合せなどゝ說き立てる必要もないが、各地に云ひ傳への古老の言も、能々之を玩味する時は、思ひ半ばに過ぎるものがある、複說いやうだが喰合せには、單味でもある場合があり。云ひ傳への品でも料理の方法に依つて差支ないのがあり、全く誤つて居るのがある事を忘れてはならぬ。



日あしの長短を割り出したる 四季の時間

萩花女

裏のお老爺さんが、或日こんな表を一枚持つて來て下すつた。

『まあ、何でございますか？』

『ハヽヽ。これは一年中の時間の伸縮表ですぢや。ソラ、上の冬至と下の冬至とをこう、輪にしてつぎ合せると一年になります。それから、右と左の黑い所を又兩方から輪にしてつぎ合せると、これが一年中の夜ですぢや、夜も晝も、九時間づゝ拔いてありますよ、書くのが厄介でしたからなあ。』

お老爺樣が、暦と首つ引きの、眼鏡越の努力によつて出來た製作品。或は寸厘相違ない正確なものとは言へまいが、然しこれで四季毎日の時間の伸縮が、略分明るから面白い。

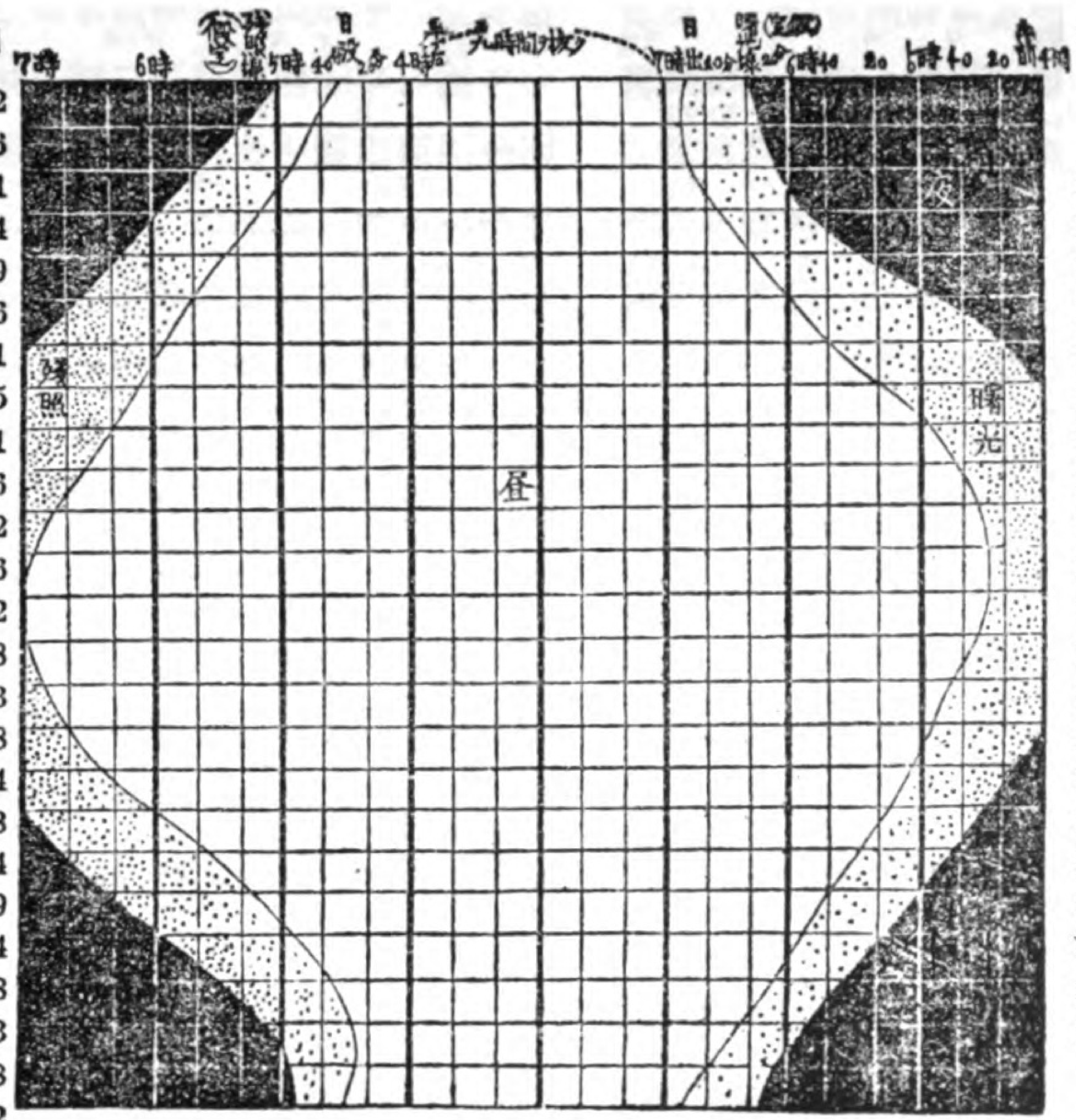
私共は每年々々同じ事をくり返し乍ら。何氣なしに夏が來ると、お日が長くて睡くなりますね。と言ひ、冬が來ると、日が短かくて困りますね。とこぼす。詩人は春がくると終日のたり／＼と云ひ。柿が山家に色付き出すと、釣瓶おとしの秋の日は、とか何とかいつて居るが、此の表を見ると非科學的な頭にも頗る趣味が湧く。

扨凝然と拜見する。

初めが寒い冬至で十二月の廿二日だ。日出がザット六時四十五分位。日沒が四時三十七分位の處、それで一日の明るい時間が僅かに九時間と四十五分しかないそれが一年中の一番短かい日である。其次が小寒で一月の六日は日出は冬至より五分方おくれるが、其のかはり日沒が亦十二三分おくれる、一日の時間が九時間五十一分で、冬至の日より六分明るさが長くなる。其次の大寒から暑い夏至迄、表に見る通り日出線日沒線

時間伸縮表

時候	月	日	日出—日沒 時間	日出—日沒 増減時間	冬至及夏至 増減時間	
冬至	12	22	9時45分	0	0	冬至
小寒	1	06	9 51	06増	06	
大寒	1	21	10 08	17	23	
立春	2	04	10 31	23	46	増
雨水	2	19	11 01	30	116	
啓蟄	3	06	11 34	33	149	
春分	3	21	12 08	34	223	進
清明	4	05	12 42	34	257	
穀雨	4	21	13 16	34	331	加
立夏	5	06	13 46	30	401	
小満	5	22	14 12	26	427	
芒種	6	06	14 28	16	443	
夏至	6	22	14 35	07	450	至
小暑	7	08	14 28	07減	07	
大暑	7	23	14 12	16	3	
立秋	8	08	13 46	26	49	
處暑	8	24	13 15	31	120	減
白露	9	08	12 43	32	152	
秋分	9	24	12 07	34	226	
寒露	10	09	11 34	35	301	進
霜降	10	24	11 02	32	333	
立冬	11	08	10 32	30	403	加
小雪	11	23	10 07	25	428	
大雪	12	08	9 50	17	445	
冬至	12	22	9 45	05	450	冬至



が兩方へ急に廣がつて斜に走るので一日の時間は一日一日と非常に增加する。其れに反して夜は漸次短かくなる。

春分の三月二十一日、溫い風がそよ〳〵と吹き出して山の雪さへ解ける頃である、日出はズット早くなつて五時四十五分前後、日沒が五時五十三分位、一日の時間が十二時間〇八分あつて冬至の頃からとは二時間半も長くなつた、それで淸明の四月五日頃櫻の花の滿開の頃には亦日が長くなつて十二時間四十五分となる詩人ならずとも、春の日の心の悠なのは、氣候や習慣や周圍の事物に原因するのは勿論だが、又日一日に伸びて行く時間に關係するのも爭はれない事實である。

夏至、六月廿二日一年中の一番日の長い時である、日出がズット早く略四時廿五分、日沒はと見ると七時といふ遲さ、一日の太陽を頂く時間が十四時間三十五分で、最短の冬至の日とは實に四時間五十分、ザット五時間近くの差であるのに一驚する。夏至から再び、冬至迄日出線と日沒線とが夥しく斜に近づいて、非常に日が短かくなつてゆく。

秋風が薄の葉末から虫の音を送る頃、九月二十四日秋分となると、日出が五時三十分位で日沒が五時三十五分、其の間が十二時間七分に縮つて、夏至から比べると二時間廿六分の減少、道理で釣瓶落しの感がある筈である。

そこで再び冬至に近いた頃、日出線に近寄つて居た日沒線は俄かに方向を一轉して日出線と並行になり、入日も亦遲れだすと、今度は小寒の處で日出線が方向一轉、日沒線を離れて、斜になる。此處の處で日出線と日沒線とが反對に同じ形を作るから面白い。

それから尙一つ面白いのは、日の出前の曙光と、日沒後の殘照とである。曙光線及び殘照線は日の長短に從つて伸縮する。

冬の朝、六時に起きるとまだ眞暗い、雨戸をくる間に東雲が白む。顏洗つて髮でも結んで居る間に、もう明るくなつて直ぐ日が上ると言つた調子に、日の出前の曙光は極短時間である。

それが夏の朝の日の出前となると、冬と反對、四時に起きるともう明るい。お部屋を掃除したり、庭を掃いたり、好い程朝の用意をして、朝顏の花でも數へて居ると漸つと日が昇るといふ樣である。殘照もそれと同一。

夏は落日後の夕栄の雲が、久しく漂つて却々消えない。夕日が山に陰らつてから打水の涼しい緣端で、家内團居した夕御飯を頂く、お父樣の二合の晩酌に大分元氣が出る頃まで、まだ殘照は垣根に白い夕顏の花に美しい。御飯をすましてからも御端居して思ひ〱の雑談、それから。蚊遣りでもたき出して漸と夜になる。

それが冬になると如何だらう。もう四時には瑞雲寺の鐘がなる。

「アラ、もう入相の鐘だわ。」と思はず言つて、裁縫の手を止めると。

「御飯でございます。」と媼が告げに來る。

「まあ、今日は御手傳もしなかつたわね。御免よ。」と驚いてお臺所へいつて見るまに、日が落ちる。食堂はもう薄暗い。

「早く、燈火をおつけなさいよ、暗くつて、折角の御馳走を鼻へでも持つて往つちあ、大變ですよ。」と母樣が被仰るので一同、大笑ひする。

斯んな事は何處の家にでも、能くある事だが、人は何の氣無しに居る。

斯くの如き譯で、夏は太陽のある時間が長い上へ、曙光と殘照と比較的長く加はるので、殊更長い樣な氣がする。

冬は太陽の時間が短かい上に曙光及び殘照が短かいので、非常に早く日がくれて了ふ。

春と秋とは、同じく夏至と冬至との中間に位しては居るが、春の方は、夏至に向つて居る爲に悠然として日が長くなる氣が永くなる。

秋は寒く且つ日の最も短い冬至に向つて居る爲に、日が漸次短かくなつて、心が落ちついて居られない。それに自然の天地が凋落の淋しさを現して居るので、秋のあはれと、殊に人の子が言ふのであらう。

煩悶だの、犯罪だの、病氣だの、結婚だのは時期が多く氣候によりて定まつて居ると聞いたが、又、此の四季の時間の變化も之れに關係して居るのではあるまいか。

尙、夜の時間の伸縮は凡べて晝の時間の長短の反對であつて、冬至に於て最も長く、夏至に至つて最も短い。故に表に於ても丁度反對の形を作る。

以上は只ホンの表面上の觀察に過ぎないが、尙、曙光及び殘照の長短の原因や、色々深く調べたら、乾度面白いものにならう。

克己心の養成

兎角に無教育な婦人は感情に馳せ易き弊がある。又多くの婦人は神經過敏であるから喜怒哀樂の働らきが男子よりも一層鋭い。彼の毛蟲を見ては忽ち驚き、蛇を見ては忽ち叫ぶがごときは舊式の婦人に多く見る處ろであるが、これは畢竟科學思想を以て頭腦を鍛錬した事のない結果で感情一偏に馳せる婦人の常である。彼の威嚇せば忽ち慄へ上り、擽ぐれば忽ち笑ひ倒るゝが如き、其の調子の如何にも弱々しく觸はらば忽ち破裂すること彼の風船玉の如きは畢竟其の精神に修養のなき故である。元より女子の風姿は柔和な尊べども其の心は堅く且つ剛くありたきものである。殊に近頃の如く野獸に等しき亂暴者が晝夜都門を徘徊して凌辱を婦人に加ふる時に於つては、男子のこれを庇護するは勿論であるが、女子自からも又これに當る丈けの氣がまへ身がまへ、心がまへがなくてはならぬ。體裁上の物識は大概でよいから、謂ゆる感情を制止し神經の過敏を防ぐ丈の修養力と克己力と并び外の害物に觸れて、これを防止するだけの度胸と身構を養成しなくてはならない。これが今日の婦人に最も必要な、又急要な務である。



新春の花くらべ

衣裳拜見記

とよ子

今日は春野樣の歌留多會、暮の中からもう樂しんで待ち構へてた事だから嬉しくつて、御招待狀に午後三時よりとあるのが、もう待ち遠しい今日はまア澤山の御客樣との風評、着物は何を着て行かうか知らと、お簞笥を明けたり、しめたりして母樣から、

何ですれ、大變な騷ぎをするぢやないか、もつと靜かに落ついて居らつしやい。

つて叱られて、悄げて仕舞ふ、だけれど考へて見ると頭はこんな文金に結んでゐるし、ありあまる着物でもなし、どれに仕樣かと氣になつてならないから、恐々母樣の顔を見て、何着ませう着物にしませうかつて伺つて見ると。

今日の御客樣はお歷々の方々も澤山參えるやうだから、此間こしらへたのを着ておいで。

と仰有るので此度は叱られない樣に、靜かに暮に白木屋でこしらへて頂いた、

鶉縮緬の二枚襲、藍鼠の地に蘭平模樣の雲中の若松の裾模樣、包み紙のまゝソツと出して、

帶も此間のにしませうかつて伺ふと、

アヽ〳〵折角こしらへたものだから帶も長襦袢も此間のにおしと仰有るので、我意を得たりと出す、長襦袢は濱縮緬でライトオレンヂ色の地に晝夜の椿の模樣、帶は大內織の鮮クリーム地に破れ氷に水仙母樣から叱られたり笑はれたり、前髮の癖がなほらなかつた、じれたりして、やつとおつくりが出來上つて出かける。

朝からこんなに大騷ぎして、それで私が上つて見れば、まアもう、とつくに始まつてむべ山風を、

ハイ御座んした。

嵐吹く御室の山の、

ありました。

つて大戰爭のまつ最中、一しきりおすみになる迄拜見して居る、組は、三人づゝの源平で三組十八人、後から入らつしやつた方々共にもう二十

何人、女七分に殿方三分の有様、スッカリ來らつしやれば三十幾人とかになるさうだ、ニーズやヴアイオレツトの匂ひがむせかへる樣、皆樣思ひ思ひにおうつくしい事、ボンヤリ見て居たけれど、つッと皆樣のお好みを調べて見度くなつた。

まづ手近からと、殿方は固より眼中にないのだから、誰女にしませうか、と氣をつけて見ると纔室元晴し、私の直ぐ傍にお出で遊ばすは、

△澤田伯爵夫人秋子の方

錆納戸色の濱縮緬の五つ紋の三枚襲、お裾模樣は御趣の雪中の松にちなんだものと見えて、東雲の老松に高砂の曲をおし手であらはした上着、お下着は雪空をきかせた鼠色の地に裾へ吹雪をぼかして同じく、高砂の曲入り、お袖の振をチラ〳〵もれるお長襦袢は、千代田縮緬の地白に若竹の地紋、お帶は霞織の地色は錆茶に檜垣に寒梅の藤原式春がすみことのれに、梅が枝さへ、宿かな、などゝあし手風に現はした歌の切に見えるのが、實に奥床しい。

申迄もなく白木屋好みのしな、私のも同じ御趣のだけれど、人樣の召して居らつしやる方が何か好い樣な氣がしてならない。

オヤ貴嬢は遊ばしませんので仰有るのでフイと我にかへつて見ると、

△園田樣の奥樣

美しい〳〵お色艶の方、尭祖参りましたので、まアお濟みになつたら入れて頂きませうと存じまして。

オヤソウつてニツコリと遊ばした小さい糸切齒がチラと見えて、二なく美しい例も花やかな快活の方、私大好、其くせ途い姿して居らつしやるのよ、かすみお召といふのだらう、此間今川橋へ行つた時、珍らしいので欲しいとは思つたが、母樣に申上るのも、これをこしらへて頂いて直ぐの事だし、これでも遠慮して居た、彼のお召、紫地にかすみ風に細草を江戸褄に織り出した二枚重、お裾は共色の燬り裾、御紋は縫りの三紋イ、ヲ子意氣で、お袖口から見えるお長襦袢は地藍に鹿の子紋の竹の節に薄な柿色で出した友染縮緬、茶地に金とほしの柴舟に濃な淡藍であらはした平綾織のお帶、只さへ美しい方が一入凄い程美しく見えた、彼方へお立ちなされた後姿をぼんやりながめて居ると、隣りに坐つて居らつしやつた花子樣が、

お美しいわ子どうしても御美麗な方は御得だ事、何を召してもお美しい、今日なんかのお召も好いの子、ほんとうに意氣だ事、知らない方がそれ者の果だらうなんて云ふのも無理がないぢや御座いませんか。

ほんとうに美しい方で御座いますネ。

さうで御座いますよ、一昨日も私お目にかゝりましたの、その時には猫子色とかの西洋花をパラッと裾に現した御紋附めしてゞしたが、よくお似合で御座いましたよ、お帶はゴブラン織の亂菊の模樣でしたが、ほんとうに好う御座いましたのよ。

一體御幾歳におなり遊ばすのでせう。

もう廿六とかにおなり遊ばすのださうですが、とてもさうは見上られませんネ、お容色が好くつて入らつしやるから、私もあんなに美しく生れ度いワ。

つて花子様つく〴〵羨しがつて居らつしやる、花子様の御召物だつて、御容色だつて、少しも退けはないのにと思つたから、

貴女だつてお美しいのに、そんなに仰有らなくつてもと申上ろと、

アラ嫌な方よ、こんな者をそんな事仰有つて罪ですワつて、それでも悪かないと見えてポーツと上氣さしておうつむきになつたのでよく見ると高砂縮緬の桔梗色地に水仙の三越一流の光琳模様お帶は鐵納戸地に金通しの大浜に茶を金糸にて霞ませた雲取りを現はした糸錦のまばゆい樣な好い柄。

お袖の振を洩るお襦袢はオレンヂ色のどうやら綸羽二重友禪らしい。

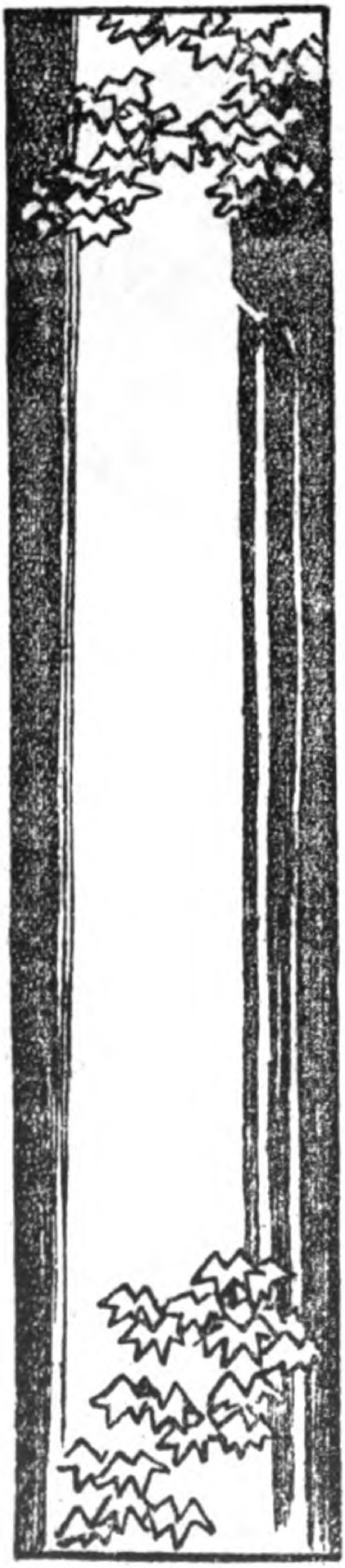
お長襦袢お一つにおなり遊ばした處が拝見仕度い。

しつとりと、落ちついた方でマガレットのお髪の首筋振ひつきたい程美しい上にお召物もお帶もよく似合ふ、丁度此の人の爲めに着物が出來たか、着物の爲めに此の人が生れたか、と思はれる樣だそれでもまだ嘘か本當か人樣を羨しがつて居らつしやる、そんなに仰有ると將來に罰が當るワと心で思ふ。

本當にどなたがどなたと申上樣もない位、皆樣好いワ、今度は誰方をと思ふとき、

サアすんだ、サア〳〵此度はお後から入らしつた皆樣お這入り遊ばせ。

と仰有るのでもうこれからは一生懸命だから、殘り惜しいが御召物拝見を中止して、一方の勇將にならなけりやならない、とにかく今年は餘程紋付流行らしい、そして色合も紫がゝつたのか鼠が多い樣だ、お若い方には、クリームやオレンヂ、サア〳〵貴女は向ふの組ですよツて仰有る、サアもううか〳〵して居られない。





處女時代に於てのみ見る女の美點

若草

◎鬼も十八番茶も出ばな

一寸したものゝたとへにも、かういはれるんですもの、實際處女時代は人世の花、ものといふものゝ美の頂點でせうよ、いえ齢はとり度くありませんね。

ですから此の時代の女を見て、秋や冬といふ氣持ちにはなりたくもなれませんよ、どうしたつて霞たつ春といつた樣な、灘の新酒の香に醉はされたといふ感じが適切にひゞくのですね、初心な男が迷はされたり、罪な女子が迷ふたりといふ諺も、こゝいらのいきさつなんでせう、といふのがこの頃になれば、どんな中低く、周圍高でも、それ相當に美くしさが肉體のうへにも、精神のうへにも備はつて來るのですもの、お孃さんなら、お孃さんだけに、娘さんなら娘さん丈けに、嘗て見られなかつた輝きが出て來るのですねどんな？つて後に追々申上ますよ、まあお正月の御祝言がてらゆつくり御託をならべさして下さいまし。處がこんなことをしやべるのには、どうもモデルがないと申上難いのでね、夫で凡てわたしの知つてる人、知らぬ人を問はず、手あたり次第ではない、眼の底にうつりこんだが最後、にげるひまもない程に、レンズを動かさなきやなりませんでした。それでもどうかこうか、よりぬきといふかたを四五人見付けまして、こゝがよい、

あすこがそれだ、とよせあつめたのが此一篇、世若し幸か不幸かこの理想的な女があつたなら、秋雨今生の思ひいでに是非とも拜顔を得て置きたいと存じますから、其折はどうぞ御紹介の勞をお惜しみあそばすなと今からお願申しておきます。扨どれもこれもまさり劣りのない花くらべ、どこからさきに手折らうやら。しかし先、人の眼に訴たへるのは表から見た姿で御座んせう、どんなおえらいお方でも、しらねば眼ふたつ、鼻口ひとつの只の人間、そのお心の奥にどんな玉や寶の美くしさが入つてゐるかわかりませぬ、それ故誰れもがあれうつくしいと感じたのは、すれちがひざま、襟元からゾッとしみこむその姿といつた瞬間にあるやうですね、今も昔しも好かれる女は第一姿がよくなくちや、いかにお顏が小町、楊貴妃でも、あるく姿が辨慶の樣であつたり、家鴨の親類といつた格好では鼻つまみですもの、そこで姿は美の衡量器即ち身體全體の調和した美い第一はすがたにあると申しますの。

◎櫻の花に梅が香とめて 柳の枝にさく姿

と半分は形容と見ても實際處女時代にはこのうつくしさが見られるのですもの。

きのふ迄師の干物か守口大根の樣な細かつたお孃樣も、十八十九の聲がかゝつてお下げ髮かマガレットに縮まり遂に頭高の束髮に代つた時分には肩から腰へかけての肉附がどことなくゆたかに、しかも引しまり、短かい足も長くなつて見る人に心地よい生々とした感じを與へます。むづかしくいへば迫るやうな表情が姿になつて來るのですね、小さい時から丹精して疵つた餘がこの時始めて効を奏して、骨の節々に「しなやか」な、そして甘味といふものをつけますのでせう、ふざけた姿をして見せても、いはれぬ愛嬌がほの見えるとは、ほんに得なもので御座んすねえ。

しかし當節はそんな柳の腰よりも、灰吹き然とした方が流行ると申すぢや御座いませんか、お藏の軽い重

いを顧ての算用からでなく、今は行燈袴といふ重寶なものがあるからでせう、しかし從來いふ處の美といふものから囚はれて居る觀念のわれ〳〵には、どうもこの灰吹然としたのは閉口ですね、種々な感情事情を取り去つて單に公平にどちらを撰ぶ？ときかれたなら、誰しも前者を喜こぶにちがひありません、お召地の二枚袷か何かを品よく着て厚板の帶きりと結び五尺一寸スラリッと立つた處などは、花ならば水仙化の姿とでも申しませう、一種壯嚴な犯しがたい美を感じますもの、がまた、其反對にたるんだ方にも捨て難い趣がありますからね、そこをいはゆる當世の通人がたがお喜こびになるので御座いませう。次には、

◎六尺の鐵心をもチャームする娥眉豊頰

即ち顏の美くしさはまた此の時が頂點と申しませうか併し顏は一と口に當代が一番といふことは人に由り好々ですからいはれませんけれど、同じうつくしさにも、引きつけられるやうな美くしさは此の後にはまた見られぬことであらうとおもはれます。棕櫚色をした髮も先づは追々黑く艶をまして來、澁色の地肌も知らぬ間にひとかはづゝむけ、そして顏全體に靑春の血が漲ぎつて來る、しかも面長なのとポチャなるとにかゝはらず、肉附がフックラとして參ります。にこりと笑ふときには、お月さまに可愛がられるほど凹まなくても、何ともいはれぬ愛嬌が口もとにありますものね、

色の白いは七難かくすと申しますが、淺黑いのも引しまつてよいものですね、どちらかといへば餘り色澤のよい人は多情に見えて嫌ひです、それよりもどこかに少しうちしほれた、雨後の白萩といつた樣な方が落ちついて、しんみになれますもの。

眼は表情の中樞部ですが、この時代の女の眼はそれこれ、巧みのない所に魔力があるのですね、張のある目、細そりとした眼、どちらにしても瞳は露がたれさうに見られます。月の雫が葡萄ならこれは何のしたゝりといひませうねえ。處で此の眼の動き具合で、その

人の美くしさが色々にかはるのですもの、絶えずコロコロ動く眼はいかにも才の勝つた悧巧相に見え、うつとりと何を夢むかといふ眼は溫良貞淑な人とゆかしくおもはれます。實に眼は最もその人格を代表いたしますのね、此の一寸の眼の表情のために、大きな男がのまれたり、吐き出されたりして泣いたり、すねたり、ふくれたり、するのかとおもふと金に飽かして手馴づけ樣とするおかたは餘程マの字の骨頂ですわ。

とはいへ眼ばかりが顏の領分ぢやなし、鼻もあれば口もある齒あれば、額もある、この同情の味方があるなればこそ、眼にものいはす働きが出來るといふもの



即ち鼻もをかしくない樣になり、額の髮なみも揃ふて來る、家並みに朽ちた味噌齒も、いつの間にやら、琴の爪のそれかとまがふ樣にみがゝれ殊に口に至つては此の時代にはまるで違つて愛らしくなるもので御座いますよ。

處で聲ですね。

◎壁越しに聞いた端歌で見たくなり

此聲のよしあしで百年の戀も覺めることがありますよ、どんな美くしいお人でも、一度うけたまはつたお聲が、ドラ聲、チヤカスカ聲、猫撫聲、これではさつぱり艶消しですね男は十五六から俗に聲がはりとか申

して一オクタープ音が下りますが、女のはこの時に最も聲帶がどうかなると見えて、三筋の糸によりをかけた人でなくてもハッキリとした聲になるものです、しかしこれも天稟ですから惡いといはれてもしかたがありませんが、鶯の初音に似た朗らかな聲や鈴虫に似たリンとした聲やこれがどんなに美の調和に大切かしれやしませむ、流暢な英語、纖細なフレンチ、ギクシャクした獨逸語でも聲に由て、よくもきかれ、あしくもきかれるものですからね。

従つて言葉の方にも響いて來ますもの、近頃は女ことに妙齢の令嬢がたの言葉がいかにも粗雜になつて、良家の子女とも仰せられたまふかたが、賣店なぞでのお言葉は實に耳を覆ふてしまひたい位ゐ、今の當局の敎育家が假名遣の斬新にクシャ〱して居られるやうですが、この言葉などの點に少も注意して下さらないといふのは、少しく矛盾したお話しのやうにおもはれますね、従來眼に角立てゝ八釜敷容めた『隨分だわ』『よくつてよ』などは大抵その家庭の階級も定まつてゐる樣ですがそれより以外に、チニオハやアクセントが叩かれる樣にきかれるのがあります。こんなのを見たりきいたりするときはその橫鬢をピシャリと登らしたいくらゐですよ、何にせよ處女に於てのみ見らるゝ美點の一つである此言葉と聲、兩々相俟つてすがしく仕度いものではありませんか皆樣何とおぼしめす？

以上表に見える美くしい點はおほかたいふてしまふたつもり、今度は、此の美くしさが外に出る大本の情の方に移りませうね。

◎氣に入らぬ風もあらうに柳かな

今迄散々あまへ〱て母樣や皆樣を困らしたヤンチャン樣が、多少うき世の風にもあてられ、親の苦勞のありがたさも判つて來た擧句ことの外の柔順になつて少々無理なことをいはれても一圖一概に跳ね飛ばさず靜かに考がへてのち、判斷をつけるといふ風に、いはば分別が出て來るのですね、これが三十四十の白髮まじりがするのなら何の當り前の話しですが、まだ世の

内幕は何にも知らぬ無垢の處女がすることなのですからいちらしいぢやありませんか、どんな向不見でもおはねでも、また却つてそんな女に限つて餘計こんな考へを起すものですよ、婦人に一番大切な柔順の德は、此頃からして現はれて參るから結構です。この德が出來ると、自然に外のうつくしい處も出て參りますからね、たとへばきのふ迄は蒼蠅いの何のかのと窘めた妹が急に可愛くなつて舐めて見たり、婢僕に對する同情心も出て來るといふ樣に、そこらがすべて圓滿に調のふて來るのですね、然しこの時代にひどひ境遇に置かれたり、亂れた家庭に育つた人は生涯不幸な思をせねばなりません、こんなめにあはれた處女にかぎつて眼つきのいやにギロギロした、そして嫉妬ッぽいのが人に見えます境遇からだから仕方がないとよく人は申しますがそんな境遇に制せられるやうな意氣地なしぢやとても何したつて奇麗にゆきやしません、しかし反對にしめり込むで五月雨時分水をこぼした疊のうへに坐らせられたやうな氣持のする女になられても往生ですよ、要は女らしい女にあるのですからね。



さうしてこのうちにどこかピンとした、輕々しくは

からかへない處が此の時代には出來て參りますよ、つまり意氣地のある女、變りもの、などゝいはれますのも凡人から見て或はさうでせうが、ケロリとした女より何處かに癖の出る女が好きですね、何故つて癖の出る丈け僞らないのですもの。無邪氣な處が露はれて居るのですもの。

◎處女の眼に入るものは凡て花ガラス通過したる事々物々

これが恐らく處女時代に於ける美點の改まつていへば生命とでも申す可き點でせう。

無邪氣な、しかも憧憬に充ちてゐる處女の眼の前には花ガラスが覆ふて居るのですもの魔が來ようと獸が來ようと、かれの神經に映る處は花の樣な人であり、花の樣な動物とおもふて居る、これが一番尊とい點で、しかも誘はれる危ふい缺點なのですね。そのうへ始終理想にあこがれてゐる所から、傍から色々の奇物がうかがふて居てもちつとも氣がつかず、氣のついた時分には、もうすでにそこに妨げが起つて居るといふやうなわけで、實にうるはしい、まあ紙風琴見たやうなものでせうね、もとより世の中といふものを知らない位ですから、奧樣根性の「疑」といふものが一とつもありません、これがまたうつくしい所なのですわね、何にかぎらず疑が起つたら、それからそれへと碌なことは考へるものぢやありません、疑から利する所は學問の上には大切なことでせうが、哲學者みたいに女が一々疑を起して居た日にや、さうでなくても決斷のにぶい女の胸、何時はれるかしれたものぢやありませんよ、そこにゆくとこの時代は無邪氣、信じ易いといふ美點が押しなべての女が持つて居る性質であります、その代りこれが半面の短所となつて、うつかりするとだまされたり、ぬかれたりするおそろしい目に遭はされるのですからね。

この無邪氣といふ處から、女の化粧、ことに此時代の女はお化粧が大事ですね、まあ學校になんか御出になると自然お忙しいから特別暇をとつてなさるのはい

けませんが、それでも女は身だしなみが肝腎で御座います、固より黒人ぢやありませんから念入りに人の歎心を買う様な眞似なんかしたら大變ですが、むくつけな、鑢の様にうぶ毛を生やした顔に面とむかはせられるより、心ばかりの薄化粧でもして活々とした、元氣のよい顔を見せられる方がどれくらゐ氣もちが好いか分りませんもの、いつも申すことですが、慈善と僞善おしやれと身だしなみ・各々がよく考へなければならぬことゝおもひます。要は此の時代の處女が化粧することは別に目的があるのでなく、人世の最も美くしい時を美く過したいといふ心に外ならない、私はこの誰れに見せようでもない、我れ自らが心ゆかしにといふ所はまた此の時代でなければ、見られない美點でせう。

　この外細かく申したら今夜一と晩かゝつてもつきますまい、かつは心理上のことなどから參考してゆくと隨分面白いもので御座いませうが、それはまた他日部分にわけて申し上げることにして、以上あらましの處女美といふものをしやべり立てました、こゝに以上の美の諸點を綜合し、私が理想の處女を作りあげて筆を擱くことゝいたしませう。

　年は十八歳

身長は五尺乃至二寸、肉附きはむしろ骨立たぬ迄のやせたるかた、色は血色の餘り漲る様なのはきらひ、すこし淺黒きかた、髪は勿論黒漆極長、眼はクルリ〱せぬパッチリとしたるかた、眉、鼻、口はいはずもがな、聲は朗なるよりリンとしまつたるかた、言葉は圓轉の切れはなれよき快活の語調にてしかも表情に富めるかた、物怯のせぬしかも出すぎぬかた、卑屈ならざる迄の柔順なるかた、決斷力のある失敗にもしよげざるやうなかた、張りと意氣地のあるかた、癖をかくさぬかた、客かなるより華奢なるかた、身だしなみに心くるはぬかた、衣裳の好み地味なるかた、眼で眼にものゝいへる人。

　終りに斷れぎれによき所拜見いたさせていたゞきしＭＬＦＮＯの五孃に厚く陰乍ら御禮申上ます。



鼠が齎らす種々の智識

碩鼠

◎鼠は清潔を好む動物であるといふことはあまり人の心づかぬ様であるが、實際これは猫にも劣らず毎朝唾液を手に塗つて面を拭ふのみならず、食事の後も必らず拭ひ、又暇さへあれば擦り研き化粧に浮身をやつすのである。

◎鼠は最も油を好む動物であるが、甞て或人がその智慧を驗せんとて種油に燈心を入れて其端に火を點じ、さて寢床に入りて窺ひ居りしに、やがて一匹の鼠が出て來て尾を油の中にさし入れて燈心を押しまづ一方の火を消し、次に他方の火を消さんとしたさうである、又鼠が鷄卵を取るには一匹がまづ卵を抱いて仰臥すれば他の鼠がその頭を咬へて引き或は其尻を押して運び去るのである。

◎鼠は如何なるものを食料とするかといふに、野菜、肉類は更にも云はず、皮、紙、木材、土性のものに至るまで少したりとも滋養のあるものは總て彼等の食料とするので、而かも鼠族の鋭利なる齒は金屬を除くの外はあらゆるものを食として噛る事が出來るのである、そして彼等は大膽にも厩に眠れる馬の蹄を冒し、牛の角を襲ひ、時にある鷄を噛み、休める動物の足の裏よりして終には人間の鼻、指などをも噛むのであるいよ〳〵食物の盡きる時は庭より掃溜をあさり歩き、蚯蚓、なめくじ、蝸牛等を捕へ喰ひ、其後に至つては共喰をするのである、今假りに一つの檻の中に五六匹の鼠を置き、長く餌を與へぬ時は爭鬪の末、弱き者を噛み倒して、遂にはこれを喰ふのである、かくして一匹喰はれ二匹喰はれ終には最も強き物が一匹殘るのである。

◎又鼠は種々なる場所に棲み、また種々の境遇にあつて生活を營むのに適してゐる、故によく水中に泳ぎ、よく地中敷石の下を穿ち隧道をも容易に作る事の出來る能力を持つてゐる、又直立して樹木、壁を攀ち上るので、空中を飛ぶといふ事の外は殆んど出來ぬといふ事なく而かも他の獸類の到底爲し得ぬ技術に長じてゐる、即ち頭を地に向けたまゝ樹上又は柱の上から平氣で下り傳ひ來る事である。

◎鼠は團結力の強いもので、猫の如き强敵に襲はれた時などには相團結してこれに抵抗しよく戰ひ、よく防ぎ、敵をして辟易せしむることもある。

◎鼠を取る器は在來いろ〳〵あつて、まづ桝落、茶碗伏、竹彈き、釣天井、金網、針金彈等であるが、甕を平地に埋めて其中に水を盛り水の面に糠とか蕎麥殼等を浮べて鼠を陷いれ溺死せしむるなどの方法もある、其の餌は焦玉蜀黍、飯の油揚、甘藷、團子等である。

◎鼠は穀類、肉類を始め、植物の根、枝、皮、葉等殆んど食はざる處ろなく、甚だしき甘味と鹽味とぞ嫌ふの外、辛子、蕃椒の如きも之を食ひ、鮮魚、生肉は多く好まざれど他に美味がなければ之をも食ふ、魚類、蝦等の燒いたものは其最も嗜好物で油類は殊に大好物である、鼠落しに多く油揚類をかけるのも其の嗜好物を心得たものである。

◎又鼠は一體に水を飮まぬものである、彼等は皆食物中の水分に依つて滿足せられる樣な身體の組織になつてゐる。

◎鼠の繁殖力は驚ろくべきものである、普通は四月に分娩して其後年内に三回分娩し一回に十二乃至十四の兒を產む、そして其の兒を愛育するの用意は周到なもので、出產の時は牝は巢に籠つて子を育て、牡は外に出で、食物を運び來るものであるが其巢を作る時も矢張牡は材料を運搬し來り、牝は内にあつて之を構造するの習である。

新年繪さがし

この繪の中には何が隱してあるか探してごらんなさい當つた方には三十名を限り賞品を上げます（賞品は家庭日記一冊）





御目出たう

コンナ理屈ニ合ハヌ繪ガアリマシヤウカ
新年ノ餘興ニ一ツ考ヘテ御覧ナサイ

●御分りになつた方は無論の事、
御分りにならぬ方も兎も角

明細書の御請求をなさい
無料で差上げます

横濱市山下町六十一
東京市銀座
大阪市心齋橋

シンガー會社

女(わの一)

恭賀新年

博文館主 大橋新太郎

副館主 大橋進一

博文館編輯部

主幹 坪谷善四郎

巖谷季雄
石橋助三郎
石坂橘樹
石井民司
伊東祐穀
伊尾準
長谷川誠也
濱田徳太郎
西村惠次郎
鳥谷部銑太郎
富所三郎
沼田藤次
押川方存
太田善男
大竹昌春
川本忠太郎
鹿野直司
海賀篤麿
河岡英男

武内桂舟
武信由太郎
田山錄彌
竹貫登代多
竹貫直人
鷹野勇雄
長井氏最
内山正如
久留島武彦
松原岩五郎
前田晃
淺田彦一
齋木寛直
木村定次郎
三間保治
神保直藏
鈴木德太郎

(イロハ順)

博文館營業部

支配人 羽田福太郎

犬野金太郎
山田静三
杉山常次郎

宮川大壽
上村恭三
堀野賢龍
田中六藏
里見謙吉
愛敬利世
佐藤憲斌
關謹平
遠藤好夫
高村眞夫
金子督太郎
松原濱之助
細野佐藏
谷俊三
玉井喜重郎
古賀豐策
小峰正一
兒玉幡太郎

有田利雄
番塲宗八
權藤文雄
横田地巴
荒井芳太郎
繁田郁藏
今井玉三郎
福澤市太郎
今井淳
永井泰
林彥之助
中村長
塚脇十三
磯岡鷲郎
松本勉治
內藤憲輔
矢澤潤三
松木玉之助

廣瀬貞一
小林久四郎
中村慶次郎
菅五太郎
木村照治
高橋常次
佐藤誠
神崎新四郎
渡部吉藏
堀龜七
早川多輔
山本順治
菊地金五郎
松澤義一
中田國治
牧武
原田貞助
松本勇次
渡邊明義

女(わの二)

博文館特別割引券

迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈上し愛讀諸君平素の御眷顧に酬ひんとす

圖書御注文の方は下段切取線内の甲種券

雜誌御注文の方は乙種券を添へ期限内に御申込被下度候

●本券は各種とも一人一枚限り有効とし數枚御送付あるも割引の歩合を增すものに無之候

（切取線）

（甲種）

博文館發行

圖書特別割引券
（女學世界新年號）

●圖書御注文は此券を切取り御添附の事
●有効期限は明治四十二年二月十日限り
●期限中は定價の一割引を以て特賣仕候
●豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす
●館友は館友規定引の外尚圖書五分引豫約品二分引の事●總て前金の外無効とす

（切取線）

（乙種）

博文館發行

雜誌特別割引券
（女學世界新年號）

●雜誌御注文は此券を切取り御添附の事
●有効期限は明治四十二年二月十日限り
●期限中一册賣は定價の五分引●册數に依り割引ある前金拂込は其金額の三分引とす
●館友は館友規定引の外割引せず
●本券は前金御注文の外は効用なし
●御申込の節は博文館小賣係宛のこと

女（わの三）

女（わの四）



謹賀新年
小賣部 圖書雜誌は汎く蒐集陳列し卸
同樣勉强仕候間倍舊の御愛顧願上候
卸賣部 何れの出版を不問價格發送等
萬事御便利に奮勉候間御取引願上候
圖書雜誌勉强販賣
委託販賣部 獨特の擴張法を以て販路
勉勵仕候間御發行前に御申込願上候
圖書切手 御進物用として優美に調進
仕候間多少に不拘御用命の程願上候
東京神田表神保町
東京堂書店
振替口座二七〇番

女(わの五)

少女世界 第四巻第二號 増刊

菊判紙數百廿八頁　口繪石版寫眞版趣味甚多

正價金拾錢…………郵税壹錢

口繪 {彩色版「ヴァイオリン」
寫眞版…………八頁}

表紙＝太田三郎氏筆



みどり色濃き松の操、霜にも萎れず、雪をも冒して、常磐に榮える松の姿は、實に少女模範とすべきものではありませんか。わけて新年には松かざり歌御會の御題も『雪中の松』と仰せ出されました。かさね〴〵のめでたさに因んだ『松の巻』こそ、新春第一の少女の讀みものです。

先づ表紙や口繪の美しいのは、言ふまでもないこと、巖谷小波氏作の**少女對話**は、讀んで趣味深く、行うて面白く、學校でも家庭でも、歡迎さるること請合です。

それから、めでたいお伽噺、樂しい少女あそび、あわれな少女小説、勇ましい歴史譚、美しい歌がたり・珍らしい理科談、とり〴〵に面白いものばかりです。

なほ餘興として、少女笑話が澤山入れてありますし、全國少女諸子の『**最も樂しいこと**』も發表してあります。お正月の讀みものとして、賣り切れない中に、早くお求めなさい！

正月十五日發行

東京本町 **博文館發行**



女(わの六)

（文藝倶樂部 第十五巻第二號 增刊）

落語講談名人揃

一月十五日發行

全一冊
洋裝菊判
紙數三百二十頁
口繪美人寫眞版十數頁
數十度刷木版銅版繪挿入
正價金廿五錢郵稅貳錢半

内容

△法樂舞……三遊亭圓蕎
△肉附面……一龍齋貞山
△紫檀樓……春馬亭柳枝
△軍神の旗……柴田馨
△七福神……三遊亭圓左
△通し矢……寶井馬琴
△九紋龍……神田松鯉
△梅の春……都々逸扇歌
△西行……三遊亭圓橘
△譽れの太刀風……田邊南龍
△白井左近……柳家小さん
△ういらう賣……猫遊軒伯知
△名人長次……三遊亭圓右
△伊庭軍兵衛……眞龍齋貞水
△荒川高俊……伊藤痴遊

人の職業は千差萬別舉ぐるに遑なき程ながら、何人も名人と呼ばれたき心は一樣なるべし。されば本誌は來ん四十二年一月十五日の定期增刊を「落語講談名人揃」と題し、我が國の古今に亘りて、斯道の名人と呼び囃さるゝ人々の苦心談は素より其の趣味に富む逸話をも、是れ亦現代の落語講談界に名人と呼ばるゝ人々に口演を囑し、其の速記を編輯して一書と爲す。何職に從事するものに限らず、此の書を讀まば大に發奮の勇氣を增すべく、目出たき春の讀物としては、爭で此の增刊に及ぶべき。發市の日を待たれて賣切れぬ内、續々御愛讀あらんことを願ふになむ。

發兌元 東京本町 博文館
振替口座二百四十番


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌ)コ八
振替口座七八〇七
卸小賣
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券
六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

女(わの八)

小間使の日記

時雨女

一日、晴、萩原家のお嬢樣へ御小間使として私が上るべき日は愈〻今日となつた、先樣では成るべくならは、少しは何か出來る者をとの御望み、此方も兄弟は大勢あり、齡は若し、それに行儀をおぼえさせたいとの心もあり、二三年の御奉公を覺悟で上る事になつたのは、逐此十日許り前の事、今朝はもう暗い中から家中は大騷ぎ、御赤飯を蒸すやら神棚へ御燈明を上げるやら、幼い弟妹は既う起きてキヤツ〳〵と騷いで居る、御母樣の御注意を聞き乍ら、支度をすませ、皆に別れを告げて、さて出發となると、譯もなく淚がこぼれる、いくら旅へ出た事のない身だとて、僅か十里や二十里の外へ出る位に斯う意久地がなくては如何な者かと、自分で自分を叱り乍ら、淚は止度ない、伯父樣はもう車に乘る、母樣の、

「ちや體に氣を付けてね、まめに働いておくれ」とおつしやる聲を後に、車に乘ると、梶棒は上げられる。

「では皆樣御機嫌宜う」と云つたきり、後は手巾で眼を押へてしまつた、村を越へ、町を通り、原をすぎ、汽車に乘つていよ〳〵向ふの停車場へ下りる迄は、移り行く外の景色を眺め乍ら、色々御邸の事を想像して、上つたら、こう御挨拶して、こう訊かれたら、こう御返事してなど〻、そんな事許り考へて居たが、もう汽車を下りると、何も考へる隙はない、人々の忙しさうに歩いて居る間をぬふて、四邊の宏大な建物に眼をうばはれ乍ら、伯父樣の後について行く、いつか町は通りぬけて、廣い田舍途を五六町行くと、もう向ふに大きな御邸が見える「吁彼の御邸だな」と思ひ乍ら鬢のほつれなどかき上げて行くと、もう御門前へつく、砂利をしきつめた長い御庭を通つて御座敷の樣な所へ導かれる、暫く待つて居ると、其中に障子が開いて、御髭のある立派な五十近い御方と、續いて四十二三の御

品の高い丸髷の御婦人が御越しになる、伯父は毎度このお邸へ上つて居るので、御心安く、只通常の御挨拶をする、奥様は伯父の蔭に少さくなつて居る私を御覧になつて、

「お前よく來ておくれだつたね」と優しい調子で被仰る、私は恐る〳〵にじり出て、母に敎はつた通りの御挨拶をする、旦那様もにこ〳〵され乍ら、

「十六だつたかな」ッて被仰る。

「は十七で」と大きな聲で後の御座いますは口の中で云ふ。

暫くするとお孃様が御こしになつたので、また叮嚀に御挨拶申し上げると、お孃様も叮嚀に御挨拶される、其中に女中がお茶など運んで來て、二十分許り話をした後、伯父が、

「では何卒充分御世話を御燒き下さる様御願ひ申します」と云つて立ち上り、私の方を向いて小聲に、

「ぢやこれから行くからな、而し、又ちよく〳〵出て來るで、其時は行き合ふからな」と云つたまゝ皆様が止めて下さるのも聞かずに、すた〳〵と出て行つてしまう、私は何だか急に淋しくなつて泣きたい様な氣がした、奥様は、

「もうお前今日から私の家の人になつたんだから、少しも遠慮しないでね、あちらでゆつくり御休み」つて被仰る、私はお孃様に導かれてお孃様の御室に隣つた四疊半の綺麗な小座敷へ行つた。

もう荷物もちやんと運ばれて居る、お孃様は、

「疲れたらう横になつてゆつくり御休み」と被仰つて出て行かれて、暫くすると御菓子だの御本だのを運んで下さる、私は奥様やお孃様の御慈悲深いのにつくづく感じた、私共の村にも、勿論此の御邸などには所詮及びも付かないけれど、村での豪家と云ふものが二三軒ある、其等の奥様や孃様の御權の高い事つたら、私等の様な者には御口もきかれぬと云ふ位、それで女中等も居にくゝつて、上つたかと思ふと出てしまふ、隣りの淸ちやん等も御小間使に上つたけれど、十日と經たぬ中に、こり〳〵したと云ふて逃げて歸つた、其子

の話によると、ほんとうに、ずゐぶんだと思ふ事許り、世間の奥樣やお孃樣と呼ばるゝ人は皆こう云ふ者だと思ふて居た、私は此御邸へ來て、皆樣の御情け深く、女中に物を御云い遊ばすにも、誠に御叮嚀な所を見て、怎うして驚かずに居られよう、吁！　私の村の豪家の奥樣や、孃樣は皆鳥なき里の何とやらだと、云ふ事を初めて悟りました。

其夜は仲働きのお美輪さんと云ふ人が來て、泊つてくれて何かと親切にお世話をしてくれました。

全く安心した私は、初めて上つた御邸とも思はずに、いつもの我家の樣な氣がして床に入るや、否や、何も思はずに、安らかな夢の國へと旅立ちました。

二日、晴　我に歸つてハッと眼を開くと、お美輪さんの床がない『オヤ寢過ぎたのか』とあはてゝ床をはね起きて支度もそこそこ、緣端へ出る途端、セルの單衣にとき色縮緬の扱帶を結ばれた寢衣姿のお孃樣が、湯殿から出て被來るのに、ハタと出會した、其時の私の心は吁かりにも他家の女中と名の付いた者がお孃樣より遲く起きるとは何事だらうと思ふと我乍ら恥かしくなつて來る、それと同時に初めて上つた身の矢鱈に恐れを感じて、若しやお孃樣が苦い御顏をなさりはすまいかと、心配し乍ら、恐る恐る跪づいて、



「御早うございます」と御挨拶申し上げて、一寸御顏色を伺ひ、

「此樣に朝寢致しまして誠に申譯も御座いません」と再び御顏を伺ふ。お孃樣は苦い御顏をなさる處か、かへつて莞爾なすつて、

「ホヽヽ、何だねえ、千滿の改まり樣は、何でそんなに改まるの、お前がそんな事云つちや、私、明日から朝寢は出來ないから困るわ」

此時の私の心、生れて初めて嬉し涙と云ふものを流した、後になつてこんな事を考へては、可笑いかも知れないが、始めて御奉公に上つた私に取つては、こんな嬉しい事はなかつた、お美輪さんが皆なに引合してくれて、此日初めて知らぬ他人の中に雜つて他家の御飯を味はつた、日々の日課と云つても、旦那樣、奧樣には、お瀧さんと云ふ、私より三つ年上な御小間使が居るので、私は只お孃樣の御小間使さへして居れば、お役目は濟む、たまには若旦那樣の御用も補すけれど、これとて下男が大ていの事は辨ずるので、私の役は誠に勿體ない程樂なものである、で御用の隙にはお孃樣の御平常着を縫つたり解き物でもしたりして居ればよい、夜は全く暇を遣はすとの御思召だけれど、私は大勢の女中が少しづゝでも夜なべするのに、私が遊んで居ては濟ないと思つて、床に着く十時迄の間に、一時間の御暇を戴く事にした、先樣では私に餘程御遠慮して居らるゝ樣に思へる、二時頃お島さんの御乾物の手傳して居ると、孃樣が一寸と、お呼びなさるので、參つて見ると、こちらへ御出でと仰有つて、私をしたがへ緣を一週りした立派なお室のドアを開けて、

「御兄樣千滿が參りました」と云ひ乍ら内へ入られる、

「呍？」と仰有つて、今迄卓に向つて一心に何か寫して被在つた廿五六の御品の高い御方は、此方を御覽になり、入口に跪づく私を一と目見て「呍！千滿か」と莞爾遊ばす、去年大學を御卒業遊ばした、御當家の若旦那樣である、私は直ぐ御優しい方だと想像した、次の御室、これは此頃御歸省中のお孃樣の弟御武夫樣の御居間と承はつたが只今御留守であつた。

夕方お安さんが、若様の御手紙七八通を持つて買物かた〴〵町へ行くので、私もそれ等の家を覺える爲めに、一緒に行つた、歸りに勸工場へよつて妹に送らうと赤いリボンを二つ買つて來た。月を踏んでの歸り路お安さんは色々とお邸の事を話した。

三日、半曇

お孃樣が御化粧部屋へお立ちになつた後で、御室のお掃除をして居ると廊下にドシン〳〵と云ふ



足音がして、お見えになつたのは、御歸省中の武夫樣、御齢はお孃樣の弟だから十九か廿であらう、顏のお色の淺黑い丈の高い威嚴のある御方、急いで襷をはづして、頭の手拭を取り、叮嚀に『お早う御座います』と御禮をして、『私が千滿でございます、誠に不束者で御座いますが、何卒宜しく御願ひ申上ます』と困つた樣な御挨拶申上げると『フン』と鼻で御返事なすつて、私が頭を上げた時分はもう三間も先へ行つて被在る、私は可笑くて一

り人で笑つた。而し淡泊した御方だと思つた、一寸彼の御眼に睨まれたら、誰でも縮み上るだらうと思つた、午後から御客様が大勢お見えになると云ふので、午前はお孃樣のお室の右に隣つた大廣間のお掃除にかゝる。お掃除をしてしまふとお孃樣は甲斐々々しく襷がけをなすつて、窓掛を絹の綺麗なのに御とり代へになり。床の置物の位置を直したり、立派な色々な花を室一面に御飾りになつたり、床の間のも活かへをなされたり、暫くの間は室を出たり、入つたり、御忙しい御樣子であつた、御晝餐が濟むと、お孃樣は御髮を御上げになり、立派に御化粧なすつた。彼がほんとうに眞氣とでも云ふのであらう、白地へ黑で芭蕉を畫いた透綾の御着物を召して、房の付いた單帯をきちんと御結びになつて、ピアノの前に御立ち遊ばす、其御姿と云つたら、ほんとに繪に描た樣であつた、侠なお澤どんは隱れて覗きに來た位、吁同じ人間に生れ乍らと、思ふと、譯もなく淚がこぼれる、御母さんの云ひ草では無いが、私等はきつと前の世で何か惡い事をしたのだらう、などゝ思つては又泣いた、其中にふと重宗公の話を思ひ浮ぶと、何處かで、女中の身分でお孃樣を羨むとは何事だと云はれる樣な氣がして急に今迄の淺墓な心が恥かしくなつて來て、吁上にも下にもきりのない世の中だ、其日々々を樂しく送つて居乍ら不足を云つては神樣にすまないと思つた。

客間からは賑はしいピヤノの音がもれて來る、二時が鳴つた、もうそろ〱御客樣の被來る頃と、私も小ざつぱりした浴衣に着更へて、前垂も白の未だ一度もかけないのをかけて、御庭へ水を打つて居た。

「千滿や」とお孃樣の御聲に行つて見ると、もう御客樣の御出で、私が咖啡を運んで出た時には、白絽の御方が三人、洋服の御方が一人、ピアノを圍んで被在した、若樣の御友達であらう、皆廿四五の御方、暫くすると又四五人御見えになる、お孃樣がノート片手に首をひねり乍ら、御こしらへ遊ばした御料理を、氣のきいたお瀧さんと不器用な私が運ぶ、お瀧さんと云へば昨日町の歸りにお安さんから聞いた事だけれど、一年

許り東京に居たとかで、いやに東京振つて、今は奥様が御世話を御焼き遊ばしたとの事で餘り塗らないけれど去年來た許りの時分など、云つては惡いけれど彼の變な顔へ眞白に塗りたくつて、いつかも、武夫様に生意氣な事申し上げたとかで『化物だまれ』とねめ付けられて其日は如何しても御暇頂いて歸ると云つて大騒ぎしたさうな、今日も薄そりと化粧して、思ひ切つて洒落て、私がそつと入口へ置いては、そこ〳〵に逃げて來る御丼や、御皿をテーブルに載せる間も如才ない事を云つては、御客様を笑はせて居つた、あゝ云ふ處は確かに東京風かも知れない、田舎育ちの私等にはとても出來ない、御酒宴中は別に用がないので、自分の間に退つて、思ひ思つたお手紙を母に宛てゝ書いた、其中へリボンを封じて置く、御酒がすんで御飯の御給仕をする時なども、お瀧さんてば、御櫃を並べて御次に控へて居る、お美輪さんに、彼の御方の御顔が如何の、目附が宜いの、武夫様てばお千満さんの方へ許り、出すのなんて女中にもあるまじき様な事を云ふて居る、一々腹を立てゝはきりが無いけれど、かう云ふ人は口先許りで存外腹の中は空なものだと思ふと、別に腹も立たない。



五時頃一同御庭へ出て武夫様が寫眞を御撮り遊ばす、蔭に見て居た私は、お孃様の美しい御姿が綠葉中に一輪咲いた赤い花の様な氣がして、吁！私も御庭に

咲いた牡丹の花であつたなら、彼の間に入つて人の目を集める事も出來るのにと、つく／＼と、かへり見る人もない野末の花の身を怨んだ。

暫くの間はピアノやヴァイオリンの音で廣い御邸をにぎはせて居つたが、其も間もなく止んで、又御邸のもとの靜けさに返つて、時々客間から笑聲がもれる許り。

久し振て「思出の記」を讀み返して居ると、風が何處から傳へて來たのか、云ふに云はれぬ尺八の音が幽かに響いて來る、ハッと思つて窓に首さしのべた私は、半身に月光を浴びてヴァイオリン片手に、木立の中へ消えて行くお孃樣の御姿を見た、尺八の音は止んだ、恰ど小說の樣だと思つた、私は窓によつた儘心はお孃樣に乘り移つて小說的の事を考へて居た。一時過ぎ御客樣を玄關に送り出した私は、尺八の主をさがしたが、音許りきいた私にそれの分る筈もなかつた。

四日、晴　昨夕夜更しした故か、今朝は眼が寄合して仕方がない、今朝も眼を潰つて歩いて來たら、緣側から辷り落ちて、丁度其處を御下へ御立ちのお孃樣に見附かつて、大笑はれに笑はれてしまつた。御飯の時、孃樣から今日夕方御別莊へ被行るので私にも御供せよときいて、餘りの不意に驚いたが而し嬉しかつた、御別莊と云ふのは此處から一里許り先の田中に建てられた極閑靜な所だと云ふ事、私は矢鱈嬉しくつて可笑しくもないのに笑つて許り居たいり付た樣な日が漸く淡くなつた頃、一行は車もからずに御邸を後にした。一行は若樣御二人と、お孃樣、御供として仲働きのお淸さんと私、都合五人、若樣は寫眞機械、孃樣はヴァイオリンお淸さんと私は包みを、各々片手にさげて、卯の花咲く小川にそうて、夏の野道を行く、四人の影は離れても一つになる、けれど武夫樣はいつも二三間遲れては時々五六間後の方から『オーイ待つてろ』なんと被仰り乍ら、汗を流してかけて被來る、若樣とお孃樣と二人並んで話して被來る處を、行き合ふ人毎に振り返つては何か私話いて行く、私が小聲でお淸さんに、『よくしたものね、御綺麗な方は皆振返つて行くのに、

直ぐ後を行く私等などには目を付ける人もない」と云ふとお清さんは、

「なあに御夫婦の樣に見えるものだから、餘計に見るのよ」と負け惜みを云ふ。すつかり馴れてしまつた私は十年も前に上つた樣な氣がして、そろ〳〵御喋舌の本性を表はして來た、黑い毛繻子張りの蝙蝠をさした若い女など、みんな傘で顏をかくして行く、横手の笹籔から股引に赤襷の女が出て來て、すれ違ひ樣グツと下を向いて足早に通り過ぎた、お孃樣は、

「アラ今のはお勝さんよ、酷いわ、知らない樣なお顏してと」お怒り遊ばす、私はお勝さんとか云ふ人が、氣の毒でたまらなかつた、順境にお育ち遊ばしたお孃樣は逆境に立つ人の心を御知りなさらない。

歌つたり、笑つたりして行く道は早いもので、もう一足で御別莊と云ふ時、向ふの丘に大きな屋根が見える、小學校ださうな、田中に立てられた新築校舍で、運動場もかなり廣い、赤い夕日を浴びて八九人の先生方がテニスの眞最中、一行の姿が現はれるや否や、一人の洒落た女教師が亂れた束髮を押へてかけて來て

「マアよく被在つたわね」と先づお孃樣の手を握る、武夫樣は寫眞機械を私に持たせた儘、もうチツケツを握つて被在る、女教師は孃樣の手を引いて木陰へ入る、若樣が先へ行かうと仰有るので私等はそろ〳〵行く、直ぐ向ふの丘の下から御別莊の瓦屋根が見える、先へ行つてはすまないとお清さんと私は堤の芝生の上に坐つた、孃樣の蝙蝠がピカリ〳〵と光る、女教師の紫袴が風に飜る、他の女教員の眼は皆孃樣に注いで居る樣で、見て居る私等迄肩身が廣い樣な氣がする、大分永い話もすんで、孃樣がこちらへ被來ると男女十六の眼が皆此方へ向く、お清さんと私はクス〳〵笑つた。

御別莊の景色は實に可い、一同はだをぬいで行水を使ふ、涼しい風がスーツと吹いて來て四方田に蛙が鳴き出した、小波ロープを召した池の汀に立つて被居る孃樣が、まるで天女の樣、少したつと先程の女教師が來て、お孃樣に笑ひ乍ら『須崎先生が餘り御似合だもんだから御夫婦ですかつて、私に訊きましたよ」と云

はれた、嬢様は『彼の綺麗に頭を分けた方？』つて笑つて被居る、お清さんは『千満ちやん私の云つた通りでせう』と大得意。後で若様に嬢様が『私もう兄様と一緒に歩く事はいやよ』と赤い御顔をして被居つた。御奉公に上つてこそこんな御別荘にも來る事が出來ると思つた、私は決して御奉公をおろそかにすまいとかたく決心した。





女の新年

萩花女

◎お化粧

まだ東雲のうす明りに、若水沸かしたお湯使つて、そと鏡臺の前によれば、一枝さゝれた小瓶の梅が、香り清しう胸を打つ。

初めて上げた高髷の重り、頭小搖ぐ心地のするを、今日は聊か醉興に、米やを呼んでお化粧す、米はおつくりが上手なり。四季の花、御園の水にねり白粉を濃い目に解いて、先づ襟足長う頸筋からさつと一刷け。頸と顏との目立つて違ふは少し野暮なり。鼻から頰へは稍濃い目に、眼頭と眉頭との間を少しぼかして鼻高う見せぬ。兩頰の上ピンクの打ち白粉一寸はたけば心地いゝ色は出でつ、米は眉墨輕う持つて粉吹いた眉をそつと作る。

今度は大事の髮の番なり。鬢たば亂さずかき分けて後には銀平打ち、透しぼりの簪、前に一輪白薔薇の大きなるを、少し氣にしながら忘れて居し口の紅、終りに薄う塗つて了へば、扨も化けたりな、人形然たる京都式娘、吹き出し相な可笑しさを凝然と堪えて『これぢあ、お雜煮も頂かれないわ』と二つ並んだ鏡の顏の赤黑い米やを見れば、いやに澄してホヽヽと笑ふ。

畫工も及ばぬ此の鏡の人、今日一日を消えずもあらば、東京パックが三舍も避けんポンチ畫なり。

◎畫葉書

年の初めのことほぎを、今年は鳥の美しい畫はがきへ、友のたれかれそれ〳〵へ走り書きしつ。愛する東都の學妹へは、畏こき御題の雪中の松、これこそ好けれと腰折れ一首はしに書いて、

雨に延び風に撓まず冬の日の
雪に色よき庭の若松

その夕ぐれを待ちわびし郵便の聲して、ヒラ〳〵と二葉。兼子樣と鶴子樣からなり。

神の御庭の御使ひ鳥が鉛脂の雲の曉を仰いで、時をば告ぐる美しの畫はがきへ、

「またお正月が參りました、お目出度いのか、お目出たくないのか、一向私今年は感興を惹き起しませぬ。然しとにかく年の初め、お互樣にゆるんだ心の紐をしめ直さずばなりますまい、終りに臨ぞんで君が御多幸をいのる。」と兼子樣が僞はらぬ新年の感想、まこと指折り數へて待つ間が人の花なるべし。

◎萬歲と猿曳き

好い程人を笑はせて、鼓の音長閑に歸りゆく萬歲のあと、今日を晴れ着の裾引いて、そつと表の道へ出づれば、老人の猿曳が目ばかり大きい小猿を負ふて、向ひの家の門を出でたり、巡禮のお鶴の衣裳か、負はれる小猿は汚れた赤の袖無しに島田の髷のかつらをかぶりつ、父さんの名は阿波の德島十郎兵衛、母さんの名は、お弓迄一人してやる早藝當、さぞや疲れて此の三日をと、後見送れば、又も隣家の門にかくれて太鼓の音は響き出しぬ。

◎新年のお料理

家持ちて初めての新年、何とやら胸さわがれ候ひしが、これも其の内の一つ、嘗て習ひしノートまで、くつての苦心と思し召せと、親しき友が祝詞のはじに附けて參りぬ。

お重詰

一の重　鯛の作り身　つま　かつら大根、わさび、
二の重　小鮒昆布卷、千年、玉子、りんご羹、
三の重　鯛味噌漬燒、附け合せ、おたふく豆、あま煮、

一吸物　鴨、松茸、
一鉢　うど、櫻麩、きくらげ、ぎんなん、鳥甘煮
一煮物　鰡切身、大根、
一小皿　柿なます、花かつを、
一香の物　千枚漬、かぶら、

一菓子　吉野饅頭　勅題　雪中の松、干菓子。

◎蜜柑

幸なる蜜柑よ、多くの果實が凡て意味なき時季に生まるゝに似ず怜悧うも除夜の鐘に愁雲斷たれし門松をくゞつて、四海波靜かなる年の初めのことほぎの、歡樂に醉ふ微笑人の寵兒となりつ、金蒔繪華かなる盃に盛られては、屠蘇一獻に微酔の姫が御料となり、雙六の賽一つ廻つては、雪かと白い美いちやんの油屋さんのポッケットにも入る。



面白かりし歌留多會の歸るさ、雪に更け往く冷たさを忘れて、さげし包みの小ささは何、友が情の温さを、未だ睡らで待ちて給ふか母の君。おゝ、榮ある使命を負ふて生れし幸ある蜜柑。

◎新年の娯樂

可笑しう羽根つきに暮れての長夜を、一家樂しうまとゐしての談話會、父上が丁髷時代の話から、太郎手代子は學校の受け賣り、乳母が在所のベイベイ言葉にお腹抱へさすれば、飽きての後に、罪なき遊びの双六はあり、百人一首の歌留多もよけれど、

お手付きにお白粉ぬられて騷がん程が興ふかし。恐ろしや近頃、何々會のチャンピオンとて、式部の君、殿方の骨立ちし拳、ものと思はぬ歌留多博士もお在しますとかや、聞き侍りぬ。上手も過ぎて技術となれば、自から趣味はそがるゝものぞかし。

子供にはドミノー、トランプ、花合せが面白からむ思はず他所に夜を更かして、歸さは雪の薄明り。「まあ女の癖に。」と母上の面輪、老ひての後の思ひ出の、嬉しきはゝ笑みの一つなり。

音樂は、ピヤノ、オルガン、ヴアイオリン、花瓦斯美しい西洋間にストウブたいて、親しき友と奏でんや、さぞや調はれぬ嬉しさなるべし。歌ならず、詩もならず、水仙凍る夜の小窓に、誰がすさびぞ。細く聞ゆる琴の音、哀れにゆかし。

◎晴衣と家の裝飾

門松くゞつて友を訪ふ、何時もの書齋なれど今日は心地よく飾られたり。お床の幅の松に鶴、餘りに平凡の圖取りと見れば、之れは又、筆は應擧その人なりし。鄙びたる枝ぶりの松が根に、笹龍膽の若紫を挿したる上の違ひ棚には、木版の湖月抄が、映入りの古びたる書籍が羅漢の像と並びて置かれつ、眞紅の椿が燃ゆる樣に只一輪、一段低い棚の上に。

少し廻りて今歸りし許りなりとて、衣桁にかけられし友が晴衣、目の覺むる樣なる心地のする、地は縮緬に少し藍がゝつた葡萄色、紋は上げ羽の丸胡蝶なり。稍高めなる江戸褄の裾模樣は幽といふよりも寧壯と云ふ可き笹の雪。

「何んて好い奇抜な柄でせうね」と思はず云へば、「「此の君」と、人驚かさん才もなき身に。」と躬なう謂いて友は笑ひぬ。

◎一年の計

一休和尚は、此の元旦の喜びの日に祝盃に醉ふ戸毎を尋ねて、髑髏をさしたる杖さし出し乍ら「御用心、御用心」と現なき醉人の腸を寒からしめしと、嘗てききぬ。之れはもう昔の事也。

近く日露戰爭の初めに於ける第一日の大勝は、作戰

計畫第一日のよろしかりしに原因すなど、今更いはじ家庭にありて、社會に出でゝ常におくれず時代の子たらんと願ふ我れ等は、今日より開らかるゝ一年の旅に向つて、奮闘の覺悟と、力と時間を損失せざる用意とを要するなり。一年の計は元旦にありと、旣に古人が幾度叫んで迷はんとする我れ等を敎へたりしや。

女三世相

女子の敎育が改まつて旣に三十年を經過した。然るにまだ實際の役に立つ婦人を作る方法が出來ないのは遺憾である。勿論敎育の外形は年と共に進歩する、けれども實際に當つて役に立つのは少い。數百千圓の敎育費を使ひ、可惜年月を空費して而かもこの得るところは生物識りと贅澤をする癖がついた位なものである。

この原因は何であるか試に其一二を擧ぐれば輕薄なる時代の潮流で婦人を無暗に持上げ過ぎた結果である、女學校の濫興もまた與つてゐる。敎育界のお勸め主義も原因の重部分であらう。無暗矢鱈に學問を崇拜したのも其の一つであらう。そこであらゆる婦人、あらゆる女性、即ち八百屋のお七も、鮨屋のおさとも、袴をつけて校門をくゞるに至つたのである、されば斯樣なつては親のしつけに最早舊式な父母の敎へも無用である、四年間學校へ上げて置けば、いづれ校長先生の方で立派な婦人の資格が造つて戴けて、その上、出來が良かつたらば、或は何爵夫人といふ樣な尊い身分に成れまいものでもないと大呑込みに呑込んでしまつたのが大なる間違ひの基である。

成ほどお定まりの學問は此通り出來る樣になつた。それから口を利かせれば相應に立派な事も言ふ風采も立勝つて見える、交際の仕方も滿更のおぼこ娘ぢやない、洋食のおけいこも出來たし、英語を挿んだ問答も達者なものである、成ほどこれならば敎育に物惜みをしなかつた丈の價はあると親兄弟の欲目には見えたであらうが、どつこい世間はさう甘く見ては呉れないのである。これ即ち女學生の三世相で始めよし中わろし末は大凶といふ現今の有樣となつたのである。

併し今日の大凶は他日の大吉を孕む因果の理法を考へて大に祝さなければならぬ、忍耐克己、玉を成すのは今日である、努めよ勵めよ。といさゝか婆心を捧げる。



女子大學 新年の寮舍生活

春霞

○冬の休暇は餘り長くもないので、其間に歸省でもしようといふ寮生は、よく〳〵故里の戀しい人か、餘程實家の近い人達かであるが、それでも各寮の家族と半數位に減るのである。廿四日の終業式が濟むと何の寮にもガラ〳〵と幾臺かの俥が來て、往つて參ります、御機嫌ようと送り送らるゝ聲の玄關に賑ふのも暫時、やがて俥の往つて了つたあとは急に靜になる。靜かにはなるが人數の少くなつたのと、時間のゆつくりするのとで、寮舍の生活はこゝに一層家庭らしくなり、御母樣御姉樣など呼びかはす言葉優しく、そろ〳〵お正月の仕度にとりかゝるのである。

○先づお天氣のよい日を撰んで煤掃をする。寮舍の煤掃には思ひがけないものを見出して打興ずるといふやうな事はあまりないけれど誰れやらの着物の上に浴衣を引張つた姿が振つてるとか、手拭のかぶり方がをかしいとか、互に人の上を笑ひつ笑はれながら元氣よく立ち働くさまはなか〳〵陽氣なもの、天井を掃ふ、障子をはたく、塵埃を掃き出す、さてソーダをとかした水で鴨居から柱、疊、敷居、廊下といふ順に丁寧にふき、終に障子を張り換へる。人數がそれ〳〵分擔を定めてとりかゝるのだから譯はない。晝頃には主婦が下女を相手の臺所掃除も大方片付いて、食膳には相應な御馳走も供へられる。お晝からは湯にでも入つて靜に疲れを休めるばかり。

○次は餅つきである。お餅は各寮とも一人前二三升位ゐのあてゝ、搗手は無論男を雇ふのであるけれど、寮生が出て其監督手傳をする。學校の割烹室にポツンポツンと杵の音が聞えはじめると『今度は何寮の番です

から」といふ通知が順々に廻る。通知のあつた寮は出て行つて搗き上つたお餅を受取るのであるが、まづ大きなお供を一組こしらへたあとは鏡に伸したり小お供にまるめたりして寮舍へ持ち運ぶのである。若い人達などはお餅を見て、もうお正月が來たやうな氣でもするのであらう。ニコ〳〵とさも嬉しさうに見える。

○其内各寮の門には〆引き渡され、松立てられて愈々お正月らしくなつて來る、購買會には歳の市が立つといふ譯でもないけれど、四ケ村約三十ケ寮からそれぞれ注文が出て、彼方此方と品物を持ち運ぶ有樣はまた寮舍の歳暮に於ける景況の一つである。一體三四年前までは歳末の買物など、出入商人の手にのみは任せずに、主婦自ら女中を連れて、水道町や、神樂坂邊まで買出しに出かけた事もあつたが、校內に購買會が設けられてからは、特にその要もなくなつた。

○各寮の裝飾は思ひ〳〵に趣向を凝らすのであるからもとより一定しない。まづ食堂の如き其の寮で主だつた室へ、不用の机本箱などで床の間を設け、それにお供の三寶をかざり、花を活け、果物籠などをあしらふことは何の寮も大抵同じやうなものであるが、其他室室の飾りなどは或は純粹の日本風にして茶室などの設置をするもあり、或は應接室遊戲室などゝ室を分けて西洋風の裝飾をまねぶ向もある。もとよりそれ等の裝飾をするために、特別な費用をかけるといふやうな事はしないので、たゞ寮內有合のものを應用して、それぞれ思ひ付きを見せるといふに過ぎない。お料理の方も鱓數子などを法の如く用意することは、何れの寮も變りないのであるが、重詰や其他の料理に至つては各寮とも日頃の練習をこゝぞとばかり心をこめるので、手並のほどとり〳〵に見事なものが出來上る。

○とにかく大晦日の夕暮迄にはお正月の仕度もすつかり整ふ。夕食にお定りの蕎麥を味ひながら、お互に國の風など語り合ふて笑ひさゞめく處はもう春のものである。がこの夜は何れの寮でも大抵除夜會といふものを開き、眞面目に過去一年間のわが月日を省みて歳暮の感を話し合ふことをする。誰も自分の務や責任を滿

足になし終へたといふ人はないけれど、所詮逝く年に未練を殘さむよりは、來む年に希望をかけて勇ましく新年を迎へようと決心する。さて快く茶菓を喫し、今年に於ける最後の挨拶をとり交して各自の室に退くのであるが、今夜ばかりは就床時間も例外を許される。大晦日に早寢をすれば老けるといふ諺を恐れる譯ではないが、さすがに殘る今年の幾時間は思ひ捨て兼ねるので、何れも百八の鐘を聽く迄は起きて居る。かくて歳暮の感を書き記すもあれば、年始狀を認むるもあり襦袢の白衿などをかけかへるのもある。

○明くれば元日、昨夜は晩くても今朝朝寢する人はなく、四時頃になるともう何れの室にも燈火がつく。廊下にお早うお目出度うと呼びかはす聲まづ元氣よく、洗面所に於ける冷水摩擦の仕方なども皆勢がいゝ。手早く髮を結ふて着物を着更へると、やがて食堂の鈴が鳴つて屠蘇の式が始まる。眞白い布で掩はれた食卓の上には梅の盆栽、水仙の花瓶など、互に清新の色香競へるも床しく、年齡の順序に從つて席につくと、數子煮豆をつけ合せたお小皿がほんのおしるしまでに各自／＼の前に運ばれて、朱塗の盃に載つたお銚子にお盃とは最も年の若い人の前に据えられる。まづ『御目出度う御座います』との挨拶が濟むと靜かに朗かに君が代を唱する。それからお盃を廻すといふ順であるが、最後に寮監のお母さんから年頭の覺悟といつたやうな敎訓的の御話があつて、この屠蘇の式は何處までも靜肅眞面目を以て終る。こゝに一同は一まづ散會して更めて學校の祝賀式に列る用意をし、やがて炊事係の方でお雜煮の仕度の出來るを待つて、再び食堂に集るのである。此時は各自の前にお口取をはじめ、お料理のかずかずがとり並べられてなか／＼賑かである。但しこれはさる一寮に於ける元日の朝の事である、元日の祝ひ方は家風に依つてそれ／＼趣きを異にするごとく寮舍に於ても各寮其風を異にして居ること言ふ迄もない。

○さて時刻が來ると、寮生はぞろ／＼と學校さして出て行くのであるが、折柄運動場の梅もチラホラにほひ初めて鶯の初音に耳驚かさるゝやうな事もあり。いづ

れも晴やかな顏におめで度うをいひ交して講堂に入れば、やがて祝賀の式は初まる。君が代、勅語奉讀、總代の祝賀などそれ〳〵恭々しくとり行はれて、校長先生や先生方の御話もあり、式の終るのは大抵お晝頃の事である。學校から歸るとまづ寮々の主婦が自寮の名刺を持つて、校長學監の御宅をはじめ他の寮々へ年賀廻りをする。其他の寮生もまた互に訪問し合ひ、通學生の年賀に來るもあれば、寮舍の玄關はその應接でなかなか忙しい。引きとめてかるた會を催すもあり、料理を誇るもあり、裝飾を見せるもありて皆思ひ〳〵に客のもてなしを努めるのである。

○三ケ日間は寮生は外出を許されない。三々伍々火鉢を圍んで樂しく語るあれば、新刊の雜誌に讀み耽るあり、手紙書くあり、歌うたふあり、琴彈ずるあり、若き人達などは運動場に出て羽根つきにテニスに打興ずるもありたゞ思ひのまゝに春の長閑さを味ふて、面白をかしく暮らすのであるが、四日になると何も外出して親戚知人或は舊師のもとなど廻禮し、世のお正月のさま〴〵を見聞して歸るから寮舍の夜のまとゐはまた更に賑ふやうな譯である。さては寮舍々々で互に招んだり招ばれたりして新趣向の遊びに新年の興を添へ其内にはまた、寮舍全體聯合の新年會といふやうなものも催される。對話、活人畫、音樂など寮々の出しものには、それ〴〵其寮の特色をあらはした思付面白きもの多く、お客樣の校長さんや先生方の隱し藝に顋をとくといふやうなこともある。

○もとより善學善遊の主義で養はれて居る寮生であるから、お正月だからとてたゞ遊んでばかりは過さないことに新年は來て學生の身の歲暮が近く譯なれば、三年生などより〳〵小集を開いては前途の方針を語りかはし、卒業後の決心を示し合ふて居る。とにかくに始業の日も近づけば歸省した人達もそろ〳〵歸つて來る寮舍々々は人數の揃ふた處で更めて新年を壽ぎ、今年に於けるお互の幸福を祈るのである。

東洋婦人に特有するヒガミを持て
嫁と姑の反目する實例

嫁と姑とはお互に好意を竭さねばならぬ理由を裏面より警告したるものは是れ也

薄氷女

姑の側

今日も早朝から、思ふまい〳〵とは思ふけれど、自烈度くてならない。嫁も嫁なら息子も息子だ。いくら心地が惡いからと云つて、良人に勝手元の用事なんぞをさせるつて云ふ法があるものか。私などは賴んだつてしても下さらなかつたが、姑御も又八釜しい御方だつたので、よしんばにゑかへる程お腹が痛んでも、下女の居ない時には押へてはこらへ〳〵して無理にも働いたものさ。あんなにスヤ〳〵眠られる位の痛みなら、少し辛抱して居れば直に全快つてしまふだらうに。一體に今時の若い者には辛抱するといふ事がとぼしい樣だ。そして又痛いなら痛いで何も見苦しい男に働かせなくても、齡こそ老つてもまだ六十に間のある私と云ふ女が家にあるに、始終私に向つて、

「どうか嫁だと思召さずに、實娘だと思召して、御遠慮なんか少しでも遊さない樣に、私も亦決してわけへだては申ません、もう母のない私ですから、なほさらわがまゝも申上ませうし、本當の母樣の樣に思つて居りますのですから、ドン〳〵遠慮なしに、私も賴みますから、行渡らない處や何彼は何卒御叱りなすつて下さいまし」

なんて體のよい事云ふ癖に。そんならさうで今朝の樣な時には、一寸「かう〳〵だから」と云ふて起したら、快く働いてやるものを矢張り嫁根性を出すから。

私がさう言へば美代も倘也も『そんな心でしたのぢやない、それは貴女のひがみと云ふもので、男が臺所元をすると見苦しいつたつて、他人が見るぢやなし、朝は寒いからそれで起さなかつた』

と云ふ。成程親孝行なこつた。併しまだ私は朝霜におぢける樣な人間ぢやない。『まア可いさ。すんだ事は。兎に角是れからは私がするから遠慮しないでさせておくれ』

と云つておく。後から考へて見りや、滿更惡氣ぢや無かつたらしい。

十時頃にかねて頼んで置いた魚安の主婦さんが、下女をつれて來た。齡は十七とやら、至つて田舍々々した娘。前のお咲から見ると半分も役には立つまい。お咲は本當に若いに似合はずよく氣のつく女だつた。

性質が惡いからつて私の不贊成にもかまはず出して仕舞つたが、とても今度はあんなには行きさうもない。まア可いさ。使ふ當人の氣に入つてさへ行けば。幸に此の田舍らしいのが大層美代の氣に入つたらしい。サアこれを人並に仕込む迄には、さぞ骨が折れよう。

魚安の主婦さんと行きちがへに、新藤の御隱居さまが來らつしやる。相變らずにお道さんの御不平。何でも此間からは、一入で御先祖樣からの小柄だの、お刀の鍔なんぞは申迄もなく、亡なつくた旦那樣の大切になされた茶の湯の御道具の天目や、なつめなんかを、子供衆の玩具にさせたり、粗末に扱つて破つたりするので、それを御とがめなさると、若御主人が、

こんなものを大事にしてどれ丈の事がある、使はないものだから好いでせう、なんて云はれるので、まだ私の生きて居る中は、そこらで見當れば仕舞つても置くが、死んだ後ではもう茶々無茶苦茶は見えすいて居るから、それよりは私が賣拂つて老後の小使にした方が、破つたりこはしたりするより、好きな方の手に渡つて大事にされる方が、御先祖樣も喜ばれようと思ふから、どうぞ道具などを好む方が御知人にあつたら世話してくれい、と仰有る。いくら若い人達のする事とは云ひ條、少なからず呆れざるを得ない。さう云ふ事

は又宅の美代には決してない。尤も新藤さんの様に立派なお家柄でもなし、玩具にしてこはす子供は一人もないし、嫁の實家も此家もほんの士族のお裾の方で澤山好い物を見つけない爲でもあらうが、性質にも依るが、大變大事にしてくれる。それにしても新藤さんの品物は實に惜しいものだ。大事にするとは云へ、倘此の上にも心懸けて氣をつけねばならん事だから、嫁に、

「他人事と思はずにお前も能く氣をおつけ」

と云て置く。正午にもなつたから、美代も好きの事なり、おすしを取つて御隱居様に上げる。

どうした事か美代は何も頂かない。

「何故だえ」ときいても、

「欲しく御座いませんから」

と云つて些とも食べない。先刻一寸云つた言が又氣にでも障つたのだらうさ、何の彼のと六づかしいものだ。新藤の御隱居様も、色々と御話の種が盡きないので、四時頃にやつと、

「ヤレ／＼命の洗濯をさせて頂いた」

と仰有つてお歸りになる。五時半には悴も歸つてくる。上へ上るか上らないに、私逹への挨拶よりまづ、

「どうだつた、大した事もなかつたか」

つて尋ねて居る。美代も又留守中には随分起きなほつて話をしたりして居た癖に、さも切なさうに、細い蚊の泣く様な聲で、

「矢つ張りどうも不可ません」

なんて云ふもんだから、倘の事大層もない心配をして居る。併し好い方ぢやアないと見えて矢つ張り御飯を頂かない。悴は氣にして、

「朝からちつとも食はんのか、それぢや倘身體が弱るぢやないか、何か欲しいと思ふものがあれば、考へ出して食つたら好からう、エヽ何か食つて見ようと思ふものはないか」

と云ふと、

「うなぎならと思ひますけれど」

つて澁々云ふ。

「手安い事つた、取つて食べたら好いぢやないか」

『でも私計りつて譯にも行きませんからまア止めませう、大層な事になりますから』といふ、私は聞かねて、『大丈夫、達者な私迄子供ぢやあるまいし、食べやしないから、取つて食べたら好いだらう、他の時ぢやなし、誰しも病氣の時には仕方のないものだから、そんな變な嫌味たらしい事は云つておくれでない』つて遂云ひ度なる。一寸云ふとすぐメソ〳〵泣き出す。何時もの癖なので。

此が儉約つて云ふのかは、しらないが、いやしい事を云ふ樣だが、まことに食物にかけては締りやだ。私は女だからよいが、お老父さんは餘程弱つて居らつしやる。夫婦とも變にふくれて嫌な顔して居るから、見ない風をしてサッサと食べて隱居所へ這入つて仕舞つた。居ない後で甘へ樣と泣かうとそれは御勝手さ。おとなしい美しい顔して居て、彼れで却々一通りでないつて事は、先に居たお咲も云ふし、大山の奥樣からも聞いて居る。子供も年を老つては女の子の方が便りになる。嫁と云ふものが恐ふよ、男はもう親なんぞは目の中にないらしい。

嫁の側

今朝は心地が惡いし。下女も居ないので、『己がしてやらう』と仰有つて下さるので、濟まないとは思つたけれど、お情けに甘へて、遂旦那樣に起きて頂いたら、マア大變、姑樣の御氣に障つて、どう仕樣かと思つた。惡氣でしたのぢやないけれど、仕方がない。色眼鏡で見られゝば赤いものも青く見えるのだから。でも好い按排に魚安の主婦樣が下女をつれて來てくれて安心した。ほんにどうしようかと心配した。今度のは田舍者で大變内氣らしいから、世話はやけ樣が、反つて好いだらう。先の咲には本當に困つたから、一つ具合よく敎へ込んで見よう。

新藤のお道さんも御可哀想に、私だつて始終上つて知つてるけれど、そりやどちらかと云ふと氣の大きなやりつ放しの方だけれど、まさか彼んなに仰有る程おやあるまい。見た處では、御兩親も大事に、がら〳〵

した方丈に反つて隱しだてもなく充分にして上げて居らつしやる樣子だし、まことに附合の仕好い奥樣だけれど、姑御樣からは矢つ張り蔭であんなに云はれて御出でなさる。彼の方でさへお云はれなさるのだから、私なんかは無理はない。

御老父樣の方は殿方の事ではあるし、御氣に召さない事はサツパリと仰有つてい下さるし、お叱りもなさるから好いけれど、どうも姑樣は嫌味つて云ふのか、當てつけつて云ふのか、これは私にぢやないけれど、此の間も石坂の實妹が來て、何かの話序に今洋行して居る伊佐雄さんの事を、私が、

『他國ではあり、萬事に不自由してゝあらう』

と云つたら、妹は、

『さんざん不自由をするが好う御座います、さうすればちつとは女房の有難味が分つて今度歸つたら可愛がつてくれませう』

つて云つたら、一寸した一言だけれど、

『貴女でも女房の有難味が分る樣な事をしておいたか』

と言はれる。よく御存じのくせに、彼の妹の事だからムツとはしたらうが、顔色なんかには出しやしない。

『エヽ〳〵、しましたとも〳〵、あのやんちや坊樣を云ふなり次第に甘やかして泣きましたものなんて茶かして笑つて仕舞つたが、後で妹は、

『なんてまア憎らしい口を利く人だらうネ、姉さんにも始終あんなゝの』つて訊くから、

『どうして〳〵、それ位ぢやないわ、眞綿に針で、キピキピと私達には氣の毒で云へない樣な事を、ズカリズカリとさす樣に仰有るのだもの』

『私にやお前の樣に呑氣に笑つて居られないから不可ないの』

つて云へば、

『いくら馬鹿な私だつて、始終ぢや堪らないネ、併し姉さん、貴女は兄さんが優しいから、これ位の事は辛抱なさい、私の樣に肝腎の御本人があれぢやアネ、實に呑氣も程に云つてなけりやなりませんからネ、加藥

の兩親なんかの云ふ事は、好い加減に氣にしないでプーイプイと飛ばしてお置きなさい」つて云つたが、ほんに妹は可哀想に、旦那で一方ならぬ苦勞をする。一體に小さい時から呑氣で氣の大きな女だから、笑談云つたり笑つたりして暮して居るが、もし私だつたら病氣にでもなつて仕舞ふだらう。彼の妹の樣に當の本人で苦勞をする事を考へて見れば、私はまだ〳〵幸福なんだらう。それにしても世の中は六つかしいものだ。お夜食の時だつてさうだ、あんなに仰有つたつても、もしや私一人で取つて頂いたら、何んて仰有るだらう。口つてものはどうでも調法につかへるものだ。御部屋へ入らしつてから後で旦那樣が、



「氣にかけないで取つてやらう」つて仰有つて下さつたけれど、無理に止めて、味はないがお粥を一膳、あんまり心配して下さるから頂いた常に姑樣は、『私は姑から意地目られて苦しんだから、私はもう決して嫁いびりなどはしない積り、實娘と變らずに叱りもするから惡く思ふな』と仰有るけども、私のひがみか何か

知らないが、今井の義妹なんかに仰有るのとは、どんなにくらべても違ふから仕方がない。又彼の義妹が少しはなだめる様にでもしてくれゝば、少しは仕好いのに陰へ廻つてはなだめる處か何の彼のとつゝくので、尚仕難くなる。

と云つて、何の彼のと細かい事を旦那の耳に入れゝば、向ふは親身の中だから、遠慮なしにズカ／＼仰有るし、さうすれば又そのおかへしは私に當たられて、尚御互の感情を害する計りだから、めつたな事は旦那様にだつて話せやしない。私一人で苦勞してなけりやならないのだ。それで居て世間へ出れば、

「宅の嫁が／＼」

つて一寸した事までも吹聴されて、ア丶／＼つまらないものだ。

再び姑の側

ア丶嫌だ／＼、今日も亦出て仕舞つて、お正午のお菜も何もこしらへて行かない。一家の取締する主婦が、毎日これぢやおさまりがつかない。それに一錢のお小使も置いて行かないし、まさか私達に御漬物で食べさして置くつもりぢやあるまい。それとも此間不足を云ふたを根に持つて、私達は私達で勝手に自分の金でこしらへて食べろとでも云ふつもりか知らん。併しもしそんな恐ろしい根性だとすれば實に末が案じられる。そりや魚屋も八百屋も帳面で取つておけない事はないが、又拂いが多いのなんのとブツクサ云ふのを聞くのが嫌だ。お老父さんは、

「そんな事があるものか、どし／＼構はずに買へば好い」

と仰有るが、私はたとへ漬物ばかりで食べても、決して取らない。もし留守にするのも、これが一日や二日ぢやない。これで五日になる。毎日々々十時頃から出て三時を過ぎなけりや歸らないのだもの。實に亂暴な話だ。今日はまア一つ悴が歸つたら、悴の前でよく話して、その話の都合に依つたら、當分今井へでも云つてやらう。お老父さんは、

「彼の嫁も好くないが、お前も最少し可愛がつてやれ」つて仰有るが、私はいくら可愛がらうと思つても、彼方がアレぢやどんなにしても可愛がる處か今ぢや憎うて憎うてならぬ。此間今井のおいさ（娘）も云つたて、一體伜があんまり嫁をかばひ過ぎるから増長するのだ。も少し確りとして、良人らしい威嚴がなければ不可ないのだ。おゝ伜と云へばもう歸る頃だらう。歸つたら一つ今日は云ひませう。オヤ歸つたらしい。何を話しくさるか。一つ立聽をしてやれ……何だつて。

「さうか、それは面白かつたらう」

だつて。何が面白いものか。そんな事だからこんな事が起るのだ。實に自烈つたいぢやないか。この樣子ぢやもう聞かなくても何も彼も分つてる。明日は此方が出掛て歸らずにやらう。

晩食の時に私は默つてたが、遂々お老父さんが仰有つた。

「何が不足か知らんが、一家の中でこんな事では取締もなにもなくなるから、お互に打ち明けて話してしまふ方がよからう、一體何用があつて、毎日留守にして仕舞ふのか」

つてお訊きなされたら、

「別に用も御座いませんけれど」

と云ふ。

「用もないものが何故出るか、留守にして菜もこしらへて行かず、毎日母樣が困つて居る、これで五日と云ふものは己れには正午食は漬物計りで食せ居る」

つて仰有ると、伜が、

「毎日魚屋も來るのですから、他家の人ぢやなし買つて下されば好いに」

と云ふ。私がムッとして、

「又後でとやかう云れては嫌ですから子」

つて云つたら、

「それだから不可ないのです、此間も此妻が御菜のこしらへ方が不味いと仰有るから、お好きなものをと云ふので貴母に相談すると、少しも快く云つて下さらんさうで、ましてや私の居らん時には隨分當てつけた

事など仰有つたりするので、實に弱つて陰ちや大變心配して居るのです、そりや、毎日それが嫌だと云つて家を捨てゝ遊びに行くと云ふのは、此妻が惡いですが、貴母もちつと考へなほして、圓滿と云ふ事を計つて被下る樣にして下さいまし、たゞならぬ身體で神經も高ぶつて居ることですから、少しの事は大目に見て被下らねば困ります」

なんて勝手な事計り、親を親とも思はない言葉だから私も意地惡と云はれついでに、

「どうせ私の樣な者は譯が分らないものだから嫁の御機嫌取りは出來ない、仕方がないからまア當分私達は今井にでも行つて逗留して、又少しお前達の風向のよくなつた頃に歸つて來よう」

と云つて、何の彼のと夫婦して不服を云ふけれど、もうそんな事は耳には入らない。お老父さんも、ちとそれぢや穩やかでないと仰有つてだつたが、後で私がよく申上たら、矢張り嫁の處より實娘の方がよいから、不承々々な樣だつたが明日から當分今井行きときまつて、久々で樂しい心地がする。丁度此間今年は冬仕度も充分してないので、忙しくて困ると云つてたから、私が行つてる間に手傳つてして來てやらう、おいさもよろこぶだらう。

再び嫁の側

一日〱に六つかしく〱仰有出して、私は〱もうもう〱本當にどうして好いんだか分らない。仰有る通りに、お氣に入る樣にと思つて物を伺へば、變に變に、妙な、私の樣な悟りの惡いものには分りかぬる樣な事計り仰有つて、少つとも分らない。あんまりだから、私が居なけりや反つて又好きな樣にも遊ばさうかと、外へ出れば、出たと云つて今日の樣な騷ぎ。これと云ふも皆私が行き屆かないからぢやあるけれど。旦那樣にも散々お氣を揉ました揚句が、とう〱無理やりに今井行き。

それや可愛い娘の處だから好からうが、實娘計なら好いが、婿と云ふ他人がそふて居るから、時々にお遊

びに來らつしやる時の樣には恐らく長の月日ぢやつゞくまい。

どうせ當分の間だらうけれど、私の爲めにはその間が、……マア仕方が無い。世間からは又色々と惡く云はれ樣けれど。どう申上ても聞き入れて下さらないから、何も皆約束事。早く坊やか孃やか知れないが、生れたなら御兩親との間も調和がとれて來て、都合もよからうけれど、アヽ早く生れてくれゝば好いにとつくづく思ふ。

何の彼のと、此間からのゴテ〳〵でクサ〳〵して、今日の日記は思ふ樣に筆が廻らない。併し打ち明けた處、私の今日の心中は煩悶と樂とが半分づゝ戰つてでも居る樣だ。





新年を迎ふるに就ての樣々の風儀

世界各國の正月

△喇叭を吹て練り歩く

正月を迎へるに就ては、各國色々の風儀がある。先づお隣りの米國から言つて見ると、一體米國人はクリスマスを以て一年中の安息日として大騒ぎをなすから、お正月と言つても誠に淋しいものである。成程白館へ行つて見ると、大統領は元日一日は萬民に門戸を開放して何人にでも握手の權利を與へてゐるから、此處は流石に賑はつてゐるが、其他は極親しい友人間に年始狀を贈答してお目度うを交換する位に過ぎぬ。蠟燭遊びと言つて、盥に水を滿え、其の中へ火を點じた蠟燭を板片に載せて浮べ、早く火の消えた蠟燭の主は一年中幸福であると云ふ樣な遊戯もやるが、之れはほんの子供遊びである。殊に米國にて新年と呼ぶのは僅に一月一日のみで、二日からは全く新年と稱へない。田舎の勞働者などは、元日でさへ平日の如く働く位で、二日以後は殆んど平日と異らぬ。最も大晦日の晩には、新年と舊年との分れる時とて、其夜は九時頃から一家總出で喇叭を吹いて歌を怒鳴りつゝ市街に出で、男女老若押し合ひ乍ら、恰も我國の祭禮の樣に意味も無く騒ぎ廻はり、平常は婦人を尊んで戯談一つ言はぬ同國人も、此の晩に限つて婦女子に觸れても、其が餘り性質の良からぬ悪戯ならぬ以上は、只默笑するのみで彼等はコンヘテと稱する我國の幣の如きものを、女は男に、男は女に振り懸け乍ら互に笑ひ騒ぎ廻はるが、同夜の十二時に至ると、鎭臺にては祝砲を打ち諸會社工場にては一齊に汽笛を鳴らす。其れと同時に此等の群集は喇叭を一度にブーブーと吹奏すると云ふ大陽氣を演ずる。其他はお正月とても別に平日と異る事はない。

△異境の歌留多會

然かも同國に在る我同胞のお正月は如何と云ふに、日本人は矢張り何處に在つても日本人で、桑港の如き澤山日本人の集合せる處は勿論、地方の山中などに勞働してゐる同胞も、正月には必ず仕事を休み、我國にあると同樣に門松も樹てれば、國旗も揚げ、如何なる貧困者でも餅と屠蘇位は必ず用意するし、知人間に回禮を爲す外、獅子舞もあれば、寶賣り、厄拂ひ、賣初めなどもあつて、本國に居ると少しも變らぬ。其他新年宴會や、婦人會などを催して松の内七日間は飲めや歌への大騒ぎな

するし、下戸や婦人の間には矢張り歌留多會なども催されるので、一月中は何處にでも毎夜々々歌留多遊の聲が洩れ聞える。

△赤き實の草を飾る

海を越えて歐洲の樣子を見るに、英國にては鴨居などに蔦やせんりやうなど云ふ類の赤色の實を持つた草を飾り、却々盛な裝飾を施して新年を迎へる。元日の御料理はロースビーフが主で、菓子はプロンピリン及びマンプヌイ等である。酒はランパイシユと定まつて居る。之を日本に對照すると恰度我々が雜煮を食ふやうなものである。そして其夜は一家團欒して色々面白い話をする。或は其の席で日本の樣に面白い正月向の遊戯なども行ふ。佛國なども新年を迎へる樣は左まで異つた事はない。そして歐米一帶に、諸官省の主要の地位を占むる人が、其の屬僚の祝賀を受け、又他の人を訪問して年賀を述ぶるなどは日本と大抵似て居るが日本の如うに「一年の計は元日にあり」などゝ只管に樂しみ歡喜して新年を迎へる風は無い樣である。又年賀狀交換の風も、全く行はれないではないが、日本の樣に盛んではない。

△鯉のスープを啜る

獨逸などの樣子を見ても、年賀の禮も日本の樣にだら〱と松の内にすると云ふ樣な事も無く、年賀狀とても其通りで、其の元旦も日本人の目から見ると何となく足りない樣な氣がする。併し獨逸の大晦日の賑かさは格別である。日本では夜が明けない内はまだ新年の部に入らないが獨逸では除夜の鐘が四方の寺々から鳴出すを合圖に、殊に大晦日に限りて用ゐる一種のパン菓子を食べ、鯉のスープを啜る。そして往來では、其の除夜の鐘が鳴ると、行來ふ人が、互に知つて居ようが知つて居まいが、又室の内と往來とでも、顏を見合せさへすれば、雙方からお目出度うと言つて挨拶をする。若い娘達の遊びとしては鉛占と云ふのがあつて、それで明年の運氣を見る。その方法は溶した鉛をワユツと水の中へ流し、その鉛の恰好が立つて居たら紳士と結婚が出來るとか、横に成つて居たら何うであるとか、各々鉛の形狀に依つて、老人だとか若い男だとか、色々勝手な判斷を下す。此れも大晦日の夜にする事である。

△日本と十三日違ひ

露國の新年は何うかと云ふに、露國は日本とは曆日の上に於て十三日間の相違があるから、元日も從つて其れ丈け遲れる譯になる。そして露國の十二月廿四日（日本の一月六日）の夜は、露國のクリマスに當るが、其れより元旦へかけて各戸は賑かで、知己朋友を自宅に招き、或は招かれて、互に饗應する。露國にても、新年になると、獨逸に行はれる樣な占ひが行れるが、露國では鉛の代りに蠟を用ゐる。其の方法は、矢張り獨逸の樣に解かした蠟を水中に落して、其の凝りたる形に依て吉凶を占ふのである。或はパンの中へ金貨を人知れず入れ置き、多人數集つて食する際、之を得たものが年中幸福だと云ふ樣な娯樂もあるし、又コップ

に水を入れ、其中へ指輪を落して、波動の具合を見て各人の未來を占ふ樣な事もする。

△一種特別の正月

ずつと懸け離れて變つてゐるのは印度の正月である。第一印度の暦は日本の暦とも違ひ、支那の暦とも違ふ上に、太陽暦と、太陰暦と、尚ほ我々の用ゐてゐる西洋暦との三つあるから、正月も矢張り三つある事になるが、其の印度の太陽暦に依ると、正月元日は日本の四月九日にあたる。かく正月が夏であると云ふ事からして既に我國や其他とは異つてゐる上に、西洋で一月一日よりもクリスマスの方が日本の正月らしいのと同じ樣に、印度でも無憂日と云つて女子が寺詣りして一生の幸福を祈る日とか、斷食の日とか云ふ一種の祭日、祝日には非常に祝つて面白く遊ぶが、年が改つても、さまで格段に感じない。或は室内に一種の木の葉を飾り、壁に天の十二宮の圖を書いた紙を貼つて祝ふなどの事もするが之れは正月のみならず、他の祭日、祝日などにもする風である。

△嚴かなる天拜式

支那の正月は陰暦であるから、大晦日は三十日になる。當日は我國同樣に大掃除をして、正月三日間は掃除をしない。扨て大晦日は十二時か一時に門を閉ぢて、翌一日の朝五時から開く。之を支那では「財門開」と云ふ。そして門外では青年が集つて盛んに爆竹を鳴る。一體此の爆竹と云ふものは、支那では寺内に行ふもので、丁度當國人が鐘の音を喜ぶ樣に支那では此爆竹を喜ぶ風がある。軈て其の中に門外では机上に蠟燭を灯し、香を燒き、黑豆、蓮子、棗子等の交つた高貴の菓子を供へて天拜式の準備に取りかゝる。扨ていよ〳〵用意が出來たとなると、一家の主人が先づ出でゝ此の嚴かなる式壇の前にて天拜を行ふ。それが濟むと室内に於ては同日に祖先に對する祭祀を行ひ、主人先づ拜をなし、家族之に次で禮拜し、後蓮子を茶碗に入れて食する習慣である。五日目も亦同樣な式が行はれるが、料理は魚(油煮)、里芋、芋頭、ソバ、飯は豆交りのものである。十五日の夜は團子を造り、色々御馳走をして、一家集つて罪もない遊びをする。

△茶　禮

韓國でも茶禮と言つて、元旦には矢張り支那と似た儀式がある。之れは祖先代々の祭祀で、佛壇の前に祭床としてテーブル樣の物を安置し、其上に酒、餅、蕎麥、牛肉、魚、野菜、果物、菓子などを供へ、主人を始め家内の男子は其前に跪づき、焚香とて我國に云ふ燒香をなし了つて再拜を三度する禮で、男子が禮拜を行ふ間女子は皆室内に安坐してゐる此の式を了つた後供物を下げて會食するが、之れで元旦の家内の儀式は終る。それより男子は夫々年始廻りに出掛ける。之れは我國と違つた事は無い。



上手に書かんとする人の撰むべき毛筆

星野天知

△讀まぬ同志、書かぬ同志

昔から見ると文字を書く事は一般に多く成つて居るのに、字の下手に成つた事は夥しい。下手に成つた計りでなく、一體書法といふ事が無茶苦茶に成つて仕舞つた。それ故書法に關係したものは何れも素人瞞しのものに成つて仕舞つたが、殊に筆ほど酷く成つたものはない。唯體裁計り立派に成つて其製法などには一向重きを置いて居らぬ。職人共が唯「數物」だの「問屋物」だのといふ呼聲の下に、成丈け手間の掛らぬ事にのみ專心修錬してゐるから、價は安く成る、數は多く出來るが、其代り製法は誠に粗末なものである。そして高い獸毛を使ふものは容易に見る事は能きなくなつた。又筆職人も其の製法を全く知らなく成つて來た。買ふ人も知らないから、矢張り其筆を買ふて、筆は安い物と思込んで居る。鳥渡見て同じに見えるから安い方へと懸る。之が「讀まぬ同志、書ぬ同志」といふものであらう。

△能筆家は筆を撰ぶ

然れ共筆は高くとも良いのを買はねば損である。安けれは第一書難いし、書難ければ字を書くのが苦痛に成る。と苦痛といふ感じが字を下手に書かせる。下手な字を度々書くと終に下手な手に成つて仕舞ふ。それ故能筆家は恐れて筆を撰むものである。「能筆は筆を撰まず」といふ諺は、惡い筆を下手な人が使ふと益々下手な字が出來るが、能筆家が其を使へば流石に立派な字

が出來るいふ、塲合をいふので、馬鹿も使へば使へるものといふ意味である。其能筆家が良い筆を使ふのだから益々立派な字が出來る譯だ。又惡い筆は切れ方が早いから、安いやうでも高く付くもので、經濟上にも損である。それに惡い筆を使ふ人は兎角平常切れた筆を我慢して使ふから、何時しか書痙病に犯される。それは、指先きの神經に痙攣性の習慣が着て、字を書かうとすると指先きが堅く剛く成つて、思はぬ所へ筆が走るものである。柔かに緩々と筆が動かないので字の角が尖つて角張るやら、筆が紙の上を飛ぶやらして自由に成らぬ。釘の折れや、髭題目や、鹿角菜の行列だなどと惡口言はれる字は、重に此病の故である。之れは其人が神經病でない以上は惡い筆を使つた罪である。

△良き筆に用ふる毛

筆の良否を見分けるには、第一に毛質を見るのだが、之れは婦人方に面白くない話だから廢めとして、少し計り細筆に就て其毛の名だけでも述べて置かう。

上代樣の貫之や、道風や、佐理卿や、行成卿や、公任俊賴などいふ人の用ゐた筆は、狸毛に白黒鹿眞の夏毛、多毛で作り、御家流の親王達は、始めは兎毛で、後には冬鹿白眞と夏鹿青味と、それに白狸を交せて製り、弘法大師は狸毛で作らせたと云ふ。今日でも矢張り細筆は日本の狸と、玉毛といふ猫毛で製つたものが細密なものが書けるので一番だ。貂や栗鼠の毛で製したものは又一段と品が善くなつてくる。商賈人は日本の狸は高價だから舶來の狸を用ゐてゐる。玉毛は、これも非常に高いから少し計りを割込む位である。或は貂と言つて鼬を用ゐ、栗鼠と言つて香狸毛を用ゐる樣な事もする。白眞といふ鹿毛も好いものだが、矢張り高價だから割込む事も仕ないといふ。素人には恁う云ふ者は容易に見分けが付かないから從て安い物安い物と用ゐるが、早く切れたり書難かつたりするのは當然である。羊毛は支那流の筆には用ゐるが、餘り面白く書けないから、日本の筆には昔から用ゐてない。

△筆の四德と仕舞ひ方

次に筆の出來方を見分けるのが肝腎である。それには筆の四德といふ事を心得て置くがいゝ。即ち毫が鋭くて纏りの良いものは其先きが尖つて居る。次には毫が充分に揃つて居るもの、其次は毫が能く練交せて形が圓く成つて居るもの、それから其根が能く緊つて丈夫なものが良いのである。此四つ



を尖齊圓健といつて四德として居るのである。序に云ふて置くが、筆の首を其軸へ着けるには、畫筆なら常に水で洗ふ所から漆で着けるが、書筆は膠で着けるから、度々洗へば拔けるのが當然だから、成るべく洗はぬ方が良い。尤も心無筆なら隔時に洗ふのは構はぬ。まして散し毛の筆は、水筆といふ位だから、尚更構はぬが、矢張軸の首まで水に入れぬが宜し

い。素人は首でも拔けると悪い筆だと思ふがそんな事はない。拔けたら膠で着けて貰へば何の事はない。決して筆の良否ではないのである。

△筆の製し方と使用法

筆を拵らへる本法といふのは、鋭い良毛を頭へ並べ、粗い剛い毛を腰へ入れ、彈力の强い毛の先を筆の咽といふ所へ置き、柔かな密な毫を其助けとして之に檾といふ草を交へ、(此檾の事は後に話す)。そして麻で束ねて管へ塡めるといふ事を韋誕筆經に載せてある。毫の配合は如其だが、之を練合せるのが肝腎で、順序良く配合した毫を濕して板の上で練ては交せ、交せては筆櫛で梳き、梳いては練つて能く先きを揃へ、それで程能い大さに分けて圓く筆形を作る。之を心を建てるといふ。そして之を乾かしてから上毛といふ飾りの毛を以て奇麗に包むのである。素人は此表面へ出て居る飾り毛計に瞞されるのだが、それは筆の風情で實用的の良否ではない。

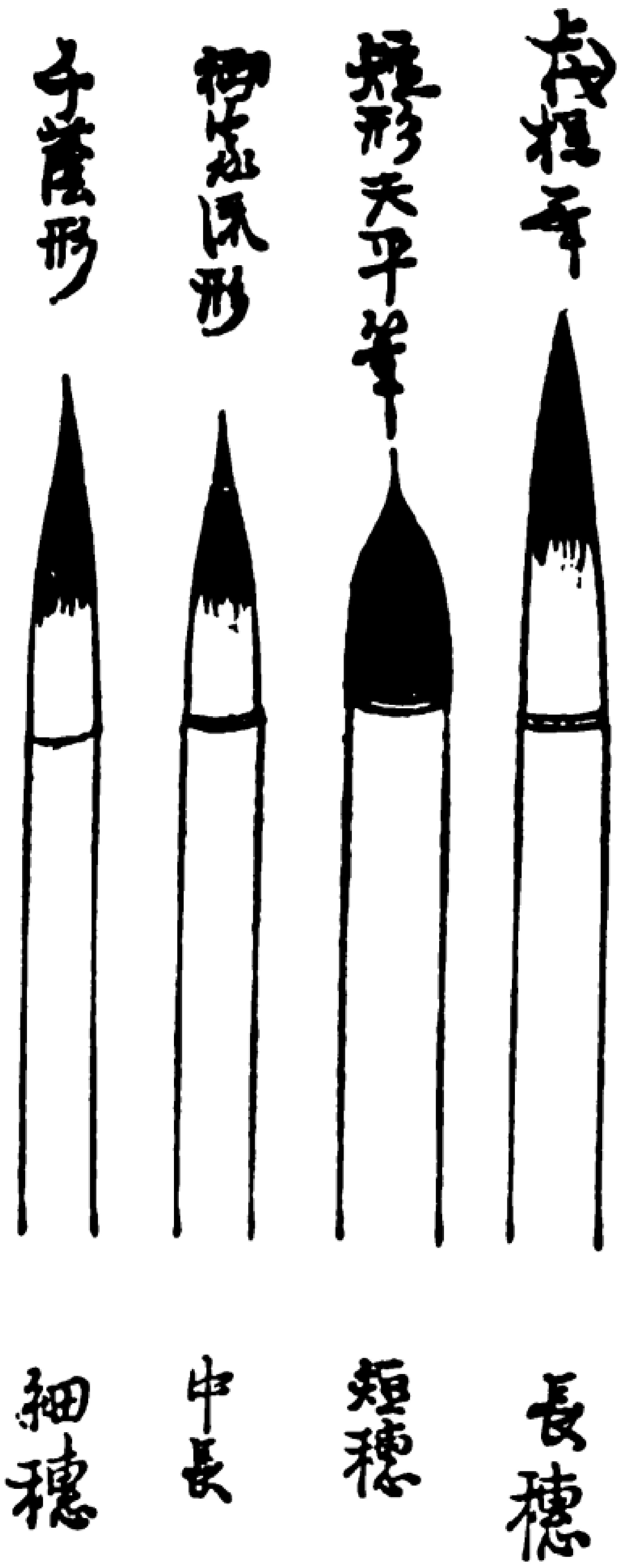
筆首の三分一の所を咽といつて、字を書く大切の所だから、其所へ良い毫先が向ふやうに作る。それ故千蔭形のやうな長い形は三分の一より卸さない。短い首なら二分の一まで卸すのが宜しい。眞書きは重に楷書を書くので、筆を竪てゝ用ゐるから、全部を狸毛で作つて、咽などゝいふ所を作らない。

前に述べた檾といふものは、支那にある麻の類で、宮内得翁といふ老人は之をマニラ麻だと言つて居る。此老翁は數十年來筆に就て研究を積んで居る名人である。此檾筆といふものは、古來名を聴いて居る人はあらうが、どんな味に書けるものかを知る人は少ない樣である。まことに腰が强くて、隨分細かい物も書けるし、大きな字も書けるし、毫の割方に由つて至極緊りの良い面白いもので、愛筆家の大喜びの品である。

△書體と筆の形

筆の形を撰ぶにも唯形が好いからとて無暗に撰取つたとて仕方がない。面白半分に形を種々と作つてある

ものでない。其形は書く字の用途に由つて撰ばねば成らぬ。今日普通の形をざつと言へば、長穗、中長、圓栗形、眞書き形の四種類で、長穗の中に千蔭形があり、中長の中に水筆形がある。其中にも又少しづゝ違つて居るが、概して草書には長穗宜しく、楷書には中長から短かい方が宜しい。圓栗形は楷書にも行書にも宜しい。草書は軟い毫が強い毫を包んで居るのが宜しく、楷書は剛い方が能い。行書は其間を執るので、假名などは剛柔半々が宜い。剛いのが強ち早く切れるといふ物ではない。前に述べた支那貍や香貍や馬毛などを多く使つた筆が切れ易いので、柔かいのでも切れ易いのがある。



此長穗は上代様の假名筆から種々轉じたもので、圓栗形は短い天平筆から形の變じたもの、中長は矢張晋唐時代の形から流れ出たものだが、水筆形といふ現今最も普通な細筆は御家流あたりの變形らしい。

如斯やうに概略話しても長くなるから委しい事は言へない、兎に角餘り筆屋が素人を困らせるから、同志の人と共に計つて製筆の會を設けて一通りの筆を作つて見た、大管でも細筆でも種々製法と毫とを嚴重にして多く出來たが、此度は品物が澤山で使ふに困つた、そこで有志者に譲る事とした、習ひ筆から手紙用、歌書き用、帳場用、眞書き、葉書き筆など〻種々あるが、殊に繪葉書など奇麗に書く筆を工夫した、今まで西洋紙へ書く毛筆といふ觀念がなかつたから一工夫をしたのだ、滑つて上手に書けぬものゆゑ毫の配合に苦勞した、弘く譲り始めてから『書き能い筆』だ『徳用な切れない筆だ』と禮を言つて會へ申込む者が非常に

多い、これ丈けでも世間の筆が惡い事が知れて居る、此會は撰筆會といつて相州鎌倉笹目谷の吾輩の邸内に設けてある、倘筆の詳しい話は吾が著した速成書法講義の「假名書き之部」にも「育翰文字之部」にもあるから篤志家はこれを見て東洋獨得の毛筆なる巧妙な器械を世に紹介して貰ひたい、東洋に特種の美術として、人間の思ふ事を自由に書き現はす東洋畫や東洋文字といふ毛筆の現象物を紹介する此毛筆は、抑ゝ冷愚看過して良いものであらうか。

◎梅香女塾の事

曩きに職を華族女學校に奉じ、後小石川區原町百五番地に梅香女塾と云ふを設けて、上流の子女を教養しつゝありし木村貞子女史は此の一月より更に其を擴張して、自ら塾生と寢食を共にし、家族的團欒の間に精神を涵養し、禮儀を修得せしめ、且時に高德の士を聘して修身道德の談話を求め、或は專門の師を招きて挿花、彈琴、その望むがまゝに學習せしめ、專ら力を塾生の指導監督に盡さるゝと云ふ。上流の子女は兎角贅澤の生活に慣れ易ければ眞に子を思ふ人は斯る家塾に托するこそ安全なれ。本塾の月費左の如し。

食費は實費支拂、塾費及び舍費三圓、下婢料二圓。



臺所に必要なる智識

撰水生

△料理法の上手下手

料理をするには、材料の撰擇に注意すべきのみならず、煮炙した結果、其滋養の價値を減さぬと云ふ事が肝要です。料理法の如何に依ては脂肪其他の不消化性分をも、消化し易くする事が出來るもので、料理法は或る意味に於ては胃液の樣な働きをします。即ち良く料理する人は溶解す事の出來る成分は溶解し、又消化に困難なものは碎いたり刻んだりして、それが胃に入つても、消化し易い樣にしますが、若し料理法が適當で無いと、折角貴い材料を使ひ乍らも之を健康に適せない食物にして仕舞ひます。

△料理を殺す加味物

料理の消化不消化は、一には加味物の如何に依て分れます。有害な加味物は、食物の全體か、でなくとも、其一部分を不消化にします。それを輕視して、如斯事は料理にさまで關係の無い事と只口あたりが好ければ可い、見榮が好ければ可いとして、深く注意を拂はれないのは、所謂喉元三寸主義の料理法とも申すのでせう。食物は、決して口を喜ばす丈のものではありません。寧ろ身體の補にすべき性質のものです。之を料理法を以て美味くするのは、食好くし、胃液即ち消化液を分泌させる手段に過ぎませぬ。其料理法が消化を害ふに至つては既に目的に反したものです。故に美味くさへあれば可いと云つて、香味や味を加味る爲の味物を、何にかまはず、混るのは餘程注意しなければなりません。

△惡料理の惡影響

惡料理の身體に及ぼす惡影響は、強度の酒類を亂用する以上の結果を見ます。殊に不消化な食物は、酒類亂用を促す一原因となります。それは惡料理は不消化

を惹起し、不消化は渇を覺えしめ、渇は酒類を多量に飲用せしむるの結果となるからです。尙惡結果は夫のみに止まりません。不消化は頭痛を誘致し、精神を鬱悒ならしめ、身神を懶惰ならしめ、つひに慢性神經衰弱を來します。さうなれば勢ひ酒類を亂用するに至るのは當然の徑路です。斯う考へて見れば、如何なる地位の婦人にでも、料理法は主要なる教育の一つであります。料理者の任務は實に人をして處世の重荷に耐へしむべく双肩を强固ならしめ困難なる問題を解決せしむべく頭腦を明快ならしめるに在ります。天下斯の如き重き責任、高尙なる務がありませうか。

△燃料の種類と其用途

燃料の種類には、木炭、堅木、軟木、無煙炭、褐炭瀝性炭、石油、瓦斯等があります。其如何なる燃料が可いかは、使用される目的の如何に依るもので、一概に決める事は出來ませんが、他に同量の種々なる燃料と比較して、最も多大の熱を生ずるのは木炭であります。軟木は堅木より速に燃え、多くの熱を生じますから、迅速の熱の必要な時に用ゐて適當です。堅木は靜に燃え澤山の炭火が出來ますから、繼續した熱の必要な時適當です。無煙炭は微細な焰と煙を立てつゝ徐々に燃えますが、これは硫黃臭い蒸氣を發しますから、空氣の流通の惡い煖爐には使用されませぬ、瀝靑炭は直ぐ燃着て盛んに焰と煙を立てますが、無煙炭よりは熱度は少ないものです。コークスは短時間に烈しい熱の必要な時の使用に適します。併し孰れにしても瓦斯の便利で經濟的なのには及びません。

△火の燃き方の巧拙

燃料を燃すに當つて、注意すべき事は、燃料が全く燃盡さない內に、他の燃料を加ふべき事です。そして一度に多量の燃料を加ふるのは、火熱を却つて減ずるばかりか、第一に不經濟です。故に少しづゝ度々加へて、火熱の度を平均に燃えさせなければ不可せん。燃えてる內にどん／＼燃料を加へると、新な燃料に火が

燃え移る間に熱度は降るもので、獨り燃料ばかりでなく、時間にも大な不經濟です。

石炭を燃料とするストーブの焚方には、非常に巧拙があります。先づこれを焚かうとする時は、爐格を動かし、灰及び燃屑を篩ひ落し、次に蓋を開けて煙元及び風通より火室の中と順々に煤と灰の掃除をして行き、後に鉋屑或は紙を輕く丸めたものを爐格の上に置き、其上に燃易い木片を縱横に渡し、更に其上に數本の堅木を、兩端か火室の隅にあるやうに置き、空所をつくりて蓋を爲すが宜しいのです。木が盛んに燃え出した時、一鐵枕だけの石炭の小塊を上に加へ、後耐火煉瓦を漸時に加へるが宜しい、斯すれば石炭は能く燃えて且つ經濟的であります。

△ストーブの風の通方

風通しが餘り過度る時は、熱氣が散じて燃料の不經濟を來します。石炭の充分に燃着た後は、風通しは唯その燃燒を繼續せしむる程度にて充分です。されば非常に強度の熱を要する時は、風通を開く必要がありますがさうでなければ、全く閉ぢ、或は半開にして置くがよろしい。又石炭が全く赤くなり、其熱の殆ど全部を放散した時は新に石炭を加へないと直に消えてしまひます。少量づゝ度々に加へるのは、經濟でもあり、熱を平均させて煮炙が工合よく出來ます。尚注意すべきは、好く氣を付けて底から灰及び燃屑を搔出す事です。燃屑を保存して置く時は、火を焚付けるに當つて火が燃着き易く、又迅速に多大の火熱を發散し、燃料經濟の助となります。

△毒素を含める庖廚具

太古に於ては、食物を熱灰中に埋めて蒸燒にするか又は燒石の上に置て炙つたものです。世の進化につれて追々器具を用ゆるやうになりました。近世になつては料理用の器具は益々多くなり、其使用法も隨分複雜を極めて居ます。之等の器具の多數は、鐵、銅、錫、眞鍮等の金屬です。この金屬は、或る物質に會ふと溶

解る爲に、食物に混じて毒素を生ずる恐がありますから、一家の主婦たる者は、買ふ時にも使ふ時に當りても、好く注意しなければなりません。

鐵の器具の新しい時は、食物に鐵臭を帶しめたり、錆で汚したりする事があります。然し、使用後叮嚀に洗ひ拭ふて、錆させぬやうにすれば、左程健康に害のあるものではありません。鐵の錆は、鐵の酸化であつて、酸素と化合せんと欲する性が甚だしく水を分解します。されば使用後は直ちに乾燥させて濕氣少い場所に置かないと直ぐ錆が出ます。日常使用せぬ鐵製器具に、牛羊等の脂を塗て置くのは、錆を防ぐ唯一の方法ですが、これは塗つた脂が鐵器の濕氣及び空氣に接觸するを防ぐからです。

▲完全なる無害の器具

磁器は、堅く滑かなる泑藥にて鐵の内面を覆ふたもので最も完全無害の器です、歐米では近來花崗石で製した器具が用ゐられて居りますが、其組成分は未だ不明ではあるものゝ、著明の化學者によりて全然無害なる事を確められ、且つ輕くて淸潔を保ち易いもので、厨房器具として最も卓越したものでせう。

亞鉛引の器具は、鐵に亞鉛を被せたものですが、これは料理用としては有害です。錫も、その溶解した錫の中に、數度薄き鐵を入れ、錫を被せたものですが、料理用として次第に多く製造される傾向に見えます。

錫器は、酸き牛乳、酸き果物、トマトース等の酸味を帶びた食物を煮たり、又は容れて置くかする時は、酸類の種類に依て、種々有害の物質を生じます。殊に無責任なる賣品中の錫器には鉛を混合されて居ますから、尙さら危險です。酸類の鉛と化合して生ずる物質は極めて有毒です。

△決して用ゐてはならぬ器具

銅は、鐵或は錫よりも一層熱の良導體な爲に、早く煮物が出來るといふ所から料理人に重寶がられて居ますが、これは果物の酸と化合して毒素を生ずるばかり

でなく、脂肪を初め鹽、砂糖及び其他組成分に硫黄を含む蔬菜類も多少銅に影響して惡結果を生じますから先づ用ゐぬ方が安全であります。眞鍮は、銅及び亞鉛の混合物ですから、其有害な事は云ふまでもありません。

鍋の中のみならず、泑藥中に混合されたる鉛を檢査するは、至つて容易い事です。其方法は、硝酸の小滴を滴下し、これを五十錢銀貨大に擴げ、和かい熱で乾かした後、水の一滴を落し、沃化ホタッシュの結晶の小塊を加ふる時は、若し鉛が含有されて居れば必ず黄色が現はれます。新に食器を買ふたならば、必ず一度はこの試驗を行ふて見るが萬全であります。

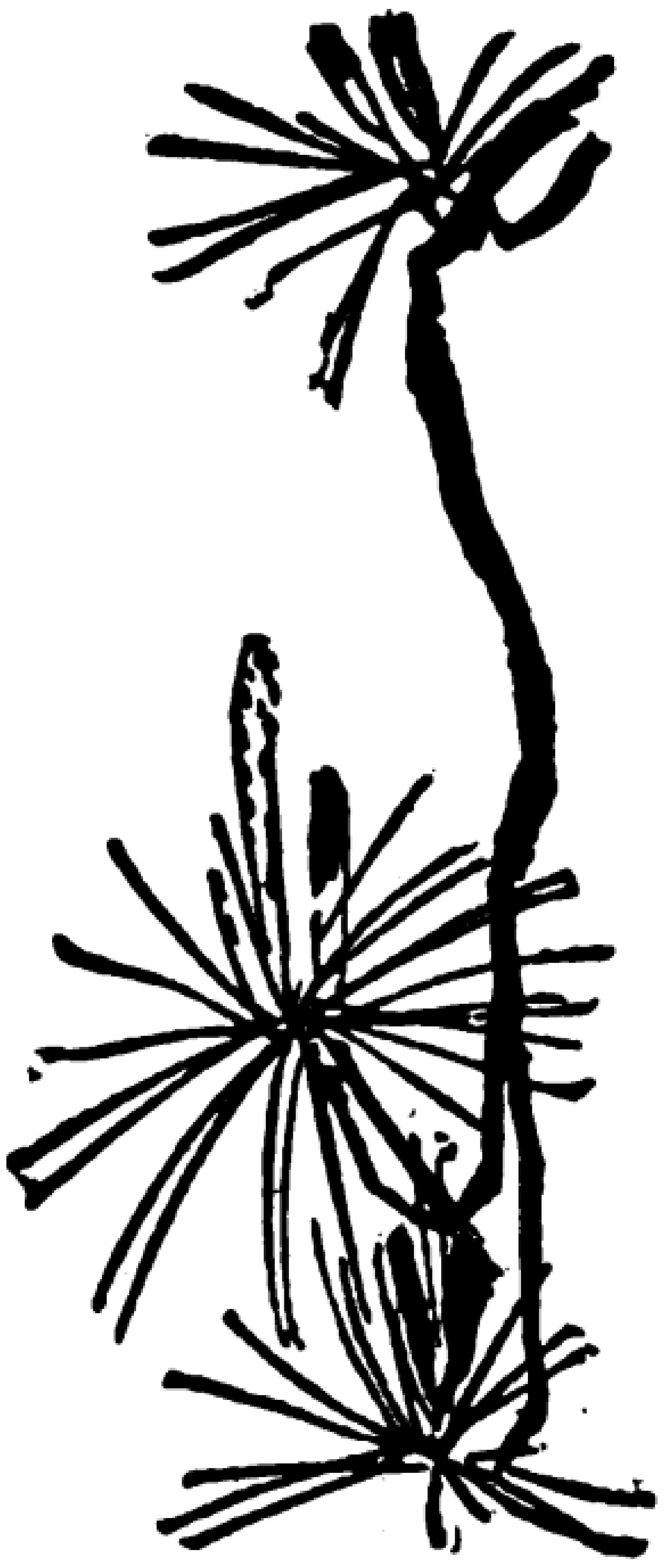


安井哲子女史の談話に就て

前號「私が洋行中に痛切に感じた事柄」と題する安井女史の談話中、少しく相違の箇所ありし由女史より申込ありたれば、左に訂正す第二十一頁―「何うぞ助けて下さい」なる見出しの中に「ある時佛蘭西の軍艦が入つて來ると云ふ噂が立ちました處、立派な婦人達が私共のところに馳けて來て言はれるには云々」とあるを、「私の學校の年少の女生徒が私共の處に來て、若し戰爭があれば助けて下さい云々」と改め、又「蜜柑を送つて驚いた話」の見出しの中に、「新橋へ着いてそれを受取つて見ますと云々、驚いて驛夫にたゞして見ますと」とあるも蜜柑は女史が自宅にて受取られたるにて、たゞされしは驛夫に對してにはあらず、配達人にたゞされしものゝ由右筆記者の聞き誤りに付玆に女史並に讀者諸君に謝す。

新年の料理

宇山錄子



椀　一、雪輪に藻汐昆布　二、白魚、鴨肉、芹
燒物　へその昆布卷（燒物がはり）
口取　栗豆金團　梅花玉子　松笠烏賊
甘煮　土當歸　卸慈姑　白魚
煮豆
雜煮餅　黃鷄肉　松茸　芹

△椀の一

鹽鱈の肉の皮を剝ぎ、賽の目に切り、沸湯にて粗と煠でゝも、又は木口から薄く切り、之を煠でこぼして布巾につゝみ、堅く絞り、細かくほごして朧肉にして使ふても宜しう御座います。藻汐昆布といふのは松葉昆布の良き品です。之を水に浸けて柔かくなつたら、沸湯にて煠覆し、良い程の長さに切つて盛合せにします。

汁は實を椀に盛つてから注ぐのです。汁加減は、水一合に醤油五勺、削鰹節茶飲茶碗に輕く一杯の割合で先づ水をわかし、鰹節を入れ、醤油をも入れて沸し、冷めて後漉して置きます。そして使ふ時にそれを少々椀に入れて湯をさして出します。斯うしてさへおけば何時でも出來ます。

△椀の二

白魚は肉が脆いもの故澤山に鹽を振るか又は鹽水につけて置いて肉を締めます。そして三十分位も經つたら、鹽氣を水で洗ひ、一尾づゝ敷笊の上に並べ、それを鍋によく湯をわかして笊のまゝ極く粗と下煮を致し椀に盛ります。之は餘程丁寧に扱はないと崩れます。

鴨肉は薄き切身にして鹽を少し振りかけ、暫くして

塩を洗ひ、鍋に少量の湯を沸かし、その中でザッと煠でゝ使ひます。長く煠でると肉も硬くなり、味がズッと落ちて仕舞ひます。芹は根を切り、能く洗つて沸湯で煠で、一度水に取り、それを絞つて二番煮出汁に少しの醤油を加へた中に二十分位も浸けておき、後引き揚げ、汁氣を絞り、一寸位の長さに切つて料合せにします。煮出汁に加へる醤油の量は煮出汁一合に五六滴で宜しう御座います。

△燒　物　ハゼの昆布巻

昆布巻は青昆布を一夜水につけ、よく洗つて鍋に入れ、極く少しの酢と水とを入れ、落蓋をして柔かになる迄ゆで、煠でたら引き上げて二枚にはがし、巾は中に包むハゼの丈にくらべてきり、長さは三四寸位にし、別に燒ハゼの頭を去り背骨を抜いだのを之れで巻きます。ハゼは大きければ一尾を二つにはがし、小さければ一尾のまゝまき、之を鍋の中に並べて煮出汁をたつぷりと砂糖とを入れ、十五分間程充分煮て後醤油を煮出汁の半分位入れ、更に暫く煮て下します。

△口　取（栗豆金團・椿花玉子・松毬烏賊）

乾物の栗豆を善く洗ひ、一晩水に浸けて使ひます。そして水を新しく換へて鍋に入れ、火にかけて煮沸た時、柄杓に一杯の冷水を注ぎ、それから二十分も煮たら、その煮水を悉皆こぼして仕舞ひ、又新に冷水を入れ、煮沸して豆が軟くなる迄に三四回も水を更へます水を度々更へると色も白くなり、又早く軟かくなります。軟かに煮へたら笊に上げ、四分の一を裏漉にかけ殘りの豆はあくひき砂糖と白味醂と鹽とを加へ弱火にかけて煮始めます。その割合は乾豆一升に砂糖二百目白味醂二合、鹽盃に一杯半位でよろしう御座います豆を煮るには、火が強いと硬くなるから、弱火にかけます。豆は甘味が染みたら前に裏漉にかけた豆と一緒にして箸や杓子でかきまはさずに始終両手で鍋を廻し傾げながら煮なければ不可ません。又此際鍋の底ばかり直に火につけると焦げつくから、鍋の底と側とに接して居る角の處を火に近づけて廻し、一ヶ所に計り熱

のかゝらぬ樣に致します。煮汁が詰つて鍋の中で豆が轉る樣になるのが煮上りの度で御座います。出來上つたら廣い皿に移して擴げ、團扇で二、三回煽ぐと好い艶が出ます。

梅花玉子は先づ水から鷄卵を煠で、湯の沸き初めから十三四分間煮ると好い加減に煠ります。煠つたら一度水に取つて後皮を剝ぐ方が宜しう御座います。又澤山の卵であれば、一緒に笊に入れて搖ると、殼が悉くひゞ破れて、剝ぐのに手數が省けて、大層綺麗に離れます。むけたら黄身と白身とを分け、少量の鹽と砂糖とを加へ、別々に裏漉にかけます。此砂糖の量は卵黄十個に對して茶碗に輕く一杯、卵白には半杯でよろしうございます。出來たら布巾を擴げ、其の上に濡れた美濃紙を擴げて、裏漉にかけて卵白を又その上に擴げ中央三分の一程一帶に卵黄を置き、丁度海苔卷の樣に卵白で卵黄を包んで卷き、又その上を紙と布巾で卷き後先を糸で縛り、周圍に五本の杉箸を同じ位の間に縦に宛行ひ、中央に兩端を緊と縛つて蒸します。蒸上つたら箸や布巾を除き、熱い間に美濃紙を除きます。そして之を木口から切ると美しい梅の花形になります。又卵白に食紅を少し混せて拵らへると薄紅梅が出來ます。

松毬烏賊は、烏賊の足を去り、腸を出して能く洗ひ開いて皮を剝ぎ、その片面に横縦に庖丁目を入れて串打と爲し、それに鹽を振り、暫く置いて後鹽を洗ひ落して烈火で粗と燒き、庖丁目の間々のところが焦げて丁度松毬の樣な外見になります。之を長さ二寸幅一寸位に切つて盛ります。

△甘煮（卸慈姑・土當歸・白魚）

慈姑の皮を剝き、よく洗ひ、後卸金でおろし、鹽を少しく加へ、手で捏ねて小圓形になし、胡麻の油をよく沸かして之を揚げ、それを又沸湯で煠で覆して水に漂し、後煮出汁と砂糖で落ち蓋をして煮ます。煮汁が半分位につまり、甘味がよく染みたら、醤油を加へて味をつけます。醤油が過入つてからはあまり長く煮て

は不可ません。大抵の煮物には醤油は一番後で加へるのが普通で御座います。又煮出汁の割合は、煮出汁が茶碗に二杯なれば、醤油は一杯、砂糖は盃に軽く一杯で御座います。

土當歸は根を切り、皮をむき、長さ一寸乃至一寸五分位に切るか、又は廻し切りにして水に浸け、兩三回も水をかへて灰汁を抜き、それを沸湯で粗と煠で、直ぐ引き揚げ、煮出汁と砂糖と醤油（之れは始めから醤油を加へてよろし）とを能くわかした中へ之を入れ、煮上つたら土當歸を他の器に揚げ、煮汁は其のまゝ煮つめ、煮つまつたら又先きに揚げた土當歸を入れ、粗と煮沸て、少しの上り醤油をさして引き揚げます、後でさす上り醤油は煮物の味を出す爲めに使ふので御座います。

白魚は水で洗ひ、鹽を振りて笊に擴げ置き、使ふ時に鹽を洗つて、茶碗に味醂を二杯、醤油一杯の割合のものを煮沸した中へ敷笊に並べたまゝ入れて煮上げます。此の敷笊を使はなければ白魚の姿が崩れます。

△煮豆

黒大豆を米をとぐ樣に桶に入れて能く洗ひ、塵埃の這入らぬ樣に桶に蓋をして清水に一夜浸けておき、さて豆も浸水も其まゝそつくり鍋に移し、酢を少々加へて（豆一升に酢盃に半杯）落蓋をして煮始めます。別に、

牛蒡を庖丁の背で皮を剝き、木口から薄切になして水に浸け、三四回水を換へ、豆と一緒にして水から煠でます。

豆も牛蒡も軟かになつたら、豆一升に砂糖を百二十匁位の割合に入れ、甘味が染むまで能く煮て、後醤油を茶碗に一杯半位入れ、粗と煮て卸します。醤油を入れてから長く煮ると硬くなります。

△雜煮（黄鶏肉　松茸　芹）

鶏肉は薄く切つて鹽を振り粗と煠でゝ使ひます。

松茸は鑵詰物で宜しう御座います。鑵から取り出して縦に薄く切り、直ぐ其のまゝ盛合せます。

三葉芹は根を去つて能く洗ひ、煠で丶水に取り、絞つて一寸位に切りて盛合せます。盛合せる時は煮汁に一寸入れて温めます。

汁は煮出汁を使ひます。其の割合は水一升に削鰹節十五匁を用ゐます。水が沸き初めた時に鰹節を入れ、暫時煮沸せて羅斗で漉し、滓の方へは再び三合ばかりの水を注れ、煮沸して二番煮出汁を取ります。

初めの煮汁は汁に致し、二番煮出汁では餅を煮ます汁加減は煮出汁一升に醤油五勺、鹽少しを加へて沸かします。餅は適宜の大さに切り粗と焼き、別に鍋に二番煮出汁を入れ、其底に煮出汁昆布を敷いて之を沸かし、此の中に焼いた餅を入れ、一寸煮て椀に盛り、前の實を添へて煮汁をかけます。斯う致せば煮汁が何時までも濁りません。又餅にも味が能くつきます。殊に昆布を鍋底に敷く事は餅の味が好くなる計りでなく鍋底に焦げつきません。

これ等の料理は前々から拵へて置いて、使ふ時に一寸温めればい丶ものですから、新年早々から周章てずに手軽に味美きものが出來ます。

前述の料理の雜煮餅以外の品は重の中へ體裁よく詰め入れても宜しう御座います。

◎催眠術應用の新療法

催眠術療法が直接間接に各種の疾病に効驗あるとは歐洲の醫界にも實驗されて確實となれるが、その特に著効を認むるは遺尿、ヒステリー、月經に關する疾病、神經衰弱、消化不良、不眠性、生殖器障害、悪癖矯正、便秘等の諸疾患なるがヒステリーの如きは東洋婦人の特有物にて醫藥も容易に効驗を見ざるも催眠療法を以てすれば決して難治のものにあらず又生殖器障害の如きもこの例に漏れず多年の實驗にて奇効あるを確信し今回東京青山南町三ノ五十に心理治療研究所を新設し北島醫學士と共に醫藥併用の新療法を行ひつ丶ある森下田玄氏は研究の爲め尙廣く診療の需に應ずる由。



幸福なるべき結婚を十二回取逃がせし女

しげ子

勿體ないが私には親の過愛が毒になつたのです、(とあの强情なお榮さんが泌々涙ぐんで語つた)。

其兩親も死去て了ふ、兄は藝者を受出して、なけなしの財産を依然昔の贅澤氣が失ないでぱつぱと費ふ、仕方なしに弟の厄介になつて女房代り母親代り下女代り泣してゐるのも運命なら仕方もありませんが、私のは純運命とは云はれません。勿論私も酷い我儘でしたが、何しろ男の中の一人娘で兩親の可愛がり方と云つたら——。全體私の家は旗本で、母は藏前の札さしとかの娘で舊は妾だつたといふ事を誰からともなく聞きました。萬事華美好な家庭でしたから私は始終お姫様かでなければ雛妓の樣な服裝をしてゐました。學校の卒業式の時、母は振袖を着て行けと云ひましたが、そんな物を着て來る人は一人もないから嫌だ〳〵と云つて遂々お召縮緬で行つた事がありました。

小學校を出てから父は今少し高等の學校へと申たのを母が承知しないで沙汰止になつて了ひました。いつの場合にも母の否といふ事を父は斷行する事が能ないので、爾來は宅へお茶と花と歌の先生が來て——琴と長唄と踊は幼い時から習つて、小學校と同時に殆ど卒業してゐました——稽古三昧、會とかおさらひとかいふ時は必ず新に着物が出來る、母が同行して師匠への附屆でも何でも私の事といふと金に糸目を附けなかつたのです。實際當時は財産も有つたのですが、それでゐて男の兄弟には毫も構ひつけず、弟は慶應義塾の幼稚舍に、兄は芝公園のミス某といふ西洋人の許へ毎日

自轉車で語學の稽古に通つてゐました。此自轉車も却却許可がなかつたので兄はぷん〳〵して、『家ぢやお榮が神樣だ、お榮の事といふと何でも諾く癖に俺にや下駄一足も素直に買つてくれた事がない』と、あたけて仕方のないのを見兼ましたから私から母に願つて辛と買ふ事になつたのです。

さて私の十六の時に初めて縁談がかゝりました。それは和歌の先生からで、先方は華族でした。其前にもちよい〳〵出入の者などから縁談もありましたが、親の慾目では『是だけ藝事も仕込み容色も十人並なのを一寸した家へは遣りたくない』と、てんから問題に成らなかつたのです。そこへお望み通りの華族さん！　母は大悦で先生の家へも二三度足を運びましたが、公卿華族で親類が非常に多くて生活向も餘り裕でないといふので、まあ如何したものかと大分長びきました。父は母次第の人ですから別段かうと奮切つた意見もなし、此上は當人の心持をと云ふ事になりましたが、私に何の考へがありませう、齢こそ十六でも、他人といつたら學校の友達か稽古の朋輩か、夫も悉皆お孃さんお孃さんと御機嫌許り取つてゐた人達よりしか知らない私ですもの、只華族といふ語が何となく耳觸りがいい位で、到底嫁かうとか止さうとか確かな返事は能ません、母も大變迷ひましたが結局まだ齢もいかないし華族から申込を受る程の我娘の價値を認めた上は急ぐにも及ばないといふ腹だつたのでせう、此縁談は一先斷りました。

それはお正月の事で、それより三月、私は母と同行に踊の師匠と弟子を二人程連れて龜井戸へ梅見に出かけ、日の薄暮に歸つて來ると玄關に客の車があつて、父が座敷で應接してゐました。母が『どなた？』と訊くと小間使が『神谷樣とか仰いました』、『おや〳〵さうかい』と、母は着物も着替へず御酒の支度をして私も一寸お酌に出ました。神谷といふ人は斑白頭でちんちくりんで、義歯の金ばかり光つた安つぽいお爺さん、つひぞ今迄私は知らなかつた人です。十時頃に送り出すと父と母とは直ぐ元の座に戻つて、晩く迄何かひそ

ひそ話をしてゐました。私はもしやと、何は何でもそこは十六ですから、それとなく間接に母に訊いて見ますと果して縁談なのです。山口縣出身の工學士で齡が卅一、親も兄弟も何にもない代りには財産もない。今は僅の俸給で新橋へ出てゐるが、其内地方の作業局へ榮轉する見込がある、容貌も立派だし品行は神谷さんが保證するといふ『父樣には默つてお出よ』と、母は密と寫眞を見せてくれました、成程立派な男です。

『却々評判のいゝ人ださうでお父樣は大變お氣に入つた御樣子だが、何しろ俸給が少いから時によると手鍋ぐらゐは提げる覺悟でなくつちやいけない、どうだねお榮ちやんに御飯が炊けるかね』と、母は串談の樣に訊くのです。

『いやだあ』といふと、

『困つたお孃樣だね』と云ひましたが目では笑つてゐました。



それからといふもの毎晩御飯が濟むと、父と母とが二階や離座敷で密談をしてゐましたが或朝父が、

『それぢや神谷へ何とか云つて遣らんきやいかんぞ・老人また來ると氣の毒だからなあ』

『然ですとも、あなた今日いらしつちや如何です、いいえあなたの方が宜うございます、彼方からあゝして態々來て下すつたんですもの、何か持つてあなたがいらつしやらなくつちや』

例の一件だなと私ははつと顏が赤くなりました。さんざん押問答の結句に、『さうかなあ』と父は髯を摑みながら仕方のない樣な顏をしました。まさか極るのではなからうが如何いふ話しになるのかと、父の出た後で、

『父樣此間の神谷さんの處へいつてたの？』と母に云ひますと、あゝ此間の話しねえ、斷る事にしたよ、いくら人物がよくても全然無財產でおまけに地方などへ引込むのぢや堪らないからねえ』

私も同感ではつと安心しました。

一寸口が開くと妙なもんで、彼方此方から種々緣談が有ましたが、記憶に殘る程のは一つもなくて私は十八になりました。お正月年始に來た踊の師匠が、『橫山町の木綿問屋で息子さんのお嫁をさがしてゐらつしやいますが、却々御注文が難かしくて』と、謎の樣な事を云ひますと母が、『私共のも最早年頃ですから相當な處があつたら嫁けたいと思つてゐますが其おはなしはどうです？ あゝです？』と私を前に置て種々訊くのです。師匠のいふには當人は廿二で役者の樣な美男子、店と奥とは全然關係がなくてお大名の樣な生活をしてゐるとの事。母はぐつと乘氣になつて、知らない間に私の寫眞を師匠に與つて了つた位、父も親類も、もう此處で極めたらよからうと此緣談は大分進みましたが是には私が不承知を云張つて遂々破壞して了ひました母は大變惜しがりましたけれども『お大名の樣でも役者の樣でも商家へ嫁つておかみさんと云はれるのは嫌だ嫌だ』と、私が泣てきかなかつたもんですから。

さうかうしてゐる中に二月の末から父が心臟病で床に就て了ひました、神戸の親類へ預けて置た兄は其時廿三でしたが、大分生意氣な行があるとかで度々宅へお尻が來る、で、寧そ呼返して妻でも持たせた方がよからうといふ事になる、さうなると私が家にゐては世話

する人も一寸二の足を踏むから先づ妹の方を先へ片附けなければと云ふので、つまり遣るのと取るのと母はいとゞやきもき方々へ頼んでゐましたが却々氣に入る樣なのが有ません。其内四月になつて私の緣談が二件かち合ました。一は工學士一は醫學士、工學士と云つても前回の樣な無財產ではなく、江州に兩親が大きな造り酒屋をしてゐて一千萬の身代だといふ、まあ話し半分に聞ても五百萬です。醫學士の方も是は又東京屈指の金滿家の二



男で淺草の三島町に私立病院を建てゝゐるといふ事。來年は厄年でもあり父も何だか弱つて來ましたから何でも此二件の中で極めなければ――、といふとさあ何方にしたものか、工學士の方は國元の親といふのが母の氣懸りで、そこへ行くと醫學士の方は二男で關係がないし、東京に永住も能るし、其上媒妁人が地位のある信用のある人でしたから遂々其方へ極つて、五月の何日かに宅で見合をしました。見合といふものも思つた程恥かしくはありませんでした。

媒妁人は父の碁仲間で始終宅へ來る方ですし、兩親も傍にゐるのですもの。私は高島田で簪を立てやの字に締めて、母が念入の厚化粧をしてくれたので只窮屈に感しただけでした。

婿の風采も首尾よく及第して、それから十日の後には結納の釣臺が玄關に舁込まれ、病人の父迄起きて赤の御飯を喰べました。

母はもう支度で毎日出かける、人が來る、祝品が來る、何だか陽氣で夢の樣で私は譯もなく嬉しいと思つてゐました。先方では成べく早くといふのを母が到底今年中には支度が間に合はないと云ふ、媒妁人が兩方の間を取つて十二月早々と、大略日取も極つた十一月の十五日に——此日は私の——、私一家に大打擊を與へくれた日ですから忘れません、曇つて寒い風の吹く日でした——踊の師匠の納會がありました。

「嫁いて子供でも產るともう踊も踊れないから一生の思ひ出に」と、母が衣裳から鬘から全然別好みにして私は其日「釣狐」の朝比奈を踊つて皆に褒めそやされ、夜晩く歸つて來て疲れ切つて脫捨も何も其儘に、寢て了ふと如何でせう！ 其晩風呂から火事が出て丸燒です。翌日の朝飯は新門前の親類の家で喰べましたが、其家迄どうして來たのかもう〳〵宛然夢中でした。何でも鐵といふ老僕が父を負つて、私は母に手を引かれて寢衣の儘で駈け出した事だけ覺えてゐます。後できくと自家だけだつたさうですが、其代り藏迄落ちて了ひましたから私共は實際箸一本もない身になつて了ひましたの。私の嫁入支度だけでも西京へ誂へたり何か種々意匠を凝したものが殘らず灰になつたのかと、母は當分それぱつかり云つてゐました。

變を聞つけて早速見舞に來てくれた大勢の人に勵まされて、其親類の長屋へ一先住む事になり、神戸の兄へも電報を打ましたが、父は精神の打擊やら身體の動搖やらが障つたと見えて、兄の着く前に薄い蒲團の上で息を引取ました。

今は婚禮處ではなく、泣の涙で暮してゐる中新らしい年は來ましたが何處がお正月だか噓の樣で、さしも

氣丈な母迄ぼつとして了つて餘り口もきゝませんから私は始めて憂世の辛い事を知つて目が醒めた樣なもの、又どう考へても夢の樣に思はれてなりませんでした。正月が濟むと普請を始めて、到底舊の樣にはいきませんが兎に角其夏は我家らしい家に住む事が能ました。是から又ぼつ〳〵支度をして增川（醫學士）へ嫁く事と思つてゐましたに、驚くぢやありませんか。增川醫學士は××縣知事の令



孃と婚約が成つたといふ新聞が出ました、私は結婚に就て別に何の考へもありませんでしたが、母が逢ふ人毎に、『娘も緣が極りまして今年中には引移ります、先方は兩人ぎりで極樂でございますから何卒相變らずお遊びに入らつして遣はされまし』などゝ吹聽して皆におめでたう〳〵と云はれたのが立消になつたのですから、恥かしくもありくやしくもあり始終悶々してゐる處へ、母は母で增川や媒妁人の所爲を口穢く罵つて愚

癖ばかり云ふ、私はくさ〳〵して了つて稽古事などは放擲に駄々ばかりこねて、毎日母と喧嘩の様な眞似をしてゐました。兄は又性來の懶惰者で父は亡る、母は屈托ばかりしてゐるのをいゝ事にして毫も勉强などはせず、悪所通が大分巧者になつた様子。稀に小言をいふと反對にやり返して、三日位は歸つて來ないといふ始末でせう、實に嫌になつて了ひました。でも世話する人があつて嫁が出來ました。尾張の魚問屋の娘で容色は左程よくもありませんでしたが極々性質の温良しい女らしい、好いお嫁さんでした。矢張り一人娘ださうで充分な支度を見るにつけても母が、

『何といつても田舍者だねえ、數ばかり多くても些も金目の品がない、それから見るとお前の時などは』と、又しても死んだ子の齢を數へるのです。

でも幸兄には大變氣に入つて悪い遊びなどは切つて捨た樣に止めて了ひました。嫂も眞實に優しい好い人でした。あの嫂が今でもゐてくれたら私は、どんなに力になるでせうに……、嫂は其翌年の秋實家へ歸つて了ひました。其原因だけは何卒お訊きにならないで下さい、私と母とは鬼何千匹だつたか知れません。

其前に私の縁談が四つ程あつたのを私は耳にも入れないではね付て了ひました、もう今度のは財産家の華族のといふのではなく、ほんの本人の腕一つとか人物を見込にとかいふ質の極々眞面目な、似合な縁談だつたのを私の不了見から惜しい破談にして了ひました。といふ譯は誠に申難い事ですが、嫂の從兄で東京の美術學校へ通つてゐる菊郎さんといふ人が度々宅へ來ました。矢張り尾州生れで、色の白い髮をぺたッと分けた感情的な人でしたが、私はいつか此人と戀に落ちて了つて、他から云ひ込む學士や實業家の縁談には三文の價値も認めませんでした。母は苦勞人だけに直ぐそれと氣が附いて、

『あんなに當人同士の氣も合ふ事だし、安本家（嫂の實家）と重縁にもなるのだから、いつそ氣心の知れない他人よりは』と、親類の異論をも排けて先方へ交渉を始めました。私はもう〳〵夢の樣な空想にばかり耽つ

て、それにしても餘り談判の長いので焦れ切つてゐますと、あゝやつぱり私の我儘が私の幸福を奪つたんです、先方のお母さんが、「何分まだ妻を持たせる齡でもなし、殊にお嬢様育ちのお樂さんに來て頂くのは却て心配だから」と、いふ云立で、百方苦心の母の情も是に於て何と仕樣もなくなりました。私は騷ぐ暴れる、母も困つて、「今が今といふのではないから約束だけでも」と他人を中へ入れたり何か、隨分手に手を盡しましたけれど



も、どうしても成立ちませんでした。母は嫂が茶々を入れたに違ひないと云つて一層そでなく當ります私もやつぱり其氣になつて了つたので、嫂の身になれば辛抱も我慢も爲きれなかつたのは當然です、遂々さういふ譯になつちまつたので私の理想の綱も切れました。

それよりは兄も自棄になる私も自棄になる、親類でも呆れて構ひ手がなくなりました母は氣が勝つてゐるだけに口惜しい情ないと一層痛切に感じたのでせう、始終焦れてく家の中は、絕

えず戰場の樣な恐ろしい殺伐な氣が漲つてゐましたつけ、遂々私の廿四の年に少し氣が變になつて、くやしい、くやしいと云ひ死に死んで了ひました。

まあ其一週忌も濟まない中に兄は今の妻を引ずり込で、「貴樣の姉だから粗略にすると許ないぞ」といふのです。誰がしと、そんな素性もしれない樣な女を姉と思へるもんですか、只ぞろ〳〵しておつに威張つて、綻一とつ縫へない樣な者を親達がゐたら閾も跨がせは爲ますまいに、こんな奴こそいぢめ出してやれと飽迄反抗しましたが世間の嫂とは全然々々違ひます、兄も私には忘れ難い恨があると見えて二人して、それはそれはお話しも能ない樣な慘酷な待遇をするんですもの此方はいくら力んでも一人きり。此慘劇を見ずに死だ父はもとより、母もまだ〳〵幸福だつたと、私は墓所へ行く度に溜めといた涙を思ふさま濺しました。

人間といふものは勝手なもので、前の嫂が戀しくなると同時に、忘れてゐた菊郎さんの事なども思ひ出して、口惜しいのだか戀しいのだか半狂人の樣な月日を送つてゐますと、兄の友達でよく宅へ來る島田といふ人があるんです。別に何をしてゐるといふでもなくお國に地面があるとかで、始終宅へ來ては御酒を呑んで行く人、その人がまだ獨身で――齡は四十以上でしたが――私を大變懇望してゐるより其家へ嫁けといふのです。「嫌な事、あんなお爺さん」といふと、「生意氣いふな、賣殘り！」と、かうなのですもの意地になつてもそんな處へは嫁かれません。

それでもまあ不幸中の幸には弟が首尾よく學校を卒業して月給を取る樣になりましたから其方へ引取られて、氣樂と云へば氣樂な樣な月日を送つてゐますが、是も年頃でそれ〳〵嫁の談しなども有ますから、それや是やを考へるとやつぱり身の置所がない樣に思はれます。

此間も、ある新聞社の主筆で親子の二人ある口がありますが如何でせう、と髮結が云ひましたから、「もうどんな處でも私の樣なものを貰つてさへ下さる方があるなら」と、云つて置て、兎に角弟に話しますと、ま

お弟はどうしてあゝ優しいんでせう。『およしなさい姉さん、今迄さんざん苦勞して、初めて嫁くのに何も子供のある處を撰ぶにも及ばないぢやありませんか、さう急かずといつ迄も私の家にゐて氣長に良緣をお待ちなさい』と、云つてくれたので私もつひ『それもさうねえ』と、髪結には體よく斷つて了ひました。

　弟の所謂良緣は是迄幾度となくあつたのを私が自分で避けてゐたのです。寄宿舍生活をしてゐた弟はそれを知りませんから、



一圖に不幸な姉と思つて同情してくれるのでせう。もう三十の聲も聞た女が子供のない初婚の人を望む樣では猶更良緣は得られまいと、しみ〴〵心細くて、身體もめつきり弱りました、此頃は嫌な夢ばかり見てゐます。菊郎ですか？　どうしてゐますか、もう子供の一人ぐらゐは産てゐるかもしれません。

春きぬといふより雪のふる年をよもにへだてゝ立かすみかな　　雅經

望んで嫁ぐ女

すみ子

結納も昨日漸く濟みました、何處からまアどう聞き出すものやら、人の事なんぞ奈うだつて構ひさうもないのに、兎角く結婚なんぞとなると老若男女を問はず餘程趣味深く感じるものと見えて聞き度がるんですね先刻も女中が買物に出掛ける處を掴まへて、お宅のお孃樣は何日お輿入れ遊ばすんですの、旦那樣は軍人でゐらつしやいますかだのと根ほり葉ほり訊くのださうです、斯うなると日頃出好きの私も人に貌を見られるやうで耻かしくつて、出られなくなりますわ。

姉達の嫁いだ家から考へ合せて見て、やはり私のも相應な家だらうと皆樣思つてお訊きなさるんでせうが奈うして／＼私が嫁ぐ處は無一物の素寒貧の書生ですわ、眞の學士といふ肩書が一つあるばかりで、家も無ければ財産なんかもとよりなし、持つてるものは古本位なもので、車の一臺もあれば何處へでも勝手に引越しも出來ようといふまア自分の身一つと同じ事なので、云はゞ共稼ぎなんですから成功した曉に自分が半分は助力たのだと思つたら甚麽に嬉しいでせう。その代り萬一貧困に陷つた塲合だつて、困つたなんて泣言を良人に聞かすやうな事は致しません、良人が著述でもすれば筆耕位にはなりますわ、一旦嫁いで他家の人となつた以上、いかに辛い事、悲しい事、また泣き度いやうな事があつたつても、今までのお嫁さん見度いに里へ泣きに行くなんて意氣地のない眞似はしたくないと思つて居ります。夫れでなくてさへ母は末子の私が卒業したてのほや／＼の貧學士の處へ嫁くといふので、もう他の兄弟達より一段身分が低い者のやうに思つて、奈うかしてまア兄弟同じ位に出世させたかつた

のにと申しては、おまけに先方から望まれたと云ふではない、たつて當方から彼の人に限ると云つて望んでやる嫁だから、仕度だけはまア充分に耻しくないだけにしてやらなくつちやならない、他の姉達とは違つて先へ嫁つてからだつて一苦勞しようと云ふのだから、着物だ指輪だつて迚も出來る望みはないからある物は無くさないやうに、少しでも餘計に仕度をして不自由の無いやうにして上げるから大切になさいと吳れ〳〵も申して一生懸命になつてくれます。

夫れを聞くとあゝ親なればこそと染々有難くて涙がこぼれます。

けれども私の身になつてみますと却々然うして着物處ではなく、仕度の相談なんかてんで耳に入れやしません、是れからは凡べて自分を賴みにして、自分の力自分の働で地位をも作り温い家庭をもつくらなければならないのですもの、その方がよつぽど大役です。

昨日も御祝物を持つて來て吳れました從姉の浪子例によつて惡口上手で、散々冷かした揚句私なんかは思はぬ處に嫁いで榮耀榮華に暮してゐるやうに見えるけれども、只だの一日だつて樂しいと思つた事はない、貴女なんか夫れから思ふと甚麽に幸福だか知れやしないわ、第一望んで行くんだから美しいわ、抱負が大きくつて好いぢやありませんかと云はれて見ると然うに違いないけれども、尙且女は溫順しく望まれて嫁す方が氣樂で好いかも知れないわと云ふと、浪子はポンと私の膝をたゝいて恐れ入りましたと云つたぎりもう返辭もして吳れないんですもの、誰樣にも夫れほど呑氣で氣樂で幸福のやうに見えるでせうが、自分では却々責任が重いですよ。

併し人に出來る事なら何だつて出來ない事は無いでせう、イザとなれば振袖の袂を斷る位の事は容易い事ですわ、自分の體の續く限り努力して夫れで成功しなかつた時は運命だと斷念します。

お友達の方々は大抵もう相當の地位ある令夫人になつてゐらつしやいますのに、私ばかりは一介の貧書生へ嫁くのですもの、併し名譽だとか財産だとかに目が眩まなかつたと云ふだけは自分でも誇りだと思つてをりますわ、慾い地位なんかのある處へでも行かうものなら私のやうな者は一生借りものゝやうな氣がして反つて不愉快ですよ。



お座敷圖書館

家庭に於る新趣味

竹貫直人

家庭に新趣味を入れると云ふことは、主婦たるものの務めの一つであらうと私は思ふ。これに依つて夫がどのくらゐ慰められ、子供がどのくらゐ喜ぶであらう、未だ嫁がざる諸孃には、恐らく此味は分るまい。

材料は何時も同じ物でも、料理の方法に因つては甘く味あふとが出來る。此心遣ひは主婦の役目で、其技倆如何に因つて家の內は和氣靄々たるものになるのである。處が一向無頓着な主婦は、此等の點に少しも注意を拂はないから、お魚でも野菜でもお醬油の煮つけだ。之を毎日あてがはれる夫こそ、誠に好い面の皮と謂つべしである。

閑話休題として、私のお勸めしたいのは表題にも示して置いた通り「お座敷圖書館」即ち家庭に於ける小圖書館の設備である、之を今年の新趣味として、是非とも計畫せられんことを希望する。

何誰でも、お正月になると屹度、今年は一つ何々をしなければならないと云ふことを云はれる、誠に結構なことで、人間希望なくしては死んだも同樣であるから、是非年の始めに當つては諸種の希望を持つやうにしたい。そしてそれが成功したら、どのくらゐ愉快なことであらう。

「お座敷圖書館」は、子供のある家庭にも、子供の無い家庭にも必要なものである。圖書館の必要なることなどは、私が改めて爰で喋々辯ずるまでもあるまい。誰にした處で、我家に澤山書籍があるのは嬉しいには違ひないのであるが、さて左樣々々は買ふことは出來無いから、家庭に圖書館を造るなどは思ひも寄らぬ、よし買へた處で、左樣な設備などをする場所も無し、と、私のお勸めに故障を云ふものがあれば、屹度斯樣

いふ理由に基く處の故障であらう。

それならば、改めて申上げる、私の所謂「お座敷圖書館」なるものは、必らずしも書籍の數の多きを以つては誇らないのである。最初は二冊でも三冊でも可いのである。家庭内にある書籍を集めて、それで開館式を擧行すれば可いのである。

一基の本箱、それが圖書館の書庫なのである。斯くして家庭に圖書館が出來ると、館則に書籍は閲覽して了つたら、直に元



の書庫に納むべしとあるから、書籍が決して散逸しない。人情で書籍の數が増したくなる。從つて無駄使ひをしないので、書籍費に廻すやうになる、數へ擧げれば利益は何程もある。家庭にある書籍は不思議に無くなつたり、痛んだりするものである、それは一定の場所に置かなかつたり、目録を造つて置かない罪であるから、一旦「お座敷圖書館」が出來た上は、其憂ひは最早決して無い。ばかりでなく、

今云つたやうな次第で、書籍の數はだん〳〵增して行く。

目錄に載せる書籍の類別は、眞實の圖書館のやうに、細かくむづかしく分ける必要は無い、お父樣用、お母樣用、子供用、この三つで澤山である。これに兄樣用、姉樣用の此二つが入れば充分であるが、これは無くても差支へはあるまい。

そこで出來るならば一定の日、假令ば日曜日の午前と云つたやうな、家內中が比較的閑な時日を撰んで開館日と定めたいのである、そして家庭にあるもの殘らず、書庫を取圍んで、所謂「お座敷圖書館」なるものを開館し、閱覽するやうにしたい。此時に、懇意なものに限つて見せるのも面白からう。

米國では此仕組が大流行であると聞いた。そして流石は大陸の民だけあつて、心が大きく、各自の藏書を持ち寄つたり、或は又た、順々に方々の家の「お座敷圖書館」の書籍を閱覽して廻つて居るとのことである。勿論懇意の間柄の家のばかりではあらうけれど、面白い仕組ではないか。

其他外國では圖書館制度がなか〳〵發達して居て、實に便利な仕組のものがある。それは家庭圖書館と云つて、或る立派な圖書館から、鍵のついて居る本箱一基づゝを、會員となつた家庭に預けて置いて、其中へ取り代へ引き換へ新らしい書籍を入れて行つて與れる。だから月々僅かな會費さへ納めれば、自由に好きな書籍、新らしい書籍が讀まれるのである。日本にも早く斯樣いふ圖書館を欲しいものである。

話は又た別の處に飛んだが、兎に角、我が國の圖書館は未だ此處までは進まないのであるから、各自の家庭に、今、申上げたやうな「お座敷圖書館」の仕組を設けることをお勸めする。左樣したら、同じく書籍を讀むにも、どんなに趣味あることであらう。

そしてお伽噺の書籍でも集めて置いてやつたなら、どんなに子供は喜ぶであらう。去年の暮に開館した日比谷圖書館の兒童室に來る子供を見るに、我家に自分が持つて居るお伽噺を、此處へ來て珍らしさうに借りて見て居る、これを見ても、家庭に新趣味を入れると云ふことの必要は知れるではないか、敢て勸む、今年は是非此「お座敷圖書館」の仕組を家庭內に設けられんことを。



顔の色を白く美しくする法

大森柳一

△美人たるの要件

所謂美人たるには種々の要件がある。然しこれは時代により、處に依り、それ〳〵嗜好の變遷があるから、決して一定することは出來ない。例へば德川氏時代には瓜核顔が貴ばれて居たが、其後或は丸ぽちやの貴ばれた時代もあつた。然し斯くの如く變遷のあつたにも拘はらず、色の白きを貴ぶ風習は、熱帶地方を除いては、各國人共に同一である。日本でも古來「色の白きは七難を隱す」と言つて居る。此の外に美人たるの要件は澤山あるが、先づその内で、最も必要な色の白くなる方法を說き、追々に他の諸要件を說明することにする。

△まづ胃腸を健康にせよ

胃や腸が病氣に罹ると顔の色が蒼黑くなる。或は胃腸に病氣がなくとも便通の能く整はぬ人は矢張り顔の色が惡い。婦人には殊に常習便秘が多い樣である。故に顔の色を白くするには先づ此の習慣を直さなければならぬ。其れには鹽湯を飮むか、或は舍利鹽、カルヽス泉鹽を用ゐればよろしい。處方は左の通りである。即ち舍利鹽を用ゐるには、

舍利鹽	七グラム
薄荷水	三グラム
單舍利別	八グラム
水	百グラム

これを一日三度に分けて飮む。若しカルヽス泉鹽を用ゐるならば、

カルヽス泉鹽	十五グラム
稀硫酸リモナーデ	百グラム

にして飮めばよろしい。或は單にカルヽス鹽十五グラムを適量の冷水に溶して、朝食前に頓服にして用ゐてもよろしい。

△あまり精神を勞する勿れ

精神狀態と顔の色とは密接な關係がある。心に苦勞なく樂天的に生活して居る婦人は、その顔の色に光澤があつて、平和な色を浮べて居るけれど、常に心を勞し、或は神經の病氣に罹つて居る人は、顔の色が蒼

白く何んとなく淋しく見える。然し處女時代を去つて家庭の主宰者となれば、如何なる婦人でも心配苦勞のない者はない。その苦勞や心痛を翫して行く人と、少しの苦勞に身も世もなく、泣き悲しむ人との別によつて、顔の色にも差別が出來るものである。要するに精神の過勞は顔の色を惡くするものである。これと相關聯して睡眠不足も同樣の結果を生ずるから、出來るならば早く眠り早く起きる習慣を養ふがよろしい。然し睡眠時間は少くとも六時間乃至八時間でなければならぬ。

△情慾を抑制せよ

生殖作用と皮膚の色素とは、如何なる關係があるかは、各國の學者の研究して居るに拘らず、未だ定つた說が發表されない。然し房事過度の結果顔の色の黑くなるのは事實である。のみならず情慾を抑制することは、健康を維持する點から考へても、殊に必要であるから、必ずしも顔の色の白きを望まぬ婦人でも、常に情慾を抑制しなければならぬ。

△顔を清潔にせよ

次に顔を不潔にすれば皮膚病に罹り易いものである。其の一例は彼の面皰である。面皰は啻に顔の美を損するばかりでなく、治つた跡には黑き斑點が出來る。これは面皰のために皮膚に熱を生じた結果、色素がその部分に集つたからである。だから面皰が出來たらば自分勝手な療法を加へないで、醫者と相談するがよろしい。

△積極的の方法

以上は主として消極的方面から說いたのであるが、次に積極的の方法を列記して見ると、

一、身體は健全でなくてはならぬ。殊に神經病に罹つて居る婦人は、早く全快する樣にするが肝要である。

二、小羊の柔かな革、又は絹布の柔い品で顔を輕く摩擦すること。

三、香水を顔へ塗る人が有るが、之れはアルコールの刺戟を受けて皮膚を荒すから、其の代りに、微温湯一合の内へレモン油を一二滴入れよく混ぜたもので顔を洗ふがよい。

四、荒れ性の人は洗粉を用ひ、且つクリーム又はグリスリンを塗るがよい。

五、顔に塗る化粧品は價の廉なるに迷はされずに、常に信用のある店で信用のある品を求めること。

等であるが、その他は追々に說明する。

△顔に塗る藥は何か

一體色を白くする藥と云ふものはないのである。或は亞砒酸の如きものがあるが、之を服用するのは非常に危險な話で、先づ生命を棄てゝかからねばならぬ。且つ其れを用ゐたからとて、決して色は白くはならぬ たゞ蒼白く透き通る樣な色になる迄である。次に色を白くする藥だと言

つて顔に塗るものがいろ／＼販賣して居るけれど、必ずしも信用すべきものではない。たゞ其れを用ゐて色を白くしようとするのは随分無理な希望である。然し若し生理上より教ふる種々の方法を守り、同時にそれ等の塗り薬を用ゐるならば、或は効があるかも知れぬ。其の處方は下の如きものである。

硼酸	四グラム
リスリン	廿グラム
アルコール	十グラム
蒸餾水	二百グラム

或は、

龍腦	二グラム
苛性加里	一グラム
食鹽	五グラム
アルコール	十グラム
蒸餾水	百グラム

最も簡單に出來るのは、

炭酸加里	五グラム
グリスリン	五グラム
アルコール	五グラム
三十倍硼酸水	百グラム

である。市中に販賣してゐる品は、多くは之れに類したものである。之れに若し香を附けたくば、薔薇水でもベルガモット油でも、自分の好きな香を混ずればよろしい。

△顔色の蒼白きを治す法

身體の營養が不良であるか、或は何處か病氣であるかして顔の色の悪いのは、致方もないけれど、別段病氣と云ふ程の事もなく、顔色の蒼白くなるのは多くは貧血の爲めである。若し其様ならば醫者に相談して速に其の原因を治さればならぬ。特に婦人にはスツルーマーと云つて僅に頸部の前面が少し膨れて來たかと思ふと、顔の色が悪くなる病もあるから、能く／＼注意しなければならぬ。で貧血のために、顔の色の蒼白くなつたのにはヘモグロビン、フエラトーゼ、又は鐵劑等の血を増す薬を飲めばよろしい。それと同時に適度の運動を行ふこと、新鮮な野菜物を食すること。便通を整へること、入浴に依つて新陳代謝を旺盛ならしめること等を決して忘れてはならぬ。然し一應は醫者の診察を受けて、貧血の原因を知るが必要である。

△美顔術の効能

一時非常に流行した美顔術は、少しは顔の色を白くし美しく見せる効があるらしい。其の方法は先づ顔へ熱い湯で搾つたタオルを乘せ、次で蟲眼鏡を以て顔の皮膚面に開口する汗腺や皮脂腺の孔の内に、塵埃や垢の存在して居るや否やを檢し、若し在るならば指の先で、其の周圍を押

して之を去り、其の跡へクリームを塗つて腺の中に再び垢や塵埃の入らぬ様にするのである。顔面に開口する腺の數は非常に澤山であるから、其の孔が全然垢や塵埃で鎖されたなら、顔は黒く見えるに相違はない。其所で、此の美顔術の効ある所以となる。然し美顔術を行ふには必ず術者として、一人なり二人なりと人手を借りなくてはならぬ上に、如何なる美顔術も根本的に顔の色を白くする事は出來ぬ。たゞ美しくするだけである。顔の汚れは除く事は出來るが、皮膚其の物を白くすることは出來ぬ。

△毛の深い婦人の心得

人間とても顔に毛が生えて居る。極く細い繊毛だから、左程目立たないが、併し往々婦人にして男子の様に髯等が濃く生える人がある。剃れば剃る程濃くなり、抜けば次第に太くなり、非常に困る事がある。然しこれを防ぐは良き方法がある。この方法に依れば再び毛の生える恐がないから、毛深くて困る婦人達は早速行つて見るがよい。其の方法は左の處方に依つて作つた藥を、其の部分へ塗るのである。

即ち先づ毛を剃つて、其の上へトルコルスマと云ふ藥を、丁寧に摺り込むのである。之れは皮膚に害を與へぬから、安心して用ゐてよろしい。トルコルスマと云つたゞけでは、或は藥舗で知らぬかも知れぬ。

酸化砒素　一グラム
生石灰　五グラム

を混じたらのをトルコルスマと云ふのである。これを二三度摺り込めば、以後其の部分には毛は生えない様になる。此の藥は一時に澤山調合させて置くと、古くなつて効が無くなるから、成るべく新しく製つて用ゐなければならぬ。尚ほ此の藥は塗つた所分の毛嚢を殺すのであるから、其の藥の附いた手で、顔や眉毛に觸れてはならぬ。且つ毒藥であるから、口に入れると危險である。

△化粧の目的

さて是までは直接に顔の白く美しくなる方法を説明したが、然し顔の色は一には持つて生れて來るのだから、先天的に色の黒い人は化粧法に依つて色を白く見せなくてはならぬ。

化粧の化の字はばけるとも訓む。白粉や臙脂を用ゐて化けることである、言ひ換へるとお化粧は婦人が生來有して居る美貌を、更に人工的の方法に依つて、最う一段美しさを増す事である。然し世間には顔は白くさへ有れば良いと思つて、白粉は厚く、臙脂を濃く塗つて、其れで嬉れしがつてゐる人がある。之れでは顔へ白壁を塗るも同様で、人間の肌の色を殺して貴ぶべき生氣が現はれないから、如何にも弱々しく見えて、美しいと云ふ所が無くなつて來る。斯の如き誤りは古來からの慣にも因るが、尚ほ一面に於ては生れ付き有して居る肌の美を充分に發揮させる方法を知らなかつたからでもある。

△西洋で行はるゝ化粧法

茲に現今西洋各國特に佛蘭西に於て、行はれて居る最も簡單な化粧法を紹介しよう。

先づ上等の石鹸を用ゐて微温湯で顔を丁寧に洗ひ、湯氣をタオルで拭き去つた跡へ、クリームジヤバノと云ふクリームシモンの白粉を塗ると顔が白くきめが細になつて見える。（獨逸ではクルンと云ふ香のある油を塗つて、それを柔い布片で拭いた跡へ、澱粉を白粉の如くに塗る）其の上へ更にアランパールと云ふ頬紅を塗ると、美しい櫻色がほんのりと現はれて來る。眉毛にはノアールと云ふチツクになつて居る眉墨を使用すると、眉毛の薄い人も濃く見え、それを薄く眼瞼に塗ると、細い目の人も、ぱつちりとした目に見える。口紅は佛蘭西製のポマーデを用ゐる。これは香も高く、日本在來の臙脂の樣に、青く光る樣な事はない。此のポマーデにも色々の種類があつて、自分の唇の色と美しく調和する色を選んで用ゐる。頬紅も同樣に調和のいゝ色を選ぶのであるが、ブランパールでも或はパトンクリームでもよろしい。白粉なども西洋では薄桃色、黄色、白色等があつて、自分の皮膚の色に調和する色を用ゐるが、日本人には黄色の白粉が適當だと云ふ噂である。手の化粧も同樣である。

更に茲に爪を美しくする方法を附加して置く。先づ爪を溫めて少し柔くなつたなら、爪の先を圓く切り、ヤスリを用ゐて形を正し、次に爪の表皮を溫めて凸凹を治し、子ールセツトと云ふ油を塗つて鹿の揉み革で磨き上げるのである。夏になつて手掌に汗の澤山出る人は、佛蘭西製のキユシドリンと云ふ品を塗る。但しこれは夏だけに限られて居る。

以上の化粧品は舶來であるから、多少高價であるが、日本にも近來輸入せられて居る筈である。





三都の遊樂

觀風子

◎三都の正月競べ

難波の葦は伊勢の濱荻、所變れば言葉さへ變る。況んや百數十里を距つた東京、京都、大阪の三都に於て遊樂方面の趣味樣々なるは勿論のことなり、先づ正月の景況から云へば、年々その寂れゆくを歎くといへども、尙は三都に冠たるは東京の正月なるべし。年暮の二十五六日頃より、門前には松竹、軒に〆飾の陽春を迎へて、もう幾夜寢ればお正月と、いたいけ盛りの子供等が、幾夜〻夢にも羽子突き交しつゝ、待つ日程なく新春第一の元旦ともなれば、東風そよ〱と門松の〆飾にそよぎ、若水汲む釣瓶の軋音まで杜絶えぬ中から、御空遙けく紙凧のうなりの音ものどけしや。今日はお正月で御座います、早くお起き遊ばせと下婢に起されて、漸く歩行の出來るやうになりたる坊ッちやまが、寢間着から晴衣に着更へさせられて、母樣の跡追ひながらピンピンはね給ふもあるめり。去るほどに皆さま御機嫌よくお屠蘇の式も濟めば、朝日の光うらうらと高く輝き、廻禮の客羽織袴に嚴めしく訪れ來るなど、世の中樂しく、面白く、賑はしくぞなりぬる。下町に花電車の連りに走りて、兩側の大店、多くは金屛風立て廻らしつゝ、今日は商ろとてにはあらで、店頭に番頭小僧の畏りながら年賀の客を受くるも目出度し。扨て山の手の市街には、馬に跨る軍人の、馬丁に警蹕の聲いさましく、蹄の音戛々と騎りゆくもあれば、絹帽子に二人挽後押の葉卷莨の煙霞と棚引き、宙を馳るが如き紳士もあり。何れか我が未來の夫にせまほしきと、羽子突く手を罷めて、見送る處女の胸の中、さこそと御推もじ申し奉る。午後からは年賀の客概ね屠蘇

機嫌になりて、千鳥足の覺束なく、動ともすれば紙鳶の絲に足をすくはれ、追羽子に額を拂はれんとするもあるめりさりとて、怒るものなく、罵るものなく、唯だ興ある樣に打笑ひて過ぎゆくなど、流石に正月の顏ぞかし。時移るに從ひて萬歲來り、猿廻し來り、獅子太鼓の遠音に日暮るれば、諸々の家に歌がるた、双六の遊戯に又一入の賑はしさあり。

さて又京都の正月は、四十年前既に都と共に去りぬと覺しく、年賀の客も東京に比べてはいと疎らに、子供等の遊び狂ふさまも首府ほどの景況はなし、門松に比叡颪のざわつきて、鴨川の流れ、夜になれば、「河風寒く千鳥鳴く」は詐りならじ。大阪は流石に市の都なり。東京ほどに正月の華麗はなけれども、町家の主人、盛裝して年賀に廻ること引きも切らず。家々軒々に國旗を立て、幔幕を引き廻らし、今日を祝ひ壽ぶこと、東京の下町におさ〳〵劣るべくとも思はれず。殊に目立ちて美しきは、柳巷花街の麗はしき手弱女が、今日を晴れにと扮裝ちて、徐ろに練り歩くさま、近松時代の古へも偲ばれて、東京には一寸見られぬ妖艶もあり。

◎三都の花競べ

東京人は遊び好なり。別段に花を眺めて歌など作るといふほどの風雅はなけれ、何と無く美しく賑かなるが好きなれば、大抵の家に庭を作りて、ソレ松よ櫻よと植ゑならべ、ヤレ松の枝に月が出たと云うては嬉しがり、櫻の花に小酒宴して、一寸通がる所仇氣なくて可愛らし。此の心愈ゝ擴がれば、家毎に櫻も植ゑずばならず、藤の花もブラ下げて見ねば物足らぬやうな心地し、菖蒲のくつきりと紫色に咲き出でたる、元より惡からう筈なく、躑躅の血に染みて朱に咲きたる、是れは保津川の碧流などに對してこそ趣あれ。東京の如き野原には調和甚だ妙ならざれども、江戸ッ子の氣象として、無いと云はれては聊か業腹なり、牡丹も、朝顏も、眞の趣味は解せぬながら、京大阪に無いのが此方の附目なり、蓮は聊か抹香臭くて江戸ッ子の肌に合はねど、折角不忍の池といふ立派な池があるからには

植ゆるに如かずと思ひ、菊花の趣味は、實は節に咲き亂れて霜に傲り、百花に殿して氣節を貴ぶところにあれども、東京人は左様な所には氣がつかず、黄菊、白菊、唯つた二種だけでは却却濟まされず狂ひ咲も欲しければ、狂はぬ咲き方も欲しゝ。何とかして出來るならば朝顏のやうに紫色や、瑠璃色にも咲かせて見たけれど、如何に人間の玩弄品に生れて來た菊花なりとて、左様々々は自由になりかね、トヾ畢竟る所は人形の首や手足を附



着けて、可惜菊の性質を臺なしにして了つた俗惡極まる菊人形こそ、實にこゝの心を現はしたるものなれ。團子坂の菊人形、上野の櫻花、一は春風駘蕩の頃、一は秋風蕭颯の時花暦中の王冠を戴くこと道理なれ、それに引換へて京都は由來花の都らしくして、其實花の少なき都なり。陽春四月、風暖かなる時、小さき日傘かざしつゝ、チラリホラリと飜り色の裳裾ひるがへして京の女の花見にゆく先は、郊外を三里

西の嵯峨野か、さらすば御室の仁和寺なり、嵯峨の嵐山は流石歌にも詩にも名高き所とて、その風致は迚も東京の上野や、隅田川の及ぶところに非ず。一帶の青山、雲か霞かとばかり櫻花咲き匂ひ、大堰川の碧流其の裾をひたして、淸瀨巖に激するの趣致は、河蒸汽も通ひ、肥料船も通る隅田川の風情とは同日の談にあらず。御室の櫻樹は古へより樹幹伸びず、横に地に這へるに名高く、法眼覺宗の歌にも「御室やま花も紅葉もかつしきて賴む影なき苔の下草」とありて、其の樹振却々に風情あり。去りながら嵯峨と御室との他には、櫻花は勿論、他の花暦にも是れぞと擧ぐ可き名所なし大阪に至りては殊更然り。元と商業の都府として建設せられたる都會なれば、金さへ儲かれば其れで能事竟りぬ。何の、梅花の、櫻花のと洒落たことを云ふに及ばんやとて、市内には別段花の名所はなけれども、五畿の地は是れ昔帝京の遺跡、有難きことには東京の如き一夜作りの名所にあらで、數百千年を閲し來れる歷史的の名所甚だ多く、吉野の櫻花、月ヶ瀨の梅花、扨ては三尾（高雄、栂の尾、槇尾）の紅葉、何れか天下一品の名所ならざる、京都人は懷中勘定に細き故、此等の名所にも懷中の身錢を切つてまでは遊覽にゆく勇氣なけれど、豪放時に東京人を驚かす事ある大阪人は、時々一家を擧げて遊覽に莫大の費を盡すことあり、去れば京都人に問へば、嵯峨と御室の他は多く知らずと答ふれども、大阪人に問へば、大抵の名所は必ず知り居ると答ふること請合なり。

をさめ

小兒のある家は常に障子など破れがちなるものなり、玄關および、客室などは時々これをつくろひおくべし　障子の穴よりあるじの心の奧までも見ゆるものなれば打捨おくべからず。

客室及び玄關は毎朝よく掃除し、敷石などに水うち、客室には床、棚などの飾りにも心を用ゐ置くべし、家の品格を表するは客室などによるものなり、又客の便所は常に用なきものから掃除もいつしかおこたるものなれば、時々掃除をなし清潔になし置くべし

手水鉢は毎日水を入れ替へて、いつも溢るゝばかりになし、手拭などにも心を用ゐ置くものなり。

懸賞諸國珍菜晩餐料理



第一等　大根料理（一貫匁にて三品づゝ五人前）

札幌　伊佐敷清子

一貫匁の大根（大根により、目方に少しづゝ相違あれど、私の量りしもの直徑二寸程にて一尺餘のもの四本）をよく洗ひ皮を去り水より上げて置く。

△大根の肉づめ

二本の大根を、中程五寸位、刺身庖丁、又は細き刃物にて中をトンネルの樣に、輪の厚さ三分位に、なるだけ圓く奇麗にくりぬく。別に豚肉三十匁を、並に切り、醬油・砂糖・味醂にて煮、俎板の上に取り出し、極くこまかく切り、摺鉢に玉子二個割り、よく摺り、右の切りたる肉を入れて、かきませ、これを前のくりぬき置きし、大根につめ、兩端は大根の細き所を、栓にして、豚肉を煮たる汁に、少し許り水を加へ、三十分間程煮、取り出して、三分位の厚さに輪切りにして三個づゝ皿に盛り、別に又油揚五枚を、半分に切り袋を作り、大根を千六本に切り、胡麻の油にていため、醬油・砂糖にて味をつけ、摺鉢に玉子一個落して、よく摺り、それに右の味つけたる、大根を入れかきませ油揚の袋につめ干瓢にて結び（稻荷すしの如く）豚肉を煮たる汁にて煮、前の皿に二個づゝ附合す。

△銀杏大根の酢煮

一本半の大根を、十文字に庖丁を入れ、一分位の厚さに銀杏に切り、一合餘りの酢に、砂糖盃に二杯入れ、其汁にて煮る、別に銀杏二合位をいりて薄皮をむき、大根の煮へたる時、鍋の中に入れ、大根と共にかきませる（銀杏は長く煮る時は色惡しくなる）青き内に、鍋をおろして、小鉢に盛る。

△吸物

殘りし半本の大根を薄く輪切りにして、二十匁位の豚肉を細長く切り、これを薄く切りたる大根にて卷ききざみたる靑昆布にて結び、一人前三ッ位の割に作り醬油、味醂にて深鍋に汁を作りて煮る、煮へたる頃葱を短册に切りて入れ、葱の煮へ過ぎぬ內鍋をおろし椀に盛り、燒海苔をもみふりかけて出す。

評　献立及調理法共巧妙にして御手際感ずるの外なし（秋穂益實選）

第二等　大根料理　兵庫　石原まつ子

△茶碗蒸し（大根三百目玉子五個芝海老二十五個海苔二枚）

先づ大根の皮をむき、おろし金にておろし、煮出し味醂醬油にて味をつけ、芝海老の皮を去り、布にとりて水氣を去りて入れ、玉子をときてませ、茶碗にいれ普通茶碗むしの手順にて蒸し海苔をもみかけて出す。

△そぼろ（大根四百匁鷄肉百匁）

大根の皮を去り五六分の輪切になし、米少量をあらひ、布につゝみ、大根と共に茹で、別に鷄肉を細まかに叩きて煮出し、味醂、醬油、砂糖にて味をつけおき茹出たる大根を煮出し、味醂鹽にて味をつけ、鉢にもり、前の鷄を大根の上よりかけてあたゝき內に出す。

△胡麻酢あえ（大根三百匁胡麻一合）

大根の皮を去り、膾ひきにてつきまた千六本にはやしてもよしこれに少量の鹽を入て、擂鉢にてもみ汁をしぼり、胡麻をいりて擂鉢にて擂り、砂糖と酢をませて味をつけ、キザ柿またはコロ柿をむき、しんを去りうすくはやし、大根と共にあえて小丼にもりて出す。

評　献立の配合面白しそぼろ煮に米を用ゐたるは其方法巧妙と云ふべし。

同上　鴨料理（一羽五百匁　五人前）　大垣　金谷しま子

まづ鴨の羽根をぬき、毛燒をなし、頭足及び羽がひを落して腹の肉を切り取り、背の方の皮をむき、首の處を持ちて背と前とを別けて裂き、背の肉其の他すべての肉をへぎとるなり、骨は吸物のだしに用ゐ其の肉にて吸物及びつけ燒の肉を取り殘りの肉をマカロニーに用ふるなり。

△吸物（骨一羽分、肉三十匁、三つ葉少々）

骨に水六合あまりを加へ、スープ鍋にいれて弱火にて能く沸騰せしめ、其浮上るあくを掬ひ取り、二三時間程煮て是をすゐのうにて漉すなり、膳に進むる前に之を一寸沸騰せしめ醤油、胡椒にて味をつけ、肉を入れ、肉の煮へたるを見て椀に盛り、湯煮したる三つ葉をあしらひ汁をかけて出すなり。

△マカロニー　（干饂飩茶碗に五杯（ゆで上り）、肉残りの分、玉葱一個、牛乳一合、トマトーソース瓶入適量）

初めに干饂飩をざつと湯煮をなし置き、肉を刻みて能くたゝきたると、玉葱の小さく刻みたるとを混せ、鹽及び胡椒を入れ、之を圓めてテンパンにバターをしきて其上に肉をのせ、肉焼ストーブの中に入れて焼く褐色になりたるを見て出し、之を饂飩にて包み、うどんの上に少しバターをのせ、ストーブに入れ、一寸焼きて出し、之を皿に盛りトマトソースを掛けて出すなり。

トマトーソースは、トマトーソースに牛乳を混じ杓子にて能くまはして温め、煎りたる香よき胡椒を混ずるなり。

△つけ焼き　（肉凡八十匁、小蕪十個）

鴨の肉片を金串にさして焼き、やけたらば合醤油（醤油二、味醂一）をつけて一寸あぶり、串を抜きて皿に盛るなり。小かぶは菊の花に庖丁し、あちやら漬になして花の芯に唐辛のきざみたるをのせるなり。

菊の花に切るには小かぶの皮をむきてかぶの中程までたて横にこまかく庖丁をいるゝなり、あちやら漬は二杯酢（酢三、醤油一、砂糖一、）を作りて小かぶの切りたるを鹽にてもみ二杯酢の中に凡二時間程つけ置き手にて酢をきりて皿に盛るなり。

評　献立の配合もよし殊に總ての調理法説明等親切にして甚佳併し吸物に吸口なきは残念。

第三等　鴨料理　（五百匁のもの一羽取りて三品づゝ五人前）

京都　上田千賀

先づたらひに水を入れ其上にて毛を逆にひくべし（毛の散らぬため且逆にひく時は、さし毛のこらざればなり）毛やきして、先づ頭、翅、足など切り離し後胸骨の右より庖丁をさし込み、腹部下まで切り開き、次に胸骨の左へ庖丁を入れ、胸骨をさきとるべし、次に腹の中

へ庖丁をさし入れ攪きさらへる樣になして腸を取り出し、後庖丁の背にて骨のある處を靜かにたゝくべし。

骨をぬくには腹を出してすぐに肩及び足などの所を左手にもち、庖丁を右の手にもちて骨際を、こきさろ樣にしてぬくべし。

腸、骨はよく洗ひ置く（腸の中にも食してあしき部あれば見分くべし）かくして料理し、骨をぬきたる肉は凡三百目と見積る。

△吸物 （小骨、腹を使ふ）

前によく洗ひ置きたる腸、骨を（大なる骨ははぶき）よく／＼たゝき其れに、玉子一ッを割りてかき立てたるを加へ、よくまぜよき程に圓め、麥粉をぬりつけ置き、

別に鍋に鰹節を煮出し、味醂醬油にて味をつけ、並の浸汁を作り、それの煮立ちし處へ前の圓めしものを入れ、

半ば煮へたる時別に、切り置きたる芹（一寸位の丈に）を散らばらぬ樣一寸くゝりてそと入れ、さつと煮てあしらひとし、椀に盛り移すなり。

（青味を長く煮る時は色あしくなる恐れあればむすべし、又あしらひを使はず肉計りを煮て椀に盛り山葵を添へて出すも一寸よきものなり）

△オムレツ （百匁を使ふ）

肉百匁を取り、味醂、醬油にて少しからめに鹽梅したる汁の煮立ちし處へ入れよく煮上げ細くたゝき置。

玉ねぎ、三ッ、四ッよく洗ひこまかく切りて右の汁にて煮上げ、肉とまぜ置き、扨、丼に玉子を一人前に二ッの割、即ち十個割り込み鹽、胡椒、少し加へ、泡立つ程よくかき廻し、玉子燒器を火にかけ、バタを、中匙に一杯落しこみ、充分煮へたれば、其上に玉子のときたるを凡そ五分の一位づゝ入れ上はどろ／＼して居ても底側黃金色に燒けたる頃、前に煮つけ置きたる、玉ねぎと肉の交せたるを、眞中より少し片よせて入れ、柏餅の如く合せて大皿に移し付合せには馬鈴薯の煮つけなどよけれど又紅生姜を適宜に切りて添へ置く一寸よきものなり。

注意　これは火かげん肝要なれば七輪などの火の強き方より　火鉢にてむつくりとして火勢の弱め底のこげ付く恐れなくてよし、又鹽胡椒は好みによりあんばいすべし。

△つくだに　（二百匁計の肉皆使ふ）

鍋に火をかけ、肉を入れ、杓子にてかき廻しながらからいりし、肉より汁出でゝ色替りたる時、生姜の細く、きざみたるを入れませ醤油を加へ、よく煮つけ又かき廻して、醤油を加へ、幾度もかくして十分長く煮詰め、又飴を加へませ合せて又よく〳〵煮上げ小皿に盛る。

評　鴨料理として獻立は書妙ならず今少しく注意を望む然れ共鴨の毛抜き方只庖丁の入方等説明の懇到なるを賞す。

同上　鴫料理（鴫十五羽）

兵庫　明智暉子

△吸物　（鴫四羽、じやうやう鉄一本を十個に切る）

まづ鴫の毛を去り、汚物をのぞき、板骨を削り取り庖丁の脊にてよくたゝき、醤油煮出しを少しませてまるめ、煮出し、醤油にて下煮をなし、椀にもり、じやうやう鉄を薄葛の汁の煮たちたる中に投じて煮て、椀にもり、そへて汁をかけ、生姜のしぼり汁をさして出す。

△パラレー　（鴫五羽、青豆一合）

羽を去りたる鴫を丸のまゝ鹽、胡椒をふり、溶きたる玉子にひたし、メリケン粉をまぶし、サラダ油をそそぎかけて、テンピの中にて焼き、青豆の鹽茹でをそへて皿にもりソースをかけて出す。

△白あえ　（鴫六羽、豆腐三丁、胡蘿蔔三本）

鴫の肉をこまかく切り胡蘿蔔をたんざくにはやし醤油・味醂・砂糖にてよく煮て汁をしぼり、豆腐を茹でて布にてしぼり、擂鉢にてすり鹽と砂糖を混じ前の材料をあえる。

評　鴫料理としては先無難然れ共パラレーの添合の青豆に今少しく味の付方に注意を要する感あり。

第四等　蜜柑料理（中の廿五個にて三品づゝ五人前）

兵庫　越村靜子

△椀　（蜜柑六個用）

馬鈴薯百五十目程を皮をむきゆでゝうら漉しにかけ蜜柑六個の皮を去り中の實をむしりてこれに交ぜ合せ更に玉子一個鹽少々砂糖一匙レモン二滴を混和して梅干位の團子とし、メリケン粉にまぶしヘットにて揚げ

ておく。別に椎茸の一寸三四分なるを五個と海老小さければ十尾大きければ五尾（無ければ干海老にてもよろし）を洗ひ一しよに醤油、砂糖、味醂にて煮しめ、これらを前の團子と椀に盛り合せあしらひには青菜をゆがき一寸位に切りて入れ、こぶだしを鹽軽く、醤油にてあつさり味つけてよく煮たちたるを上よりかける吸口、ミカンの皮を火にてあぶり焦してこまかくたゝき切りバラ〳〵とかけて出す。

二、皿　（蜜柑九個用）

豚肉百五十目を一とかたまりとし、ミカン五個を皮をむき袋をはなさぬやうそのまゝ鍋に入れ肉とともに二時間程水煮し鹽一つまみ入れ更に二時間程煮る、肉は五ッ切れに切りて皿に盛り渡しミカン一個づゝつけ合せ殘りの煮汁に蜜柑四個の實をバラ〳〵にはなして入れ一と煮へしたらば胡椒少々砂糖少々鹽少々メリケン粉一匙入れよく混せたるを肉の上よりたつぷりとかける。

三、酢の物　（蜜柑十個用）

大根三、胡蘿蔔一の割合にて纖に切り鹽にてよくよくもみ堅くしぼり、蜜柑十個の皮も袋もきれいに取りふきんにてしぼりて汁をとり、これに醤油、砂糖にて三バイを作り前の大根にかける暫時して皿に盛り渡したらばしぼりかすの蜜柑の實を上よりバラ〳〵とかけ淺草海苔をあぶり手にてもみ、更らに其上よりかけて出す。

評　料理法説明に於ても親切なるは殊に結構々々

同上　鰤料理　（七百匁三品　五人前宛）

臺南　坂口芳子

△鰤吸物　（鰤百匁、蓮根二十匁、百合根一個、豆腐一丁、三ッ葉五葉）

鰤を刺身の如く切り、百合根を解き放ち蓮根の皮を剥ぎたるをサイ形に切り、水煮し、豆腐を小さく切て入れ、醤油にて加味し、三ッ葉一寸位に切たるを入れ椀に盛り吸口に柚子皮を小さく切りたるをのせ出す。

△鰤フライ　（鰤三百匁、メリケン粉一合、玉子二個、パン粉少し、胡麻油二合、色蕪菁二個）

鰤を厚さ三寸位に切り食鹽少し振り置き、メリケン

粉を水にて解きたるものに玉子を混せ、衣をつくり、鰤の切身に着せパン粉を少しぬり、胡麻油にて揚げ、皿に盛り、色蕪菁の皮を剝ぎ、きざみたるをもみ添へてソースと共に出す。

△鰤照燒（鰤三百匁、味醂少し、醤油少し、大根二本）

鰤を厚さ三分位に切り、味醂、醤油に浸し置き金網にて一二回附燒としたるを皿に盛り　大根おろしを添へて出す。

同上　鴨料理（五百匁五人前三品）

△鴨吸物（鴨肉七十五匁、豆腐一丁、百合根一個、三ツ葉十葉、ウド少し）

鴨の肉を刺身の如くに切り水煮して百合根の剝きたるものと　豆腐をサイ形の小さく切たるとウド三ツ葉一寸二分位切りたるを入れ醤　油にて味を加減し吸口に山椒の葉を用ゆ。

△鴨スチウー（鴨百七十五匁、馬鈴薯五個、色蕪菁二個）

鴨の足及羽に附きし　處の肉を一個三十五匁位の大きさに切り五個を取りヘットにて少し燒く砂糖醤油にて味を加減し皿に盛り　馬鈴薯の蒸したるを一個づゝ添へ色蕪菁の皮を剝ぎ刻ざみたるをもみ色取り　として出す。

△鴨櫻煮（鴨肉二百五十匁、栗三合、百合根二個、馬鈴薯八個）

鴨肉を細かく切り生栗の皮を剝きたる物の上しぶを取り　百合根を解き馬鈴薯をひし形に切りたるものをバタにて燒く砂糖醤油にて味　を加減しべにを少し落し汁のなき樣にし皿に盛りて出す。

但し百合根は少し遲く入るゝをよしとす。

註　先づ鴨料理として面白し然れ共百合根を二品に用ゐたるは惡し

同上　鴨料理（十五羽五人前外三品）

△鴨吸物（生麩拾個、水ぜり五葉）

鴨毛拔したるものを二羽骨のまゝに切り水煮をし生　麩に水ぜりウドを一寸二分　位に切りて入れ醤油にて味を加減し椀に盛り吸口に柚子の皮を用ゆ。

△鴨丸燒（鴨五羽、味醂少し、醤油少し、二色蕪菁二個）

鴨の毛を剝きたるものを五つに解き體を二個に切り味醂醤油に浸し置き金網にて附燒とし色を蕪菁を切りたるものをもみ色取りと　し皿に盛り出す。

△鴨茶碗むし（鴨八羽、蓮根二十匁、百合根二個、銀杏一合、玉葱一個、玉子二個、）

鴨の剝毛したるもの八羽を細かく切り蓮根百合根の　切りたるものと水煮をしスープを製し置き銀杏の燒きたるを剝毛し玉葱と共に入れ、茶椀に盛り玉子蕩を解きしものを入れ蒸して出す。

數奇の生涯を送りし名媛の面影

附錄新撰名媛かゞみの繪解

◎靜御前

靜は京都の白拍子なり。源九郎義經之を見そめ、妾としていたく寵愛せり。義經が京師を去るに及び、從ひ行きて吉野山に匿る。後山僧の攻むるに遭ひ、捕へられて京師に送られ、北條時政更に之を鎌倉に致せり。乃ち賴朝は靜に就て義經の所在を問ひしも、知らずと明さざりしが、身重なりしかば其の儘に留め置きぬ。さる程に、賴朝の妻政子は、靜の歌舞を能くするを聞き、一度之を見ばやとて豫々之を召したれど、靜は病と稱して參らず、且つ內々今度君の御不審を蒙りて遙々召されて參りたるものなれば、仰言にいとも畏き事なれど、旣に判官の妾となりて御不審の霽れざる間に、公衆の前に出でゝ舞はん事頗る恥辱の至りなりと塗りて申すに、政子尙も賴朝に勸めて已まざりければ、やがて鶴岡八幡へ詣でしを機として、社の廻廊に召されけり。靜此頃は只だ離別の悲しみのみにて、舞曲の事など更に思ひ寄らずとて、座に臨みても尙ほ固く辭みけるが、賴朝切に勸めて已まざりければ、辭み難くて、遂に立ちて舞ふ。工藤祐經鼓を打ち、畠山重忠銅拍子を擊ちぬ。靜先づ吟じて、

吉野山峯の白雪踏みわけて
入りにし人の跡ぞ戀しき

と云ひ、次に離別の曲を謠ひ、又更に吟じて、

賤やしづ賤の緒環くりかへし
昔を今になすよしもがな

とぞ歌ひて舞ひける。眞にこれ社壇の壯觀にして、梁の塵も動きつべく、上下あッと感ずる聲、雲にも響くばかりなりしと云ふ。然るに賴朝は、さつと御簾を下させて、此の白拍子は興さめたるものぞ、今日神前に歌舞を奏するには、關東萬歲と祝ひこそすべきに何ぞや、反りて叛人を慕ひて離別の曲を歌ふとは、とて殊の外に怒りけるが、政子の慰むる所によりて、漸くゆるし衣を纏頭として取らしめぬ。

◎小野小町

小野小町は其の出づる所明かならず。或は參議篁の孫なりと云ふ。父は良眞と云ひて、出羽の守なり。小町は絕世の美人にして和歌を善くせり。紀貫之は古今和歌集を撰して多く其の歌を收め、序に之を論じて、「小町は古への衣通姫の流なり、哀れなるやうにて強からず、言はば美き女のなやめる所あるに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし」と言へり。其の妙なる容姿と稀世の歌才とに幾多の人を惱殺せし

め、大内山の庭に植ゑられては、三千の寵姫爲に色なく、世は獨り小町あるが爲に光り輝きてぞ見えけるが、其の終りは明かならず。

世に「玉造小町壯衰書」と云ふものあり。或は僧空海の著なりと云ひ、又三善清行の著なりとも云ふ。中に小町が年老ひて道路に乞食する事を載せあり。人は之を以つて小野小町とし、十訓抄、著聞集など皆な其の事を載せて、玉造小町と小野小町とを一人とすれど如何にや。

◎祇　王

祇王は京師堀川の白拍子なり。母は刀自と言ひて亦白拍子なりき。たま〳〵母病に罹りしかば、日々石清水觀音に祈りけるに、途に平清盛に逢ひて其の召を蒙る事となり、病の故を以て辭めども聽かれず、遂に母及び妹祇女と共に四八條の邸に召されて、寵愛甚だ優れりき。然るに後佛御前が入りて寵を專らにするに至り、祇王は移り變る世の樣につく〴〵無情を感じ、斯く情けなき所に片時も居るべきにあらずと、母子三人泣く〳〵宮を出でゝ嵯峨に遁れぬ。出づるにあたり、局の障子に涙を押へつゝ左の一首をぞ殘しける。

萠出るも枯るゝも同じ野邊の草
　何れか秋に遇はではつべき

佛は之を憫みて再び召さんと請ひしも、清盛諾かざりしが、再三請ふて聽きぬ。さて使を遣はして之を召しゝも祇王至らず。時に佛は病に罹りしかば、之を慰むる爲め強ひて召しければ、祇王は清盛の怒りを恐れて漸くにして往きぬ。舞ひ歌ふて曰く、

佛も昔は凡夫なり、我等も終には佛なり、
　いづれ佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ、

と。聽く者皆涙を流しける。後、祇王は、終に母妹と共に尼となり、庵を嵯峨野に結びて、佛祀に事へしが、時に祇王は年二十一、祇女は十九母の刀自は四十五歳なりしと。今の嵯峨往生院は其の跡なり。

◎袈裟御前

袈裟は本名を阿都麿と云ひて、攝州渡邊孫某の女なり。母を衣川と云へり。袈裟は姿容いと艷に美しく、愛嬌ありて心情深かりき。十四の春を迎へし時、左衛門尉源渡に嫁したり。夫婦互に心淺からずして早や三年となりしが、こゝに衣川の甥に遠藤盛遠と云ふ者あり。路に美しき一女を見て、何處の女ならんと行衛見まほしく思ひて尾けて行く程に、源渡の家に入りたり。盛遠心に、さては之れが聞えし衣川の女にやあらん、如何はすべきと、寢ては夢み起きては現つに頻うひけるが、軈て衣川の家に至り、劫かして是非に女を給はれよと請ひぬ。盛遠去つて後、衣川は袈裟を呼びて、若し彼れが言を聽かざれば必ず我れは害に遭はん、如何はすべきと泣く〳〵言ふに、袈裟はさのみ爭ひ給ふ勿れ、自ら善く之を計らはんとて日の暮るゝを待つに、盛遠到りぬ。袈裟は出でゝ之を迎へ、盛遠の掻き口說くに對して詞寡なに會釋ひ居たり。左る程に夜し漸く更け行くまゝに、袈裟暇を乞へば、盛遠大に怒り、二人相見たりと

て逢はずば逢はぬも同然なり、よし諦めよとて、刀を突き立てゝ思ひ切つたる氣色に、袈裟暫く打案じて、暇を乞へるは女の習ひ、君が志の程を知らんとてなり、若し眞實此の身を思召さば彼のうたてき渡を殺し給へ、さあらば我れは是れより歸りて謀を構へんと言ふ。其の謀と云ふは、袈裟は家に歸りて渡に髮を沐はせ、酒に醉はせて高殿に臥させ置くべければ、忍び入りて新たに沐する者を認めば之を殺せと云ふなりき。去れば盛遠は悅んで諾せり。袈裟は家に歸りて何時になく酒肴を設け、夫渡を請じて、母の病は今朝より快くなりぬれば、其の悅びに祝宴せん程に一盃きこしめせとて銚子を取りければ、渡は前後も知らず醉ひ臥したりまて袈裟は之を扶けて帳臺の内に臥さしめ、自らは髮を濡ほし、詭り服して男子の粧ひを爲し、席を隔てゝ臥しぬ。去る程に、夜半盛遠來りて首を斬りしが、持ち去りて覩れば哀れや袈裟なりき。盛遠いたく悲しみそを提げて渡の家に至り、實を告げて死を待ちしが、渡は、事既に此に至りて御身を殺すも詮なし、今は僧と爲りて其の冥福を祈らばやとて、先づ自ら髮を剃りければ、盛遠も亦た僧となりぬ。後に僧文覺と云ひて頼朝に義擧を奬めしは是れなり。

◎紫式部

式部は藤原爲時の女にして、藤原宣孝に嫁して二女を儲けたり。長を大貳三位と云ひ、次を辨局と云ふ。共に學を好みて才名ありき。式部は生れつき敏くして、幼き頃人の書を讀むを聞きて容易く之を暗記せしかば、爲時はいたく彼れを愛しみ、常に式部に向ひて、御身が男ならざる事は返すぐも遺憾なりと語りけるとか。

式部長じて博く和漢の書に渉り、朝廷の典故にも通じ、和歌に巧みに又文藻にも富みけるが、當時上東門院は文嗣を好ませ給ひ、婦人の才學ある者を擇みて左右に侍せしめ給ひしかば、式部も參候ひぬ。其の著源氏物語五十四帖は、醍醐、朱雀、村上三朝の事蹟にかこつけて書きたるものなるが、文章の妙なる事は古今に雙びなく、自ら記せる日記文も亦た頗ぶる美はしければ、物語と共に、和文の模範として推稱せらる。

◎小督局

局は高倉帝の寵姫なり。少納言藤原信西が孫にて、櫻町中納言成範が女なり。一說に藤原通範の女なりと。琴を善くし、姿色勝れしかば、宮中に入りて大に寵せられ、爲めに建禮門院に對する帝の寵愛は漸く弛ませられしと云ふ。

是より先小督の未だ家に在りし頃、淸盛の婿なる藤原隆房と親しみけるが、禁中に入るに及びて、隆房喪魄已ます、生きて相見ん事も難ければ、むしろ死なんと思ひ惱めり。淸盛之を見て、中宮は我が女なり、其の寵愛衰へ、又隆房の憂欝に沈むは皆な小督の爲めなり、小督何たる振舞ぞ、あれは婿の敵、女の敵、急ぎ引き出し、髮を切り、尼になして與れんとぞ怒り罵りける。

小督此の由傳へ聞きて、潛かに出でゝ嵯峨の民舍に匿れしが、帝は小

晉局後に搔き消すやうに失せたりければ、いとゞ御歎きに沈ませ給ふ、かゝりしほどに北面の士源仲國に命じて之を求めしめ給ふ。仲國は仲秋明月の夜獨り騎して嵯峨に至り、遙かに琴の音を聞き入りて、漸く之を得たり。

さて宮に歸りて寵幸いよ〱渥く、やがて防門院を生みしが、清盛聞きて大に怒り、遂に捕へて尼となしぬ。時に年廿三。(或は云ふ、清盛宮に入りて小督を引き出し、其の美なるを見て心動き耳語して己れに事へしめんとせしも、從はざりしかば、怒りて耳鼻を截り、尼となして之を放ちしかば、帝は大に憂ひさせられ、病を得て崩じ給へりと)、後大堰川に投じて死せりと云ふ。

◎弟橘姫

橘姫は忍山宿禰の女にして、日本武尊の妃なり。尊の東國を征し給ひし時、妃も亦從ひて下り給ひしが、尊が駿河の賊を平げ、相摸を歷て上總の國に渡らんとし、海を望み見て、是れは小海なり、跳りても超えつべしとて、舟に乘りて發し給ひけるに、中途にして暴風俄に起り、舟將に覆らんとしければ、妃は之を見ていたく憂ひ、こは海神の祟りなるべし、身を以つて尊に代り奉らんとて、自ら海に投じければ、忽ち風止み、浪靜かになりて、尊の舟は恙なく上總國に着く事を得たり故に時人は其の海を稱して馳水と曰へり。尊はそれより進みて陸奥國に至り、還りて碓氷嶺に登りける時、橘姫を憶ひ出で、東望して「吾嬬耶」と歎き給ひしが、それより後東國を吾妻と稱ふるに至れり。

◎橘逸勢女

逸勢は、學を勉め、書を善くし、殊に隷楷に妙を得たる人なりしが、資性曠達にして細行修らず、遂に罪を得て流竄せらるゝ事となりしかば女は悲みに絕えずして、泣く〱之に隨はんとせしも、役人等の叱り止むるに遭ひ、止むなく晝は伏し、夜行きて、潜に護りて之に從ひしが、遠江の坂築驛に至り、逸勢は病に罹りて、遂に歸らずなりぬ、女は歎けども〱盡きず、乃ち棺を驛に近き野に埋め、其の側に廬を結び恰も生者に對する如く事へて十餘年を經、後ち自ら柩を負ふて都に還りて改めて葬りぬ。當時擧つて彼の女の至孝を稱したりと云ふ。

◎横笛

横笛はもと神崎の遊君なりしが、容貌美しく、情も深く、また世に雙びなき能者にて、今様、朗詠は言ふに及ばず、琴、琵琶にも堪能に、歌道にも勝れたれば、後ち建禮門院の女房として伺候ふ事となりぬ。時に平重盛の侍、齋藤時賴、人知れず見染めて心を通はし、遂に相約して松蘿の契色深くぞ見えける。然るに時賴の父茂賴此の事を聞きつけていたく叱責しければ、時賴味氣なき事に思ひ、十八歲を一期として菩提心を發し、嵯峨の奧、法輪寺に入りて僧となりぬ。

横笛は斯くとは知らず、男も見えず、音信も無きに、さては假初の契

りなりしかと獨り思ひに沈みしけるが、たまく時頼の出家せる由を告ぐるものあり。斯くと聞きていたく愕き、女童一人を具して忍びて御所を紛れ出で、嵯峨に至り、門を叩きて面會を請ひぬ。時頼の道心も爲に弱くなりぬべしとみえしに、流石に彼れは時頼此の寺に在らずと言はしめて逢はず。去れば横笛は此世にては到底添はれぬべし、よし此の世にては叶はずとも、後世には必ず添はんと、左の一首を讀み棄てゝ去る。

山深み思ひ入りぬる柴の戸の
　まことの道に我をみちびけ

後ち時頼は復其の來らん事を憂ひて高野山に入り、横笛は亦奈良の法華寺に入りて尼となる。

◎稚足姫皇女

稚足姫、また栲幡姫姫とも云ふ。雄略天皇の三年に、姫の廬城部連武彦と通ずる由を誣奏する者ありしが、やがて身重になりければ、武彦の父枳莒喩之を聞きて、禍の家に及ばん事を恐れて、武彦を廬城河に誘ふて之を殺しぬ。帝之を聞し召されて、姫に就いて事の由を問はせ給ひけるに、姫はつゆしる覺えのあらざれば、身重の程も素より明かならず。且つ姫は武彦の冤死を傷み、密かに神鏡を懷きて出で、五十鈴川の水上に至りて之を埋めて、其處にて自盡し給へり。さて帝は姫の行衛を慮り人を使はして其の蹤跡を求めしめ　河上に至りしに、虹霓の蛇に似たるを見て、其地に於て神鏡と姫の屍とを得たり。依て腹を割いて之れを驗べしに、身重とは跡方もなき事にて、枳莒喩は爲に子の罪を雪ぎ得たりと云ふ。

◎中將姫

中將姫は大臣横佩豐成の女にして、母を藤原の百能と云ふ。長谷觀音に祈りて孕み、天平十九年八月十九日を以て姫は生る。明年誕生の宴に姫は筝を執りて左の歌を書し、いたく人を驚かせりとぞ。

初瀬寺救世の誓を現はして
　女も法の國に迎へん

九歳の時禁中に入りて琴を奏せしが、其の技まことに妙なりしかば叡感斜ならず、三位に叙して、中將の名を賜はりぬ。

幼にして母を失ひ、繼母の手にて育てられしが、繼母はいたく姫を惡み、或時人をして姫を山中に誘はしめて殺さしめんとせしも、其の人忍びずして姫と共に雲雀山中に潛めり。後、繼母は、父が此處に狩りして姫を伴ひ歸りしを聞き、病と稱して家に歸りて死せしが、姫はそれより、我が命を保ち得たるを偏に佛力なりとし、愈々脱俗の心を生じ、寶龜元年遂に當麻寺に入りて、善心尼と號し、後、妙法と稱せり。翌年七月十日、觀世音と彌陀佛が、共に來りて五色の蓮糸を作り、姫をして曼陀羅布を織らしめしと云ふ。布上に極樂の圖あり。是れ極樂圖の始めなり。

◎淀君

淀君は淺井長政の長女にして、母は小谷の方と云ひ、織田信長の妹な

り。長政戰死せしかば、小谷の方は子女を携へて信長に據りしが、後、柴田勝家に再醮するに及びて、淀君等も亦之れに從ひ行きぬ。然るに勝家が豐臣秀吉に攻められ、北庄城に自害せし時、小谷の方も殉死せしより、淀君等は更に叔父の織田長益に據りぬ。さて淀君は容姿甚だ美しかりしかば、秀吉いたく之を愛し、後、納れて側室となし、遠征の途にも尙ほ之を携へ行きぬ。天正十九年一子鶴松を生みて夭死したりしが、文祿二年秀頼を生みて漸く勢力を得、翌年豐臣秀次自殺するに及びて、秀頼は秀吉の後を繼ぎ、淀君は其の生母たる故に、諸大名中心を寄するもののあるに至り、遂に秀吉の正室たる杉原氏の黨と淀君の黨との二派を生じ、暗々裡に相鬩ぐに至りぬ。慶長四年秀吉薨じて後は、大阪城に在りて、秀頼を輔けて一切の事を其の手に決して、一方ならず威を振ひしが、やがて大野治長との間に面白からぬ風聞起り、關ヶ原の戰後に至りては頻りに治長を重用し、遂に相議して德川家康を圖らんとせしが運の盡きにて、秀頼に勸めて兵を擧げしも、遂に利なく、元和元年五月八日、大阪城陷りて、秀頼と共に自殺せり。

◎小宰相局

局は刑部卿藤原憲賢の女にして、上西門院の官女なり。越前守三位平通盛其の風姿の艶はしきを見て戀ひ慕ひ、

我戀は細谷川の丸木橋
　踏み返へされて濡るゝ袖かな

と詠みけるに、門院之を見給ひ、憐れに思召されて、遂に之れに妻はし給ひぬ。後壽永の亂起り、通盛攝州湊川に戰死しける時、瀧口時員馳せ來りて、此の由小宰相に告げしに、小宰相は血涙を流して悲しみ、遂に得堪えずして、數日の後夜中潜に蒼海に投じて死せり。

◎虎

虎は相摸大磯の遊女なり、其の母は大磯の長者某の女にして、父は關東に謫せられし伏見大納言實基卿なり、虎は容貌美しく、歌を善くす曾我祐成屢々其の許に通ひて何時かわりなき仲となり、人々相競ふて虎を誘へども皆な顧みざりき。たま〳〵和田義盛來りて虎を呼びて酒を佐けしめんとせしも出でざりしより、義盛いたく怒りしかば、其の母恐れて之を促がす、虎曰く曾我は一寒士にして、和田は豪族なり、されど、自らは貧富によりて心を易へんとは思はずとて、遂に應ずべくも見えず。時に祐成來りて虎の許に在りしより義盛は祐成に請ふて虎と共に席に列らしめしが、盃を得れば必ず祐成に與へ、酒を了る迄終に義盛と獻酬せざりしと云ふ、彼の復仇の前にも、祐成は虎に會ひて別を告げ、紀念を遺して去りしより、祐成が讐を報じて鬪死するに及び、頼朝に召されて種々當時の状を問はれたりき。さて免されて歸りしも、祐成を思ふて悲しみに堪へざりければ、箱根山に登り、僧行實に請ふて祐成の冥福を祈り、又諷誦文を作りて彼れを悼み、祐成より形見に贈られし葦毛の馬を布施に奉り、遂に尼となりて善光寺に往きぬ。時に

年十九。行いて黠成が復仇のところに至り、泣く〳〵歌を詠じたり。

浮世ぞと思ひそめにし墨衣
いままた露の何とおくらん

露とのみ消えにし跡を來て見れば
尾花がすゑに秋風ぞふく

夫れより大磯に歸りて高麗寺に住みぬ。又寬元三年正月年七十一にして、紀州熊野に歿すとも云ふ。

◎かぐや姫

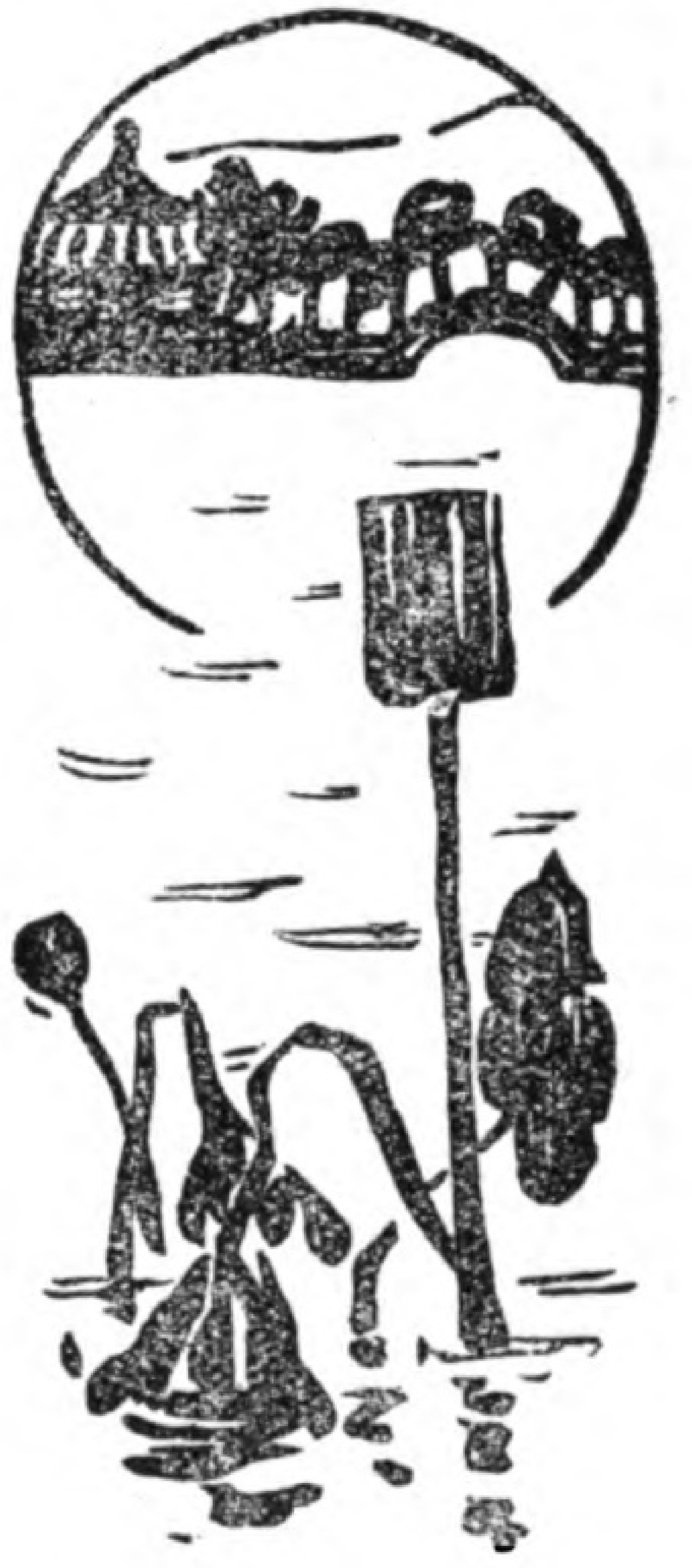
姫は竹取の物語にある美はしき假想の人なり。昔竹取の翁と云ふあり。或日竹の中に本光る竹一竿あり。怪しく思ふて寄り見るに、筒の中光りて大さ三寸ばかりの美はしき人あり。翁いたく喜び、手に入れて家に歸り、妻の嫗にあづけて養はす。長ずるに及びて秋田なよ竹のかぐや姫と名けしもの即ち是れなり。容姿甚だ美しかりしかば、時の皇子達は如何にしてか之を得んものと競ひ合ひしが、いづれも甲斐なかりき。此の事帝聞し召して使を遣はされたれど姫は逢はず。更に翁に姫を奉れとの仰せ言ありしも、姫は從はざりしかば帝かぐや姫の家に行幸あり、一目見て類ひ無く思しければ、率ゐて還らんとし給ひしが、姫答へて、已が身は此の國のものにあらずとて、影の如くに消え失せぬ。帝口惜しく思召して率て還らじと仰せければ、又舊の形態になりぬ。斯くて或る月の光り冴けき八月十五日の夜、姫は還らじとて 二千人餘の武士共が弓矢を帶びてかぐや姫の家の周りを隙も無く守れる中を子の刻頃に家の邊り晝の如く輝き、天の羽衣を身に纏ひ、雲に乘りて下り來りし人に導かれて、月の都に登り行きぬ。登るにあたり姫は帝にとて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ
君をあはれとおもひいでぬる

と書き記し、不死の藥を添へて頭の中將を呼び寄せて參らす、中將還りて藥に文添へて參らせしかば、帝見給ひて、いたく哀がらせて、物もきこし召さず、大臣を召して何れの山か天に近きと問はせ給ふに、或人駿河の國にある山ぞ都にも天にも近く侍ると奏す、帝之れを聞き給ひて、

逢ふ事も涙にうかぶ我が身には
死なぬ藥も何にかはせん

と、不死の藥に文具して使に賜ひ、其の駿河の國にある山の絕頂に持ち行きて、火をつけて燃やすべき由仰せ給ふ。使の山に登りてより、其の山をふしの山と名づけ、其の煙今尙ほ雲の中へ立ち上るとなり。



和歌

三宅花圃女史選

（天）雪　本郷　月子

よき程に草木のいろもあらはれて
　けしきをそふる庭のうす雪

評 上の句情ふかし

（地）冬月　横濱　秋山孝子

末枯れの野を行く僧のすげ笠に
　凍りてしろき冬の夜の月

評 荒涼の枯野のさまみる如くて

（地）折にふれて　山口　倉光芙蓉

うすれ行く夕日の光り羽にうけて
　あきつやすらふ川蓼の花

評 繪の如く美はし

（人）折にふれて　神奈川　飯田白露子

落葉かく里のわらべに物やりて
　みねのもみぢを一枝折らせつ

評 朝四暮三とや、色ふかくそめ給ひし御心なるかな

（人）月下美人　四日市　水谷靜子

まとかけの花のあやきぬまきあけて
　しはし月みるをとめ子やたれ

評 花とみむ人のおもわに村雲の薄衣かけて月やまつらむ

（人）寒夜月　前橋　宮内りき子

唐崎の松の葉白く霜見えて
　月影寒し琵琶の湖面

評 ある調なれど何となくすてがたくこそ

（人）油繪　信濃　光子

誰がふでの雫かそめて油繪に
　にほひこめたるひめゆりの花

佳調

失題　岐阜　林久子

あひみつるほどは短き別れ哉まちしそのまは久しかりしな

失題　芝　二木こま子

金堂に落葉さびしき秋の日や御經の聲の若きに泣きぬ

冬の月　　岩代　佐藤初子

ふり仰ぐ木立のひまに水色のみ空寒けし冬の夜の月

古鄉の母　　香川　福島菊子

小夜ふけて一人淋しく文よめどこゝろはかよふ母のひざもと

失題　　姫路　尾田四鶴子

降出し雪にしらみて曉の祇園の街は薄化粧しぬ

冬月　　伊豫　珠川朋子

遠ざかる按摩の笛の音もたえて市しづかなる冬の夜の月

題しらず　　越後　松永文子

訪ふ人の心の色にくらぶればちしほもあさしにはのもみぢば

折にふれて　　美濃　傍島小枝子

父まさばさすらひせずとこしかたをくりかへし思ふ雁なく夕べ

雪中梅　　丹後　吉崎花子

春を待つこゝろいそぎに雪わけて咲か軒端のうめのはつはな

失題　　河内　小松ふじ子

安らかにねむれる稚子をさしのぞきまさきくあれと祈る夜半哉

失題　　清國　古谷靜江子

甲板のしもに印せし靴のあと照して寒し船の上の月

深夜の雁　　土佐　弘瀬典美

寢もやらずふるさと人をしのび居ればまたひとつらのかり啼きわたる

別るゝ友へ　　神戸　今西操子

吹きすさぶ世の波風をしのぎつゝさきくておはせ千代の後まで

初雪　　越後　小林あき子

しほれたる黄菊の上にふりかゝる今日の初雪あはれなりけり

霜野　　豊後　加納豊子

草も木も枯れし霜野に有明の月かげさむく狐なくなり

學び舍にて　　紀伊　松島千枝

うれしきはまなびのまどに故鄉のふみ見る折のこゝろなりけり

野徑霜　　京都　佐藤清子

引く駒のいふきもしろくかげみえてさむさ身にしむ野路のあさしも

雁　　名古屋　土屋たま枝

きのふけふ名さへ夜寒の里かけて衣かりがねなきわたるなり

落葉　　山口　末田貞節子

心地よく朝清めせし庭の面に二ひら三ひら散る紅葉かな

野曉月　　岩代　岸野つれ子

をしかなく嵯峨野の庵にたびねしてあかつきさむき月をみるかな

寒流　　岩代　岸野常子

霜はしらたてる野道のやぶかげにかれぬもさむし堀川の水

失題　　大和　北村久子

欸乃に磯邊は暮れて潮滿ちて月はまろらに浮び出にけり

失題　　岩代　芳子

夜をふかみ落葉の音も蟲の音も絶えてさびしき我がいほりかな

「天」になり給ひし岸野の君を祝ひて　　埼玉　あけぼの

あまたある言葉のうちにえらまれし花の香のほまれ高しも

雪中竹　　陸中　澤田いさ子

ねぐらいでし鳥の羽風のあとならん一枝青き雪の呉竹

折にふれて　　埼玉　あけぼの

あなうれしをろかなる身もみ情のふかき敎の圃に交りて

冬　菊　　栃木　流　水
冬枯れて淋しさまさる我庭になくさめがほの菊の一本

遠山雪　　横濱　鈴木まつ子
もみぢみにのぼりしをちの山のはもけさはましろにゆきぞふりける

わが身の不幸をなげきて　　岐阜　天野辰子
いとあらき浮世の淵に沈みつゝうかぶすべなき身をいかにせん

鏡　　備中　天野その子
つゝめともこゝろの波のあらけれは水のかゝみのかけそみたるゝ

折にふれて　　下總　紫鶴子
かくてなほつれなき人のなど戀ふるかばかり弱きわれのこゝろか

風さむき日京の町を思ひて　　神戸　ゆり子
木がらしはのがれしものを追ふ如く四條五條をふきて走りぬ

失　題　　京都　綾子
わが袖に落つる涙のひろまなし君を忍びて床にある身は

池　氷　　播磨　きぬ子
もみぢ葉をむすびとめたる池の面にさむさのほとそおもひしらるゝ

折にふれて　　山梨　田邊きみ子
美くしさにはの紅葉散りそめて日毎さむさの増り行くかな

折にふれて　　神田　井田美子
ふく風も寒けさましぬ母のなき子等の小袖は誰が縫ふらん

夕　雁　　大阪　富永かをる
山のはをつらも亂さず打つれてかりなきわたる秋の夕ぐれ

失　題　　出雲　猿木辰子
いと清き月の光を友として歌おもふ夜は短かゝりけり

初　冬　　埼玉　松風春子
今朝見れば庭の紅葉ちりそめてさびしき里に冬はきにけり

千　鳥　　埼玉　荻野くに子
あり磯うつなみの音いたくふけゆきてちどりの聲ぞ近く聞ゆる

折にふれて　　周防　清木文子
姉君に心ある人おくつきにつぼめる薔薇を手向してあり

夜　船　　千葉　宮崎りよ
旅僧の浮落話に更けにけり銚子下りの刀根の川船

雪　近　　岐阜　堀口ます
ちかき日に雪やふるらしさを鹿の深山をいでゝ里に來たれり

失　題　　東京　岡せい子
人知らぬ谷の紅葉も紅にもゆる思は君や知るらん

ある朝よめる　　周防　小越龜代子
髮あげて朝まどおせば菊の香のすが〳〵しくも身にせまるかな

海邊遠情　　長崎　澁子
み手とりて君とわかれし磯の邊にひとりたゞずみもの思ふかな

鹿　　尾張　櫻井由美子
さをしかの聲きくまどの月ふけてそゞろにさむきこころもでの山

失　題　　神戸　足立ゑい子
こがらしの磨きあげたる冬の月天津乙女の鏡かとみる

友の御墓に詣でゝ　　米國　盧津なほ子
見るからに袖ぞひぢぬる亡き友の涙もうかぶ紅葉の路

初日出　　京都　北村はな子
二見浦あさ心地よき高とのに神代のまゝの初日おろかむ



短文

甲賞

登美子樣へ

紀伊 松島双葉

思ひかけぬお便りかな、秋雨淋しき學舎に、長夜のつれ〲、御筆をや執らせ給ひし、ゆかしき御筆のあとに、御地のさま目に見る樣にて、靜けき月のかげふみて、何やらん御經細う打誦じ給ひつゝ、そゞろありきの御面かげ、はるかに五十鈴川畔をしのび參らせ候。路は幾十里と事々しう候へど、汽車の便も候ものを、一日はこの地を訪れ給はずや、鳴たつ澤はなけれど、ふけゆく秋の和歌の浦は、心なき身にもさすがにあはれはすてがたく、また此頃の山畑、打つゞく限り蜜柑の實の色づきわたりて人まち顔なる、これこそは御目よろこばしまさん料ならめと切にまち奉候。

乙賞

勸業債券

前橋 渡邊松子

何ぞ欲しい物が有るならば、と良人から少し計り頂いたから、早速三越タイムスを繰り返して見て、御召にしようか指輪にしようか帯締にしようかと色々考へた末、夫れよりも勸業債券でも買つて置かう、運が好ければ千圓五百圓、それが當らぬでも元々、今から嫁に行く身と云ふではなしと早速銀行に行つて債券と替へた、然し人間も斯程慾張る樣になつて來てはと思ふと、何だか又心細い樣な氣もする。

乙賞

霜の夜

京都 木俣津夜子

ある寒い夜でした、妙子樣のお家へ歌留多會にいつて、お暇したのは黒谷の鐘が鳴る十二時頃であつた、登美子さんと二人、花菱の定紋の附いた提灯をさげて、松並木の鴨川堤を急いだ、磧には霜が下りたとみえてほの白く見える、その間をちよろ〱と、冷たさうな音を立てゝ水が流れてゐる、下加茂神社の灯がチラ〱と枯林の間からみえる、出町橋を渡らうとすると、橋の板は霜で眞つ白になつてゐる、妾しが、「かさゝぎの渡せる橋におく霜の」といふと、登美子さんが「白きを見れば夜ぞ更けにける」と下の句を讀まれる、千鳥が悲しげに啼く、二人は笑みて歌を暗誦しつゝ橋を渡つた。

丙賞

燈臺守

まつ子

嗚呼、自分はなんで此處へ來たらう、此島に生あるものは只數本の松と自分のみである、陸から三里も沖なるこの荒磯島に!!

周り一里の離れ島に、親兄弟姉妹一人もなき此の哀れな子を訪ふものは、あの月、あの星、それに松ふく風と、磯の波の音のみである、神の惠はこゝにも來る、四季もある、日も照り、雨も降る、が、鳥はなかぬ、花はさかぬ!!

此離れ島の此の哀れな子の慰みは何？花か、月か、鳥か、否、此の子の慰はあの白いアーク燈の光である、白いさびしい光は此の哀れな子の命である、此光の絕えし時があらば、そは此の子の命の限りである。

丙賞

ビフテーキ

千葉　山口秋子

ヒフテーキをこしらへ樣と思ふて、戸棚から牛肉を持ち出し、好く叩いて兩面に鹽と胡椒を振りかけ、フライ鍋にバタを溶かして、牛肉を燒いた、さあ〳〵冷めぬ内にと進めたら、一同ニコ〳〵顔、父樣は一寸御覧遊ばして大變黒いといはれる、母樣は御飯を盛りながら、黒く成つたのは餘り火が强かつたのだらうとおつしやるから、强い火で手早く燒けば固くならないと習ひましたからといふと、餘り手早やくもなかつたと見えるアハヽヽヽと父樣と兄樣がお笑ひになる、臺所では下女があとの仕末にこまつて居るらしい、髮と姿と顔の飾りにばかり氣を取られて居た私は、今日の失敗を心から恥ぢた。

丙賞

お使

駿河　大野たけ子

武ちやんや、武ちやんや！……返事がない。武ちやんや！　三度目にかう母樣がお呼びなすつてもまだ次の間に寢轉んでゐる、母樣は「武ちやんゐないの？」、ぢや芳つちやんでいゝよ、あのね、この風呂敷をもつて、蜜柑をね！。」と「お母さま何？」、お使なら僕いつて來ますよ。」、寢入つてゐる筈の武夫が急にムクリと起上つた、けれども時が遲かつた、芳子さんはいつて了つたので。

すさむ夜

福井　藤田かほる

枕時計は旣に十時を告げた、霰まじりの風は未だ止まない、ゴー〳〵ッと物凄い音は、近づくに隨つて漸次に大きくなつて、遂には雨戸へザアーッと打ちつける、同じことを幾度となく繰り返す、鼠も今夜はカタともしない、暫くすると雨になつた、窓硝子の隙間からは、冷い風がスーッと枕元を過ぎる、ブル〳〵ッと思はず身顫した、首を縮めて寢返りしたが、足はつめたくなつて居る、次の間で母樣の嚔が聞える、手足を縮め脊を圓くして頭から夜着をひきかぶつた、外には未だ風が荒れて居る、芭蕉の葉の裂ける音が如何にも淋しい。

祝ひに招かれて

神奈川　内藤千代子

なつかしの御消息くりかへし拜し參らせ候、此度は御妹子樣の御髮上げの由にて、その御賀莚に私をまで御招き下され有がたく御受け申上候、末たのもしき蕾の花の、無事に七つの秋を重ね給ひし嬉しさ、御兩親樣の御喜びもさこそと察しまつられて、妹もたぬ私の今更に羨ましく、當日は御手傳ひかた〴〵何をおきても是非々々參上仕らんと樂しみ居り候、あはれ御稚兒髷の匂やかに、御振袖姿の御美しきが、日頃の御縹緻に榮えて如何ばかりに在しまさん、當日の御有樣今より目にうつるやうに存ぜられ候。

商店の一夜

清國　福田つる子

今夕飯が濟んだのであらう、番頭さんが、口を歪めて齒をほじりながら、中仕切の暖簾をくゞつて店へ出て來て火鉢の前に坐つた、楊子を一寸横にさして、腰から煙草入をはづし、スポンと音をさしてきせる筒をぬく、五六服は絶間なく吸ふ、七服目の火をつけ樣とうつむいた時、今迄暗かつた天井の電氣がパツと明るくなつて、番頭さんの藥罐頭に後光がさした、漸く小僧さん達も濟んだと見えて、前掛で口を拭ひながらぞろぞろと店に出て來て、思ひ〳〵の所に坐り、眞面目な顔をして控へたが、二三時間經つと、お客さんの來たも知らずに、コクリ〳〵おじぎをはじめ樣、昨晩も火鉢の中へ指を突込んで、ビツタリして眼をさました小僧さんが有つた、其時の顔を思ひ出すと、此眞面目な顔が一層をかしくて仕方がない。

大根引

秋田　細井たみゑ

オヽいゝ天氣だ、この一週間ばかりと云ふものたゞの一日も晴れた空を見なかつた、今日こそうらの大根を引いてしまはう、こんないゝ日は再とあるまい、と襷をはしなり手拭を姉樣被りにして甲斐々々しく取かゝつた、麗かなる日光はホンノリと身體にあたつて、何ともいへぬいゝ氣持、よくまあこんなに大きくなつたもの、斯うなつて見ると我知らず得意の笑が溢れる、嬉しいは嬉しいが、しかし手も足も泥まみれ、腰はゑびのやうに曲つてしまつた、やつとの事で腰をのばして見ると、もう半分程引いた、どれもう一奮發とかゞむ途端バラ〳〵ツと背にあたつたのは大粒の霰、オヤと顔を上げるとザアーツと頭からビツシヨリ、大雨になつた、あゝ變りやすき秋の空、思へばつらき大根引。

朝の散歩

宮城　大町まさ子

から〳〵と雨戸繰る音に驚いた樣に鷄がなく、未だ明けやらぬ空には有明の月が淡く殘つて居る、田の方へ行つて見ると蛙が稻穗の先へぴつたり付いて少しも動かない、冠川の堤から馬子の唄が聞える、露けき細道を辿り〳〵て新田山の麓へ來ると、山守の翁が落葉たく音であらう、パチパチと木の間より微かに聞える、風もないのに木の葉が二三枚ヒラヒラと散る、普渡寺の明けの鐘ゴーンと響き渡る、急いで家へ歸ると、御爺樣は庭に咲き亂れた菊を眺めてニコ〳〵して居なさる。

出發の前

岐阜　堀　峯子

どうやら仕度も出來た、夕食後ふら〳〵と的なく家を出たが、何となく氣が落ちつかぬ、前途に望を抱いて異國へ出發する身の、思ひを、それからそれへ走らせて、つくれんと立ち止つた。

あゝ明日は何うしても此村を出て行かればならぬと思ふと、何となく悲しゝなつた、黄ばんだ枯葉が風に吹かれてハラ〳〵と落ちた、それがわけて今日は胸にこたへた。

田舍の朝

松江　米川よし子

紡績の六時を報ずる笛の音が、朝霧を破つて高く響く、つるべの底が井戸の水面をトーンと打つたと思ふと、やがて物を洗ふ音がする、子供の泣き聲も聞える、これがなどゝ言ふ笑ひ聲のするは、仕事の手を止めて負ぶつた子供に乳房を見せるのであらう、菊畠では今朝も亦蜜の群がさわぎ出した、松原を、「西は追分――」と古びたのを唄つて行く者がある、馬子であらう、裏の丘の上のお寺では經よむ聲やら鐘の音やらが聞え出した。今日一日のわが村の生活はこれより始まるのである。

夜の恐怖

大阪　木村花子

私は亦勞れた胸を冷さうと肩掛一つで表に出た。街はシンとして月は強く輝いてゐる、東から西に延びた道の中程へ、左側の家が明瞭と影を落して、見つめると大地に凍りついてる樣に見える、そつと片足を影につけた、と髮の毛の端々迄しみ渡る冷やかさが、惑亂した頭を引しめて、思はず歩を止めた、四ツ辻に、ツトと赤い灯影が揺れて、靴音が靜寂を貫いて嫌と云ふ程心に響く、私は氷の溝にでも立つたかの樣に、大きな恐怖に襲はれて、冷たい鼓動が着物を通して強く手に答へるのを覺えた。

水邊

神戸　月さゆり女

沈みかゝつた夕日を浴びて、落葉した樹が一本すつと立つてゐる、戰ぐ風に、散り殘つた紅い黄色い葉がはら〳〵と灰色の空に飛ぶ、だら〳〵と二三間ほど下つた汀には、朽ち果てた小舟が、見るかげも無く沈んで居る、左右の白い枯蘆が、がさ〳〵と鳴る毎に、水に映つた紅い雲が碎ける。

白鷺が一羽、何處からかそろりと水の淺い處に下りて、やがて小さなこぶしを作つてしよんぼりと佇んだ。

折鶴

大森　荒川桂雅女

久しぶりで本箱のかたづけをした、隅の方から欲反古が現はれた、捨るも惜しい、と云つて人に見らるゝも何となく恥かしい樣な氣がする、不知不識の内に鶴を折つて仕舞つた、其時お隣りの美いちやんが遊びに來て、其鶴頂戴とせがまれたには實によわつて仕舞つた、いやと云へば泣き出す、鶴のかはりにとう〳〵日頃またなく愛でゝ居つた置物の可愛い犬をとられて了つた。

新刊紹介

綠蔭叢書第二編「春」　島崎藤村著

昨年来作家のモデル問題に就て文壇に兎角の評判ありしが、それに就て作家の側よりは一言半句も女々しき辯解を爲さゞりしのみか、更に大いにモデルを用ゐてこの一大作を組み立てしは流石に第一流家の度量藝術家の態度といふべし、聞く處によれば本篇は即ち舊文學界の同志者をモデルとして自家の青春時代の抱負と煩悶とを描寫したるものなりといふ。如何にも、それらしく描かれたり、各人各樣の性格は個々に活躍して情熱のあるところ、能く現はされたり、但し此の作現代の思想とは大分の懸隔ある二十年前の社會人情を土臺として描かれたる樣なれば、今日の思潮とは聊か合はぬところありて、爲めに全般に亘つて感興の乏しきを免かれざるは、評判のある割合に多數人を熱中せしめざる所以なるべきか、兎もあれ、此の長篇をして無難に終りを結ばしめたるは、作家の大成功といふべし。定價九十錢(上田屋發賣)

◎木村長門守　綠蔭生著

豐臣秀賴の四天王の一人として、忠節無雙と稱せらるゝ木村重成の事蹟を小說的に記したるものにして、重成幼少にして未だ春雄と稱せらるゝ頃近江の太守佐々木義郷に育てらるゝ事より、京都大佛殿造營に關して家康秀賴の間に確執を生ずるや、秀賴に仕へて先づ冬の陣に大功を立てたる事を初めとし、彼れが一生の働き振りは殆んど本書に於て之を盡せり。定價金七拾錢、京橋區元數寄屋町三丁目、(金尾文淵堂發行)

生理學上より見たる　婦人の本分　大澤醫學博士著

女子教育の急劇なる進步によりて男女の關係漸く面目を改めんとすると同時に、舊說の次第に破壞さるゝは自然の數なるが、稍もすれば空想に空想を生じて根底なき說に惑はさるゝに至るもの多し、故に男女の關係はどこまでも科學上に根底を置かざるべからず、此の書は即ち生理學上より見たる婦人の位置を示したるものにして、動物の雌雄、男性女性の別、生殖の理由等より次第に說き及ぼして日常生活に入り女尊男卑の由來、獨身者の心身の不健全なる事を擧げ更に一夫一婦の由來、男女の分業の由來に及び女子の貞操に結べり、生理學上より見たるものなれど穩當平生にして殺風景ならず。正價五十五錢(大倉書店發行)

◎フランダースの犬　日高柿軒譯述

原著者は名聲高き閨秀學者なり、英國に生れたれども、佛蘭西人の血統を承け、伊太利の文物に深く通じ、其の作物には著しく拉典の色を帶びたり、其の作物中殊に傑出せるものを此の書と爲す、世の弱きもの、貧しきものに濺ぐ著者の熱血は此の一編に依つて略知する事を得べし、殊に忠犬が孱弱き主人を慕ふて死地に就くの健氣さには不知不識動物に對する愛護の念を禁ずる能はざらしむ。定價金貳拾五錢、(内外出版協會發行)

二月號の豫告

▲時代の教育を受けし人の思想
▲望まれて嫁く人と望んで嫁く人
▲婦人が時間つぶしをする實例二十種
▲最高學府を出でし女の行衛
▲お客をそらさぬ工風
▲我が力を試めさんとして働きし一年間の結果
▲日記文より得たる私の利益
▲三度嫁ぎて三度歸りし女の實例
▲病魔を驅逐する最良策
▲無方針に働らく人の損害

毎月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
定刊數……十二册
内（增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十二年一月一日發行第九卷第壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局・二千六百二十番　三千二百二十九番

販賣用電話…本局二六二〇番
振替貯金口座……二百四十番



△御進物用圖書切手　優美なる函入とし三百五十餘頁の本館總目錄を添へ申候、金高は壹圓以上何程にても御隨意に調進可仕候、地方は送料雜費拾錢申受け候。（圖書の御引替は全國賣捌店共通）

△圖書陳列所　電車にて御來館の方は、本町角にて御下車、東の方三層の洋館目當に御運び被下度候。

博文館出版圖書拔萃目錄

新年御進物用恰好の圖書種種取揃有之候

—女學世界用目錄目次—

御註文規定摘要

△御註文は前金たるべし、又郵券代用は必ず一割增の事

△郵便爲替の御送金は拂渡局十軒店、受取人博文館と乞御記入

△書狀宛名は『東京日本橋區本町三丁目博文館小賣係』の事

△金高壹圓以上の御送金には受領證を送り以下は送本を以て辨ず

△一時に金五圓以上の御註文には正價一割引の館友證を呈す

明治四

博文館發行定期

太陽

◎太陽　東洋雜誌界の覇王政治、文學、科學、經濟、宗教、其他各方面に亘り雄大莊嚴名海外に轟く。

毎月一回一日發行　▲外に增刊年四回(定價同一)▲大判(四六判二倍大)▲本文中本文二百五十六頁　▲光澤紙寫眞版四頁二色刷二枚▲普通十二枚▲寫眞版數十箇挿入

正價(◎壹冊參拾錢　▲郵稅參錢)　前金(郵稅共)(●四冊金壹圓廿七錢●八冊金貳圓四拾四錢●十六册金四圓六拾八錢

商工世界 太平洋

◎商工世界太平洋　商工界の絕好機關當世第一流の意見と實業界の事情を網羅す。

毎月二回一日、十五日發行▲外臨時增刊▲大判(四六判二倍大)本文百十二頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價(◎壹冊拾貳錢　▲郵稅二錢五厘)　前金(郵稅共)(●六冊金七拾六錢●十二册壹圓四拾八錢●廿四册貳圓八拾六錢

農業世界

◎農業世界　農事改良の急務に應ぜんとするものにして、眞に國本培養の良資料主筆は石阪農學士なり。

毎月一回十日發行▲外增刊年二回　▲菊判本文二百四十頁▲原色寫眞版一枚▲石版彩色畫一枚▲光澤寫眞版四頁▲普通寫眞四枚

正價(◎壹冊貳拾錢　▲郵稅貳錢)　前金(郵稅共)(●三册金六拾參錢●七冊壹圓四拾貳錢●十四册金貳圓七拾八錢

實業少年

◎實業少年　實業に從事する少年諸君が立身出世の相談相手、學科獨習の良師友たり。

毎月一回一日發行▲外增刊年二回▲大判(四六判二倍大)本文七十二頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價(◎壹冊拾錢　▲郵稅壹錢)　前金(郵稅共)(●四冊金四拾貳錢●七冊金七拾貳錢●十四冊金壹圓四拾錢

文藝倶樂部

◎文藝倶樂部　小說に、時文に、將た美文に、天下の名篇を蒐む、活社會の消息、藝苑の事情、最新の流行等を網羅せり

毎月一回一日發行外增刊年四回　▲菊判本文三百二十頁　▲木版刷錦繪一枚▲原色寫眞版一枚▲光澤寫眞版二頁▲普通寫眞八枚

正價(◎壹冊三拾五錢　▲郵稅三錢五厘)　前金(郵稅共)(●四冊金壹圓五錢●八冊金貳圓●十六册金參圓九拾錢

冒險世界

◎冒險世界　冒險小說、探檢奇譚、冒險的成功談、書生氣質、陸海軍々事談、學校評判記、運動界情況等を滿載す。

毎月一回五日發行▲外增刊年二回▲大判(四六判二倍大)本文百二十八頁▲原色寫眞版口繪一枚▲光澤紙寫眞版四頁

正價(◎壹冊拾五錢　▲郵稅一錢五厘)　前金(郵稅共)(●四册金六拾參錢●七册金壹圓〇七錢●十四册金貳圓〇五錢

幼年畫報

◎幼年畫報　稚兒幼童唯一の良友、繪畫寫眞等善盡し、美極む、記事は是れ小波山人獨得の壇場。

毎月一回五日發行▲外增刊年四回▲菊判美麗畫本▲石版極彩色繪畫十六頁▲二色刷木版寫眞刷込十六頁▲光澤紙寫眞四頁

正價(◎壹冊拾錢　▲郵稅五厘)　前金(郵稅共)(●四冊金四拾錢●八冊金七拾八錢●拾六册金壹圓五拾錢

十二年
刊行十五大雜誌

少年世界

◎少年世界　國定教科書に連絡し、材料豐富、插畫饒多、記事口繪共遙に同種他雜誌に超絕す。

毎月一回一日發行▲外增刊年四回▲菊判本文百二十八頁（内十六頁二度刷）▲原色寫眞版標本畫、彩色毛筆畫各一枚▲光澤紙寫眞版二頁

正價（◎壹册拾錢▲郵税一錢五厘）　前金（郵税共）（●四册金四拾四錢●八册金八拾五錢●拾六册金壹圓六拾四錢）

少女世界

◎少女世界　少女に最も適應せる諸學科を網羅し家庭に於ける子女教育を稗補せんことを期せり。

毎月一回一日發行▲外增刊年四回▲菊判本文百二十八頁（内十六頁着色二度刷）▲石版極彩色刷口繪二枚▲光澤紙寫眞版四頁

正價（◎壹册拾錢▲郵税壹錢）　前金（郵税共）（●四册金四拾貳錢●八册金八拾壹錢●拾六册金壹圓五拾六錢）

女學世界

◎女學世界　趣味實益兼備なる家庭必讀の好雜誌女子品性智識の寶庫、女學生最良の課外敎師。

毎月一回一日發行▲外增刊年四回▲菊判本文二百八頁▲原色寫眞版一枚▲石版彩色畫一枚▲習畫帖二頁▲光澤紙寫眞版四頁▲普通寫眞版四頁▲附錄（美麗繪葉書）

正價（◎壹册貳拾錢▲郵税貳錢）　前金（郵税共）（●四册金八拾參錢●八册金壹圓六拾壹錢●十六册金參圓拾貳錢）

中學世界

◎中學世界　中學程度各種學生の必讀誌　學生の需むる處盡く備はれり。

毎月一回十日發行▲外增刊年四回▲菊判本文二百四十頁▲原色寫眞版一枚▲水彩畫一枚▲色鉛筆畫一枚▲ペン畫一頁▲鉛筆畫一頁▲光澤紙寫眞版二頁▲普通寫眞版四枚▲附錄（美麗繪葉書）

正價（◎壹册貳拾錢▲郵税貳錢）　前金（郵税共）（●四册金八拾參錢●八册金壹圓六拾壹錢●拾六册金參圓拾貳錢）

文章世界

◎文章世界　入間一日も文章なかるべからず、本誌各種の文體を表裏縱橫に説き實益に資せり。

毎月一回十五日發行▲外增刊年四回▲菊判本文二百四十頁▲水彩畫及石版彩色畫二枚▲二色刷寫眞版二枚▲光澤紙寫眞版四頁

正價（◎壹册貳拾錢▲郵税貳錢）　前金（郵税共）（●四册金八拾參錢●八册金壹圓六拾壹錢●十六册金參圓拾貳錢）

英語世界

◎英語世界　英文講讀法、作文法、書簡作法、日用會話、難句解釋、受驗手引等盡く網羅す。

毎月一回五日發行▲年刊十二册▲菊判本文六十八頁▲光澤紙寫眞版二頁▲本文中寫眞版數多挿入

正價（◎壹册拾錢▲郵税壹錢）　前金（郵税共）（●三册金參拾貳錢●六册金六拾貳錢●十二册金壹圓貳拾貳錢）

數學世界

◎數學世界　普通數學の諸科目全般に涉り、新説を紹介し、定理を證明し親切に問題を研究す。

毎月一回十日發行▲外增刊年四回▲菊判本文百二十八頁▲光澤紙寫眞版二頁▲木版密圖數十箇挿入

正價（◎壹册拾五錢▲郵税一錢五厘）　前金（郵税共）（●四册金六拾錢●八册金壹圓拾七錢●十六册金貳圓參拾錢）

鐵道汽船旅行案內

毎月一回一日發行▲年刊十二册▲菊判紙數約百六十頁▲麻布式折本全國旅行地圖石版二度刷添附

正價（◎壹册拾錢▲郵税一錢五厘）　前金（郵税共）（●三册金參拾貳錢●六册金六拾貳錢●十二册金壹圓貳拾錢）

女（秘付三）

婦人書類

【家政及家事經濟】

- 下田歌子女史著 **家政學** 全二册和裝上製 大判四三〇頁 正價一册參拾錢 郵稅一册六錢
- 岸上操君著 **家政案內** 全一册洋裝並製 大判二五六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 近藤正一君著 **新撰家事問答** 全一册洋裝上製 小判二六六頁 正價貳拾錢 郵稅四錢
- 下田歌子女史著 **家事要訣** 全一册和裝並製 大判二八二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢
- 中村鈴子女史編 **家庭の模範** 全一册洋裝並製 中判四二四頁 正價參拾八錢 郵稅六錢
- 三輪田高等女學校長三輪田眞佐子女史著 **新家庭訓** 全一册和裝上製 大判三二〇頁 正價四拾五錢 郵稅八錢
- 下田歌子女史著 **泰西所見家庭教育** 全一册和裝並製 大判 頁 正價參拾五錢 郵稅八錢
- 曾我部純一君著 **最新家計簿記** 全一册洋裝並製 大判一三四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

【禮式】

- 坪谷善四郎君著 **増訂日本女禮式大全** 全一册洋裝上製 大判五九二頁 正價九拾錢 小包料拾貳錢
  ▲蒔繪函入和裝美本 正價壹圓貳拾錢 小包料拾六錢
- 日本婦人正風會々長中島義式君著 **新撰日用女禮式** 全一册洋裝並製 大判一八六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 同君著 **女子禮法教科書** 全一册洋裝並製 大判二六四頁 正價參拾八錢 郵稅六錢
- 高等女子師範學校教授佐方鎭子女史著 **禮式と作法** 全一册和裝上製 大判三三八頁 正價四拾五錢 郵稅八錢
- 同君著 **新撰小學女禮式** 全一册洋裝並製 大判二二〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 下田歌子女史著 **普通禮式** 全一册和裝上製 大判二六二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢
- 大橋乙羽君著 **和洋禮式** 全一册洋裝並製 大判二四八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 中島義式君著 **新撰女子作法書** 全一册洋裝並製 大判一四〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 宮本桂仙君著 **西洋男女交際法** 全一册洋裝並製 小判二二六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

【料理】

- 赤堀吉松君 赤堀峰松君 赤堀菊子君共著 **惣菜料理** 全一册和裝上製 大判 頁 正價四拾五錢 郵稅八錢
- 大日本割烹學會長石井泰次郎君著 **四季料理** 全一册和裝上製 大判三一〇頁 正價四拾五錢 郵稅八錢
- 龜井まき子女史著 **家庭料理法** 全一册和裝並製 大判二三〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

- 下田歌子女史著 **料理手引草** 全一冊和装上製 大判三三〇頁 正價参拾五錢 郵税八錢
- 藤本藤蔭君著 **實用料理法** 全一冊洋装並製 大判二八四頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 佐々木孝君著 **西洋料理法** 全一冊洋装並製 大判二五四頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 阪本隆哉君著 **衛生食物調理法** 全一冊和装並製 大判一五四頁 正價参拾錢 郵税六錢
- 同君著 **病者の食餌** 全一冊洋装並製 中判長形一兲頁 正價貳拾錢 郵税四錢
- 八百善主人著 **八百善料理通** 全二冊和装並製 中本和紙刷 正價参拾八錢 郵税六錢
- 小田原屋主人編 **漬物早指南** 全一冊和装並製 中本和紙刷 正價拾貳錢 郵税四錢
- 醍醐山人編 **料理早指南** 全二冊和装並製 中本和紙刷 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 風羅山人編 **料理いろは庖丁** 全一冊和装並製 中本和紙刷 正價拾八錢 郵税四錢
- 東京治庖會講師亀井まき子女史著 **和洋菓子製法** 全一冊和装上製 大判三〇〇頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- 報知新聞家庭記者天野誠齋君著 家庭寶典 **臺所改良** 全一冊和装上製 大判二四〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

【手藝】

- 下田歌子女史著 **女子手藝要訣** 全一冊和装上製 大判二六二頁 正價参拾五錢 郵税八錢
- 女子高等師範學校教授喜多見佐喜子女史著 **裁縫指南** 全一冊和装上製 大判 頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- 吉田謙子女史著 **裁縫と編物** 全一冊洋装並製 大判二六二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 飯田呉服店裁縫部小岩井主任 鹽田副主任合著 **實用裁縫全書** 全一冊和装並製 大判二六六頁 正價五拾錢 郵税八錢
- 三木とみ子女史著 **編物指南** 全一冊和装上製 大判三〇二頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- 刺繍術專門 磯村大次郎君著 **實用刺繍術** 全一冊洋装並製 大判一二四頁 正價貳拾五錢 郵税四錢
- 山田興松君著 **實用造花術指南** 全一冊洋装並製 大判一〇〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢
- 森田洪、鈴木吉拙、牧野等君共著 **應用家庭美術** 全一冊洋装並製 中判三四〇頁 正價四拾錢 郵税六錢

【茶の湯及活花】

- 水原翠香女史著 **茶道と香道** 全一冊和装上製 大判三六四頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- 岡崎淵沖君著 各傳比較 **點茶活法** 全四冊和装上製 大判六〇〇頁 正價貳圓五拾錢 小包料拾六錢
- 江刺家協一君著 **茶の湯大全** 全一冊洋装上製 中判五〇八頁 正價六拾錢 郵税八錢
- 博文館編輯局編纂 **茶の湯と生花** 全一冊洋装並製 大判二五八頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 青山御流會頭琴松園文雅君 跡見女學校講師松幸齋理参君共著 **諸流生花指南** 全一冊和装上製 大判三〇六頁 正價四拾五錢 郵税八錢

吐月齋惠一島君編纂 挿花盆石 **四時の詠** 全三冊和裝上製 大判 一四〇頁 正價五拾錢 郵稅六錢

秀貫齋月一珣君編纂 挿花盆石 **正風花鏡** 全三冊和裝上製 大判 二〇二枚 正價五拾錢 郵稅六錢

大露庵河村一洗君選 **新撰活花圖式** 全二冊和裝並製 美濃紙木版刷 正價四拾錢 郵稅六錢

榮雲齋先生編 **挿花大樂抄圖會** 全二冊和裝並製 美濃紙木版刷 正價四拾錢 郵稅六錢

江原春巒君著 盆景盆石 盆山盆庭 **秘訣圖解** 全一冊洋裝並製 大判 二二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

柏翁春郊中島信義君著 草木實驗 **盆栽仕立秘法** 全一冊洋裝並製 大判 一八一頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

順石軒翁編 **盆山百景圖** 全四冊和裝上製 大判木版刷 正價壹圓 小包料拾貳錢

內山幻堂君著 **家庭と園藝** 【家庭衛生】 全一冊和裝上製 大判 約三百頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

醫學士石原喜久太郎君編 新編 **家庭衛生** 全一冊洋裝上製 大判 五八〇頁 正價壹圓七拾錢 郵稅拾貳錢

醫學士石原喜久太郎君閱 首藤環君編 新撰 **衛生生理問答** 全一冊洋裝上製 小判 二〇二頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

青山女學院講師牧野清子著 **婦人の生理と衛生** 全一冊和裝上製 大判 頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

千葉勝景君 鹿島櫻巷君共編 **家庭衛生訓** 全一冊洋裝並製 小判 四〇八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

海軍大軍醫隈岐敬治郎君譯 **女子衛生學** 全一冊洋裝並製 小判 三二〇頁 正價參拾錢 郵稅四錢

醫學士田村貞策君・朝夷孤舟君共著 **育兒の務** 全一冊和裝上製 大判 三三四頁 正拾四拾五錢 郵稅八錢

西田敬止君著 **育兒と衛生** 全一冊洋裝並製 大判 二四四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

下田歌子女史著 **母親の心得** 全一冊洋裝並製 大判 二六八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

醫學博士三島通良君著 **はゝのつとめ** 全一冊洋裝上製 大判 三一二頁 正價七拾五錢 郵稅拾錢

女學世界衛生顧問糸左近君著 四季應用 **通俗治療法** 附 養生秘訣 全一冊洋裝上製 中判 二九二頁 正價貳拾八錢 郵稅六錢

新潟縣高田高等女學校教諭藤井靜子女史著 **簡易治療法** 全一冊和裝上製 大判 三五二頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

藥學得業士金澤廉君著 **通俗治療救急法** 全一冊洋裝上製 小判 三一〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

醫學士田村貞策君 朝夷孤舟君共譯 衛生指針 **姙產婦の務** 全一冊和裝並製 大判 四二八頁 正價七拾五錢 郵稅八錢

醫學士伊庭秀榮君著 複習問答 **簡明產婆學** 全一冊洋裝並製 中判 二二〇頁 正價五拾錢 郵稅六錢

產科專門醫稻生鑑次郎君纂著 **實習產婆學** 全二冊洋裝並製 大判 五六八頁 ▲上卷七拾錢 下卷八拾錢 上卷通常產 下卷異常產 郵稅各八錢

醫學士守矢親國君譯述 **生殖器新書** 全一冊洋裝上製 中判 四五六頁 正價九拾錢 小包料八錢

醫學士小玉龜藏君著 **延命長壽法** 全一冊洋裝上製 三六判 四四〇頁 正價六拾錢 郵稅六錢

女（後付六）

文學士杉谷泰山君著
身心修養 **長命術** 全一冊洋装並製 大判四二二頁 正價七拾錢 郵稅拾錢

醫科大學秋吉無聲君譯
醫學上の戀愛觀 全一冊洋装並製 中判二一四頁 正價參拾錢 郵稅六錢

澤田順次郎君著
自然界に於ける **兩性の秘密** ▲一名 人類性別學 全一冊洋装並製 大判四〇〇頁 正價六拾五錢 郵稅八錢

【修身及立志】

女子高等師範學校教授下田次郎君著
女子の修養 全一冊洋装並製 小判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

前田長太郎君著
女徳の養成 全一冊和装上製 大判約三百頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

文學士大町桂月君著
女學生訓 全一冊洋装並製 小判二五六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

松原岩五郎君著
女學生の栞 全一冊洋装並製 大判三三〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

千河岸櫻所君評釋
女訓評釋 全一冊和装上製 大判四一六頁 正價六拾錢 小包料八錢

村井弦齋君著
給入 **下女讀本** 全一冊洋装並製 大判一一〇頁 正價拾五錢 郵稅四錢

千河岸櫻所君編
日本女子立志編 全二冊和装並製 大判七三六頁 正價一冊六拾錢 郵稅一冊八錢

東京女學館講師西田敬止君著
帝國女子修身鑑 全四冊和装並製 大判四二四頁 正價一冊拾錢 郵稅一冊貳錢

安藤紫陽君 箕輪撫鬣君共編
名士の父母 全一冊洋装並製 中判一五二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

佛國モリスブロック君著 前田越嶺君譯述
偉人の母 全一冊洋装並製 大判一九八頁 正價參拾八錢 郵稅六錢

中央新聞記者田村江東君著
活動せる **實業界の婦人** 全一冊洋装並製 大判 頁 正價參拾八錢 郵稅六錢

濱本義顯君著
婦女教育 **明治姫鏡** 全一冊和装並製 大判木版一[illegible]頁 正價六拾錢 郵稅八錢

讀賣新聞記者闕如來君著
明治の令孃 全一冊洋装並製 中判一八二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

博文館編輯局編
運命開拓法 全一冊洋装並製 大判二〇八頁 正價貳拾錢 郵稅六錢

同
處世百話 全一冊洋装並製 大判二〇八頁 正價貳拾錢 郵稅六錢

近藤正一君著
女子職業案内 全一冊洋装並製 三六判四六六頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

【作文、習字及習書】

下田歌子女史著
女子作文の栞 全一冊和装美本 大判二三六頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君著
女子消息 **文のしをり** 全一冊洋装並製 大判三〇〇頁 正價五拾錢 郵稅八錢

樋口一葉女史著
通俗書翰文 全一冊洋装並製 大判二四六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

近藤正一君著
古今才媛文集 全一冊洋装上製 中判 頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

東京女學館講師西田敬止君編
女子消息文範 全一冊洋装並製 中判三一〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

女(挟付七)

下田歌子女史著
●女子書翰文　全一冊和裝上製 大判二二八頁　正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君 遏美雅子女史共著
●新撰女子用文　全一冊淨裝並製 大判二二六頁　正價參拾錢 郵稅六錢

下田歌子女史著 坂正臣君書
●女子用文習字帖　全二冊和裝並製 大判一四四枚　正價八拾錢 郵稅八錢

大和田建樹君著 小野鵞堂君書
●明治女子書翰文　全一冊和裝並製 大判一〇〇枚　正價四拾錢 郵稅四錢

多田親愛君書 假名習字帖
●古今和歌集序　全一冊和裝上製　正價八拾錢 郵稅四錢
▲大判特製 綸子表紙美本　正價壹圓貳拾錢 郵稅六錢

橋千蔭君書 高等女子習字帖
●烏丸帖　全一冊和裝並製 大判二四枚　正價參拾五錢 郵稅四錢

同君書 假名習字帖
●新百人一首　全一冊和裝並製 大判五一枚　正價參拾錢 郵稅四錢

新岡久頼君著
●いろは三體帖　全一冊和裝並製 大判折本　正價四拾錢 郵稅四錢

河村墨稼君書
●初學手紙の文　全二冊和裝並製 大判一〇〇枚　正價參拾五錢 郵稅六錢

中村不折君著并畫 花卉山水人物
●水彩繪手本　全四冊和裝上製　正價各五拾五錢 郵稅各四錢
第二輯迄既刊（附錄水彩畫手引）

中村不折君著
●畫道一班　全一冊洋裝上製 中判三一〇頁　正價八拾五錢 郵稅八錢

三宅克己君畫並著
●水彩畫指南　全一冊洋裝上製　正價六拾五錢 郵稅八錢

丸山晩霞君著 水彩畫法
●女性と趣味　全一冊洋裝上製 大判四三〇頁　正價貳圓 小包料八錢

中村不折君著
●鉛筆畫法　全一冊洋裝並製 中判一一七頁　正價六拾五錢 郵稅八錢

石川鴻齋君著
●畫法詳論　全三冊和裝並製 大判一五〇枚　正價五拾錢 郵稅六錢

橋元春郊君譯
●繪畫講話　全一冊洋裝並製 中判三八〇頁　正價六拾五錢 郵稅八錢

野口珂北君著 小蘋女史畫
●畫法自在　全一冊洋裝並製 大判二五〇頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

三宅克己君著
●水彩畫手引　全一冊洋裝並製 中判二七〇頁　正價七拾五錢 郵稅六錢
▲總クロース上製　正價九拾錢 郵稅八錢

諸大家執筆
●水彩習畫帖　洋裝並製各冊原畫六枚習畫六枚　各正價參拾五錢 各郵稅貳錢ツヽ
【第一卷】三宅克己君筆【第二卷】丸山晩霞君筆【第三卷】大下藤次郎君筆【第四卷】三宅克己君筆

佐藤竹次郎君編 古今對照
●習畫帖　全二冊和裝並製 大判三七枚　正價七拾五錢 郵稅六錢

毛筆畫研究會編
●初心毛筆畫譜　全五冊和裝並製 和紙彩色刷　正價一冊拾貳錢 郵稅一冊貳錢
▲山水之部 ▲花鳥之部 ▲獸類之部 ▲人類及魚之部 ▲雜之部

定家卿撰 兒玉錦成君編輯
●錦葉百人一首　全一冊洋裝上製 大判錦繪刷美本　正價貳圓 小包料拾貳錢

貞節義操
●古今名婦百首　全一冊和裝並製 小判五〇枚　正價拾錢 郵稅貳錢

- 高島藍泉君編 **明治名婦百首** 全一册和裝並製 小判五〇枚 正價拾錢 郵稅貳錢
- 小林永濯君編 **明治英名百首** 全一册和裝並製 中判和紙刷 正價拾八錢 郵稅四錢
- 諸名家合作 **新雛形千歳袖** 全一册和裝並製 大判三一枚 正價貳拾八送 郵稅四錢

【家庭雜書】

- 報知新聞家庭記者中村木公君編 實驗問答 **日本家庭節用** 全一册洋裝上製 三六判三三四頁 正價壹圓卅錢 小包八錢
- 奥村繁次郎君著 家庭に於ける **吉凶百談** 全一册洋裝並製 中判　頁 正價四拾錢 郵稅六錢
- 農學博士稻垣乙丙君校閱 工藤審君著 新編 **家庭の科學** 全一册洋裝並製 大判　頁 正價未定 郵稅
- 博文館編輯局編纂 **家庭百生活** 全一册洋裝並製 大判二〇八頁 正價貳拾錢 郵稅貳錢
- 同 **女玉手筐** 全一册洋裝並製 大判二〇八頁 正價貳拾錢 郵稅貳錢
- 同 當世 **交際社會** 全一册洋裝並製 大判二〇八頁 正價貳拾錢 郵稅貳錢
- 同 **都會生活** 全一册洋裝並製 大判二〇八頁 正價貳拾錢 郵稅六錢
- 伊達奥州君著 **女性觀** 附 **通人漫語** 全一册洋裝並製 小判一六六頁 正價貳拾錢 郵稅貳錢
- 櫻井鷗村君著 **現代女氣質** 全一册洋裝並製 中判三八〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

- 元祿姉さん著 現代生活裏面觀察 **呪はれたる女** 全一册洋裝並製 大判二〇二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢
- 博文館編輯局編 明治四十二年 **家庭日記** 家事重要記事井最新諸規則付 全一册洋裝上製 中判四八〇頁 正價參拾八錢 小包八錢
- 博文館編輯局編 四十一年夏期休暇 **女學生日誌** 全一册洋裝並製 大判六四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢
- 博文館編輯局編纂 **衣服と流行** 全一册洋裝並製 大判二三六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

當代第一流の女子教育家編著

【定期刊行全書】

家庭百科全書

全部五拾册每卷紙數三百頁以上
菊判和裝美本
每月一回刊行

▲正價一册金四拾五錢 郵稅八錢宛

- 【第一編】新家庭訓……三輪田眞佐子女史著
- 【第二編】四季料理……石井泰次郎君著
- 【第三編】裁縫指南……喜多見佐喜子女史著
- 【第四編】和洋菓子製法……龜井まき子女史著
- 【第五編】茶道と香道……水原翠香女史著
- 【第六編】諸流生花指南……琴松園文雅君 松幸齋理參君著
- 【第七編】育兒の務……醫學士田村貞策君 朝夷孤舟君著
- 【第八編】簡易治療法……藤井靜子女史著
- 【第九編】禮式と作法……佐方鎭子女史著
- 【第十編】惣菜料理……赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子君共著
- 【第十一編】編物指南……三木とみ子女史著
- 【第十二編】婦人の生理と衞生……牧野濱子女史著
- 【第十三編】教育お伽噺……木村小舟君著

【第十四編】女德の養成……前田長太郎君著
【第十五編】家庭と園藝……內山正如君著
【第十六編】魚鳥家畜の飼養……鹿野直司君著
以上既刊……以後引續き刊行す
每編醫學專門大家講述

家庭衛生講話

洋裝菊判美本每卷紙數約百六十頁口繪寫眞版挿入

▲正價一冊金參拾五錢　郵稅金六錢▼

【第一編】一般救急法……醫學博士　三輪德寬君述
【第二編】衛生學大意……醫學博士　森林太郎君述
【第三編】藥物の大要……醫學博士　林春雄君述
【第四編】姙產婦之心得……醫學博士　緒方正清君述
【第五編】花柳病講話……醫學士　筒井八百珠君述
【第六編】耳の衛生……醫學士　賀古鶴所君述
【第七編】傳染病大意……醫學博士　井上善次郎君述
【第八編】婦人病講話……醫學博士　佐藤勤也君述
【第九編】外科講話……醫學士　桂秀馬君述
以上既刊……以後引續き刊行す

家庭文庫

下田歌子女史編

全部十二冊菊判和裝美本紙數每卷二百五十頁以上

正價壹冊金參拾五錢十二冊參圓七拾錢　郵稅一冊八錢宛

【全部完成全書】

【一】女子書簡文
【二】女子普通禮式
【三】詠歌の栞
【四】料理手引草
【五】婦女家庭訓
【六】母親の心得

【七】家事要訣
【八】女子手藝要訣
【九】女子普通文典
【一〇】女子作文の栞
【一一】女子遊戲の栞
【一二】泰西所見家庭敎育

庭訓 少女文庫

下田歌子女史編

全部十二冊菊判和裝美本紙數每卷二百五十頁以上

正價壹冊參拾五錢六冊壹圓九拾錢　郵稅一冊六錢宛

【一】お伽噺敎草
【二】庭訓お伽噺
【三】內國少女鑑

【四】外國少女鑑
【五】家庭の心得
【六】學校の心得

家庭衛生叢書

醫學博士井上通泰君監修

全十二冊洋裝美本每冊大判約一六〇頁

正價一冊貳拾錢十二冊貳圓拾五錢　郵稅一冊六錢宛

一編 ●傳染病の話(北里博士)●胃の攝生法(長與博士)●眼科衛生談(井上博士)●血族結婚と聾啞との關係(金杉博士)●淋病と家庭(土肥博士)

二編 ●腸窒扶斯に就て(宮本博士)●婦人の衛生一斑(木下博士)●婦人及小兒の眼の衛生(相淵博士)●眼科衛生談(井上博士)

三編 ●室內空氣に就て(緒方博士)●眼科衛生談(井上博士)●小兒科一斑(三輪博士)●小兒の衛生に就て(弘田博士)

四編 ●腸胃の話(井上博士)●耳の攝生(岡田博士)●乳兒の衛生に就て(緒方博士)●狐憑とヒステリーとの關係(吳博士)●眼鏡の話(井上博士)

五編 ●創傷の話(三輪博士)●神經の攝生に就て(吳博士)●ジフテリアの話(宮本學士)●皮膚の衛生に就て(岡村博士)

六編 ●ペストの話(宮本學士)●身心の養生(大澤博士)●家庭に於て注意すべき二三の學校衛生(三島博士)●產時の創傷傳染(木下博士)

七編 ●黴毒に關する家庭の注意(筒井學士)●家庭と黴菌(遠山博士)●姙娠中の攝生(緒方博士)●便秘の話(井上博士)

八編 ●婦人姙孕力の話(第一)(伊庭學士)●肝臟の話(木村博士)●分娩時の攝生(緒方博士)●色盲の話(井上博士)●小兒の身體上の監視并に感官の話(瀨川博士)

九編 ●肺癆の話(井上博士)●婦人姙孕力の話(第二)(伊庭學士)●小兒の蟲及瘡の話(瀨川博士)●產後の攝生(緒方博士)

十編 ●飲酒血族の退化(林博士)●生殖不姙症の話(伊庭學士)●消毒法の大意(二)(遠山博士)●雜錄=衛生學上より見て歐米と日本との風俗習慣中善きもの惡きもの

十一編 ●癲狂村の話(吳博士)●最適當な日本婦人の結婚年齡(楠田氏)●消毒法大意(遠山博士)●衛生酒の話(林博士)

十二編 ●聾啞の話(賀古學士)●癲狂村の話(下)(吳博士)●慢性銅中毒の話(林博士)●口內衛生に就て二三の注意(石原學士)

國文書類

第二高等學校教授岡澤鉦次郎君著　教科參考 日本文典要義　全一册洋裝上製 大判 五三八頁　正價壹圓貳拾錢 小包料拾貳錢

同君著　新式 日本文典原理 一名 理論的日本文典　全一册洋裝上製 大判 七四二頁　正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

文學士岡田正美君著　解說批評 日本文典　全二册洋裝並製 大判 六〇八頁　正價各四拾錢 郵稅各八錢　▲洋布特製 一册五拾五錢 小包料一册八錢

落合直文君著［文部省檢定濟］　中等教育 日本文典　全一册洋裝上製 中判 四八八頁　正價六拾錢 郵稅八錢

文學士和田萬吉君著　日本文典講義　全一册洋裝上製 大判 四〇〇頁　正價壹圓 小包料八錢

下田歌子女史著　女子普通文典　全一册和裝上製 大判 二四六頁　正價參拾五錢 郵稅八錢

哲學館大學講師三石賤夫君著　學生參考叢書 國文典　全一册洋裝上製 小判 一六二頁　正價拾參錢 郵稅貳錢

文學士鈴木暢幸君著　日本口語文典　全一册洋裝並製 大判 三一六頁　正價四拾錢 郵稅八錢　▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢

文學士長連恒君著　日本語學史　全二册洋裝並製 大判 上下二册　正價一册四拾錢 郵稅一册八錢　▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢宛

落合直文君著　中等教育 文法教科書　全一册洋裝上製 大判 一二六頁　正價四拾五錢 郵稅六錢

文學博士上田萬年君著　國語學叢話　全一册洋裝並製 大判 二三一頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

久米幹文君校閱 小谷一馬君著　新撰 國語教授問答　全一册和裝並製 中判 七六頁　正價貳拾錢 郵稅四錢

文學士保科孝一君著　國語學史　全一册洋裝上製 大判 四〇六頁　正價壹圓 郵稅拾貳錢

文學士小倉博君著　學生參考叢書 國文熟語詳解　全一册洋裝並製 小判 一八二頁　正價拾參錢 郵稅貳錢

內藤耻叟君校閱 大宮宗司君校註　校註神皇正統記　全一册洋裝並製 大判 二五八頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

中村秋香君校訂　吉野拾遺詳解　全一册洋裝並製 大判 一五二頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

大和田建樹君删定［文部省檢定濟］　中等教育 删定徒然草　全一册洋裝並製 大判 一一二頁　正價拾八錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註　校註徒然草　全一册洋裝並製 大判 二〇六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

同君校註　校註竹取物語　全一册洋裝並製 大判 七六頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢

同君校註　校註土佐日記　全一册洋裝並製 大判 五〇頁　正價拾錢 郵稅貳錢

同君校註　校註方丈記　全一册洋裝並製 大判 六〇頁　正價八錢 郵稅貳錢

同君校註　校註伊勢物語　全一册洋裝並製 大判 一〇六頁　正價拾貳錢 郵稅四錢

同君校註　校註更科日記　全一册洋裝並製 大判 九四頁　正價拾貳錢 郵稅四錢

文學博士萩野由之君 落合直文君 池邊義象君校註　日本文學全書　全部廿四册 洋裝中判並製　正價一册廿五錢 郵稅一册六錢

◉第一編
○竹取物語 ○伊勢物語 ○住吉物語 ○徒然草 ○紫式部日記

◉第二編
○土佐日記 ○枕草紙 ○更科日記 ○方丈記

◉第三編
○十六夜日記 ○落窪物語 ○辨内侍日記

◉第四編
○とりかへばや物語 ○堤中納言物語 ○四季物語

◉第五編
○中務内侍日記 ○蜻蛉日記 ○讃岐典侍日記 ○和泉式部日記

◉第六編
○濱松中納言物語 ○大和物語 ○唐物語

◉第七編
○宇治拾遺物語 ○多武峰少將物語

◉自第八至第十二編
○源氏物語 五冊に分載

◉自第十三至第十五編
○榮花物語 上、中、下三冊

◉自第十六至第十八編
○太平記 上、中、下三冊

◉第十九編
○保元物語 ○平治物語 ○秋夜長物語 ○鴉鷺合戰物語

◉第二十編
○平家物語

◉第廿一編
○古今著聞集

◉第廿二編
○公事根源 ○十訓抄

◉第廿三編
○水鏡 ○大鏡

◉第廿四編
○増鏡

北村季吟君著
◉**枕草子春曙抄** 全七冊和裝並製 大判和紙木版 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

大和田建樹君選
◉**古文讀本** 全六冊和裝並製 大判七五六頁 正價壹圓六拾錢 郵税分本四錢宛
▲正價一ヨリ五迄各貳拾五錢▲六卷參拾五錢

國學院編纂
◉**名文評釋** 全一冊洋裝並製 大判四五二頁 正價五拾錢 郵税拾錢

落合直文君編
◉**中等教育國文軌範** 全一冊洋裝並製 中判三八〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

寮野勇雄君著
◉**新撰國文問答** 全一冊洋裝上製 小判二六六頁 正價貳拾錢 郵税四錢

和歌書類

佐々木信綱君著
◉**歌學論叢** 全一冊洋裝上製 中判五六八頁 正價壹圓 郵税八錢

大和田建樹君著
◉**歌まなび** 全一冊洋裝上製 中判一〇三八頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

佐々木信綱君著
◉**増補詠歌自在** 全一冊洋裝上製 中判七八〇頁 正價壹圓 小包料八錢

落合直文君著
◉**新撰歌典** 全一冊洋裝並製 中判六一〇頁 正價四拾錢 小包料八錢

學習院女子部長下田歌子女史著
◉**詠歌の栞** 全一冊和裝並製 大判二一〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

佐々木信綱君著
◉**詠歌辭典** 全一冊洋裝上製 小判一三七六頁 正價七拾五錢 郵税八錢

宮澤春文君著
◉**作歌自在** 全一冊洋裝並製 大判二四〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

有賀長伯君著
◉**和歌八重垣** 全七冊和裝並製 木版刷和紙小判 正價五拾五錢 郵税八錢

佐々木信綱君著
◉**日本歌選** 全一冊洋裝上製 中判 近日發行

故佐々木弘綱君著 佐々木信綱君校
◉**世々のあと** 全一冊洋裝上製 中判一四四頁 正價貳拾八錢 郵税四錢

佐々木信綱君校註
◉**賀茂眞淵翁全集** 全二冊洋裝並製 中判一〇〇〇頁 正價一冊卅五錢 郵税一冊八錢

● 香川景樹翁全集　同君校註
全二册洋裝並製　中判一〇一三頁
正價一册卅五錢　郵税一册八錢

● 近世名家々集　同君校註
全二册洋裝並製　中判一〇七二頁
正價一册卅五錢　郵税一册八錢

● 明治名家々集　同君校註
全二册洋裝並製　中判一一五四頁
正價一册卅五錢　郵税一册八錢

● 類題武藏野集　仲田顯忠翁編
全四册和裝並製　中判二三〇枚
正價六拾錢　小包料八錢

● 類題採風集　黒澤翁滿翁編
全四册和裝並製　中判二〇〇枚
正價五拾錢　小包料八錢

● むぐらゐ集　同翁編
全三册和裝並製　大判木版刷
正價八拾錢　小包料八錢

● 後撰和歌集標註　契沖阿闍梨遺註　賀茂眞淵翁後按　平豐流君増註
全四册和裝並製　大本和紙刷
正價八拾錢　小包料八錢

● 萬葉集　佐々木信綱君註
全三册洋裝並製　中判一二二〇頁
正價一册廿五錢　郵税一册六錢

● 後拾遺和歌集、相模家集　經信卿母集、高陽院歌合　同君校註
合一册洋裝並製　中判三九二頁
正價貳拾五錢　郵税六錢

● 校註明倫歌集　同君校註
全一册洋裝並製　大判二二二頁
正價貳拾五錢　郵税四錢

● 百人一首講義　佐々木信綱君校註
全一册洋裝並製　中判三〇〇頁
正價貳拾錢　郵郵四錢

● おもひ草　佐々木信綱君著
全一册洋裝上製　中判一五二頁
正價五拾錢　郵税六錢

● 竹柏園集第二編　同君編纂
全一册洋裝上製　小判五五八頁
正價參拾五錢　郵税六錢

● 庭の摘草　附歌德記　子爵黒田清綱君　村松今朝太郎君編　税所敦子女史共撰
全一册和裝上製　中判二六二頁
正價參拾五錢　郵税六錢

● 新體詩作法　河井醉茗君著
全一册洋裝並製　中判三二二頁
正價參拾五錢　郵税六錢

● 新體詩歌自在　中郁秋香君著
全一册洋裝上製　中判八三四頁
正價壹圓　小包料八錢

● 新體詩學　大和田建樹君著
全一册洋裝並製　小判二二四頁
正價拾五錢　郵税四錢

● 美文韻文花紅葉　鹽井雨江君武島羽衣君大町桂月君合著
全一册洋裝上製　小判四二二頁
正價參拾錢　郵税六錢

● 美文韻文黄菊白菊　文學士大町桂月君著
全一册洋裝上製　小判四〇二頁
正價貳拾五錢　郵税六錢

● 天地有情　文學士土井晩翠君著
全一册洋裝上製　小判二三〇頁
正價貳拾五錢　郵税四錢

● 美文韻文霓裳微吟　文學士武島羽衣君著
全一册洋裝上製　小判三六八頁
正價參拾五錢　郵税六錢

● 美文韻文暗香疎影　文學士鹽井雨江君著
全一册洋裝上製　小判三五四頁
正價貳拾五錢　郵税六錢

● 美文韻文磯馴松　佐々木信綱　印東昌綱君合著
全一册洋裝上製　小判四一二頁
正價貳拾八錢　郵税六錢

● 美文作法　田山花袋君著
全一册洋裝並製　中判三〇〇頁
正價參拾五錢　郵税六錢

● 散文韻文雪月花　大和田建樹君著
全一册洋裝上製　小判六二六頁
正價參拾五錢　郵税六錢

大和田建樹君著
散文 韻文 **深山櫻** 全一冊洋裝上製 小判七〇二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

同君著
散文 韻文 **藻鹽木** 全一冊洋裝上製 小判五九〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

巖谷小波君作 東儀鐵笛君作曲
お伽唱歌 上下 全二冊洋裝並製 正價各拾五錢 郵稅各貳錢

樂書刊行協會編纂【文部省檢定濟】
日本唱歌集 全一冊洋裝並製 大判四八頁 正價貳拾錢 郵稅貳錢

大和田建樹君作歌 上眞行君作曲
日露開戰軍歌 參錢五厘

佐々木信綱君作歌 上眞行君作曲
露西亞征討の歌 參錢五厘

大町文學士作歌 上眞行君作曲
露國征伐軍歌 四錢

井上博士作歌 山田源一郎君作曲
征露の歌 貳錢五厘

小波君作歌 山田源一郎君作曲
旅順の海戰 貳錢五厘

同君作歌 東儀鐵笛君作曲
征露軍歌決死隊 貳錢五厘

野口寧齋君作（戰詩）
征露宣戰歌 五錢

佐藤六石君作（戰詩）
征露大捷歌 五錢

國府犀東君作（戰詩）
伐露樂譜大陸劍歌 五錢

佐々木信綱君外數君合作
日露戰爭國民唱歌 八錢

鹽井文學士作歌 白井君作曲
女子軍歌 拾錢

竹内十次郎君著
征露海軍軍歌 參錢

木村小舟君作歌 田村虎藏君作曲
家庭唱歌 小判洋裝並製 全部十二冊 一冊四十頁
賣價（一冊金貳錢五厘 十二册金廿七錢） 郵稅三册迄貳錢

（一）桃太郎
（二）舌切雀
（三）松山鏡
（四）花咲爺
（五）浦島太郎
（六）文福茶釜
（七）勝々山
（八）羅生門
（九）一寸法師
（一〇）猿蟹合戰
（一一）俵藤太
（一二）瘤取り

小說書類

故尾崎紅葉君著、巖谷小波君石橋思案君校訂
紅葉全集 全部六冊洋裝大判總クロース 金字金模樣附……堅牢美本
▲正價一冊壹圓八拾錢全部金拾圓小包料拾貳錢宛
▲紙數一冊約九百餘頁總紙數五千六百頁

第一卷
色懺悔 巴波川 戀の眠 關東五郎 猿枕 二人むく助
風雅娘 南無阿彌陀佛 此ぬし 新色懺悔 わかれ蚊帳 二人女房
新桃花扇 拈華微笑 夏痩 文ながし 七十二文命の安賣

第二卷
伽羅枕 紙きぬた
おぼろ舟 夏小袖
むき玉子 戀の病

第三卷
三人妻 心の闇
侠黑兒 袖時雨
男ごゝろ むらさき

第四卷
隣の女 三箇條 青葡萄
不言不語 冷熱 八重襷
鷹料理 浮木丸

第五卷
多情多恨 千箱の玉章
安知歇貌林 寒牡丹

第六卷
金色夜叉前編 續金色夜叉 煙霞療養
金色夜叉中編 續々金色夜叉 紅葉山人傳
金色夜叉後編 紅葉著作年表

幸田露伴君著作
露伴集 前編 大判上製 近日刊行

江見水蔭君著
大蠻勇 全一冊洋裝並製 中判五四〇頁 正價五拾錢 郵稅八錢

永井荷風君著 **あめりか物語** 全一册洋裝並製 中判 頁 正價六拾五錢 郵稅八錢

巖谷小波君著 和田英作君畫 伯林土産 **戀の畫葉書** 全一册洋裝上製 中判四六〇頁 正價壹圓 小包料八錢

世界お伽噺完成紀念出版 **お伽花籠** 全一册洋裝上製 中判 頁 正價七拾錢 郵稅八錢

巖谷小波君著 休暇之友 **笑の國** 全一册洋裝上製 中判三七七頁 正價六拾錢 郵稅八錢

同君著 **子供こゝろ** 全一册洋裝上製 中判三五六頁 正價九拾錢 郵稅八錢

江見水蔭君著 實地探檢 **捕鯨船** 全一册洋裝並製 大判二〇三頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

博文館編輯部編 **ふた昔** 全一册洋裝並製 大判六四〇頁 正價五拾錢 郵稅五錢

海軍主計中監鑑田重弌君著 日露戰役紀念 **彈片** 全一册洋裝並製 三六判五〇〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

千葉紫草君纂譯 **最近外交秘密** 全一册洋裝並製 小判三一七頁 正價參拾錢 郵稅四錢

泉鏡花君外十四名新作 **換菓篇** 全一册洋裝上製 中判三〇〇頁 正價六拾錢 郵稅八錢

福田琴月君著 當世 **奥樣氣質** 全一册洋裝並製 中判約二百卌頁 近日發行

村井弦齋君著 **女道樂** 全一册和裝上製 大判四六六頁 正價八拾錢 小包料八錢

同君著 **酒道樂** 全二册洋裝上製 大判五五四頁 正價一册五拾五錢 郵稅一册八錢

江見水蔭君著 **地底探檢記** 全一册洋裝並製 大判二四四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

押川春浪君著 **海底軍艦** 全一册洋裝上製 小判三九八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同君著 英雄小說 **武俠の日本** 全一册洋裝上製 小判四八二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

同君著 海國冒險奇談 **新造軍艦** 全一册洋裝上製 小判三五一頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同君著 英雄小說 **武俠艦隊** 全一册洋裝上製 小判三三二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同君著 英雄小說 **新日本島** 全一册洋裝上製 小判三七二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

同君著 英雄小說 **東洋武俠團** 全一册洋裝上製 小判五三〇頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

同君著 傳記小說 **銀山王** 全一册洋裝上製 小判三二七頁 正價參拾錢 郵稅六錢

內田不知庵君著 **社會百面相** 全一册洋裝並製 大判五五四頁 正價五拾五錢 小包料八錢

若松賤子女史遺稿 櫻井鷗村君編纂 **忘れがたみ** 全一册洋裝並製 中判六三二頁 正價八拾錢 小包料八錢

樋口一葉女史著 **一葉全集** 全一册洋裝並製 大判四八六頁 正價四拾錢 小包料八錢

大橋乙羽君著 **花鳥集** 全一册洋裝上製 中判一二〇八頁 正價壹圓 小包料拾貳錢

江見水蔭君著 **戀** 全一册洋裝上製 小判三八二頁 正價參拾錢 郵稅四錢

女(後付一五)

●**沙翁物語十種** 文學士小松月陵君譯
全一册洋装並製 中判三〇〇頁 正價四拾五錢 郵税六錢

●**家庭小說 ひとりぼっち** 河井道子 辻村蜻子女史共譯
全一册洋装上製 中判三七〇頁 正價六拾五錢 郵税八錢

●**英獨戰爭未來記** 文學士高田知一郎君 法學士佐藤忍君 共譯
全一册洋装上製 大判三八八頁 正價六拾五錢 小包料八錢

●**鐘樓守** 佛國文豪ユーゴー作 尾崎紅葉君譯
全一册洋装上製 大判八九二頁 正價貳圓 小包料拾貳錢
▲分本並製 上卷正價九拾錢 下卷正價壹圓 郵税八錢 小包料八錢

●**椿姫** 長田秋濤君譯
全一册洋装並製 大判四八〇頁 正價八拾五錢 小包料拾貳錢
▲洋布特製 正價金壹圓 小包料拾貳錢

●**小公子** 若松賤子女史譯述
全一册洋装並製 大判三七四頁 正價參拾五錢 郵税八錢

●**十五少年** 森田思軒君譯述
全一册洋装並製 大判二九六頁 正價參拾五錢 郵税八錢

●**日露戰爭未來の夢** 文學士中内蝶二君譯
全一册洋装並製 大判一九二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

●**日露戰爭未來記** 文學士大町桂月君譯
全一册洋装並製 大判一五八頁 正價拾八錢 郵税四錢

●**哥薩克兵** 露國レオ、トルストイ伯著 田山花袋君譯
全一册洋装並製 大判二三〇頁 正價拾八錢 郵税六錢

●**ロビンソン絶島漂流記** 高橋光威君譯述
全一册洋装並製 大判四九八頁 正價四拾錢 小包料八錢

●**海島探險 塔中の怪** 押川春浪君譯述
全一册洋装上製 小判三三二頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

●**冒險少年 初航海** 櫻井鷗村君譯述
全一册洋装上製 小判三一八頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

●**世界冒險譚** 櫻井鷗村君譯
全部拾貳册 中判洋装並製
正價 ●壹册金參拾錢 ●六册壹圓六拾五錢 ●拾貳册參圓貳拾錢 ▲郵税壹册六錢宛

【一】金掘少年
【二】遠征奇談
【三】二勇少年
【四】續遠征奇談
【五】決志少年
【六】漂流少年
【七】殖民少年
【八】航海少年
【九】不撓少年
【一〇】朽木の舟
【一一】侠勇少年
【一二】絶島奇談

●**帝國文庫**
▲全部五拾册 中判上製總紙數五萬餘頁 正價一册六拾錢 小包料一册拾貳錢宛

帝國文庫は小說のみ蒐收したるものに非ざれども目下編纂の便宜上全部を一括して茲に掲ぐ

⊙第一編……眞書太閤記 卷一
⊙第二編……眞書太閤記 卷二
⊙第三編……眞書太閤記 卷三
⊙第四編……眞書太閤記 卷四 ▲附太閤朝鮮軍記
⊙第五編……源平盛衰記
⊙第六編……南總里見八犬傳 上卷
⊙第七編……南總里見八犬傳 中卷
⊙第八編……南總里見八犬傳 下卷
⊙第九編……東海、奥羽、木曾、江の島道中膝栗毛
⊙第十編……梅暦春告鳥
⊙第十一編……通俗三國志 上卷

女(後付一八)

- 第十七編……京山全集
- 第十八編……校訂 落語全集
- 第十九編……並木宗輔浄瑠璃集
- 第二十編……紀行文集
- 第二十一編……一九全集
- 第二十二編……漂流奇談全集
- 第二十三編……邯鄲諸國物語 ▲續種彦傑作集
- 第二十四編……校訂 續紀行文集
- 第二十五編……續水滸傳
- 第二十六編……傾城水滸傳
- 第二十七編……文耕堂浄瑠璃集
- 第廿八、九編……白縫譚 上下
- 第三十編……北雲美談 時代鏡
- 第三十一編……常山紀談
- 第三十二編……萬物滑稽合戰記
- 第三十三編……續一九全集
- 第三十四編……校訂 黄表紙百種
- 第三十五編……校訂 俳優全集
- 第三十六編……校訂 俗曲大全
- 第三十七編……續々紀行文集
- 第三十八編……續馬琴傑作集 下卷
- 第三十九編……脚本傑作集 下卷
- 第四十編……續京傳三馬傑作集
- 第四十一、二編……釋迦八相倭文庫 上下
- 第四十三編……種彦短編傑作集
- 第四十四、五、六編……俊傑神稻水滸傳 上中下
- 第四十七編……校訂 近世奇談全集
- 第四十八編……校訂 名家短篇傑作集
- 第四十九編……佛教各宗 續高僧實傳
- 第五十編……校訂 名家漫筆集

曲亭馬琴翁著 **南總里見八犬傳** (本箱入 全五十冊) 和裝並製 大判三〇五一枚 正價九圓五拾錢 小包料六拾四錢

文學士小山内薫君著 **演劇新潮** 全一冊洋裝上製 中判 頁 正價五拾五錢 郵稅八錢

坪内博士序文 伊原青々園著 **日本演劇史** ▲特製合本 正價壹圓八拾五錢 全二冊和裝並製 大判七八五頁 正價一冊八拾五錢 郵稅一冊八錢 小包料拾貳錢

同君著 新曲 **浦島** 全一冊洋裝上製 中判一五四頁 正價八拾五錢 郵稅六錢

同君著 新曲 **かぐや姫** 全一冊和裝上製 和本綴五四枚 正價八拾五錢 郵稅四錢

福地櫻痴居士作 肥後武士 江戸藝者 **花盛劇楓葉** 全一冊洋裝並製 大判一一八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

同居士作 **山中平九郎** 全一冊洋裝並製 大判一六八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

同居士作 **芳哉義士の譽** 全一冊洋裝並製 大判一五二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

博文館編輯局編纂 **義士銘々傳** 全一冊洋裝並製 大判三二〇頁 正價貳拾五錢 郵稅二錢五厘

依田學海君序文 松林伯圓翁講演 伯圓講演 **菅公** 全一冊洋裝並製 大判二五四頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

地理書類

理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君共著

●大日本地誌　全部拾册

▲大判脊皮上製總紙數壹萬餘頁
▲每卷地圖及寫眞銅版數多挿入

⊙第壹卷　關　東　相摸、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆七島、小笠原島
⊙第貳卷　奥　羽　磐城、岩代、陸前、中、陸奥、羽前、羽後
⊙第參卷　中　部　尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、美濃、飛驒、信濃
▲以上三卷正價各金貳圓五拾錢　小包料拾貳錢宛
⊙第四卷　近　畿　山城、大和、河内、和泉、攝津、伊賀、伊勢、志摩、近江、丹波、丹後、但馬、播磨、紀伊、淡路、
▲第四卷　正價金參圓　郵稅拾六錢
⊙第五卷　北　陸　若狹、越前、加賀、能登、越中、越後
⊙第六卷　中　國　美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐
⊙第七卷　四　國　阿波、讃岐、伊豫、土佐
▲第五、六、七卷正價各金貳圓五拾錢郵稅拾貳錢宛
續刊　⊙第八卷　九　州　⊙第九卷　北海道
⊙第十卷　琉球及臺灣

●日本地理教科書
農學博士稻垣乙丙君　實業學校　矢津昌永君共著
全一册洋裝上製　大判　二一四頁　正價七拾錢　郵稅八錢

●外國地理教科書
農學博士稻垣乙丙君　實業學校　矢津昌永君共著
全一册洋裝上製　大判　一九〇頁　正價六拾五錢　郵稅八錢

●日本新地理
理學士佐藤傳藏君著
全一册洋裝並製　大判　三一四頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲洋布特製　正價五拾五錢　小包料八錢

●改訂增補新撰日本地理問答
上村左川君著　武田櫻桃君增訂
全一册洋裝上製　小判　二五二頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

●學生參考叢書日本地理
志賀重昂君閱　設樂金三郎君著
全一册洋裝並製　小判　二三二頁　正價拾參錢　郵稅貳錢

●日本名勝地誌
野崎左文君外四君合著
全十二册洋裝並製　中判　五一〇〇頁　正價一册參拾錢　郵稅一册六錢

【一編】畿内之部
【二、三編】東海道之部上、下
【四、五編】東山道之部上、下
【六編】山陽道之部
【七編】北陸、山陰之部
【八編】南海道之部
【九編】北海道之部
【一〇編】西海道之部
【一一編】琉球之部
【一二編】臺灣之部

●本邦地理詳說
中村士德君　大久保千濤君共著
全一册洋裝上製　中判　七〇〇頁　正價壹圓八拾錢　小包料拾貳錢

●日本風景論
農學士志賀重昂君著
全一册洋裝上製　大判　二五八頁　正價九拾錢　小包料八錢

●韓國總覽
農商務省商工局員德永勳美君著
全一册洋裝上製　大判　一五〇〇頁　正價參圓參拾錢　小包料拾六錢

●韓國新地理
文學士田淵友彥君著
全一册洋裝並製　大判　三五〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲洋布特製　正價五拾五錢　小包料八錢

●學生參考叢書外國地理　上、下
哲學館大學講師三島定之助君著
全二册洋裝並製　小判　三〇〇頁　正價一册拾參錢　郵稅一册貳錢

石倉翠葉君著 ●本派本願寺名所圖會 全一冊洋裝上製 大判三九四頁 正價六拾錢 小包料八錢

同君著 ●大谷派本願寺名所圖會 全一冊洋裝上製 大判二二八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

同君著 ●佛光寺名所圖會 全一冊洋裝上製 大判一〇八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

同君著 ●日蓮宗各本山名所圖會 全一冊洋裝上製 大判三五六頁 正價五拾錢 小包料八錢

同君著 ●成田山名所圖會 全一冊洋裝上製 大判一五八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

同君著 ●善光寺名所圖會 全一冊洋裝上製 大判二七六頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

同君著 ●高野山名所圖會 全一冊洋裝上製 大判三四二頁 正價六拾錢 小包料八錢

長谷川雪旦君畫 ●江戶名所圖會 全四冊和紙木版 刷大判一一七三枚 正價五圓貳拾八錢

同君畫 ●江戶名所花曆 全四冊和紙木版 刷大判一五六頁 正價四拾錢 郵稅六錢

竹貫佳水君 沼田笠峰君 木村小舟君合著 ●少年日本地理 ▲全部六卷洋裝大判美本每卷紙數約百四十頁 四十二年早春創刊

巖谷小波君 金子紫草君著 ●少年世界物語 ▲洋裝大判美本每編約百四十頁 四十二年早春創刊

巖谷小波君 金子紫草君著 ●少年世界讀本 全部十二冊每編大判百四十頁全部完成 ▲正價壹冊貳拾錢◎十二冊貳圓九錢 ▲郵稅四錢宛

歷史書類

法學博士文學士有賀長雄君著 ●大日本歷史 全二冊大判洋裝背皮金字入美本 上卷一〇五〇頁 下卷一二〇九頁 ▲上卷正價貳圓小包料拾六錢 ▲下卷正價貳圓五拾錢小包料拾六錢

木村鷹太郎君著 ●大日本建國史 全一冊洋裝上製 大判　頁 正價壹圓五拾錢 小包料八錢

國府犀東君著 ●大日本現代史 洋裝背皮美本 大判約二千頁 正價　錢 郵稅　錢 中、下卷……未刊

文學博士萩野由之君編 ●大日本通史 全三冊洋裝上製 大判一〇〇〇頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

法學博士文學士有賀長雄君著 ●帝國史略 【文部省檢定濟】 全一冊洋裝上製 大判一〇三〇頁 正價壹圓參拾錢 小包料拾貳錢

文學博士萩野由之君著 中等教育 ●日本歷史 全二冊洋裝上製 正價各五拾五錢 郵稅各八錢

文學士木寺柳次郎君著 ●日本歷史 全一冊洋裝上製 大判三七六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

文學博士原秀四郎君著【文部省檢定濟】 ●中等國史教科書 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
▲第一學年用 正價四拾錢 郵稅六錢
▲第二學年用 正價五拾錢 郵稅拾錢
▲五學年用 近日刊行

宮田零君編 新撰 ●日本歷史問答 全一冊洋裝上製 小判二二八頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

松井柏軒君著 新撰 ●大日本帝國史 全一冊洋裝上製 大判五六四頁 正價四拾錢 小包料八錢

女(後付二一)

女（後付二二）

- 文學士幸田成友君著 **東洋歷史** 全一册洋裝並製 大判三二四頁 正價四拾錢 郵稅四錢 ▲洋布特製【文部省檢定濟】正價五拾五錢 小包料八錢
- 文學士木寺柳次郎君著 中等教育 **東洋歷史** 全一册洋裝上製 大判二八八頁 正價八拾錢 小包料八錢【文部省檢定濟】
- 松原岩五郎君編 新撰 **東洋歷史問答** 全一册洋裝上製 小判二三六頁 正價貳拾錢 郵稅四錢
- 丸井文學士 高島米峰君共著 學生參考叢書 **東洋史** 全一册洋裝並製 小判一八七頁 正價拾參錢 郵稅貳錢
- 文學士久保天隨君著 **朝鮮史** 全一册洋裝並製 大判三三六頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
- 文學士吉國藤吉君著 **西洋歷史** 全一册洋裝並製 大判三四八頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
- 文學士木寺柳次郎君著 中等教育 **西洋歷史** 全一册洋裝上製 大判二六六頁 正價七拾錢 小包料八錢【文部省檢定濟】
- 長谷川誠也君著 新撰 **西洋歷史問答** 全一册洋裝上製 小判二四〇頁 正價貳拾錢 郵稅四錢
- 法學士山本信博君著 **北米合衆國史** 全一册洋裝並製 大判三一〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
- 大使館三等書記官奥田竹松君著 **佛蘭西革命史** 全一册洋裝並製 大判四四四頁 正價七拾錢 小包料八錢
- 河上清君著 **通俗獨逸歷史** 全一册洋裝並製 大判三三四頁 正價貳拾錢 郵稅八錢
- 文學士久保天隨君著 **日本歷史寶鑑** 全一册洋裝上製 大判一六〇〇頁 正價參圓 小包料貳拾錢

傳記書類

- 文學博士箕作元八君著 學藝叢書 **歷史叢話** 全一册洋裝上製 大判二二〇頁 正價四拾錢 郵稅六錢
- 文學士齋藤隆三君著 **元祿世想志** 全一册洋裝並製 大判三四八頁 正價四拾五錢 郵稅八錢
- 文學博士高山林次郎君著 **世界文明史** 全一册洋裝並製 大判三七六頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
- 文學士大町桂月君著 **日本文明史** 全一册洋裝並製 大判三〇二頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
- 白河文學士 國府種德君共著 **支那文明史** 全一册洋裝並製 大判三二六頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
- 國友重章君閲 恒屋盛服君著 **朝鮮開化史** 全一册洋裝上製 大判五六六頁 正價壹圓 小包料拾貳錢
- 文學士阪本健一君著 **日本風俗史** 全一册洋裝並製 大判三四二頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲洋布特製 正價五拾五錢 小包料八錢
- 重田勘次郎君著 **世界風俗志** 全一册洋裝並製 中判四六三頁 正價五拾錢 郵稅八錢
- 法學博士阪谷芳郎君編 **青淵先生六十年史** 一名 近世實業發達史 全二册洋裝上製 大判二二二〇頁 正價壹圓五拾錢 小包料貳拾四錢
- 高橋光威君著 貝島太助翁の成功談 **炭鑛王** 全一册洋裝並製 大判一五八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

大橋乙羽君著
●藤侯實歷　全一册洋裝上製　小判二四六頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

文學博士前田慧雲君述
●親鸞聖人　全一册洋裝並製　大判一二五頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

豐田小八郎君著
●但馬聖人　全一册洋裝並製　大判一四八頁　正價參拾五錢　郵稅四錢

水谷不倒君著
●竹本攝津大掾　全一册洋裝並製　大判二三〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢

海軍省敎育本部藏版
英國水師提督
●ネルソン傳　全一册洋裝上製　大判一三二〇頁　正價壹圓六拾錢　小包料拾六錢

伊藤伯題辭　米山梅吉君著
開國先登
●提督彼理　全一册洋裝並製　大判一九〇頁　正價貳拾錢　郵稅六錢

慶應義塾敎授菅綠陰君著
●カーネギー　全一册洋裝上製　中判一五四頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

文學士煙山專太郎君著
英雄末路
●ナポレオン　全一册洋裝並製　中判二六六頁　正價參拾錢　郵稅四錢

犀東　國府種德君著
●菩提達摩　全一册洋裝上製　大判一六二頁　正價拾五錢　郵稅六錢

博文館編輯局編纂
●世界三十六文豪　全一册洋裝並製　大判二四〇頁　正價貳拾錢　郵稅貳錢

文學士土井晩翠君著
●ナポレオン性格論　全一册洋裝上製　中判三一七頁　正價五拾五錢　郵稅八錢

小野田翠雨君著
現代
●名士の演說振　全一册洋裝並製　中判三二二頁　正價四拾五錢　郵稅六錢

全國敎育家大集會編
●帝國六大教育家　全一册洋裝並製　大判二八〇頁　正價五拾錢　郵稅八錢

文學士蜷川龍夫君著
●日本高僧之人格　全一册洋裝並製　大判二三八頁　正價四拾錢　郵稅拾錢

矢野文雄君序　鳥谷部春汀君著
●時代人物月旦　全一册洋裝上製　三六判五七三頁　正價七拾錢　郵稅八錢

長田秋濤君著
●世界富豪の表裏　全一册洋裝並製　大判二六二頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

太陽評論記者鳥谷部春汀君著
●明治人物評論　全一册洋裝上製　小判四二三頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

同　君著
●續明治人物評論　全一册洋裝上製　小判四四八頁　正價參拾錢　郵稅六錢

同　君著
●明治人物小觀　全一册洋裝上製　中判四二八頁　正價參拾八錢　郵稅八錢

遲塚麗水、內藤鳥樹君著
露軍將校
●旅順籠城實談　全一册洋裝並製　大判二九四頁　正價四拾八錢　郵稅八錢

黑木軍通譯官來原慶助君著
●黑木軍百話　全一册洋裝上製　大判一七二頁　正價四拾錢　郵稅六錢

宮崎虎之助君著
●基督觀　全一册洋裝並製　大判二五六頁　正價四拾錢　郵稅八錢

每編知名文士編
●少年讀本　全部五十册　大判洋裝並製
▲正價一册拾參錢　▲郵稅一册四錢宛

大和田建樹君著
●日本歷史譚　全部廿四册大判美本　每册約百頁密畫挿入
▲正價一册金八錢　▲郵稅一册四錢宛

每編知名學士編
●世界歷史譚　全部三十六册　每編密畫挿入
▲正價一册拾參錢　▲郵稅一册四錢宛

女（後付二四）



●月やくをつうじ
子宮病血の道を全治す

▲**月經不通** 長きは數年間短きは二三ヶ月の間月經なく或は血塊抔と稱へ經水の少なき人

▲**月經不順** 毎月經水の日定まらず又月經少なく又は多きに過て「どかをり」等にて不同の人

▲**月經困難** 月經時又は其前後に身體に異狀を起し、腰或は子宮部に痛を發し氣分鬱ぐ人

▲**女子十六七歳**にて**月經なき人**

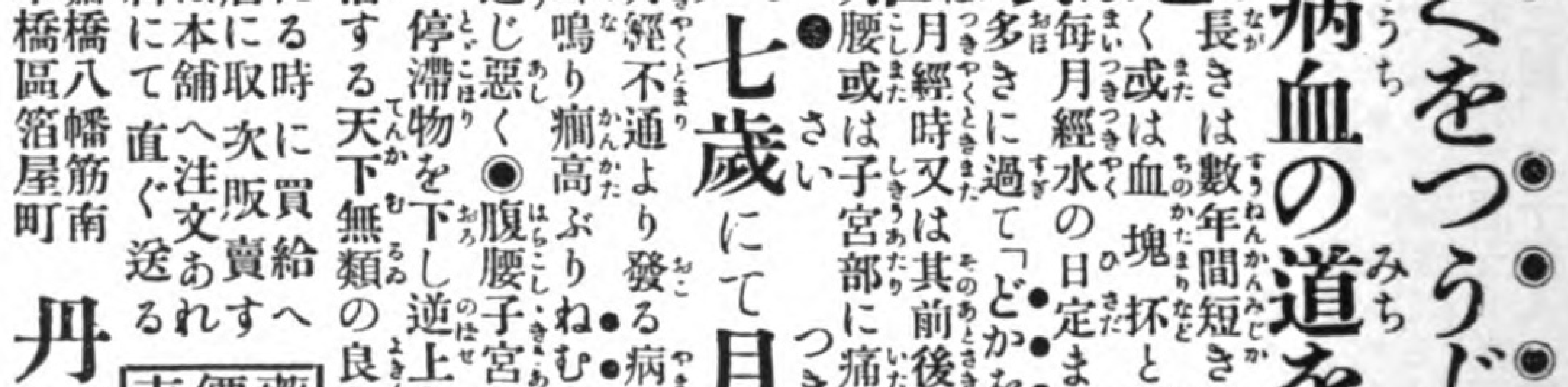
其他月經不順又は月經不通より發る病症◉逆上强く頭痛◉めまひ◉目かすみ◉耳鳴り癇高ぶりねむられず◉顔色惡く氣分鬱ぎ◉食物進まず通じ惡く◉腹腰子宮部に痙攣又は疼痛ある症等に用ひて腹内の停滯物を下し逆上をしづめ總て月經不順より起る諸病を根治する天下無類の良藥なり

注意
藥は思ひ立たる時に買給へ
全國有名藥店に取次販賣す
若し無き時は本舗へ注文あれ
全國無遞送料にて直ぐ送る

藥價表

一日分	金八錢
半週分	金廿五錢
一週分	金五拾錢
二週分	金壹圓

本舗 大阪市心齋橋八幡筋南 東京市日本橋區箔屋町 **丹平商會藥房**



女學世界

(明治四十二年一月一日發行 毎月一回一日發行) 第九卷第壹號 (明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)

(定價金貳拾錢●本號に限り郵稅貳錢五厘)